岩手県埋文センター文化財調査報告書第79集

湯の沢Ⅲ・繋沢Ⅱ・石神Ⅱ遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

㈶岩手県埋蔵文化財センター
日　本　道　路　公　団

湯の沢Ⅲ・繋沢Ⅱ・石神Ⅱ遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

序

本県には数多くの埋蔵文化財包蔵地が存在し、県教育委員会のまとめた遺跡台帳によれば、昭和59年３月現在6,235箇所の遺跡が登録されております。

一方、四国４県に匹敵する広大な面積をもつ本県にとって地域開発の基幹となる道路など交通網整備事業は県政の重要施策となっております。

貴重な先人の記録である文化財の保護・保存と現代生活を豊かにするための地域開発は相矛盾する要因を持つものの両者のバランスある行政施策は避けることのできないものであります。

当埋蔵文化財センターは、昭和52年発足以来、埋蔵文化財保護の立場に立って県教育委員会の指導と調整のもとに、止むを得ず開発によって破壊され消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線建設に関連して、昭和58年度に発掘調査した安代町湯の沢Ⅲ、繋沢Ⅱ、石神Ⅱ遺跡の調査結果をまとめたものであります。

湯の沢Ⅲ遺跡は縄文時代中期の集落跡であり、円筒系土器文化圏と大木系土器文化圏の接触と変化解明の好資料となると思います。なお、繋沢Ⅱと石神Ⅱ遺跡では遺構発見はできませんでしたが、遺物は得ることができました。この報告書が広く活用され、斯学の発展と埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成にご援助、ご協力を賜わりました日本道路公団仙台建設局一戸工事事務所、安代町役場、安代町教育委員会をはじめ関係各位に感謝すると共に、今後のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

昭和59年６月

財団法人　岩手県埋蔵文化財センター

理事長　金　子　彰　吉

財団法人　岩手県埋蔵文化財センター組織

―― 役　員 ――

理事長	金子彰吉	（県教育長）
副理事長	尾沢重遠	（県教育次長）
常務理事	熊谷正男	（県立埋蔵文化財センター所長）
理　事	吉田良和	（県農政部次長）
〃	高橋健之	（県林業水産部次長）
〃	穂積昭慈	（県土木部次長）
〃	板橋　源	（県立博物館長）
〃	草間俊一	（県立盛岡短期大学長）
〃	小形信夫	（元常務理事）
監　事	佐藤公志	（県教委総務課長）
〃	小野寺英二	（県教委財務課長）

―― 職　員 ――

所長　熊谷正男　　副所長　宮　英一　　所付　吉田　努

【総務課】

総務課長	菊池　勉
庶務係長	阿部詔夫
主　事	戸草内幸男
〃	立花多加志
技能員	佐藤春男

【調査課】

調査課長	近藤宗光
主任専門調査員	昆野　靖
〃	国生　尚
専門調査員	片方宗明
〃	長沼　彬
専門調査員	大原一則
〃	渡辺洋一
〃	田鎖寿夫
〃	佐々木嘉直
〃	栃沢満郎
〃	平井　進
〃	中村良一
〃	田村壮一
〃	岩渕　久
〃	光井文行
〃	玉川英喜
〃	石川長喜
専門調査員	三浦謙一
〃	高橋与右衛門
〃	高橋義介
〃	佐々木清文

【資料課】

資料課長	名須川溢男
専門調査員	菊池利和
〃	工藤利幸
〃	中川重紀
〃	酒井宗孝

例　言

1．本報告書は、岩手県二戸郡安代町に所在する湯の沢Ⅲ・繋沢Ⅱ・石神Ⅱ遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の調査は、東北縦貫自動車道八戸線建設に伴う事前緊急発掘調査である。調査は、日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、財団法人岩手県埋蔵文化財センターが発掘調査を担当した。

3．野外調査は昭和58年４月19日から開始され、同年９月17日に終了した。室内整理作業は昭和58年11月１日から昭和59年３月31日まで行われた。

4．湯の沢Ⅲ遺跡の検出遺構は下記のとおりである。

縄文時代竪穴住居址…４棟　焼土遺構…10　陥し穴状遺構…５基　ピット…30基

繋沢Ⅱ・石神Ⅱ遺跡では遺構が検出されず、遺物散布地であった。

5．野外調査及び室内整理作業は、専門調査員の佐々木嘉直と佐々木清文が担当した。

原稿執筆は、Ⅰは嶋千秋（前調査課長）が、Ⅱ・Ⅲの５、Ⅳの１・２・５、Ⅴの１・３は佐々木清文が、Ⅲの１～４・６、Ⅳの３・４・６、Ⅴの２・４は佐々木嘉直が行った。

6．石器の石質鑑定は、岩手県立大船渡農業高等学校教諭佐藤二郎氏に依頼した。

7．火山灰の鑑定は東京都立大学助教授町田洋氏に依頼した。

8．炭化材の年代測定（炭素14法）については学習院大学木越邦男研究室に依頼した。

9．野外調査にあたっては安代町役場、安代町教育委員会の協力を賜った。

10．野外調査では作業員として次の方々の協力を得た。

上沖連次郎　小山田米蔵　畠山三郎　伊藤孫衛　軽井沢市蔵　小山田留蔵　小山田与太郎
佐藤　好　五日市ヨシ　畠山タマ　岩舘タマ　宇土沢マツ　宇土沢トキ　村上富美子
小笠原サダ　藤川和子　畠山チヨ　羽沢タケ　遠藤タキ　種市タマ　軽井沢ハツエ
遠藤イト　藤本リセ　伊藤ヨネ　伊藤ミサ　斎藤イト　小森トミ

11．室内整理作業では次の方々の協力を得た。

越場ミチエ　米内弘子

湯(ゆ)の沢(さわ)Ⅲ遺跡

遺跡所在地	二戸郡安代町字湯の沢88
委託者	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和58年6月1日～8月18日
調査対象面積	9,100㎡
発掘面積	9,100㎡
遺跡記号	ＹＳⅢ83
調査担当者	専門調査員　佐々木嘉直・佐々木清文
協力機関	安代町教育委員会

本文目次

序

組織

例言

Ⅰ．調査に至る経過…… 2

Ⅱ．調査方法と室内整理の方法…… 3

Ⅲ．遺跡の立地と環境…… 5

Ⅳ．検出された遺構と遺物…… 18

1．住居址…… 18

BF30住居址…… 18

BH29住居址…… 21

BH31住居址…… 25

CD31住居址…… 25

2．焼土遺構…… 26

BF28—1焼土…… 26

BF28—2焼土…… 26

BG28—1焼土…… 26

BG28—2焼土…… 26

BG30焼土…… 29

BG30石囲炉…… 29

BH30焼土…… 29

BH31焼土…… 30

BF32焼土…… 30

DF37焼土ピット…… 30

3．陥し穴状遺構…… 30

BH27陥し穴状遺構…… 30

BJ30陥し穴状遺構…… 33

CA31陥し穴状遺構…… 33

CC34陥し穴状遺構…… 35

CE34陥し穴状遺構…… 35

4．ピット…… 35

BF29ピット…… 35

BF30ピット…… 37

BF31ピット…… 38

BF32—1ピット…… 38

BF32—2ピット…… 38

BF32—3ピット…… 41

BF32—4ピット…… 41

BF32—5ピット…… 43

BF33—1・2ピット…… 43

BF33—3ピット…… 43

BG30—1ピット…… 45

BG30—2ピット…… 45

BG31ピット…… 45

BG32—1ピット…… 46

BG32—2ピット…… 46

BG32—3ピット…… 47

BH30ピット…… 47

BH32ピット…… 47

BH33—1ピット…… 49

BH33—2ピット…… 49

BH34ピット…… 49

BI29ピット…… 49

BI30ピット…… 51

BI31ピット…… 51

BJ30ピット…… 51

CB29ピット…… 51

CG32ピット…… 53

DH51ピット…… 53

DI51ピット…… 53

5．遺構外の出土土器…… 54
6．石器および石製品……58
石器集計表…… 63
Ⅴ．まとめ…… 66
1．住居址について…… 66
安代町縄文中期住居址一覧表……67
2．陥し穴状遺構について…… 68
安代町の陥し穴状遺構分類表…… 71
3．出土遺物について…… 73
4．さいごに…… 74

鑑定結果
火山灰の鑑定結果…… 76
C^{14}測定結果 …… 77

図版目次

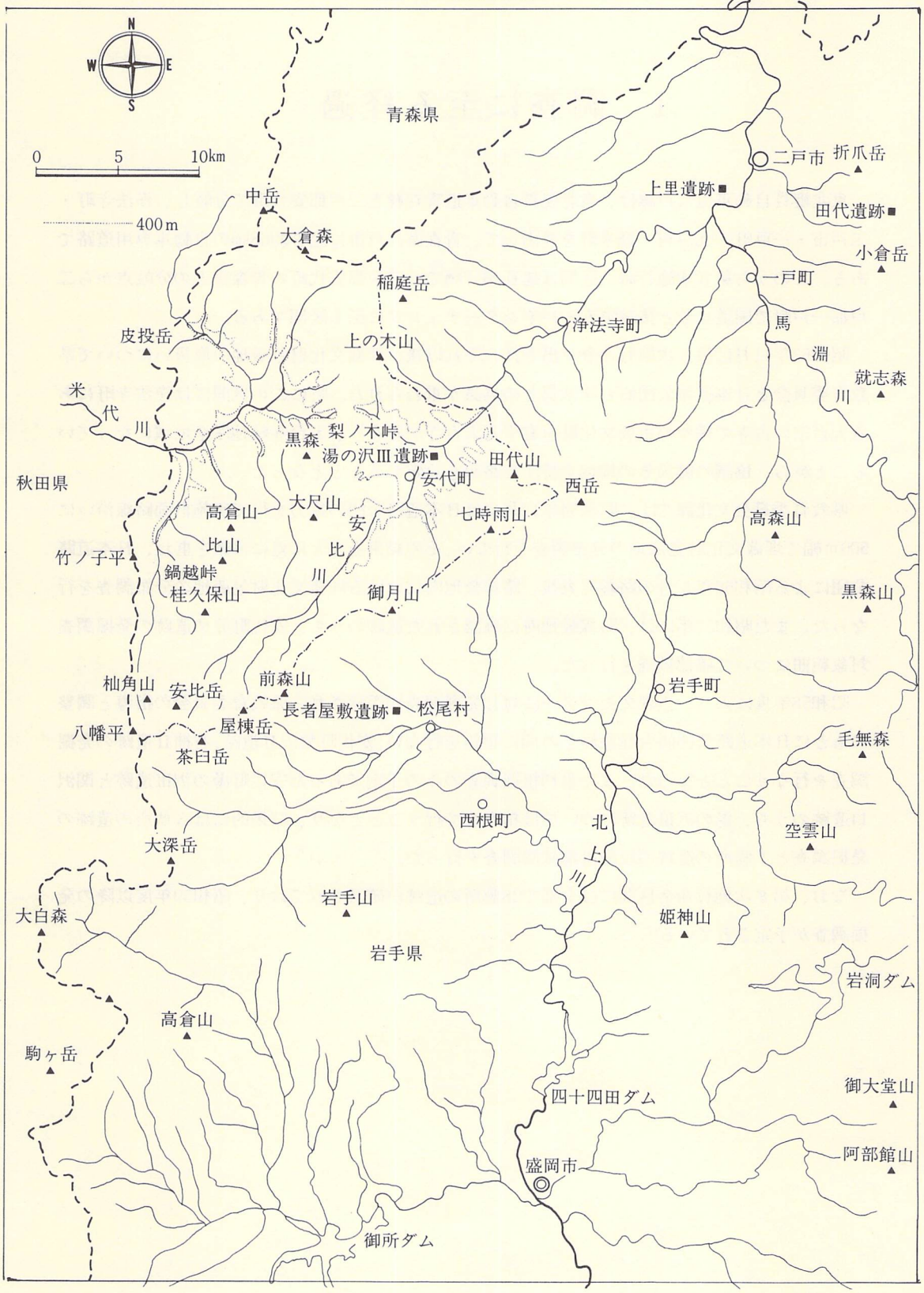
図版1　遺跡位置図…… 1
図版2　地形分類図…… 7
図版3　遺跡周辺の地形図…… 9
図版4　遺跡分布図…… 13
図版5　遺構配置図(1)…… 15
図版6　遺構配置図(2)…… 17
図版7　BF30住居址 …… 19
図版8　BF30住居址土器出土状況 …… 20
図版9　BH29住居址 …… 22
図版10　BH31住居址 …… 23
図版11　CD31住居址 …… 24
図版12　焼土遺構(1)…… 27
図版13　焼土遺構(2)…… 28
図版14　陥し穴状遺構(1)…… 31
図版15　陥し穴状遺構(2)…… 32
図版16　陥し穴状遺構(3)…… 34
図版17　ピット(1)…… 36
図版18　ピット(2)…… 39
図版19　ピット(3)…… 40
図版20　ピット(4)…… 42
図版21　ピット(5)…… 44
図版22　ピット(6)…… 48
図版23　ピット(7)…… 50
図版24　ピット(8)…… 52
図版25　陥し穴状遺構の形態と分布…… 70
図版26　土器実測図(1)…… 78
図版27　土器実測図(2)…… 79
図版28　土器実測図(3)…… 80
図版29　土器実測図(4)…… 81
図版30　土器実測図(5)…… 82
図版31　土器実測図(6)…… 83
図版32　土器実測図(7)…… 84
図版33　土器実測図(8)…… 85
図版34　土器実測図(9)…… 86
図版35　土器実測図(10)…… 87
図版36　土器片拓影(1)…… 88
図版37　土器片拓影(2)…… 89
図版38　土器片拓影(3)…… 90
図版39　土器片拓影(4)…… 91
図版40　土器片拓影(5)…… 92
図版41　土器片拓影(6)…… 93
図版42　石器(1)…… 94
図版43　石器(2)…… 95
図版44　石器(3)…… 96
図版45　石器(4)…… 97
図版46　石器(5)…… 98

図版47　石器(6)…… 99
図版48　石器(7)…… 100
図版49　石器(8)…… 101
図版50　石器(9)…… 102
図版51　石器(10)…… 103
図版52　石器(11)…… 104
図版53　石器(12)…… 105
図版54　石器(13)…… 106

写真図版目次

写真図版１　遺跡遠景…… 109
写真図版２　遺跡近景…… 110
写真図版３　ＢＦ30住居址 …… 111
写真図版４　ＢＦ30・ＢＨ29住居址…… 112
写真図版５　ＢＨ29住居址 …… 113
写真図版６　ＢＨ31住居址 …… 114
写真図版７　ＢＨ31住居址 …… 115
写真図版８　ＣＤ31住居址 …… 116
写真図版９　焼土遺構(1)…… 117
写真図版10　焼土遺構(2)…… 118
写真図版11　陥し穴状遺構(1)…… 119
写真図版12　陥し穴状遺構(2)…… 120
写真図版13　ピット(1)…… 121
写真図版14　ピット(2)…… 122
写真図版15　ピット(3)…… 123
写真図版16　ピット(4)…… 124
写真図版17　ピット(5)…… 125
写真図版18　ピット(6)…… 126
写真図版19　ピット(7)…… 127
写真図版20　ピット(8)…… 128
写真図版21　ピット(9)…… 129
写真図版22　ピット(10)…… 130
写真図版23　土器(1)…… 131
写真図版24　土器(2)…… 132
写真図版25　土器(3)…… 133
写真図版26　土器(4)…… 134
写真図版27　土器(5)…… 135
写真図版28　土器(6)…… 136
写真図版29　土器(7)…… 137
写真図版30　土器(8)…… 138
写真図版31　土器(9)…… 139
写真図版32　石器(1)…… 140
写真図版33　石器(2)…… 141
写真図版34　石器(3)…… 142
写真図版35　石器(4)…… 143
写真図版36　石器(5)…… 144
写真図版37　石器(6)…… 145
写真図版38　石器(7)…… 146
写真図版39　石器(8)…… 147

図版１　遺跡位置図


N
W
E
S
0
5
10km
400m
青森県
秋田県
岩手県
二戸市
折爪岳
上里遺跡
田代遺跡
小倉岳
一戸町
馬
淵
川
就志森
浄法寺町
中岳
大倉森
稲庭岳
上の木山
皮投岳
米
代
川
黒森
梨ノ木峠
湯の沢Ⅲ遺跡
安代町
田代山
西岳
七時雨山
高森山
高倉山
大尺山
安
比
川
比山
竹ノ子平
鍋越峠
桂久保山
御月山
黒森山
前森山
杣角山
安比岳
長者屋敷遺跡
松尾村
岩手町
八幡平
屋棟岳
茶臼岳
毛無森
西根町
北
上
川
空雲山
大深岳
岩手山
姫神山
大白森
岩洞ダム
高倉山
駒ヶ岳
四十四田ダム
御大堂山
盛岡市
阿部館山
御所ダム

Ⅰ　調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線は、東北縦貫自動車道青森線と二戸郡安代町で分岐し、浄法寺町・二戸市・一戸町・九戸村・軽米町を経由して、青森県八戸市に至る約68kmの自動車専用道路である。このうち第８次施行命令区間は延長26.7kmで、二戸郡安代町の青森線との分岐点から二戸郡一戸町で国道４号と接続する一戸インターチェンジに至る区間である。

昭和53年11月に第８次施行命令が出され、それ以後、埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて県教育委員会と日本道路公団仙台建設局との協議が重ねられた。特にこの区間には浄法寺町にある天台宗の古寺で種々の重要文化財を有する天台寺が存在し、天台寺緑地保全地域になっていることから、協議の結果その地域を避けて路線を設定することとなった。

県教育委員会文化課では、昭和54年12月には日本道路公団の協力を得て実施計画路線沿いに500ｍ幅で埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行ない、その結果をもとに更に協議を重ね、日本道路公団による昭和56年５月の路線発表後、路線敷地内における埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行なった。また昭和57年には、路線敷地内に確認された遺跡のうち、安代町分の遺跡の発掘調査対象範囲について確認調査を行った。

昭和58年度に入り、当埋文センターに対し発掘調査が委託され、県教育委員会の指導と調整のもとに日本道路公団仙台建設局との間に契約を行ない、安代町繋沢Ⅱ遺跡、石神Ⅱ遺跡の発掘調査を行なうこととなった。また当初粗掘調査のみの予定であった安代町湯の沢Ⅲ遺跡と関沢口遺跡のうち、湯の沢Ⅲ遺跡については精査まで行うこととなり、結果的には３個所の遺跡の発掘調査と１個所の遺跡の粗掘遺構確認調査を行った。

なお、第８次施行命令区間には全部で28箇所の遺跡が確認されており、昭和59年度以降の発掘調査が予定されている。

II　調査方法と室内整理の方法

1．調査方法

調査地はその大半がタバコ栽培の畑地となっており、残りは山林となっていた。発掘調査に先だって、畑地内全域を踏査し、遺物の散布状況を確認した。その後試掘溝を入れて遺構の検出面を確認してから、表土除去・遺構検出を行った。試掘溝は１ｍ幅で20ｍ間隔に人手により行い、表土除去作業は路線中心杭の周囲を残して重機（ユンボ）を使用して全面について行った。表土の捨場所がないため、始めに路線の両側の幅５ｍの範囲で表土を剥いだ後、遺構検出・50cm間隔のコンタ測量を行い、遺構の検出されなかった場所に中央部の土を移動して表土を剥ぎ、遺構検出を行った。遺構検出は鋤簾を使用して行った。

グリッドの設定は日本道路公団の中心杭ＳＴＡ４＋60とＳＴＡ５＋80を基準点として使用し、平面直角座標に合わせるようにした。基準点の平面直角座標第Ｘ系による成果は下記のとおりである。

ＳＴＡ４＋60（Ｘ＝11834.1978，Ｙ＝20527.5228）

ＳＴＡ５＋80（Ｘ＝11920.6795，Ｙ＝20610.6437）

ＳＴＡ４＋60からＹ＝20550.0000に直交する点P_1と、それを見通した任意の遠地点P_2を 設定し、次にP_1からP_2を見通した後、Ｘ＝11875.0000に直交する点P_3とそれを見通す任意の遠地点P_4を設定した。P_3（Ｘ＝11875.0000，Ｙ＝20550.0000）を基準として平面直角座標に合わせて５ｍメッシュのグリッドを設定した。

グリッドの名称は、西から東に向かって50ｍ間隔でＢ・Ｃ・Ｄとし、さらに５ｍ間隔でＢＡ・ＢＢ……ＢＪ・ＣＡと細分し、また南から北に向かって５ｍ間隔で21・22……41・42……とし、アルファベットと数字の組合わせでＢＪ21グリッド、ＣＤ30グリッドのように呼んだ。

遺構名は、検出されたグリッド名と遺構の種類を組合わせてＢＦ30住居址、ＣＧ32ピットというように命名した。同一グリッド内から複数の遺構が検出されたときは、検出順にグリッド名の後に数字を付けてＢＧ28－１ピット、ＢＧ28－２ピットのようにした。

精査にあたっては、住居址は４分法、ピット等は２分法を原則として、遺構の状況に応じて使い分けることにしたが、実際は住居址も規模が小さく、２分法で行ったものが多い。

遺構内からの出土遺物は、埋土上位と下位、床面上とに分け、埋土出土のものは層位を確認して一括で取り上げ､床面上からのものは出土地点とレベルを図面に記録したのち取り上げた。

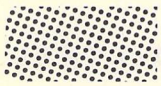
実測は調査員が主となり、作業員の協力を得て行った。実測図の縮尺は20分の１を原則としたが、状況に応じて10分の１の図面作成も行った。

写真撮影は調査員が行い、35㎜版２台（モノクロ・カラーリバーサル）と６×７㎝版１台、（モノクロ）を使用した。

２．室内整理

出土遺物は現地において水洗とラベル記入まで済ませ、室内では種別の仕分け、接合複元・写真撮影・実測・トレース・拓本の順に調査員が作業員の協力を得て行った。遺物の実測はニシオグラフＩ型・同II型を使用して行った。

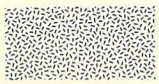
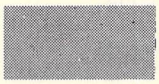
遺構実測図は原図の点検・修正後・トレース・図版作成の順に整理した。地形図のトレースは外部の業者に依託した。図面中の焼土・炭化材・崩落及び掘り過ぎ等は下記のスクリーントーンを使用した。土器はＰ、石はＳのアルファベットで図示した。


焼土

炭化材

崩落及び掘り過ぎ部分

遺物実測図では破損部を細い実線で現わした。石器の使用痕は下記のスクリーントーンで表わした。


敲打痕

磨面

仕上り図版の縮尺は次のとおりである。

住居址・焼土遺構：30分の１　，ピット・陥し穴：40分の１，

土器実測図：３分の１　，土器片拓影：３分の１　，剥片石器：２分の１

礫石器・石製品：３分の１　，石皿・台石：４分の１　，角柱状原石：５分の１

写真図版は、遺構は縮尺不定、遺物はほぼ以下の通りである。

土器：４分の１（１のみ３分の１、57・58は２分の１）　，土器片：３分の１

剥片石器：２分の１　，礫石器・石製品：３分の１　，石皿・台石：６分の１

角柱状原石：４分の１

Ⅲ　遺跡の立地と環境

1．遺跡の位置

湯の沢Ⅲ遺跡は、岩手県二戸郡安代町字湯の沢88番地内に所在し、安代町役場北東約2.7㎞地点に位置する。国土地理院発行五万分の一地形図「荒屋」（ＮＫ－54－18－16）図幅中では北緯40度６分23秒、東径141度4分29秒付近である。安代町は、岩手県北西端に位置し、東は浄法寺町と西根町に、西は秋田県鹿角市に、南は松尾村に、北は青森県田子町に接している。

安代町の町名は、1956年荒沢村と田山村が合併した際、町域を二分する安比川と米代川の河川名からとったものである。面積456.94㎢、人口8,000人余の町である。

2．地形概観

町域は、四角岳（1003ｍ）、中岳（1024.2ｍ）、皮投岳（1122.4ｍ）、呱子森（1018.8ｍ）、杣角山（1495.3ｍ）、八幡平（1613.6ｍ）、源太森（1595ｍ）、大黒森（1446ｍ）、屋ノ棟岳（1397.4ｍ）、前森山（1340.7ｍ）、七時雨山（1060ｍ）など、1000ｍ級の山々に囲まれている。また、町域の中央部を南北に走り、安比川と米代川の分水界をなす山々の中にも、安比岳（1458.3ｍ）、高倉山（1051.3ｍ）、比山（1037.9ｍ）のように、1000ｍ級の山がある。このため、総面積の85％以上は、火山灰土におおわれた標高400ｍ以上の山地であり、林野率は93％に達し、耕地は3.2％にすぎない。耕地の40％余を占める水田は、安比川と米代川沿いの谷底平野に分布している。谷底平野の背後には、小規模な段丘や山麓地緩斜面が発達し、畑地や牧草地として利用されている。安代町の主要遺跡はこの地形面に分布している。この地形面の標高は280ｍ～400ｍである。

3．地形区分

安比川流域の地形区分図は、種市進（現在．種市高校教諭）（註１）作成の原図を利用し、若干修正したものである。

Ａ面　谷底平野（Ｃ面）の後背地に発達する地形面であり、遺跡が最も多く分布している。調査例も多く、住居址などの遺構が多く検出されている。赤坂田～扇畑付近は複合扇状地、曲田・五日市・石神・中佐井付近は火山灰砂段丘である。

Ａ′面　山地とＡ面の傾斜変換点付近の地形面である。山麓地緩斜面や扇状地堆積物・崖錐性堆積物に被覆されたＡ面である。Ａ面に次いで遺跡が多い。曲田地区の遺跡はＡ面からＡ′面にかけて立地する場合が多い。

Ｂ面　Ａ面とＣ面の間に部分的に発達する小規模な沖積段丘である。高畑・曲田・保土沢・五日市付近に分布している。

Ｃ面　現沖積面である。

C′面　C面の背後に発達する小規模な扇状地群である。C面～C′面は遺跡の最も少ない地形面である。

地形区分図に示した16遺跡のうち、B面に立地する荒屋Ⅰ遺跡を除く15遺跡は、A面やA′面に立地している。

4．湯の沢Ⅲ遺跡付近の地形

湯の沢Ⅲ遺跡は、七時雨山地の北西山麓地を開析する湯の沢の右岸に発達する山麓地緩斜面に載る。この緩斜面は、標高350～400ｍの北北西に伸びる尾根の西斜面に発達している。標高320ｍ以上の上位斜面（平均斜度15度）は山林、下位斜面（平均斜度４～５度）は畑地である。調査範囲は、標高305～320ｍの下位斜面である。この斜面は、尾根と谷が掌指状（鋸歯状）に発達する旧地形面が二～三回にわたってタバコ畑として整地されたものである。このため、タバコ畑として利用されていた部分では、遺構や遺物は殆ど検出されなかった。遺構や遺物は、削平を受けなかった西端の残丘状の斜面に集中していた。

5．基本土層

湯の沢Ⅲ遺跡はタバコ栽培のために、尾根状の高まりを削り、沢を埋めて西から東に緩く傾斜する畑地に整地されていた。そのため東側の尾根付近では１～1.5ｍ削られ、基盤の礫層の現われている所もあった。削剝や盛土されず残存していた部分は西側に張り出す尾根の端付近だけで、現状は牧草地となっている。基本土層の模式図は西側端付近の土層断面をもとに作成した。各土層の特徴は以下のようになる。

Ⅰａ層　10ＹＲ3/2　黒褐色　表土層・植物根が多く混じる。しまり･粘りなし。層厚5～15cm。

Ⅰｂ層　盛土・褐色土と黒色土の混合層。旧沢地の付近に多く、所によっては盛土が三層見られる所もある。

Ⅱａ層　10ＹＲ3/3　暗褐色　橙色パミス・黄褐色土がまばらに混じる。上位に灰黄色の火山灰がレンズ状に堆積する所もある。しまり・粘りなし。層厚５～10cm。このⅡａ層上面が第一検出面である。遺物包含層である。

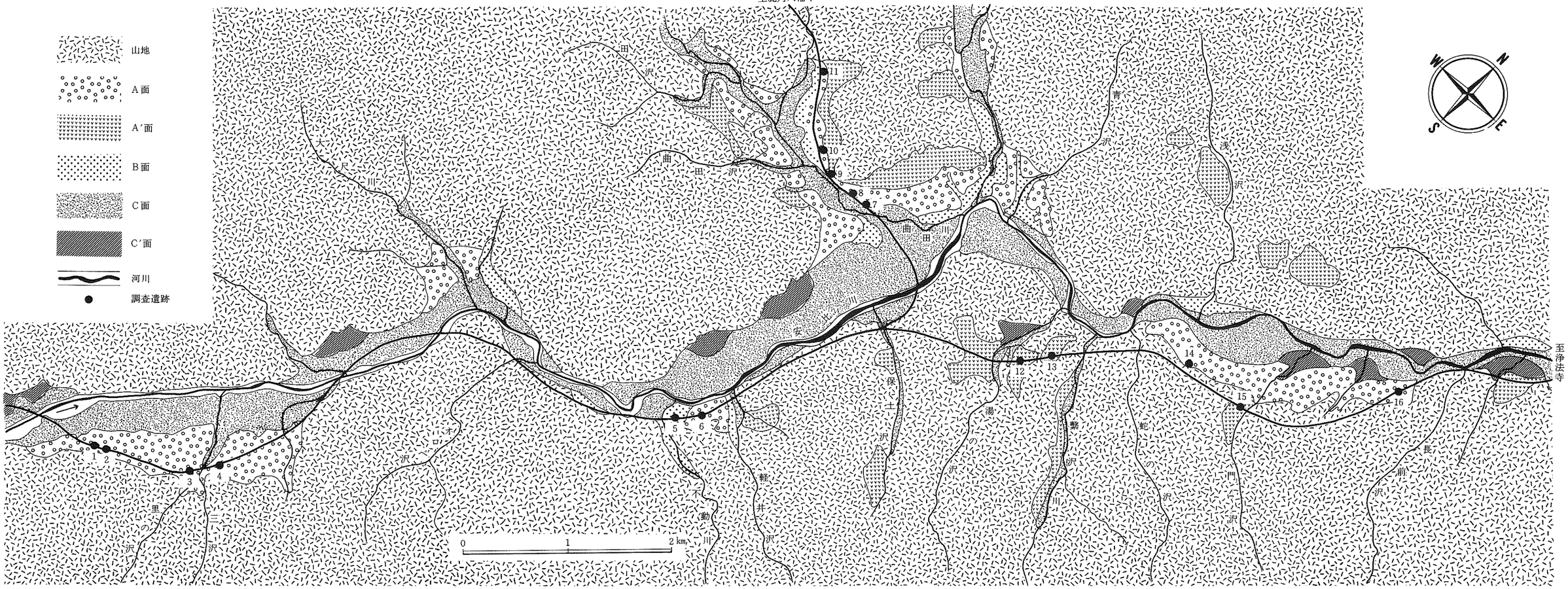
Ⅱｂ層　10ＹＲ2/1　黒　色　直径２～３㎜のラピリがごくまばらに混入する。旧沢地にのみ堆積している。しまり・ねばりなし。層厚25～30cm。

Ⅱｃ層　10ＹＲ3/4　暗褐色　橙色パミス・黄褐色土がまばらに混じる。ややしまっている。粘りなし。層厚20～30cm。このⅡｃ層の上面が第二検出面である。

Ⅲ　層　10ＹＲ4/4　褐　色　橙色パミスがまばらに混じる。しまっている。少し粘りあり。層厚20～60cm。

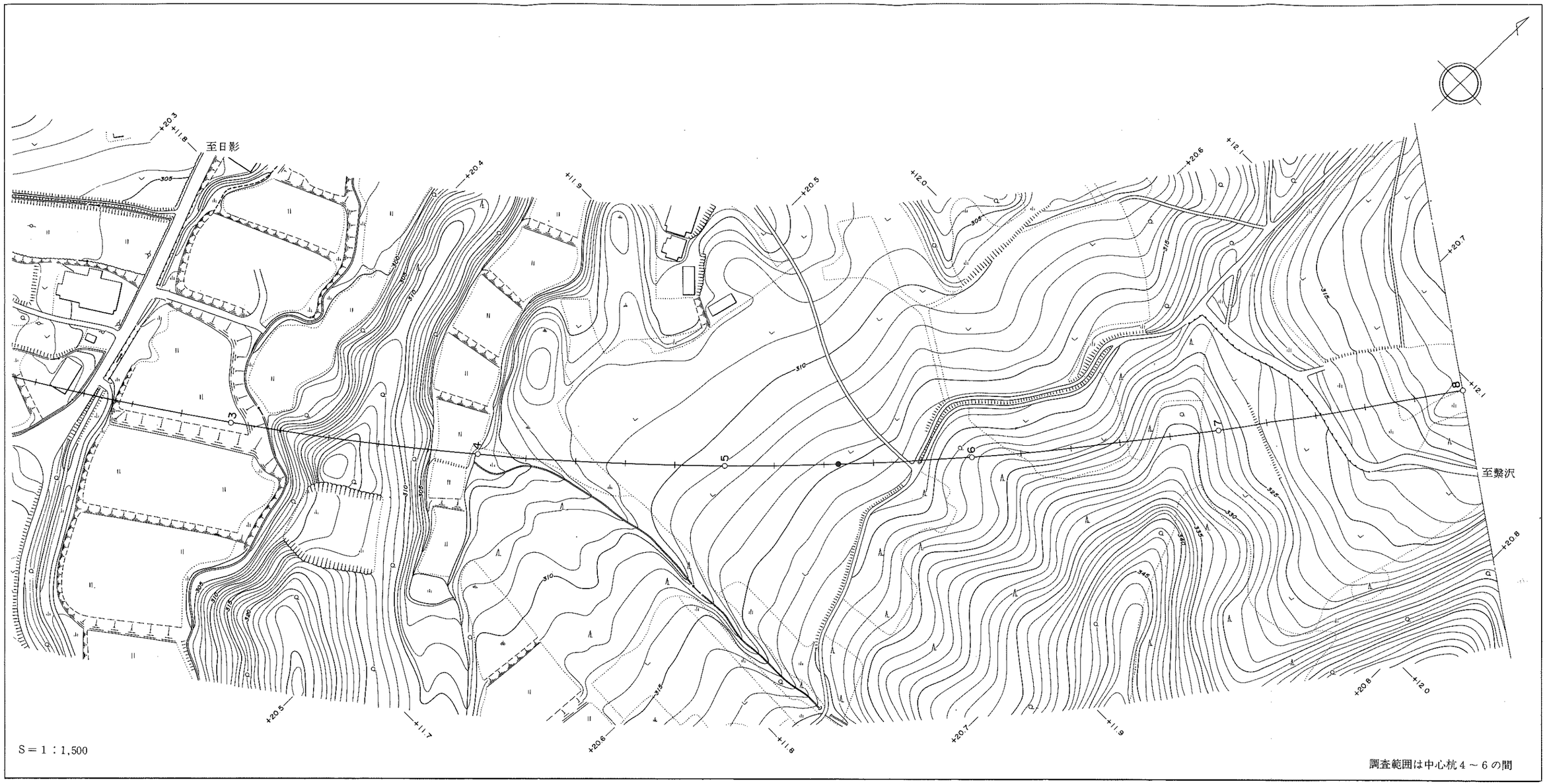
Ⅳａ層　10ＹＲ5/4　にぶい黄橙色　橙色パミスが混入する。八戸浮石流（シラス）と言われる。しまっている。粘りなし。層厚20～40cm。

図版２　地形分類図



おもな検出遺構数	1赤坂田Ⅰ	2赤坂田Ⅱ	3扇畑Ⅰ	4扇畑Ⅱ	5荒屋Ⅰ	6荒屋Ⅱ	7有矢野	8上の山Ⅹ	9上の山館	10上の山Ⅶ	11曲田Ⅰ	12湯の沢Ⅲ	
○ 縄文時代中期の住居址	○○●□	○○	□□□△	○○□△	○	○△△△△△△△	○○□△	○□	○●△	○○○●□□□□□□□△	○○○●●●●●●●●●●●●●●	○△	13繋沢Ⅱ（遺構なし）
◎ 縄文時代後期の住居址	○○	○○	□□△	○○□△	◎	○△△△△△△△	○○□△	○	○△	○○○□□□□□□□△	○○○●●●●●●●●●●●●●	○△	14石神Ⅱ（遺構なし）
◉ 縄文時代晩期の住居址	○◉	○○	□□	○□△	◎	△△△△△△	○◉□△	○	○	○○○□□□□□□□△	○○○●●●●●●●●●●●●●	○△	15関沢口（調査中）
● 縄文時代の住居址	○◉	○○	□□	○	◎	△△△△△△	○●□		●●	○○○□□□□□□□△	○○○●●●●●●●●●●●●●	●△	16水　神（調査中）
□ 平安時代の住居址	○●	○○	□□	◎	◉		○□			○○●□□□□□□	○○○●●●●●●●●●●●●●	△	
△ 陥し穴状遺構													

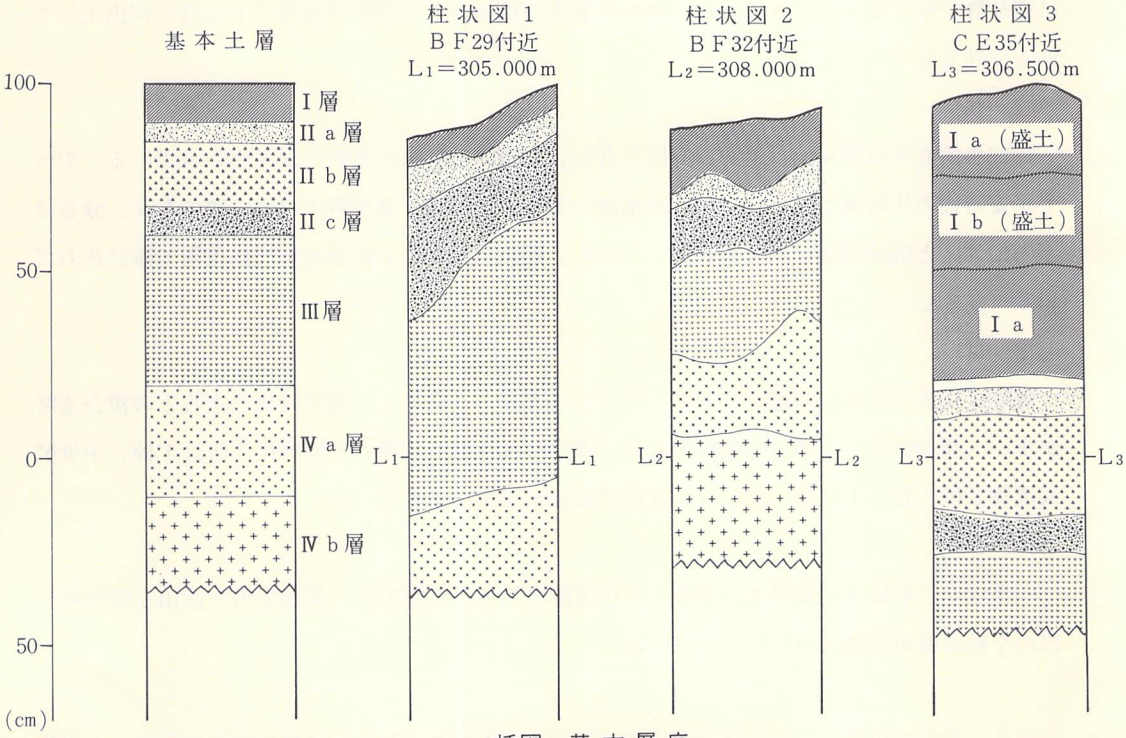
図版３　遺跡周辺の地形図



Ⅳｂ層　10ＹＲ6/4　にぶい黄橙色　Ⅳａより白味がかっている。八戸浮石流（シラス）と言われる。しまっている。粘りなし。層厚は７ｍ以上になる所もある。

本遺跡では西側の1～1.5ｍ削られた部分に凝灰岩質の礫が表土直下に見られた。

本遺跡の遺構検出面は表土直下のⅡａ層上面であるが、場所によってはⅡｃ層上面でなければ検出できない所もあった。Ⅱ層自体は遺物を多く含む遺物包含層であったが、遺跡の大半が削剝を受けており、調査地の西側にしか残っていなかった。



挿図　基本層序

６．安代町の遺跡

安代町の遺跡は、138ヵ所確認されている（註２）。その分布をみると、安比川流域が94ヵ所、米代川流域が44ヵ所である。安比川流域では、曲田川流域や中佐井方面に多く分布している。その中で、発掘調査が行われた遺跡は、越戸Ⅱ遺跡を除き安比川流域に分布する遺跡である。すでに、赤坂田Ⅰ・Ⅱ遺跡、扇畑Ⅰ・Ⅱ遺跡、荒屋Ⅰ・Ⅱ遺跡、有矢野遺跡、上の山Ⅶ・Ⅹ遺跡、上の山館遺跡、越戸Ⅱ遺跡の報告書が発行されている。以下時代別に概観してみたい。

縄文時代

遺跡数の80％近くを占めている。検出された住居址は、152棟である（註３）。時期別にみると、中期39棟、後期40棟、晩期44棟、不明29棟である。住居址の分布をみると、中期前半は、

荒屋Ⅰ・Ⅱ遺跡や湯の沢Ⅲ遺跡など安比川の東側に多く、後半は西側の有矢野遺跡、越戸Ⅱ遺跡や上の山地区の遺跡に多い。後期は、赤坂田・扇畑地区と上の山・曲田地区に多い。晩期は曲田Ⅰ遺跡に集中している。前期の遺構は検出されていないが、前期の円筒土器片は、湯の沢地区で出土している。

弥生時代

住居址は検出されていないが、墓壙と思われる遺構が曲田Ⅰ遺跡で5基検出されている（註4）。遺物は、馬場山（531.5m）の南東山麓部に発達するA面～A′面の地形面に載る上の山地区遺跡群で若干出土している。1983年から調査が開始された関沢口遺跡でも土器片が出土している（註5）。

古　代

1975年調査された保土沢遺跡の5棟を含め、8遺跡で66棟の住居址が検出されている。すべて平安時代の住居址である。上の山Ⅶ遺跡の39棟、扇畑Ⅰ・Ⅱ遺跡の14棟の順であり、分布は上の山地区と扇畑地区に二分される。しかし、関沢口遺跡でも住居址が粗掘段階で確認されている（註6）。

中　世

館跡に代表される17の遺跡である。段丘上（A面）に立地し、縄文時代や古代との複合遺跡が多い。調査例は、上の山館遺跡があり、縄文時代住居址6棟、平安時代住居址1棟、中世竪穴遺構3棟、ピット21基、陥し穴状遺構2基などが検出されている。

近　世

一里塚4、経塚3、窯跡2、番所1の10遺跡である。七時雨山―荒屋新町―曲田―梨木峠―田山を結ぶ鹿角街道沿いに分布している。

註1　種市進氏は、岩手県埋蔵文化財センターの専門調査員として発掘調査に従事し、安比川流域の地形区分を『上の山Ⅶ遺跡発掘調査報告書』などで発表している。

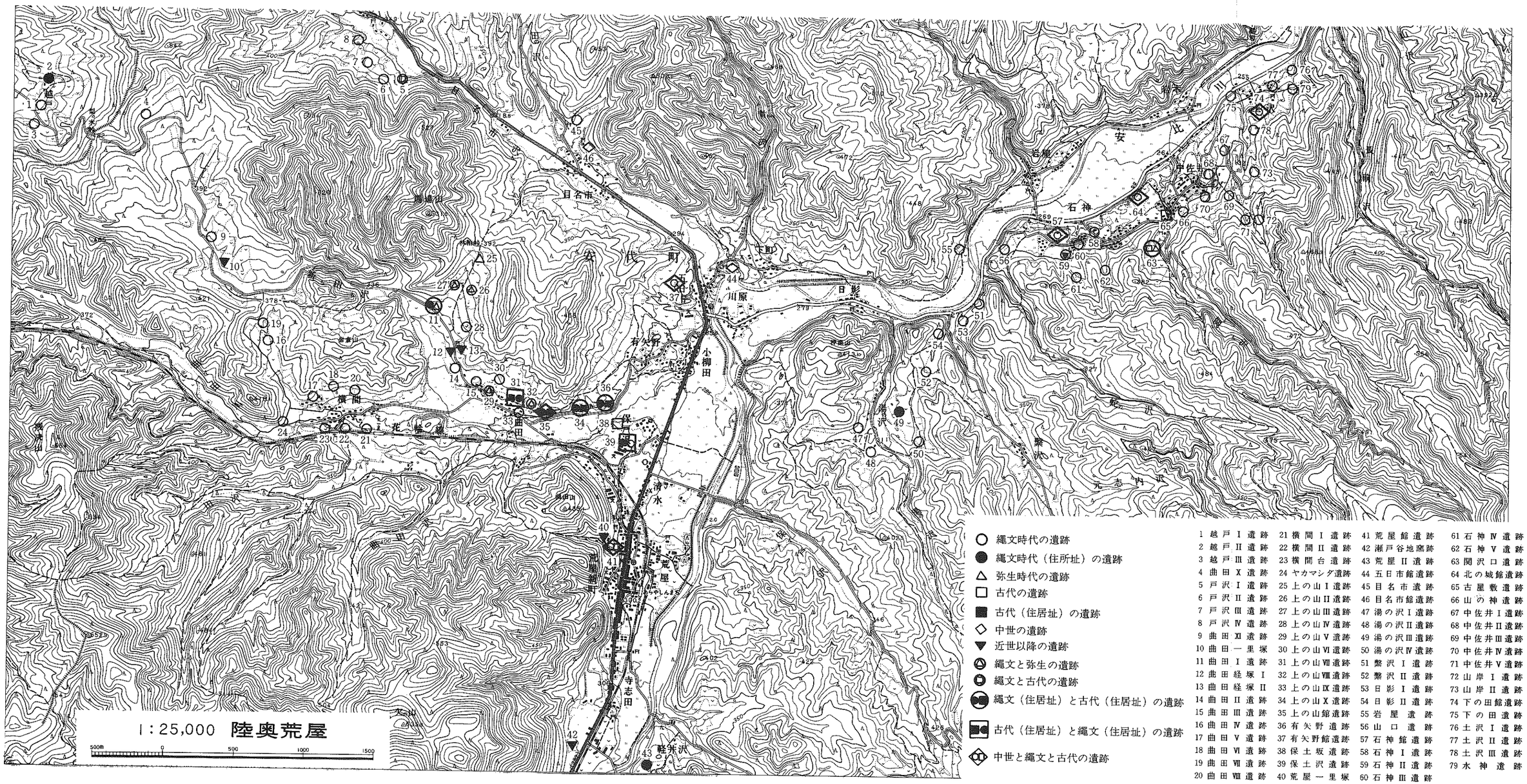
註2　遺跡数は、岩手県遺跡地名表をもとに、鈴木隆英が『曲田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』に掲載予定のものである。

註3　曲田Ⅰ遺跡を70棟とした数である。

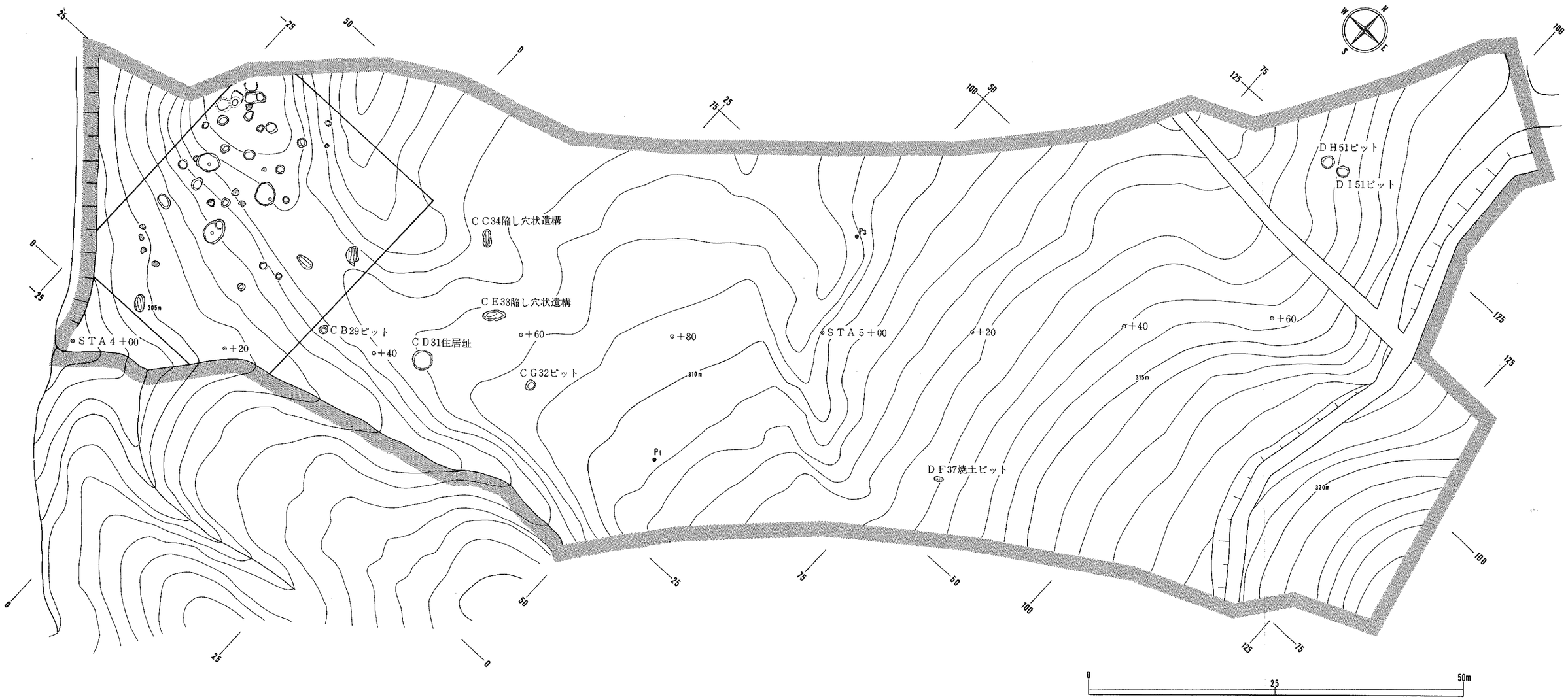
註4　報告書は1984年発行予定。

註5・6　関沢口遺跡は1983年粗掘を行い、1984年精査を行っている。

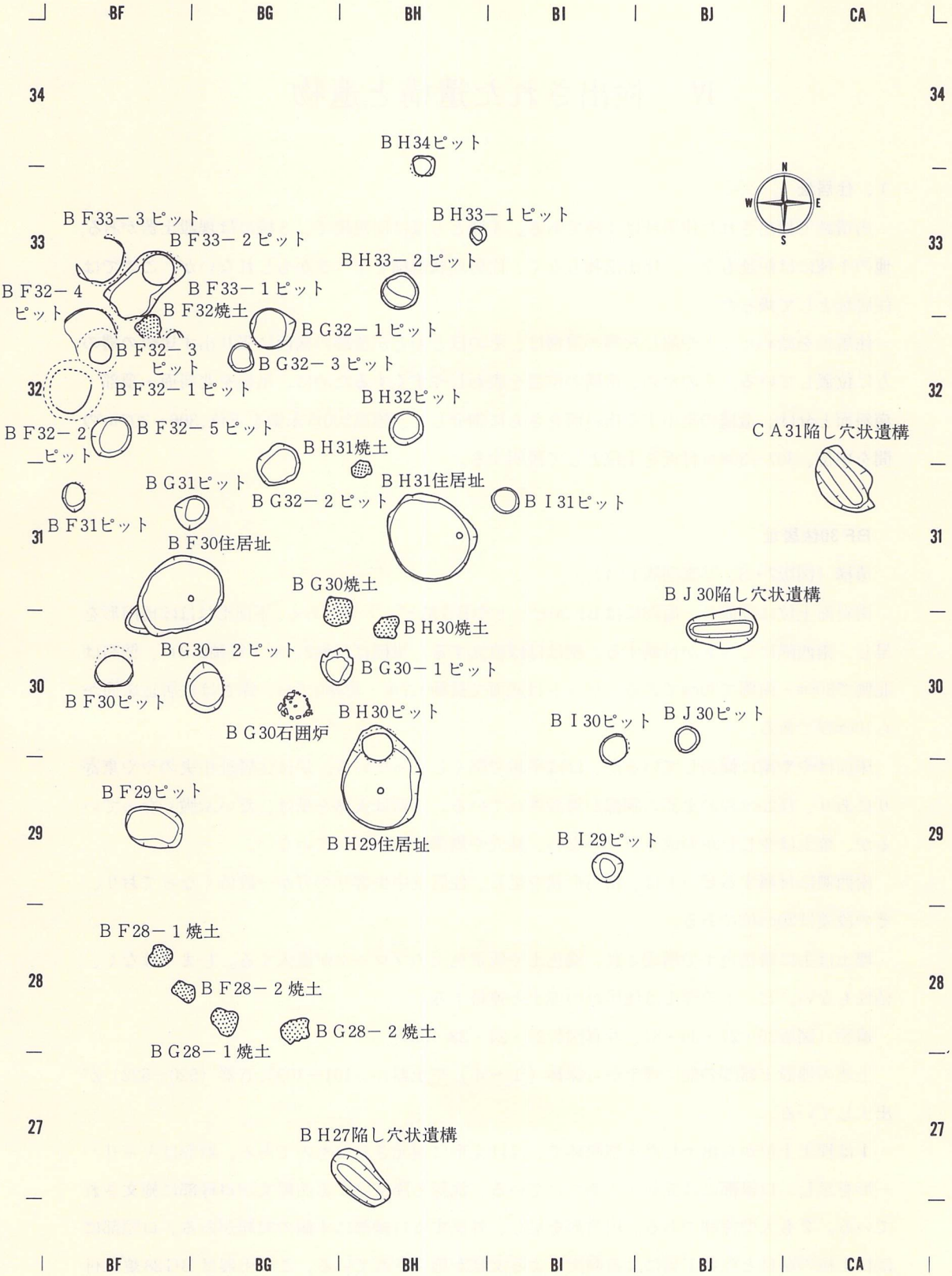
図版4　遺跡分布図


1:25,000 陸奥荒屋
500m 0 500 1000 1500
目名市
安代町
川原
日影
小柳田
有矢野
横間
曲田
保
荒屋
寺志田
駄米沢
石神
中佐井
安丘
湯沢
繋沢
縄文時代の遺跡
縄文時代（住所址）の遺跡
弥生時代の遺跡
古代の遺跡
古代（住居址）の遺跡
中世の遺跡
近世以降の遺跡
縄文と弥生の遺跡
縄文と古代の遺跡
縄文（住居址）と古代（住居址）の遺跡
古代（住居址）と縄文（住居址）の遺跡
中世と縄文と古代の遺跡
1 越戸Ⅰ遺跡
2 越戸Ⅱ遺跡
3 越戸Ⅲ遺跡
4 曲田Ⅹ遺跡
5 戸沢Ⅰ遺跡
6 戸沢Ⅱ遺跡
7 戸沢Ⅲ遺跡
8 戸沢Ⅳ遺跡
9 曲田Ⅺ遺跡
10 曲田一里塚
11 曲田Ⅰ遺跡
12 曲田経塚Ⅰ
13 曲田経塚Ⅱ
14 曲田Ⅱ遺跡
15 曲田Ⅲ遺跡
16 曲田Ⅳ遺跡
17 曲田Ⅴ遺跡
18 曲田Ⅵ遺跡
19 曲田Ⅶ遺跡
20 曲田Ⅷ遺跡
21 横間Ⅰ遺跡
22 横間Ⅱ遺跡
23 横間台遺跡
24 ヤカマシタ遺跡
25 上の山Ⅰ遺跡
26 上の山Ⅱ遺跡
27 上の山Ⅲ遺跡
28 上の山Ⅳ遺跡
29 上の山Ⅴ遺跡
30 上の山Ⅵ遺跡
31 上の山Ⅶ遺跡
32 上の山Ⅷ遺跡
33 上の山Ⅸ遺跡
34 上の山Ⅹ遺跡
35 上の山館遺跡
36 有矢野遺跡
37 有矢野館遺跡
38 保土坂遺跡
39 保土沢遺跡
40 荒屋一里塚
41 荒屋館遺跡
42 瀬戸谷地窯跡
43 荒屋Ⅱ遺跡
44 五日市館遺跡
45 目名市遺跡
46 目名市館遺跡
47 湯の沢Ⅰ遺跡
48 湯の沢Ⅱ遺跡
49 湯の沢Ⅲ遺跡
50 湯の沢Ⅳ遺跡
51 繋沢Ⅰ遺跡
52 繋沢Ⅱ遺跡
53 日影Ⅰ遺跡
54 日影Ⅱ遺跡
55 岩屋遺跡
56 山口遺跡
57 石神館遺跡
58 石神Ⅰ遺跡
59 石神Ⅱ遺跡
60 石神Ⅲ遺跡
61 石神Ⅳ遺跡
62 石神Ⅴ遺跡
63 関沢口遺跡
64 北の城館遺跡
65 古屋敷遺跡
66 山の神遺跡
67 中佐井Ⅰ遺跡
68 中佐井Ⅱ遺跡
69 中佐井Ⅲ遺跡
70 中佐井Ⅳ遺跡
71 中佐井Ⅴ遺跡
72 山岸Ⅰ遺跡
73 山岸Ⅱ遺跡
74 下の田館遺跡
75 下の田遺跡
76 土沢Ⅰ遺跡
77 土沢Ⅱ遺跡
78 土沢Ⅲ遺跡
79 水神遺跡

図版５　遺構配置図（１）


ＣＣ34陥し穴状遺構
ＣＥ33陥し穴状遺構
ＣＢ29ピット
ＣＤ31住居址
ＣＧ32ピット
ＳＴＡ４＋00
ＳＴＡ５＋00
ＤＦ37焼土ピット
ＤＨ51ピット
ＤＩ51ピット
P1
P3
305m
310m
315m
320m
N
S
W
E
0
25
50m

図版6　遺構配置図（2）


BF
BG
BH
BI
BJ
CA
34
33
32
31
30
29
28
27
N
W
E
S
ＢＨ34ピット
ＢＨ33－１ピット
ＢＨ33－２ピット
ＢＦ33－３ピット
ＢＦ33－２ピット
ＢＦ33－１ピット
ＢＦ32－４ピット
ＢＦ32焼土
ＢＧ32－１ピット
ＢＦ32－３ピット
ＢＧ32－３ピット
ＢＦ32－１ピット
ＢＨ32ピット
ＢＦ32－２ピット
ＢＦ32－５ピット
ＢＨ31焼土
ＣＡ31陥し穴状遺構
ＢＧ31ピット
ＢＨ31住居址
ＢＧ32－２ピット
ＢＩ31ピット
ＢＦ31ピット
ＢＦ30住居址
ＢＧ30焼土
ＢＪ30陥し穴状遺構
ＢＨ30焼土
ＢＧ30－２ピット
ＢＧ30－１ピット
ＢＦ30ピット
ＢＨ30ピット
ＢＧ30石囲炉
ＢＩ30ピット
ＢＪ30ピット
ＢＦ29ピット
ＢＨ29住居址
ＢＩ29ピット
ＢＦ28－１焼土
ＢＦ28－２焼土
ＢＧ28－２焼土
ＢＧ28－１焼土
ＢＨ27陥し穴状遺構

Ⅳ　検出された遺構と遺物

1．住居址

当遺跡で検出された住居址は４棟である。４棟ともほぼ同規模で、３棟には埋設土器がある。他の１棟には炉址もなく、伴出遺物もなく、住居址状遺構とすべきかもしれないが、ここでは住居址として扱った。

住居址を始めピットや陥し穴等の遺構は、そのほとんどが遺跡の南西に張り出す尾根の端の方に位置している。そのため、遺構の位置を表わしやすくするために、尾根を北斜面・頂部・南斜面と分け、遺構の集中する南斜面をさらに細分して、標高306ｍ未満を下位、306～307ｍの間を中位、307～308ｍ付近を上位として説明する。

ＢＦ30住居址

遺構（図版7・8、写真図版3・4）

南斜面上位に位置し、周囲にはＢＦ30ピットやＢＧ31ピット等がある。平面形はほぼ楕円形を呈し、南西隅にピットが付属する。壁はほぼ直立する。規模は長軸2.7ｍ・短軸2.2ｍ、壁高は北側で50cm・南側で30cmである。ピットは底面で長軸0.7ｍ・短軸0.5ｍ、深さは住居址床面から10cm程である。

床面はやや南に傾斜しているが、ほぼ平坦で堅くしまっている。炉は住居址中央のやや東寄りにあり、径20cm程の土器の胴部が埋設されている。土器は火熱を受け、だいぶ脆くなっているが、焼土は少ししか形成されていない。柱穴や周溝は検出されていない。

南西側に付属するピットは、楕円形状を呈し、住居址中央寄りの方が一段低くなっており、その段差は20cm位である。

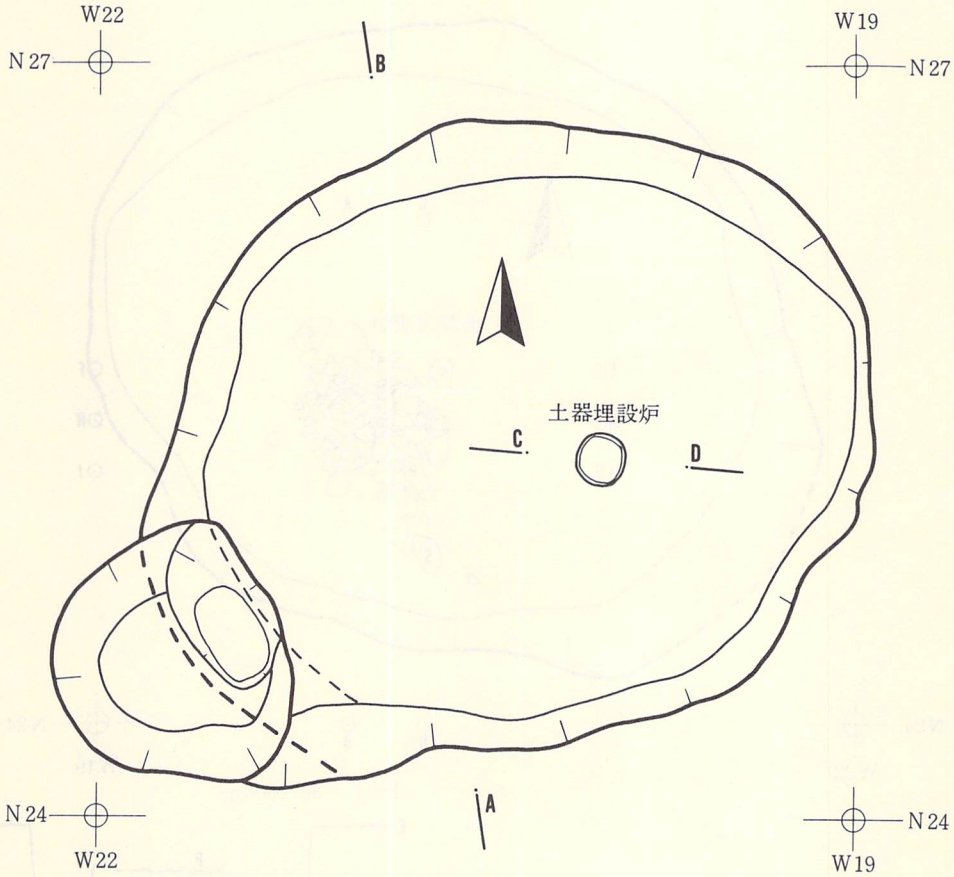
埋土は主に暗褐色土で構成され、褐色土や灰黄色土のブロックが混入する。しまりはなく、粘性もない。ピットの埋土は住居址の埋土と連続する。

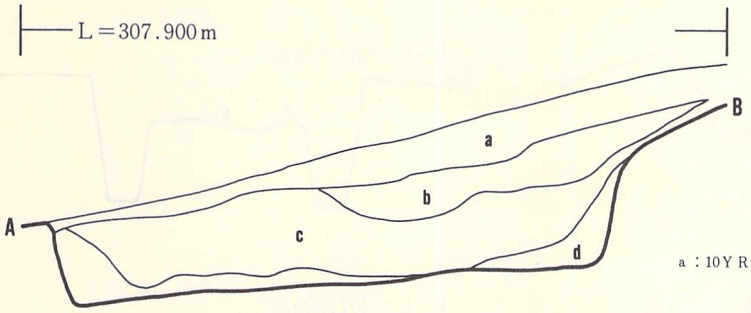
遺物（図版26・27・36・54、写真図版23・24・28・39）

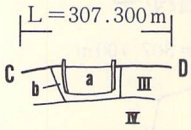
上述の埋設土器(5)の他に埋土から深鉢（１～４）や土器片（101～109）、石器（520～522）が出土している。

1は埋土上位から出土した大型深鉢で、ほぼ完形に復元されたものである。器形はキャリパー形を呈し、口縁部には突起が４個ついている。沈線と隆帯による曲線文が口縁部に施文されている。**2**も大型深鉢である。円筒形を呈し、外反する口縁部に４個の突起がある。口頸部には粘土紐の貼付と箆状工具による刺突による文様が施文されている。この土器はＢＧ28焼土付

図版７　ＢＦ30住居址





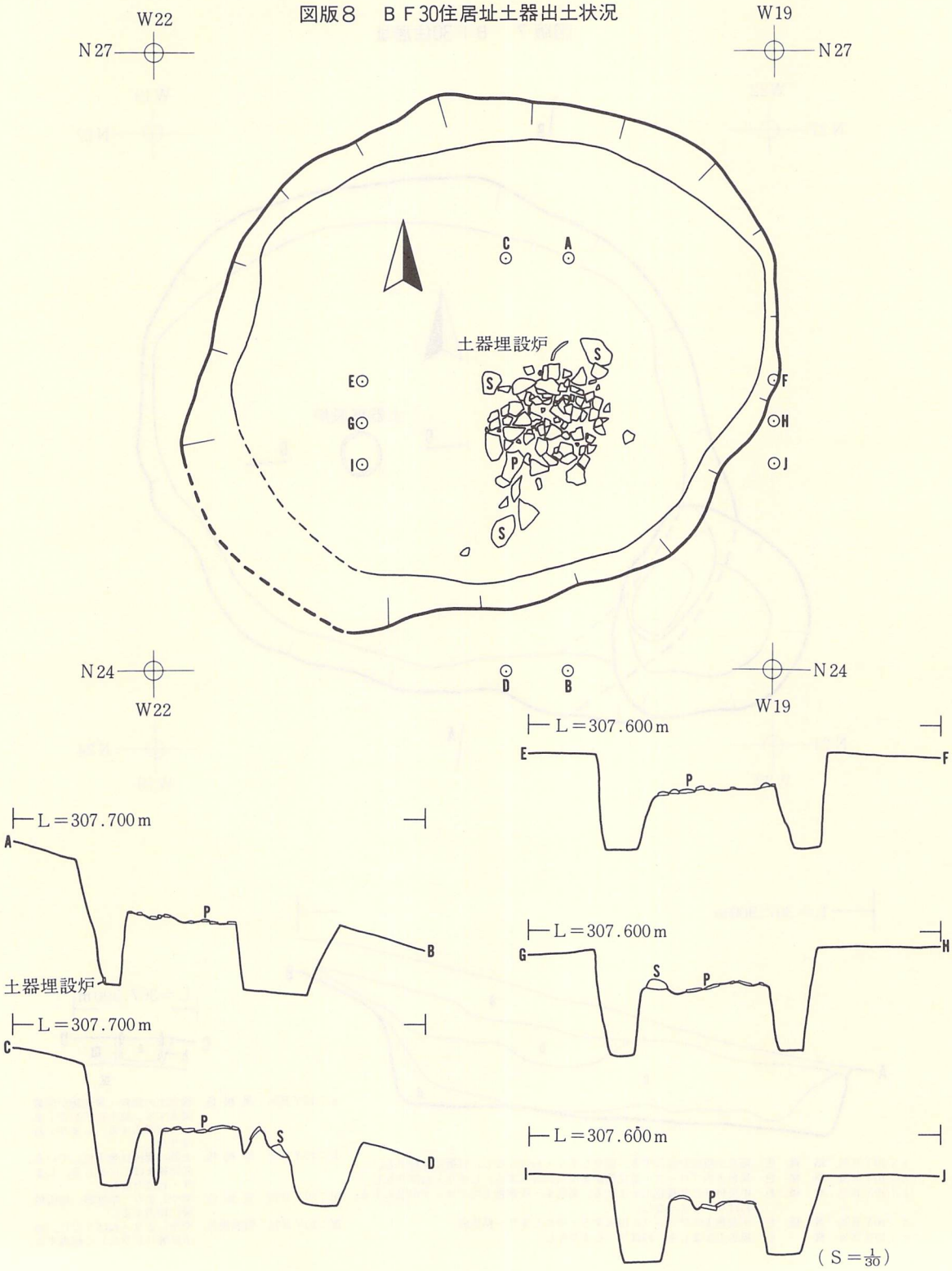


a：10ＹＲ2/3　暗　褐　色　褐色土粗粒が混入する。ややしまり・ねばりなし。Ⅱ層に連続する。
b：10ＹＲ3/4　暗　褐　色　褐色土のブロック・炭化物がまばらに混入する。しまり・ねばりなし。
c：10ＹＲ3/3　暗　褐　色　中央付近に黒褐色土がまじる。褐色土・灰黄色土のブロックが混入する。ねばり・しまりなし。
d：10ＹＲ5/6　黄　褐　色　灰黄色土のブロックが混入する。ややしまり・粘性弱。
e：10ＹＲ3/4　褐　　色　黒色土がまじる。ねばり・しまりなし。

a：10ＹＲ2/3　黒　褐　色　褐色土の粗粒・炭化物が少量混入する。焼土粒子がごくまばらに混入する。しまり・ねばりなし。
b：10ＹＲ3/4　暗　褐　色　土器の周囲は焼土化している。炭化物まばらにまじる。しまり・ねばりなし。
Ⅲ：10ＹＲ5/6　黄　褐　色　ややしまり・粘性弱。地山Ⅲ層に相当する。
Ⅳ：10ＹＲ4/6　明黄褐色　ややしまり・ねばりなし。地山Ⅳ層（シラス）に相当する。

（Ｓ＝1/30）

図版８　ＢＦ30住居址土器出土状況



近から出土した土器片とも接合している。**3**は小型深鉢で3分の2位が残存する。平縁の口縁部に粘土紐を波状に貼り付けてある。また口縁部下端には横に張り出す小突起がある。**4**も小型深鉢で胴部上位の2分の1周位が残存する。円筒形を呈し、口頸部に沈線が一条巡る。**5**は口縁部・底部ともに欠損している。器形はキャリパー状を呈していたようである。

101～**107**は口縁部破片、**108**・**109**は胴部破片である。時期は**1**・**3**が縄文時代中期中葉の大木8ａ式、**2**・**103**が円筒上層ｃ式、**101**が円筒上層ｅ式に相当すると思われる。

石器（520～522）は角柱状の原石である。横断面形が五角形を呈する角閃石英安山岩の柱状節理の破片で、長さと重量は、**520**：50.5cm・2400ｇ、**521**：44.6cm・1020ｇ、**522**：29.7cm、750ｇである。この石器は住居址南西に付属するピットの埋土上位から出土している。

BH29住居址

遺構（図版９、写真図版4・5）

南斜面の中位に位置し、北側でBH30ピットと重複している。平面形は楕円形で、壁はほぼ直立する。規模は長軸2.6ｍ・短軸2.2ｍ、壁高は北側で60cm・南側で25cmである。

床面は南側に少し傾斜するがほぼ平坦で、堅くしまっている。ピットと重複する部分は貼床となっている。炉は中央付近にあり、径20cm程の土器が埋設されている。埋設土器はかなり破損しており、焼土が薄く形成されている。炉の周囲と北西の壁際には粒径20cm位の礫が数個置かれている。柱穴や周溝は検出されていない。

埋土は主に黒褐色土で構成されており、焼土や炭化物が混入している。埋土の上位は軟らかく、下位はややしまっている。

遺物（図版27・36・42・54、写真図版24・28・32・39）

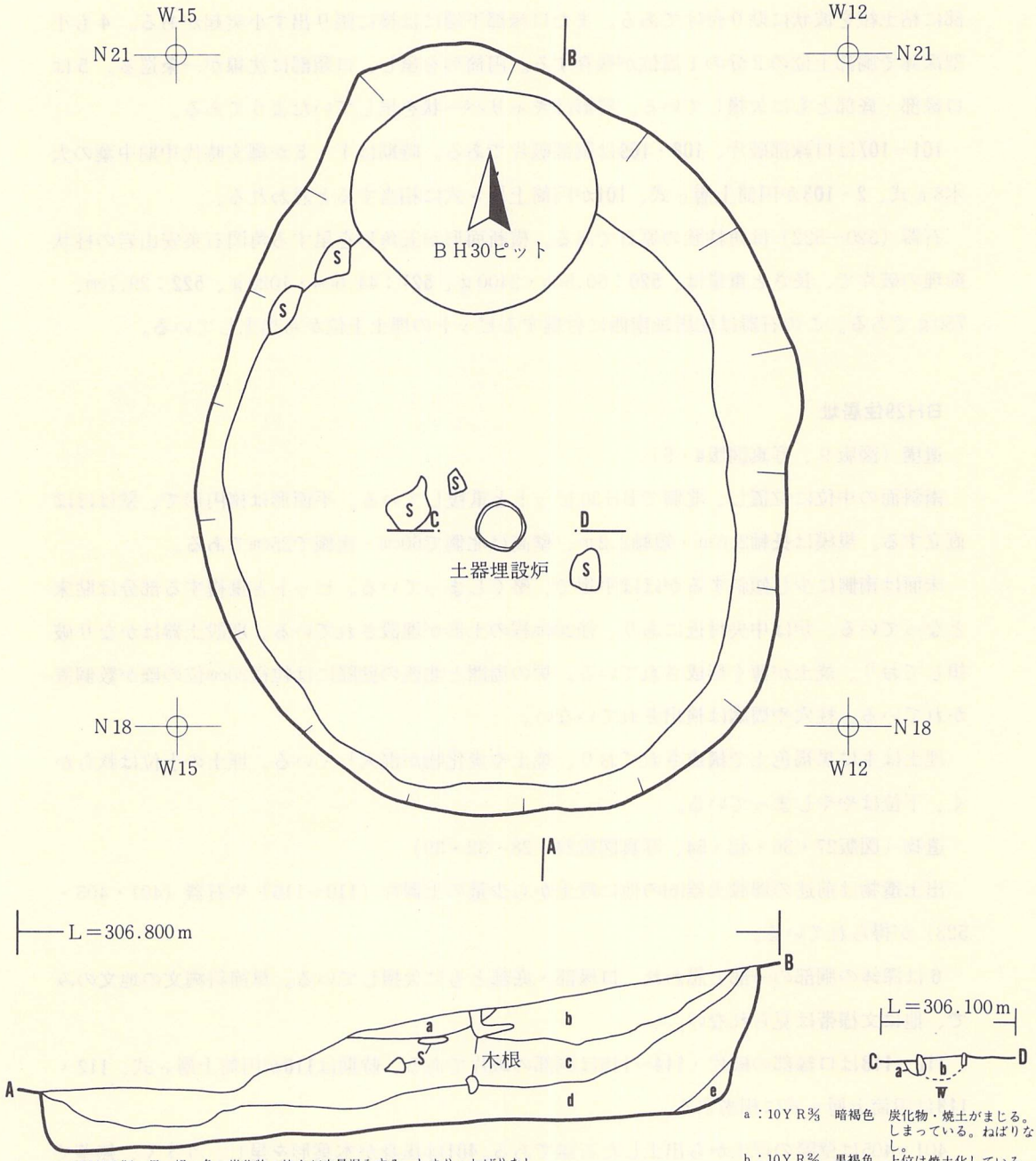
出土遺物は前述の埋設土器(6)の他に埋土から少量の土器片（110～116）や石器（401・405・523）が得られている。

6は深鉢の胴部の一部と思われ、口縁部・底部ともに欠損している。単節斜縄文の地文のみで、他に文様帯は見られない。

110～**113**は口縁部の破片・**114**～**116**は胴部の破片である。時期は**110**が円筒上層ｃ式、**112**・**113**は円筒上層ａ式に相当する。

401・405は壁際の埋土から出土した石鏃である。**401**は鏃身が木葉形を呈し、うすく、無茎である。長さ29mm・重量1.3ｇで石質は硬質泥岩である。**405**は鏃身が木葉形を呈し、有茎である。長さ49mm・重量3.9ｇで石質は白色珪質細粒凝灰岩である。**523**は横断面形が五角形の角閃石英安山岩の柱状節理の破片で、長さ19.0cm・重量750ｇである。

図版9　ＢＨ29住居址

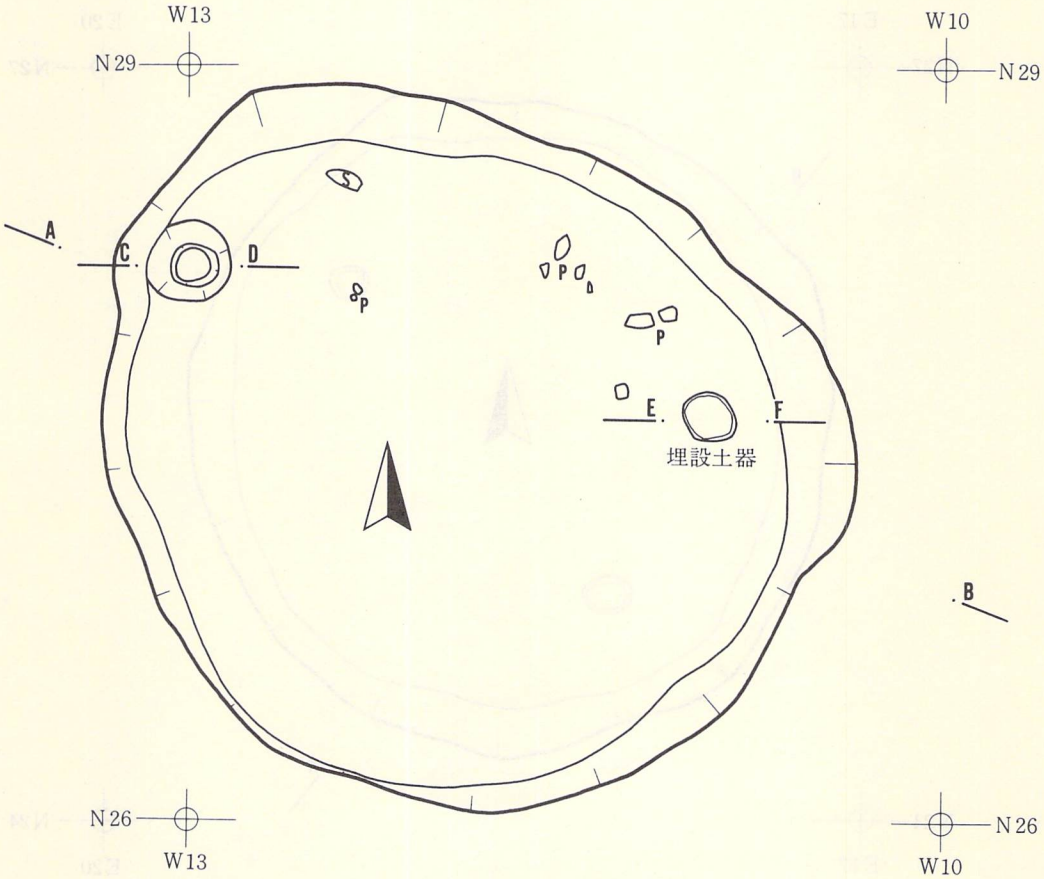


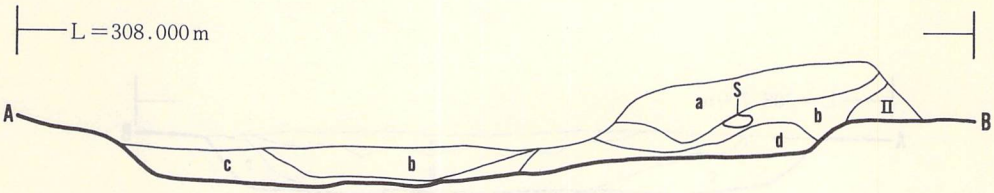
a：10YR3/2　黒　褐　色　炭化物・焼土が少量混入する。しまり・ねばりなし。
b：10YR2/3　黒　褐　色　焼土・炭化物・橙色パミスがまばらに混入する。しまり・ねばりなし。
c：10YR3/2　黒　褐　色　炭化物・焼土がごくまばらにまじる。ややしまり・ねばりなし。
d：10YR3/2　黒　褐　色　炭化物・焼土・褐色土ブロックが少量まじる。しまっている。粘性弱。
e：10YR4/4　褐　　色　灰黄色土がやや多くまじる。しまりなし。粘性あり。

a：10YR3/3　暗褐色　炭化物・焼土がまじる。しまっている。ねばりなし。
b：10YR2/3　黒褐色　上位は焼土化している。厚い部分で1㎝。しまり・ねばりなし。
Ⅳ：10YR5/8　黄褐色　シラス層への漸移層。しまっている。ねばりなし。

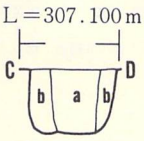
（S＝$\frac{1}{30}$）

図版10　ＢＨ31住居址

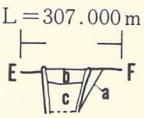




a：10YR2/1　黒　色　しまりなし。ねばりなし。
b：10YR2/2　黒褐色　褐色土ブロック・炭化物がまばらに混入する。しまり・ねばりなし。
c：10YR3/3　暗褐色　黄褐色の浮石がごくまばらに混じる。しまり・ねばりなし。
d：10YR4/6　褐　色　黄褐色土のブロックが混入する。ややしまり・ねばりなし。
II：10YR5/4　褐　色　植物根が多く混入する。ややしまり・ねばりなし。



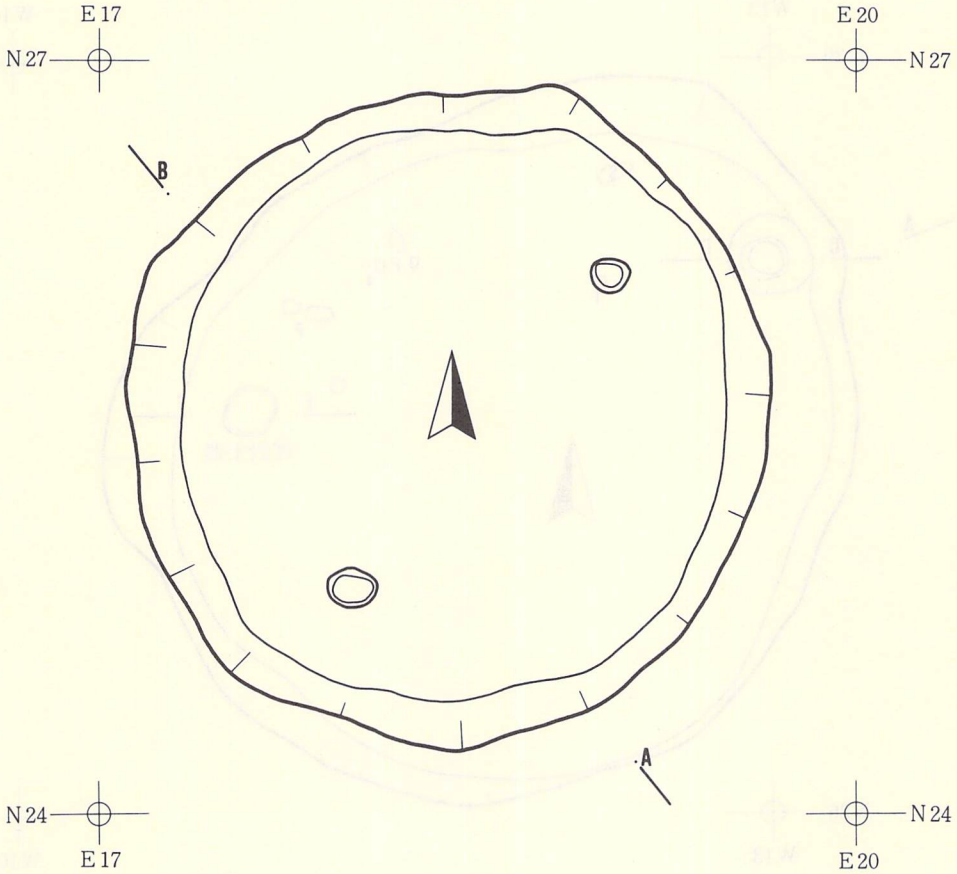
a：1 YR3/4　暗褐色　褐色土の粗粒混入。しまり・ねばりなし。
b：10YR3/3　明褐色　2～3cmØの風化礫と褐色土粗粒が混入 aよりややしまる。粘りなし。

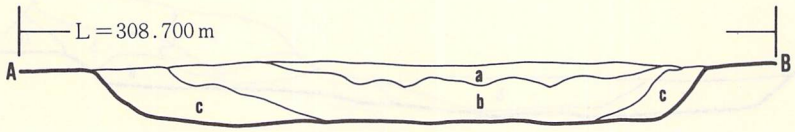


a：10YR4/4　褐　色　暗褐色土混入。ややしまり・ねばりなし。
b：10YR3/4　暗褐色　褐色土の　粒がまばらに混入する。ややしまり・ねばりなし。
c：10YR5/6　黄褐色　地山Ⅳ層。しまっている。粘性弱。

（S＝1/30）

図版11　ＣＤ31住居址





a：10ＹＲ⅔　黒　褐　色　炭化物がごくまばらに混入する。しまり・粘性なし。
b：10ＹＲ⅔　暗　褐　色　灰黄色土のブロックや粗粒が多く、炭化物・焼土粗粒がまばらに混入する。しまり・粘性なし。
c：10ＹＲ⅔　にぶい黄褐色　褐色土ブロック・灰黄色土ブロックが混入する。ややしまる。粘性なし。

（Ｓ＝$\frac{1}{30}$）

BH31住居址

遺構（図版10、写真図版6・7）

南斜面上位から尾根頂部付近にかけて位置し、近くにはＢＩ31ピットやBH31焼土がある。この遺構の周囲は土採りが行われており、遺構検出時には壁の大半は破損していた。平面形はほぼ楕円形を呈し、壁は60度位に外傾して立ち上がる。規模は長軸2.7m・短軸2.5m、残存する壁高は北側で35cm・南側で５cm位である。

床面はほぼ平坦で、堅くしまっている。柱穴は西側の壁際に１基だけ検出されている。柱穴痕は径15cm、掘方径25cm、深さ25cmである。炉と周溝は検出されていない。東壁寄りには鉢形土器が埋設されているが、その周囲には焼土や炭化材は認められない。

埋土は上位が軟らかい黒色土や黒褐色土、床面近くは黄褐色土が混入する暗褐色土で構成されている。南東側の床面近くの埋土には、炭化物や焼土が混入し、ややしまっている。

遺物（図版28・36・48・49、写真図版28・35・36）

出土遺物は上述の埋設土器(7)の他に、床面直上から（117～119）、埋土下位から(8)、埋土上位から（120～127）のような土器片や石器（496・499）が得られている。

7はややキャリパー形を呈する大型深鉢である。底部は欠損し、口縁部は平縁で内彎ぎみに外傾して立ち上がる。単節斜縄文の地文のみで、文様帯を持たない。**8**は大型深鉢の口縁部破片で８分の１位の残存である。平縁で粘土紐の貼付と竹管刺突による文様が構成されている。**120**・**126**・**127**は口縁部破片、**117**～**119**・**121**～**125**は胴部破片である。時期は**8**と**121**・**122**が円筒上層ｃ式、**120**が大木8ａ式に相当する。

２点の石器のうち**499**は床面直上から出土している。かなり風化して表面が剥落しかかっているが、平らな磨面と浅い凹みが形成されている。重量380ｇで、石質は角閃黒雲母花崗岩である。**496**は埋土からの出土で、磨面と敲打面と不規則な浅い凹みが形成されている。重量810ｇで石質は両輝石安山岩である。

CD31住居址

遺構（図版11、写真図版８）

尾根頂部に位置していて、他の３棟の住居址からはやや東方に離れている。平面形はほぼ円形を呈し、壁は内彎ぎみに外傾して立ち上がる。規模は径2.3m・壁高20cm位である。

床面は平坦で、堅くしまっている。炉と周溝はない。柱穴と思われる小ピットが南西と北東の壁からそれぞれ30cm中央寄りにあり、規模は径15cm・深さは５cmと10cmである。柱穴の埋土は炭化物がまばらに混入する暗褐色土で、しまりはない。

埋土は主に炭化物・焼土・灰黄色土のブロックが混入する暗褐色土で構成され、しまり・粘

性ともにない。壁際から床面にかかる部分には褐色土や灰黄色土のブロックが混入するにぶい黄褐色土が堆積し、ややしまっている。

遺物は出土していない。

2．焼土遺構

ここで扱う焼土遺構は、屋外炉と思われる焼土や石囲炉・焼土ピットを一括したものである。

またＢＦ28－１・２焼土、ＢＧ－１・２焼土は南斜面下位に位置し、隣接している。遺構検出時は住居址と思われたが、焼土の周囲は南に緩く傾斜し、焼土のレベルもそれぞれ異なり、床面と思われる部分や柱穴・壁等も検出されなかったので、焼土遺構としたものである。

BF28－１焼土（図版12、写真図版９）

南斜面下位に位置し、東側にはＢＦ28－２焼土がある。焼土の広まりは楕円形状で、規模は長軸90cm・短軸70cmで、厚さは中央付近が最大で８cm位である。焼土の直上や周囲の覆土には炭化物が混入している。床面と思われる堅い平坦面や柱穴・周溝等は検出されていない。

BF28－２焼土（図版12、写真図版９）

南斜面下位に位置し、周囲にはＢＦ28－１焼土やＢＧ28－１焼土等がある。この焼土の広がりは不整な楕円形状を呈し、規模は長軸80cm・短軸60cm位で、厚さは中央付近が最大で10cm位ある。床面と思われる平坦面や柱穴・周溝等は検出されていない。

BG28－１焼土（図版13、写真図版10）

南斜面下位に位置し、周囲にはＢＦ28－２焼土・ＢＧ28－２焼土等がある。焼土の広がる範囲は不整な楕円形を呈し、規模は長軸 100cm・短軸80cm位・厚さは中央付近が最大で10cm位ある。植物根による攪乱を受け、粗粒状になっている所が多い。床面のような平坦面や柱穴・周溝は検出されていない。

BG28－２焼土（図版13、写真図版10）

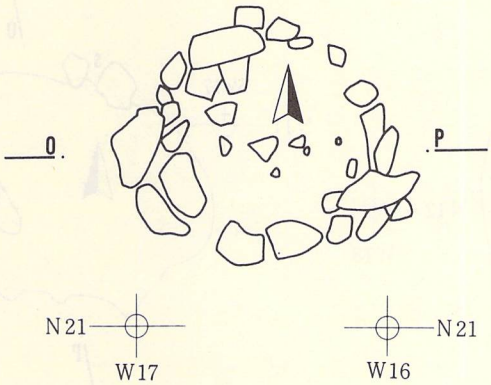
南斜面下位に位置し、周囲にはＢＧ28－１焼土やＢＨ27陥し穴等がある。焼土の広がる範囲は不整な円形を呈し、規模は径90cm位、厚さは最大10cm位である。植物根による攪乱を受けている。床面のような平坦面や柱穴・周溝は検出されていない。

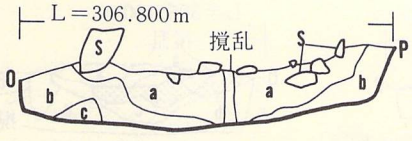
遺物（図版28・29・42～44、写真図版24・25・32・33）

上記した四つの焼土遺構の周辺からは多くの土器片や石器が出土している。土器片は（９～16）

図版12　焼土遺構（1）

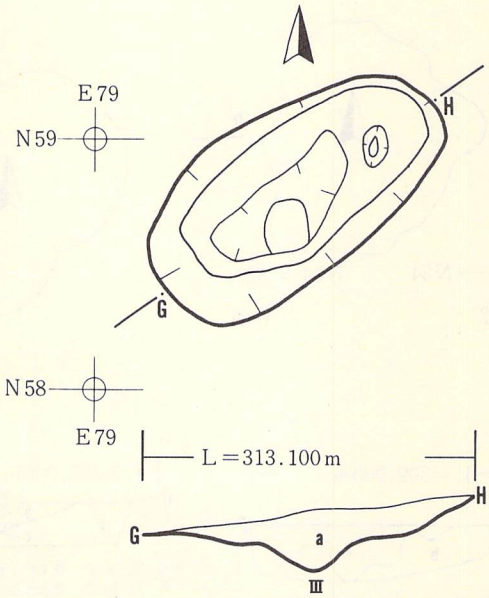
a．ＢＧ30石囲炉





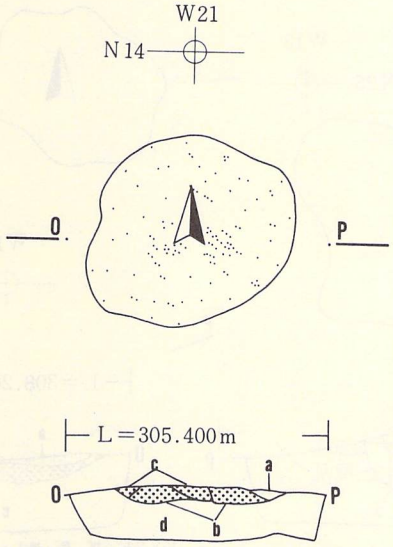
a：10ＹＲ3/2　黒　褐　色　炭化物少量混入。ややしまっている。粘性なし。
b：10ＹＲ3/3　黒　褐　色　炭化物まばらに混入。褐色土のブロック混入。
c：10ＹＲ5/6　黄　褐　色　地山Ⅲ層に類似。しまっている。粘性なし。

b．ＤＦ37焼土ピット



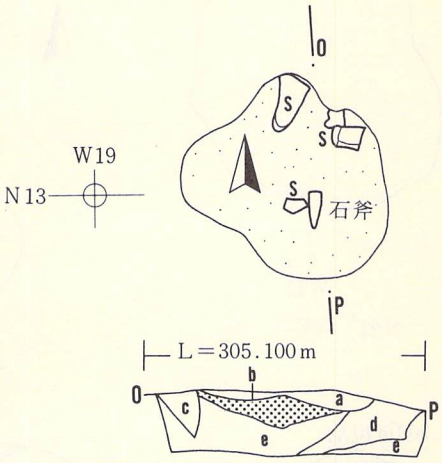
a：10ＹＲ3/1　黒　褐　色　炭化物多く混入。しまっている。粘性なし。
Ⅲ：10ＹＲ5/3　褐　褐　色　地山Ⅲ層。上面は焼土化し、硬くしまっている。

c．ＢＦ28－１焼土遺構



a：10ＹＲ3/3　暗　褐　色　焼土粒子がまばらに混入する。しまり・ねばりなし。
b：7.5ＹＲ3/4　暗　褐　色　焼土層。しまり・ねばりなし。
c：5ＹＲ3/4　赤　褐　色　焼土。しまっている。ねばりなし。
d：10ＹＲ3/3　暗　褐　色　褐色土ブロック混入。しまり・ねばりなし。地山Ⅲ層に類似。

d．ＢＦ28－２焼土遺構

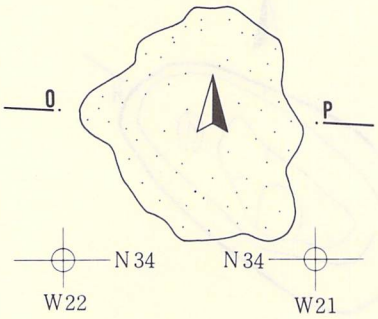


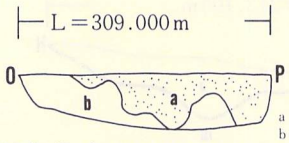
a：7.5ＹＲ3/3　暗　褐　色　焼土少量混入。ねばりなし。粘性なし。
b：5ＹＲ3/4　赤　褐　色　焼土。しまっている。粘性なし。
c：10ＹＲ3/4　褐　　色　暗褐色土混入。しまりなし。粘性なし。
d：10ＹＲ3/3　暗　褐　色　焼土少量混入。しまりなし。粘性なし。
e：10ＹＲ5/4　褐　　色　地山Ⅲ層。しまり弱。粘性なし。

（Ｓ＝$\frac{1}{30}$）

図版13　焼土遺構（2）

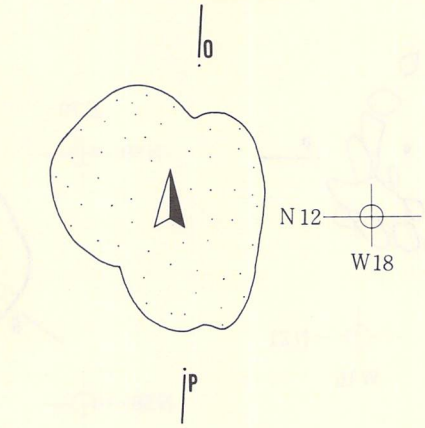
a．ＢＦ32焼土遺構





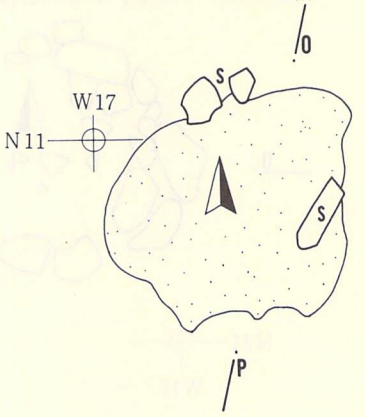
a：10ＹＲ3/4　褐　色　焼土の粗粒がまばらに混入。しまりなし。粘性なし。
b：10ＹＲ5/4　黄褐色　2～5㎜⌀の浮石をまばらに含む。ややしまる。粘性なし。

b．ＢＧ28－１焼土遺構



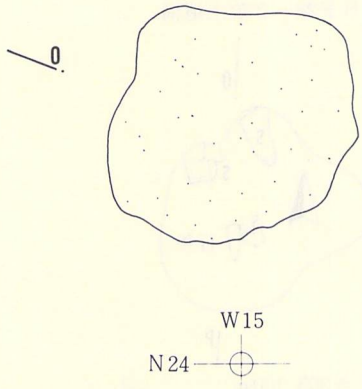
a：10ＹＲ3/4　暗　褐　色　焼土粒子少量混入。しまりなし。粘性なし。
b：7.5ＹＲ3/4　暗　褐　色　焼土化している。しまりなし。粘性なし。
c：5ＹＲ3/4　赤　褐　色　焼土。しまっている。粘性なし。
d：10ＹＲ3/4　暗　褐　色　褐色ブロック混入。しまりなし。粘性なし。

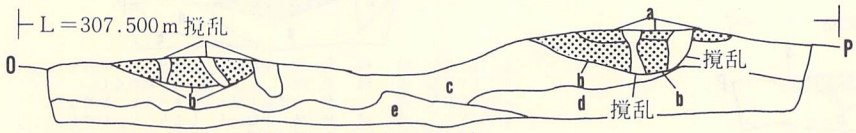
c．ＢＧ28－２焼土遺構



a：10ＹＲ3/4　暗　褐　色　炭化物・焼土少量混入。しまりなし。粘性なし。
b：5ＹＲ5/8　明赤褐色　焼土。硬くしまる。粘性なし。
c：5ＹＲ3/4　極暗赤褐色　しまりなし。粘性なし。
d：10ＹＲ3/4　褐　色　しまり弱。粘性少しあり。

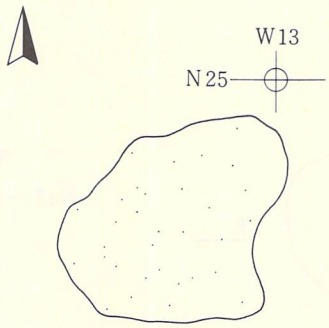
d．ＢＧ30焼土遺構



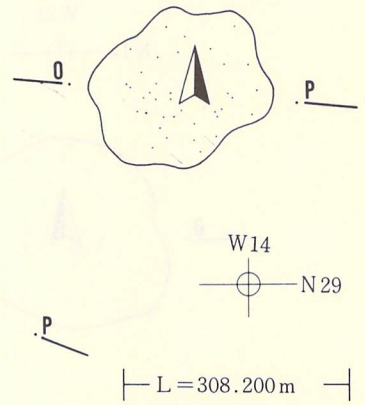


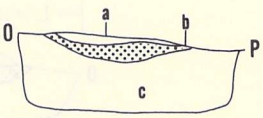
a：10ＹＲ3/4　暗褐色　焼土粗粒・炭化物が混入。しまり・ねばりなし。
b：5ＹＲ3/4　赤褐色　焼土層。ややしまっている。粘性なし。
c：10ＹＲ3/4　暗褐色　褐色土ブロック・焼土がまばらに混入する。ややしまり・ねばりなし。
d：10ＹＲ3/4　暗褐色　褐色土ブロック混入。ややしまる。ねばりなし。
e：10ＹＲ3/4　黄褐色　しまっている。粘性弱。地山Ⅳ層に類似。

e．ＢＨ30焼土遺構



f．ＢＨ31焼土遺構





a：10ＹＲ3/4　褐　色　焼土・炭化物がまじる。しまっている。粘性なし。
b：7.5ＹＲ5/8　明褐色　焼土層。しまっている。粘性なし。
c：10ＹＲ3/4　褐　色　しまっている。粘性なし。地山Ⅳ層に類似。

（Ｓ＝$\frac{1}{30}$）

のように接合複元できたものもある。**9**は大型深鉢の上半部である。４個の大きな突起と４個の小突起を交互に持つ波状口縁を持ち、口唇部と頸部に縄文原体の圧痕がある。地文は横位の羽状縄文で、他の文様帯は持たない。**10**は大型深鉢の口縁部付近で４分の１位の残存である。口縁部に粘土紐が鋸歯状に貼り付けられ、その下位には粘土紐とＣ字状の連続刺突による文様帯がある。**11**は口縁部付近の破片で、粘土紐の隆帯と２条の平行する撚糸圧痕による文様が施文されている。**12**は深鉢の口縁部突起の破片である。単節斜縄文の地文の上に粘土紐の貼り付けによる文様帯が形成されている。**13・15・16**は粗製深鉢の破片と思われる。**14**は小型の浅鉢の胴部破片と思われる。上位には粘土紐の貼り付けと刺突による文様帯がある。時期は**11**が円筒上層ａ式、**10・14**は円筒上層ｃ式、**12**は円筒上層ｄ式に相当する。

石器は（409・417・431・439）の４点がある。**409**は縦形の石匙で、弧状の辺の一部が欠損している。直線状の辺には45度位・弧状の辺には15度位の刃部加工がなされている。石質は凝灰質泥岩である。**417**は横長の剥片の緩い弧状の縁辺の背面に30～45度位の角度の刃部が形成されている。石質は珪質泥岩である。**431**は台形状の剥片の一辺に不規則な小剥離が形成されている。石質は珪質泥岩である。**439**はわりと薄い剥片で、弧状の縁辺の一部に不規則な小剥離が形成されている。石質はチャート質粘板岩である。

BG30焼土（図版13、写真図版10）

南斜面上位に位置し、東側にはＢＨ30焼土、北側にはＢＨ29住居址がある。焼土の広がる範囲は不整な楕円形状で、規模は長軸110・短軸90cm位、厚さは中央付近が最大で10cm位である。焼土の周囲には柱穴や周溝等住居址の一部となるような施設は検出されていない。

出土遺物は得られていない。

BG30石囲炉（図版12・36、写真図版９・28）

南斜面中位に位置する。北東にはＢＧ30ピットが、南東にはＢＨ31住居址がある。炉の形状はほぼ円形で、径１ｍ位の範囲に粒径10～30cmの礫を並べて造られている。礫は西側では二重になっている。石囲炉の周囲には炭化物の混じる黒褐色土が堆積していたが、焼土は確認されなかった。また石囲炉の周囲は特に堅くしまってはおらず、また平坦でもない。柱穴や周溝と思われるものも検出されていない。

出土遺物としては、円筒上層ａ式と思われる土器片、（**128・129**）等が数点得られている。

BH30焼土（図版13、写真図版10）

南斜面上位に位置し、西側にはＢＧ30焼土、北側にはＢＨ29住居址がある。焼土の広がる範囲

は不整な楕円形状を呈し、規模は長軸100cm・短軸80cm位、厚さは中央付近が最大で10cm位ある。焼土の周囲には平坦で堅い面や柱穴・周溝等は検出されていない。

出土遺物は得られていない。

BH31焼土（図版13・42、写真図版10・32）

尾根頂部に位置する。焼土の広がる範囲は不整な楕円形状を呈し、規模は長軸70cm・短軸50cm位、厚さは中央付近が最大で８cm位である。焼土上の覆土には炭化物が含まれている。周囲には柱穴や周溝・床面等は認められない。

出土遺物として焼土の周辺から石匙の未製品と思われる石器１点（**410**）が得られている。器形は撥形を呈し、つまみ部の一部が作り出されている。刃部は形成されていない。石質は凝灰質珪質泥岩である。

BF32焼土（図版13、写真図版10）

尾根頂部に位置し、ＢＦ32ピットの西側に隣接する。焼土の広がる範囲は不整楕円形状を呈し、規模は長軸100cm・短軸70cm位、厚さはほとんどなく痕跡程度である。周囲には床面や柱穴・周溝等は認められない。

出土遺物は得られていない。

DF37焼土ピット（図版12、写真図版９）

調査地の中央付近に位置し、周囲に他の遺構はない。平面形は楕円形を呈し、底部から緩く彎曲して壁につづく。床面には植物根によると思われる攪乱痕があるが、堅くしまっている。底面から壁面にかけて焼土が厚さ２～５mmの厚さで形成されている。埋土は炭化物が多く混入する黒色土で構成され、しまっている。柱穴・周溝等は検出されていない。

出土遺物は得られていない。

３．陥し穴状遺構

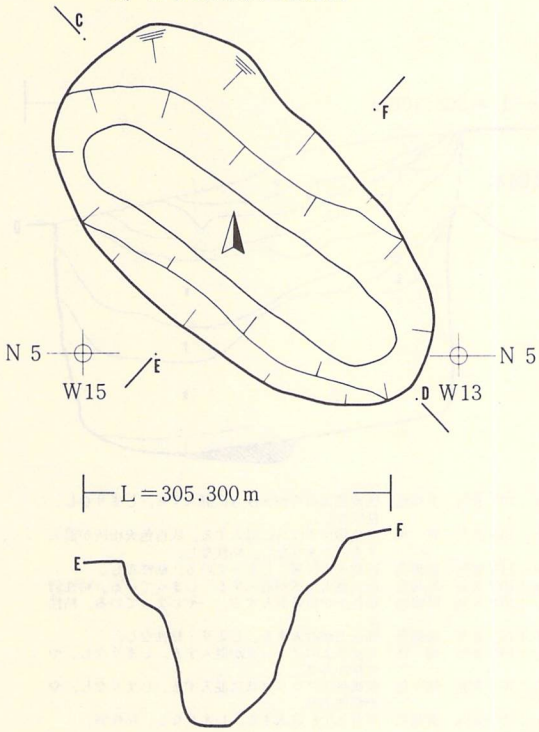
当遺跡で検出された陥し穴状遺構は５基である。４基は同規模で丘陵麓付近の谷と尾根を結ぶように構築されている。長軸方向の異なる１基は形状のまとまりに欠けるが、４基と同じように埋土に十和田ａ降下火山灰層があることから遺構として登録した。

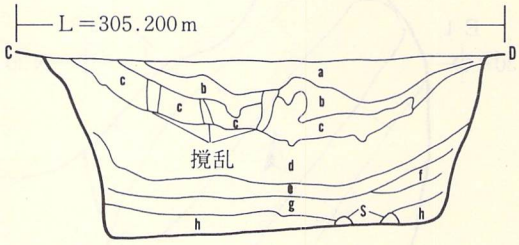
BH27陥し穴状遺構

遺構（図版14、写真図版11）

図版14　陥し穴状遺構（1）

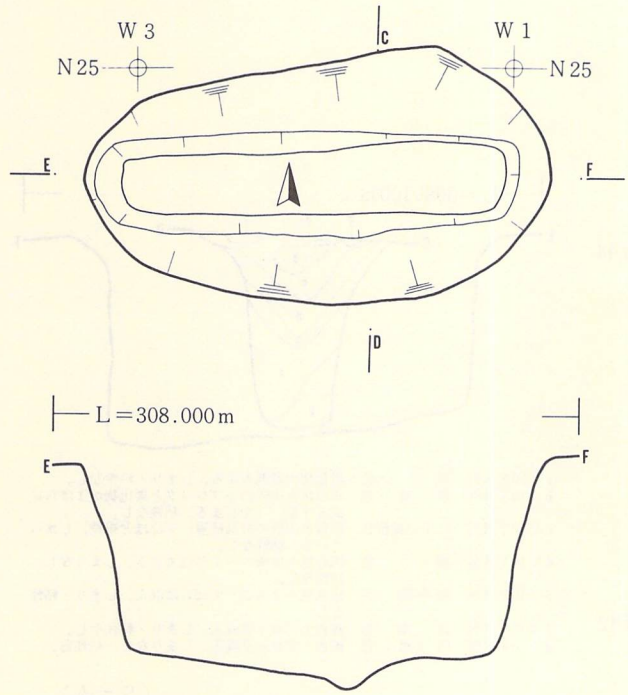
a．ＢＨ27陥し穴状遺構

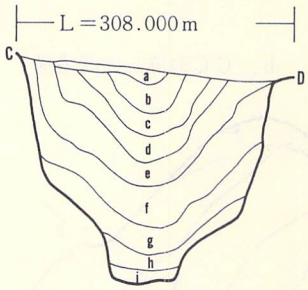




a：10ＹＲ3/2　黒　褐　色　灰黄色火山灰・炭化物がまばらに混入する。しまり・粘性なし。
b：10ＹＲ3/2　黒　褐　色　灰黄色火山灰やや多く混入する。しまり・粘性なし。
c：10ＹＲ7/8　にぶい黄橙色　砂質火山灰層、下位ほど粗粒。ややしまる。粘性なし。
d：1ＹＲ3/4　暗　褐　色　褐色土ブロックが混入する。縄文土器片混入。ややしまり・粘性弱。
e：10ＹＲ4/4　褐　色　暗褐色土少量混入する。しまっている。粘性なし。
f：10ＹＲ3/4　暗　褐　色　ややしまっている。粘性弱。
g：10ＹＲ3/3　暗　褐　色　黄褐色土の少ブロックが混入する。しまっている。粘性中。
h：10ＹＲ5/4　にぶい黄褐色　黒褐色土少量混入する。しまっている。粘性強。

b．ＢＪ30陥し穴状遺構



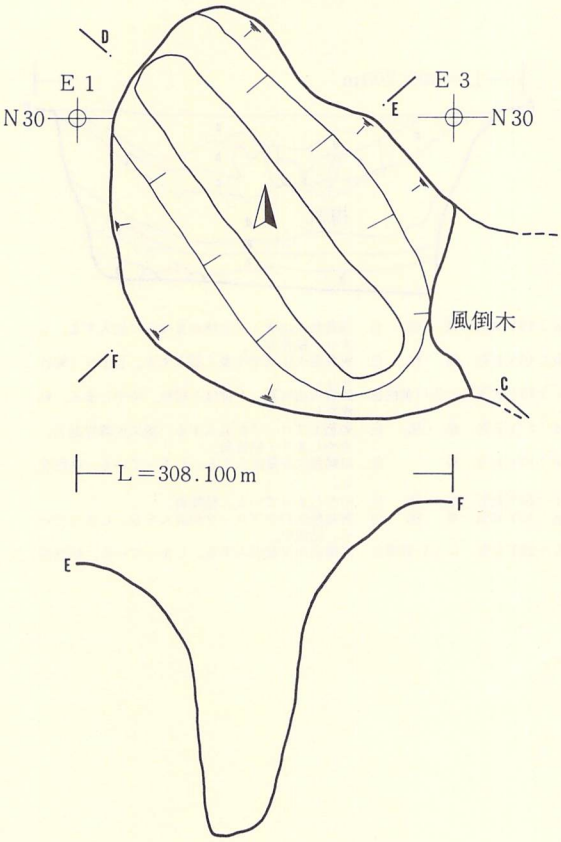


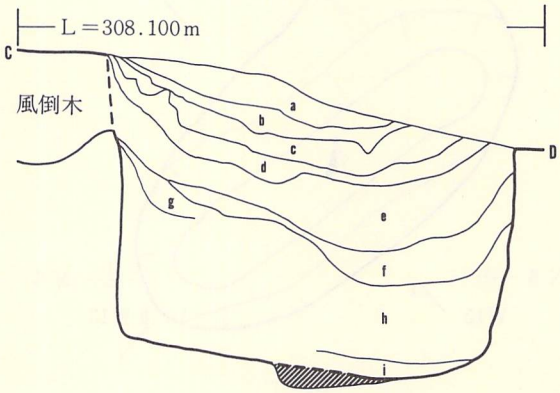
a：10ＹＲ4/3　にぶい黄褐色　炭化物・褐色土・灰黄色土が混入する。しまり・粘性なし。
b：2.5ＹＲ6/3　にぶい黄色　砂質火山灰層、下位ほど粗粒。しまっている。粘性なし。
c：10ＹＲ5/4　にぶい黄褐色　砂質火山灰層。暗褐色土が混入する。しまりなし・粘性なし。
d：10ＹＲ4/4　褐　色　にぶい灰黄色土のブロックが混入する。しまり・粘性なし。
e：10ＹＲ3/4　暗　褐　色　褐色土・黒褐色土の粗粒が多量に混入する。しまり・粘性なし。
f：10ＹＲ5/8　黄　褐　色　黒色土の薄層が混入する。しまり・粘性なし。
g：10ＹＲ5/8　黄　褐　色　にぶい黄橙色土のブロックが混入する。しまり・粘性なし。
h：10ＹＲ6/4　にぶい黄橙色　暗褐色土が混入する。しまり・粘性なし。
i：10ＹＲ5/4　にぶい黄褐色　にぶい黄橙色土が混入する。しまり・粘性なし。

（Ｓ＝$\frac{1}{40}$）

図版15　陥し穴状遺構（2）

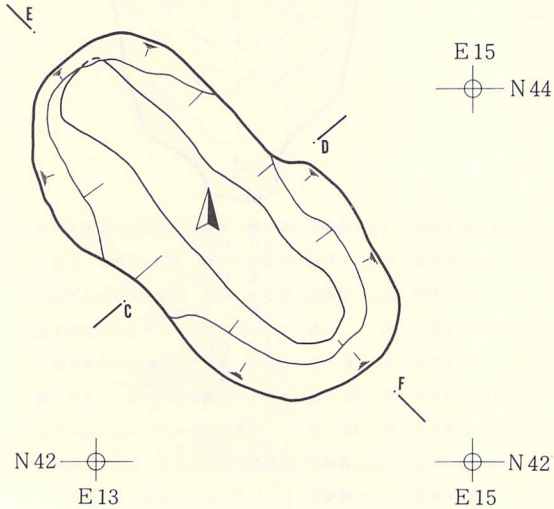
a．ＣＡ31陥し穴状遺構

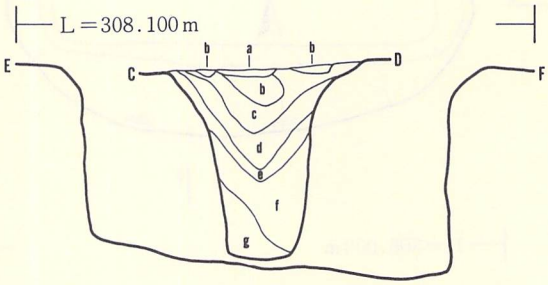




a：10YR2/2　黒褐色　灰黄色火山灰がまばらに混入する。しまりなし。粘性なし。
b：10YR2/1　黒　色　炭化物がまばらに混入する。灰白色火山灰が混入する。しまりなし。粘性なし。
c：2.5YR5/3　黄褐色　砂質火山灰層。しまっている。粘性なし。
d：10YR4/2　黒褐色　灰黄色火山灰が混入する。しまっている。粘性弱
e：10YR3/2　暗褐色　褐色土が少量混入する。やしまっている。粘性なし。
f：10YR3/4　暗褐色　褐色土が混入する。しまり・粘性なし。
g：10YR4/4　褐　色　黄褐色土のブロックが混入する。しまりなし。やや粘性あり。
h：10YR4/6　褐　色　黄褐色土ブロック状に混入する。しまりなし。やや粘性あり。
i：0YR5/8　黄褐色　灰黄色土が混入する。しまりなし。粘性弱。

b．ＣＣ34陥し穴状遺構





a：10YR2/1　黒　色　炭化物少量混入する。しまり・粘性なし。
b：10YR3/2　黒　褐　色　灰白色火山灰の小ブロックと炭化物がまばらに混入する。やしまる。粘性なし。
c：10YR7/2　にぶい黄橙色　砂質火山灰の再堆積層、下位ほど粗粒。しまっている。粘性なし。
d：10YR4/4　褐　色　灰白色火山灰５～７％位まじる。しまりなし。粘性なし。
e：10YR3/3　暗　褐　色　灰白色パミスごくまばらに混入。しまり・粘性なし。
f：10YR3/2　黒　褐　色　褐色土ブロック混入。しまり・粘性なし。
g：0YR3/4　暗　褐　色　褐色土ブロック混入。しまりなし。粘性弱。

（S＝$\frac{1}{40}$）

Ｂグリッドの丘陵南斜面下位を占地し、沢に近い緩斜面の縁に位置する。平面形は北西から南東方向に長軸をもち、開口部は楕円形、底部は隅丸長方形である。断面形をみると、長軸・短軸とも底部より開口部が広く、壁の立ち上がりは外傾している。底面には湧水があり、多少凹凸がある。埋土は弓状に落ち込むように堆積しており、８層に細分される。ｃ層は十和田ａ降下火山層である。規模は開口部径240×126㎝・底部径197×40㎝・深さ88～96㎝である。

遺物（図版29・36、写真図版25・28）

埋土上位から小型深鉢片（17～19）、縄文土器片（130・131）が得られている。**17**は頸部がくびれる平縁の小型深鉢、地文は斜縄文である。**18・19**は同一個体である。平縁、折り返し口縁、地文は複節斜縄文である。**130**は口縁部破片である。口縁部には縦位の短い隆帯とボタン状貼付文があり、原体圧痕文を伴う。**131**は平縁の口縁部破片である。口縁端や頸部に横位の隆帯がめぐり、原体圧痕文を伴う。**130・131**は円筒上層ａ式に分類される。

ＢＪ30陥し穴状遺構

遺構（図版14、写真図版11）

Ｂグリッドの丘陵頂部平坦面を占地し、平坦面の南縁に位置する。平面形は東西方向に長軸をもち、開口部は楕円形、底部は隅丸方形である。断面形をみると、長軸・短軸とも底部より開口部が広く、壁は全体的に外傾する立ち上がりを示すが、短軸断面には緩い段がある。底面は比較的平坦で堅くしまっている。埋土は弓状に落ち込むように堆積しており、９層に細分される。ｂ～ｃ層は十和田ａ降下火山灰層である。規模は、開口部径 248×133㎝・底部径 204×36㎝・深さ98～120㎝である。

遺物（図版36・44、写真図版28・34）

埋土上位から縄文土器片（133～135）、剥片（442）が得られている。**133**は胴部破片、地文は斜縄文である。**134・135**は半月形の原体圧痕文のみられる口縁部破片で、円筒上層ｂ式に分類されよう。

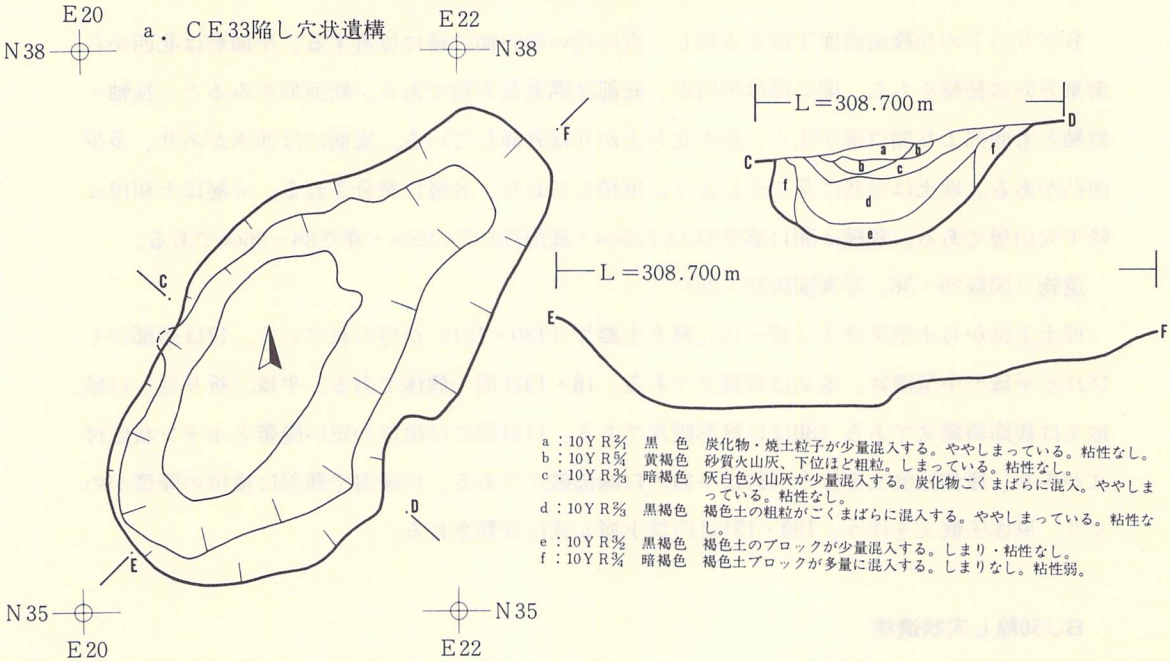
ＣＡ31陥し穴状遺構

遺構（図版15、写真図版11）

Ｃグリッドの丘陵頂部平坦面北縁を占地し、旧沢の谷頭近くに位置するＣＣ34陥し穴状遺構と相対している。平面形は北西から南東方向に長軸をもち、開口部は風倒木によって攪乱されているが楕円形に近い。底部は隅丸長方形である。断面形をみると、長軸断面では壁は直立し、短軸断面では開口部ほど外反する。底面は南から北に低く傾く。埋土は弓状に落ち込むように堆積しており、９層に細分される。ｃ層は十和田ａ降下火山層である。なお、第一次精査段階

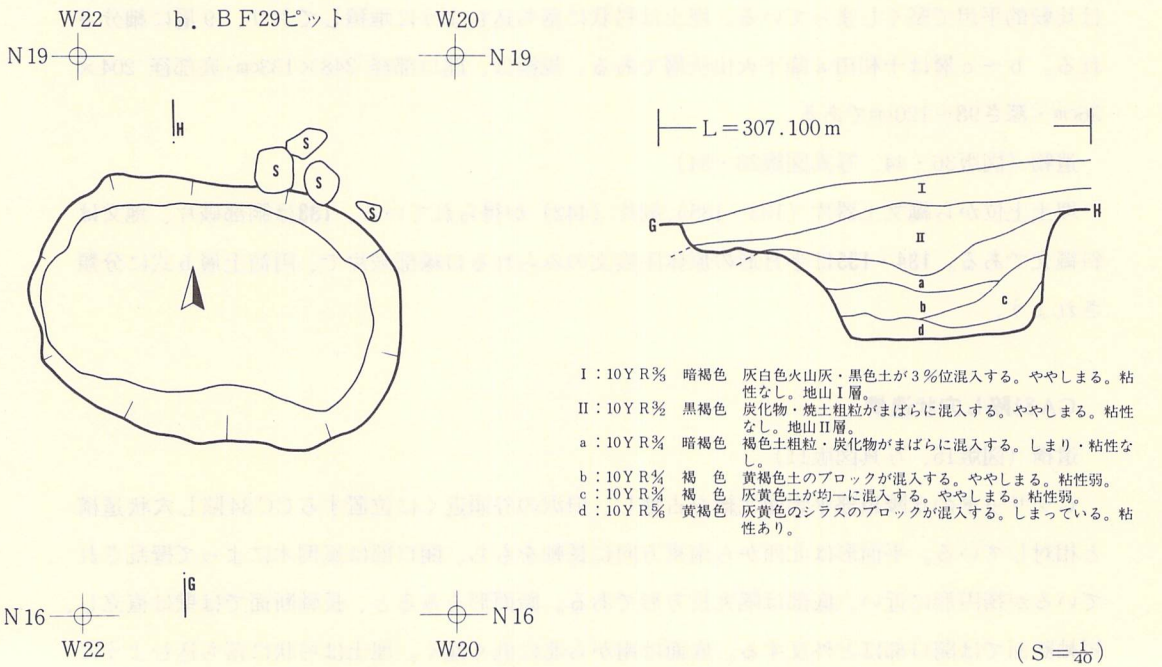
図版16　陥し穴状遺構（3）

a．ＣＥ33陥し穴状遺構



a：10ＹＲ2/1　黒　色　炭化物・焼土粒子が少量混入する。ややしまっている。粘性なし。
b：10ＹＲ5/4　黄褐色　砂質火山灰、下位ほど粗粒。しまっている。粘性なし。
c：10ＹＲ3/3　暗褐色　灰白色火山灰が少量混入する。炭化物ごくまばらに混入。ややしまっている。粘性なし。
d：10ＹＲ2/3　黒褐色　褐色土の粗粒がごくまばらに混入する。ややしまっている。粘性なし。
e：10ＹＲ3/2　黒褐色　褐色土のブロックが少量混入する。しまり・粘性なし。
f：10ＹＲ3/4　暗褐色　褐色土ブロックが多量に混入する。しまりなし。粘性弱。

b．ＢＦ29ピット



Ⅰ：10ＹＲ3/3　暗褐色　灰白色火山灰・黒色土が3％位混入する。ややしまる。粘性なし。地山Ⅰ層。
Ⅱ：10ＹＲ3/2　黒褐色　炭化物・焼土粗粒がまばらに混入する。ややしまる。粘性なし。地山Ⅱ層。
a：10ＹＲ3/4　暗褐色　褐色土粗粒・炭化物がまばらに混入する。しまり・粘性なし。
b：10ＹＲ4/4　褐　色　黄褐色土のブロックが混入する。ややしまる。粘性弱。
c：10ＹＲ3/4　褐　色　灰黄色土が均一に混入する。ややしまる。粘性弱。
d：10ＹＲ5/6　黄褐色　灰黄色のシラスのブロックが混入する。しまっている。粘性あり。

（Ｓ＝1/40）

ではピットを想定していたため、遺構南半部の埋土下位は実測せずに掘り上げている。規模は開口部径（230）×164cm・底部径206×39cm・深さ115～148cmである。出土遺物はない。

CC34陥し穴状遺構

遺構（図版15、写真図版12）

C～Bグリッドにかけて発達していた旧沢の谷頭付近を占地しており、CA31陥し穴状遺構と相対している。平面形は北西から南東方向に長軸をもち、開口部は中央付近が歪な楕円形、底部は不整ながら隅丸長方形に近い。断面形をみると、壁の立ち上がりは全体的に直立ぎみで開口部付近で外反する。底面には湧水があり、北から南に低くなる。埋土は中央ほど落ち込んで堆積しており、7層に細分される。c層は十和田a降下火山灰層である。規模は、開口部径230×100cm・底部径196×41cm・深さ92～110cmである。出土遺物はない。

CE33陥し穴状遺構

遺構（図版16、写真図版12）

C～Bグリッドにかけて発達していた旧沢の谷頭付近を占地し、2基（CA31、CC34)の陥し穴状遺構とともに、谷頭付近を囲むように位置する。平面形は北東から南西方向に長軸をもち、開口部・底部とも不整な楕円形である。断面形は浅いU字状をしている。壁面や底面には凹凸がある。埋土は弓状に落ち込むように堆積しており、6層に細分される。b層は十和田a降下火山灰層である。規模は、開口部径300×150cm・底部径140×60cm・中心部の深さ52cmである。出土遺物はない。なお、この遺構は形態や規模などの点で他の4基と異っているが、埋土の構成は同じである。

4．ピット

当遺跡で検出されたピットは30基である。ピットは他の遺構と同様に、遺跡南西端のBグリッドに集中しており、特に残丘状の丘陵頂部付近には、断面形がビーカー形～フラスコ形を示すピットが多い。3分の1のピットで、埋土を中心に縄文時代中期の土器（片）が出土している。

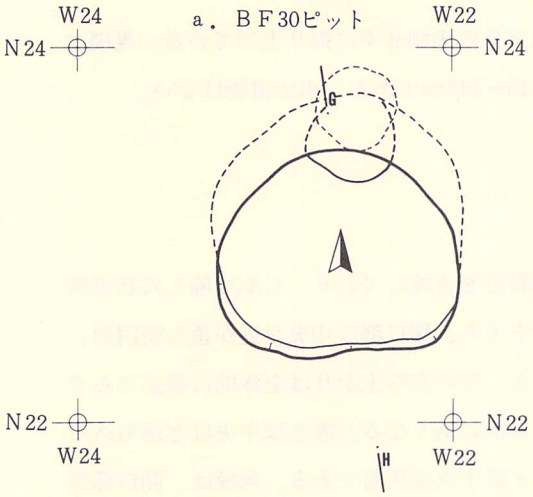
BF29ピット

遺構（図版16、写真図版12）

Bグリッドの丘陵南斜面下位を占地し、BH29住居址西方に位置する。住居址を想定した第一次検出面を25cmほど堀り下げた時点で検出された。平面形は、開口部・底部とも東西方向に

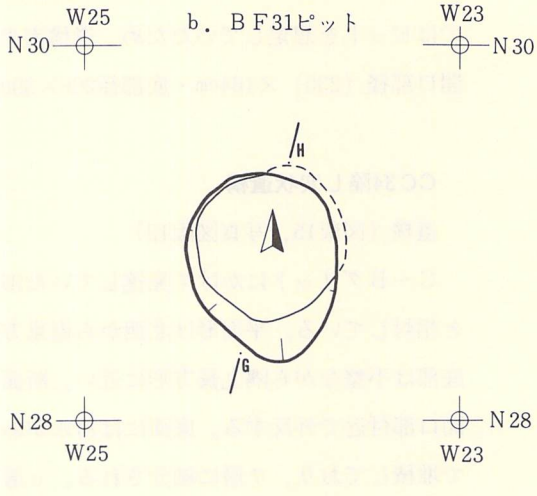
図版17　ピット（1）

a．ＢＦ30ピット



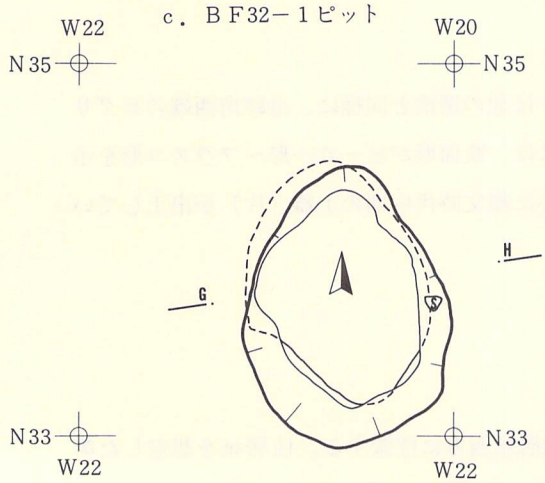
a：10ＹＲ3/3　暗　褐　色　1㎜∅のパミスがまばらに混入する。褐色土も混入する。ややしまる。粘性なし。
b：10ＹＲ3/4　暗　褐　色　橙色パミスがまばらに混入する。土器片・礫が混入する。ややしまる。粘性なし。
c：10ＹＲ3/2　黒　褐　色　灰黄色土が少量混入する。ややしまる。粘性なし。地山Ⅱ層。
d：10ＹＲ3/4　褐　　色　灰褐色土ブロック・灰黄色土が混入する。しまっている。粘性弱。
e：10ＹＲ3/4　暗　褐　色　灰黄色土が混入する。しまり・粘性なし。
f：10ＹＲ5/3　にぶい黄褐色　灰黄色土が多く混入する。しまり・粘性なし。

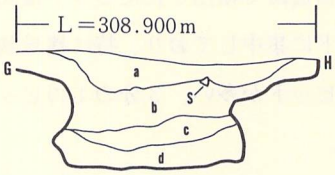
b．ＢＦ31ピット



a：10ＹＲ4/4　褐　　色　灰黄色パミス・暗褐色土がまじる。しまり・粘性なし。
b：10ＹＲ4/6　黄　褐　色　にぶい黄橙色土・暗褐色土がまじる。しまり・粘性なし。
c：10ＹＲ6/4　にぶい黄橙色　しまり・粘性なし。地山Ⅳ層に類似する。

c．ＢＦ32－１ピット





a：10ＹＲ3/4　褐　　色　灰黄色火山灰が混入する。ややしまっている。粘性なし。
b：10ＹＲ5/3　黄　褐　色　灰黄色火山灰の小ブロック・浮石が混入する。ややしまっている。粘性なし。
c：10ＹＲ3/4　暗　褐　色　灰黄色火山灰・褐色土の粗粒が混入する。しまり・粘性なし。
d：10ＹＲ5/3　にぶい黄褐色　灰黄色火山灰が全体に混入する。しまり・粘性なし。

（Ｓ＝1/40）

長軸をもつ楕円形である。断面形をみると、開口部が底部よりも広く、壁は外傾した立ち上がりを示している。壁面には凹凸がある。底面は全体的に平坦である。

埋土は、全体的に弓状に落ち込んで堆積し、4層に細分される。上位は暗褐色～褐色、下位は褐色～黄褐色の土層で構成される。規模は、開口部径200×138cm・底部径176×102cm・深さ48～64cm（第一次検出面からの深さ82～90cm）である。重複関係はない。

遺物（図版29・37・44・47・49、写真図版25・28・34～36）

埋土上位から深鉢（20～22）、縄文土器片（136・138～142）、剥片（443）、凹石（448）、磨石（503）などが得られている。

20は円筒下層d式の大型深鉢の破片である。4山の波状口縁で、突起部はM字状である。頸部には隆帯が巡り胴部と区画される。口頸部は、突起部と突起間中央付近から垂下する短い隆帯で区画される。隆帯による区画帯の中は、長短の原体圧痕文で充填されている。口縁端や隆帯上にも原体圧痕文を付す。地文は斜縄文で横位の綾絡文を伴う。**21**は円筒上層c式の大型深鉢口縁部山形突起である。突起には孔がある。隆帯上に原体圧痕はなく、隆帯の間にC字状の刺突文がみられる。地文は斜縄文である。**22**は深鉢胴部である。地文は斜縄文で横位の綾絡文を伴う。**136・138～140**は口縁部破片、**141・142**は胴部破片であり、**140**以外は円筒上層c式に分類される。

BF30ピット

遺構（図版17、写真図版13）

Bグリッドの丘陵南斜面中位を占地し、BF30住居址の南西側に位置する。南壁付近は、第一次検出面を50cmほど掘り下げた状態で検出している。平面形は円形基調である。断面形をみると、壁の立ち上がりは北側は内彎し南側は直立している。底面は平坦であり、北壁直下には直径48cm、深さ38cmの副穴が斜めに掘り込まれている。

埋土は6層に細分され、上位から暗褐色、黒褐色、褐色～暗褐色の土層で構成される。規模は、開口部径130×108cm・底部径134×132cm・深さ70～110cmである。

遺物（図版30・37・43・44・47・50、写真図版25・28・33～36）

埋土下位や副穴付近から大型深鉢（23）、埋土下位から深鉢（24）、埋土上位から小型鉢（25）、埋土から縄文土器片（143～151）、剥片（444・445）、箆状石器（424）、凹石（486）、半円状扁平打製石器（505）などが得られている。

23は円筒上層c式の大型深鉢である。平縁で4山の突起があり、口唇部に工具による押圧痕が連続する。頸部がくびれ、胴部が脹らむ。口頸部に貼付された隆帯上には横位の原体圧痕文を伴う。刺突はC字状、地文は斜縄文である。**24**は円筒上層c式の深鉢である。平縁で頸部が

くびれ、胴部が張る。口縁端に楕円と鋸歯状の隆帯が貼付されている。隆帯は胴部上半まで貼付され、隆帯上に短い原体圧痕文を伴う。刺突はC字状、地文は斜縄文である。**25**は平縁で、口縁部は大きく外反し、胴部下半が脹らむ。口縁端に工具による縦位の刻みがある。地文は横位の結束羽状縄文である。**144・146～150**は口縁部破片、**143・151**は胴部破片である。**143～145・149**は円筒上c式、**146**は円筒下層d式に分類される。**144・145**は埋土下位から、それ以外は埋土上位から出土している。

BF31ピット

遺構（図版17、写真図版13）

Bグリッドの丘陵南斜面上位を占地している。平面形は、開口部は楕円形、底部は円形である。断面形をみると、全体的に開口部が底部より広く、壁は外傾した立ち上がりを示している。底面には掘り過ぎもあるが、全体的に平坦である。

埋土は3層に細分され、上位から褐色、黄褐色、にぶい黄褐色の土層で構成される。規模は開口部径102×80cm・底部径84×80cm・深さ44～70cmである。出土遺物はない。

BF32－1ピット

遺構（図版17、写真図版13）

Bグリッドの丘陵頂部平坦面を占地している。平面形は南北に長軸をもつ楕円形であるが、頸部や底部は歪である。断面形はフラスコ形に近い。底面や壁面には凹凸がある。埋土は4層に細分され、上位から褐色、黄褐色、暗褐色、にぶい黄褐色の土層で構成される。全体に灰黄色火山灰が混入している。規模は、開口部径150×110cm・頸部径116×86cm・底部径132×102cm・第一次検出面からの深さ52～62cmである。

遺物（図版37、写真図版28）

埋土上位から縄文土器片が得られている。**152**は円筒上層d式に分類される深鉢の口縁部破片である。小さい山形突起の下に2本の隆帯が貼付され、隆帯上に原体圧痕文を伴う。

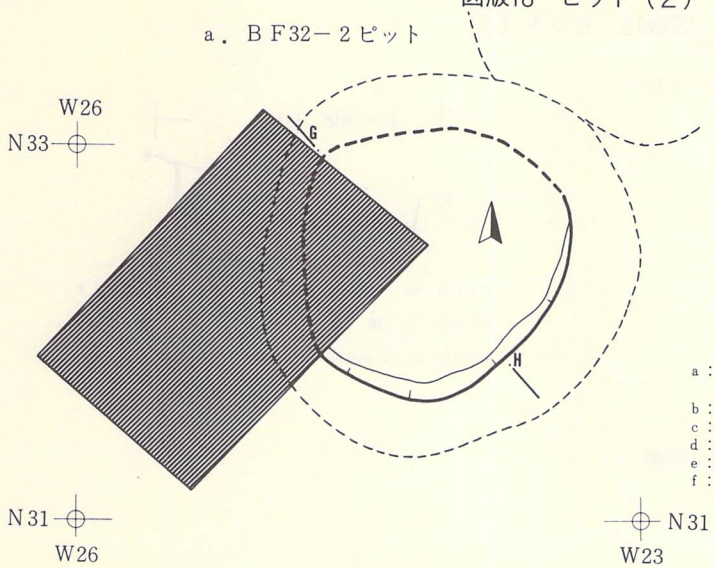
BF32－2ピット

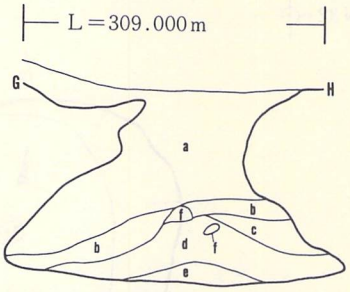
遺構（図版18、写真図版14）

Bグリッドの丘陵頂部平坦面を占地している。土層観察用深掘り断面で、遺構の西半分の存在が確認された。実測途中で開口部付近が崩落しており、実測図の開口部は第二次精査面である。平面形は、残存部から円形と推定される。断面形はフラスコ形である。底面はほぼ平坦であり、北東部でBF32－3ピットと切り合う。

図版18　ピット（2）

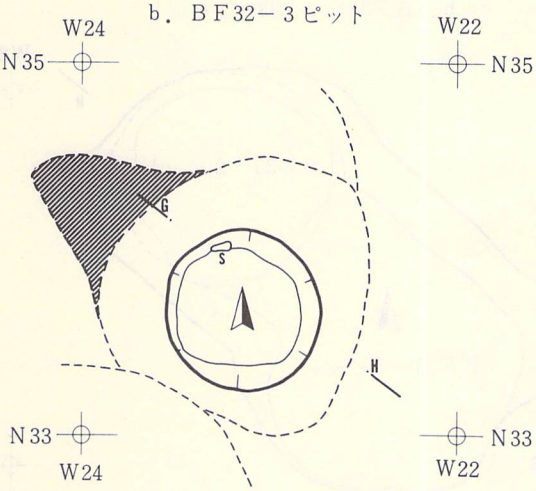
a．ＢＦ32－２ピット

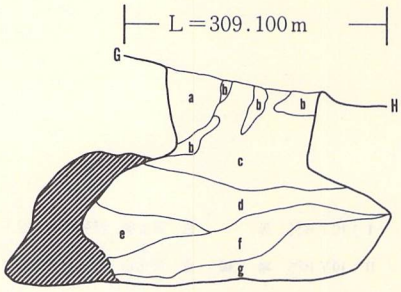




a：10ＹＲ5/8　黄　褐　色　灰黄色土が混入する。上位はややしまる。粘性なし。
b：10ＹＲ5/4　にぶい黄褐色　暗褐色土が混入する。しまり・粘性なし。
c：10ＹＲ3/6　褐　色　しまりなし。粘性弱。
d：10ＹＲ6/4　にぶい黄橙色　しまりなし。粘性弱。
e：10ＹＲ6/4　にぶい黄橙色　灰黄色土がかる。しまり・粘性なし。
f：10ＹＲ5/8　黄　褐　色　しまり・粘性なし。

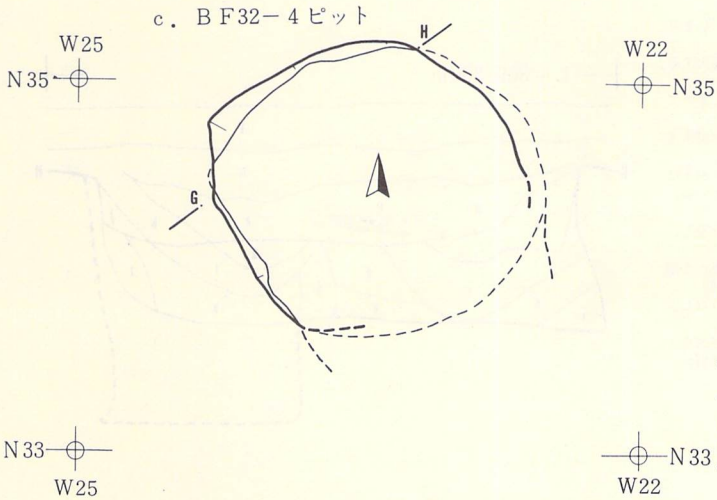
b．ＢＦ32－３ピット

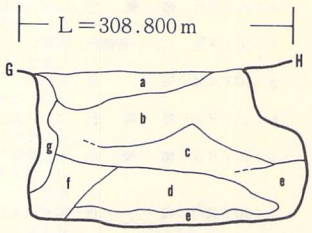




a：10ＹＲ3/4　暗　褐　色　2～3mmφのパミスと炭化物がまばらに混入する。ややしまる。粘性なし。
b：10ＹＲ4/4　褐　色　植物根による撹乱。しまり・粘性なし。
c：10ＹＲ5/6　明黄褐色　しまり・粘性なし。
d：10ＹＲ3/6　褐　色　炭化物まばらに混入する。しまり・粘性なし。
e：10ＹＲ3/4　褐　色　暗褐色土・焼土が混入する。しまり・粘性なし。
f：10ＹＲ5/4　にぶい黄褐色　ややしまる。粘性なし。
g：10ＹＲ7/4　にぶい黄橙色　しまり・粘性なし。

c．ＢＦ32－４ピット



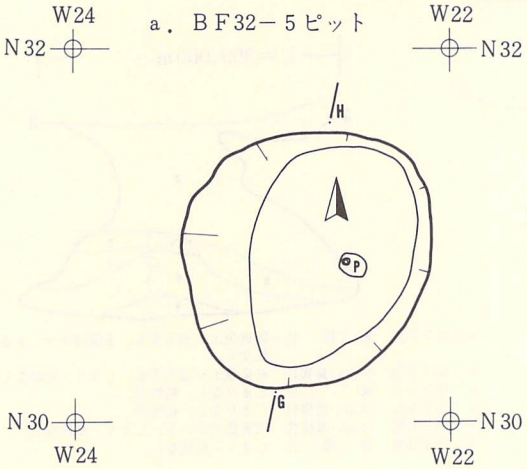


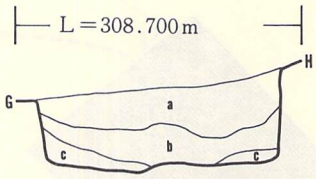
a：10ＹＲ4/4　褐　色　にぶい黄橙色土が混入する。少ししまっている。粘性なし。
b：10ＹＲ5/6　黄　褐　色　にぶい黄橙色土・暗褐色土が混入する。しまり・粘性なし。
c：10ＹＲ5/4　にぶい黄褐色　にぶい黄橙色のブロックが混入する。しまり・粘性なし。
d：10ＹＲ3/6　褐　色　黄褐色土の小ブロック・炭化物がまばらに混入する。しまり・粘性なし。
e：10ＹＲ5/6　黄　褐　色　にぶい黄橙色・焼土ブロックが混入する。しまり・粘性なし。
f：10ＹＲ5/8　黄　褐　色　硬くしまる。粘性なし。地山の崩落物のようです。
g：10ＹＲ5/8　黄　褐　色　ややしまっている。粘性なし。地山と思われる。

（Ｓ＝$\frac{1}{40}$）

図版19　ピット（3）

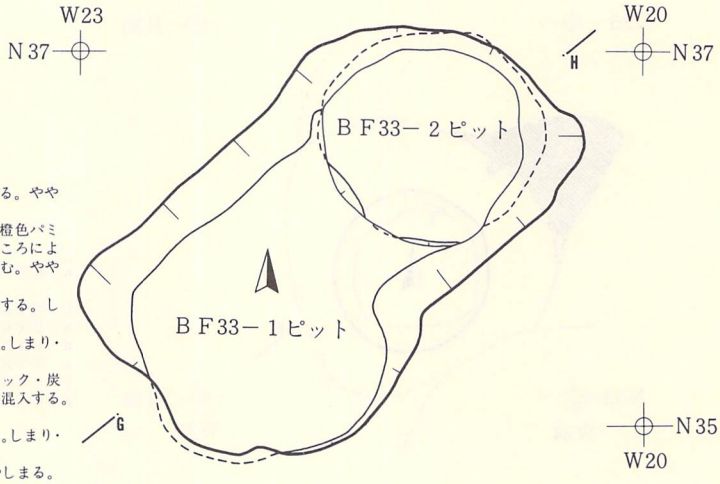
a．ＢＦ32－５ピット

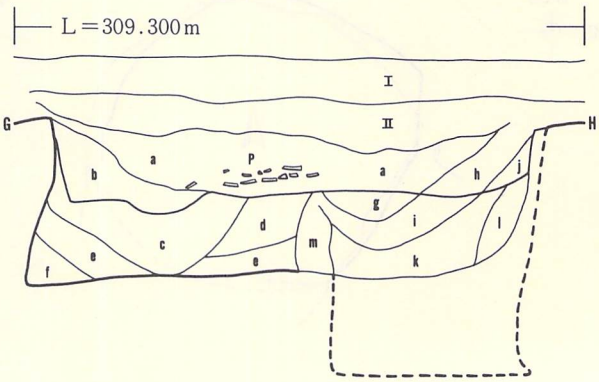




a：10ＹＲ4/4　褐　　色　橙色パミスや暗褐色土が少量混入する。しまり・粘性なし。
b：10ＹＲ5/6　黄　褐　色　暗褐色土が混入　る。しまり・粘性なし。
c：10ＹＲ6/4　にぶい黄橙色　シラス層。しまり・粘性なし。

b．ＢＦ33－１・33－２ピット





Ⅰ：10ＹＲ2/1　黒　　色　表土層。植物根多く混入する。ややしまっている。粘性なし。
Ⅱ：10ＹＲ3/3　暗　褐　色　炭化物・褐色土ブロック・橙色パミスがまばらに混入する。ところにより灰黄色火山灰や遺物を含む。ややしまり、粘性なし。
Ⅲ：10ＹＲ5/6　褐　　色　橙色パミスをまばらに混入する。しまっている。粘性弱。
a：10ＹＲ3/4　暗　褐　色　褐色土ブロックが混入する。しまり・粘性なし。遺物を含む。
b：10ＹＲ4/4　褐　　色　暗褐色土を含む。焼土ブロック・炭化物・黄橙色土がまばらに混入する。しまり・粘性なし。
c：10ＹＲ3/4　暗　褐　色　褐色土ブロックが混入する。しまり・粘性なし。
d：10ＹＲ4/4　褐　　色　黒褐色土が混入する。ややしまる。粘性弱。
e：10ＹＲ3/4　暗　褐　色　にぶい黄橙色土が混入する。しまりなし。粘性弱。
f：10ＹＲ5/4　にぶい黄褐色　灰黄色～にぶい黄橙色土が混入する。しまり・粘性なし。
g：10ＹＲ4/6　褐　　色　黄褐色土が混入する。ややしまっている。粘性なし。
h：10ＹＲ3/4　暗　褐　色　にぶい黄橙色土のブロックが混入する。ややしまる。粘性なし。
i：10ＹＲ3/4　暗　褐　色　ｈに類似する。褐色のパミスがまばらに混入する。ややしまっている。粘性なし。
j：10ＹＲ4/4　褐　　色　暗褐色土が混入する。しまりなし。粘性弱。
k：10ＹＲ4/4　褐　　色　ｊに類似する。にぶい黄橙色土が混入する。しまりなし。粘性弱。
l：10ＹＲ5/6　褐　　色　黄褐色土が混入する。しまりなし。粘性弱。
m：10ＹＲ4/4　褐　　色　にぶい黄褐色ないしは灰黄色土が混入する。しまりなし。粘性弱。

埋土は６層に細分され、全体的に黄褐色～にぶい黄褐色の土層で構成される。ａ層は人為的堆積層であろう。下位の２層は中央ほど高く堆積している。規模は、開口部径150×144cm（推定値）・底部径210×202cm・検出面からの深さ102cmである。このピットは底面付近でＢＦ32－３ピットと重複しており、ＢＦ32－３ピットより古い。

遺物（図版37、写真図版28）

埋土上位から縄文土器片（154・155）が得られている。**154**は胴部破片、**155**は底部付近の破片である。時期は不明である。

ＢＦ32－３ピット

遺構（図版18、写真図版14）

Ｂグリッドの丘陵頂部平坦面を占地し、ＢＦ32－２ピットとＢＦ32－４ピットの間にあり、両ピットと重複している。平面形は円形であるが底部には歪みがある。断面形はフラスコ形であるが、中位から下位にかけて崩落しており掘り過ぎが認められる。埋土は、植物根による攪乱部を除くと６層に細分される。ｃ層は基本土層Ⅳ層を中心とする人為的堆積層である。ｅ層から掘り過ぎ部分には焼土が多く混入している。規模は、開口部径86×82cm・頸部径72×66cm・底部径150×142cm・深さ98～118cmである。このピットは、ＢＦ32－２ピットの一部を切り、さらにＢＦ32－４ピットとの境界付近には、壁の補強に使用したと思われる扁平な巨礫があることなどから、３基のピットの中では一番新しいものであろう。

遺物（図版37・45、写真図版28・29・34）

埋土上位から縄文土器片（156～159）や剥片（446）が得られている。**156**は円筒上層ａ式に分類される口縁部突起、**157**は４条の原体圧痕文と刺突文のある口縁部破片、**158**は斜縄文、**159**は無文の口縁部破片である。

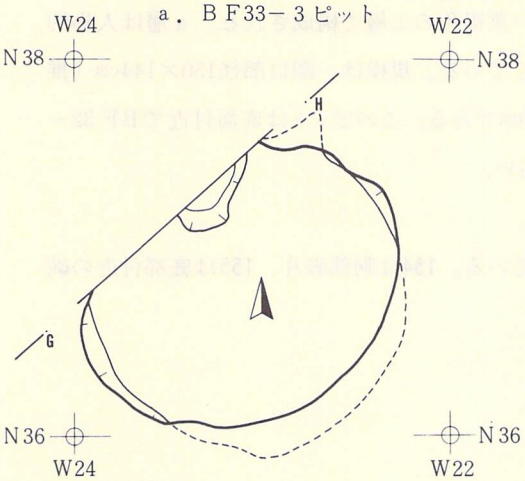
ＢＦ32－４ピット

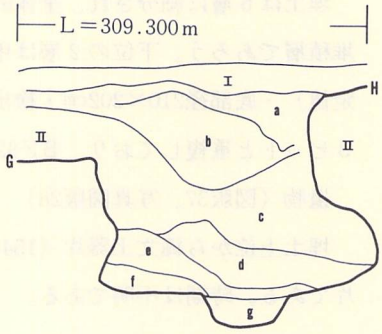
遺構（図版18、写真図版14）

Ｂグリッドの丘陵頂部平坦面を占地し、ＢＦ32－３ピットと重複している。平面形は円形と推定される。断面形はフラスコ形に近い。床面はＢＦ32－３ピットと同じ面であり区別はできない。埋土は７層に細分されるが、中位のｃ～ｅの３層は人為的堆積層であろう。規模は、開口部径152cm・底部径156cm・深さ76～82cmである。このピットはＢＦ32－３ピットより古いものと思われる。出土遺物はない。

図版20　ピット（4）

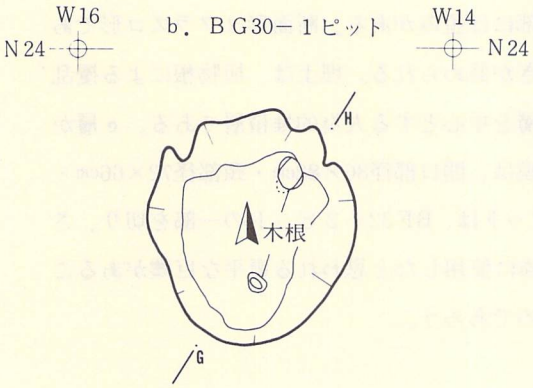
a．ＢＦ33－３ピット

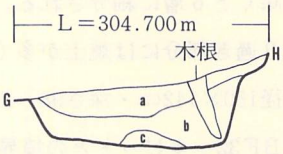




a：10ＹＲ3/4　褐　色　暗褐色土が混入する。ややしまり・粘性なし。
b：10ＹＲ3/4　暗　褐　色　灰黄色土・炭化物が混入する。しまり・粘性なし。
c：10ＹＲ5/4　明黄褐色　にぶい黄橙色土・明褐色土が混入する。ししまり・粘性なし。
d：10ＹＲ3/3　明　褐　色　にぶい黄橙色土のブロック・黒褐色土が混入する。しまり・粘性なし。
e：10ＹＲ3/6　褐　色　にぶい黄橙色土・黒褐色土が混入する。しまり・粘性なし。
f：10ＹＲ5/4　にぶい黄橙色　暗褐色土が少量混入する。しまり・粘性なし。
g：10ＹＲ5/4　にぶい黄褐色　砂礫が多く混入する。しまっている。粘性なし。
I：10ＹＲ3/2　黒　褐　色　表土層
II：10ＹＲ3/4　暗　褐　色　地山II層

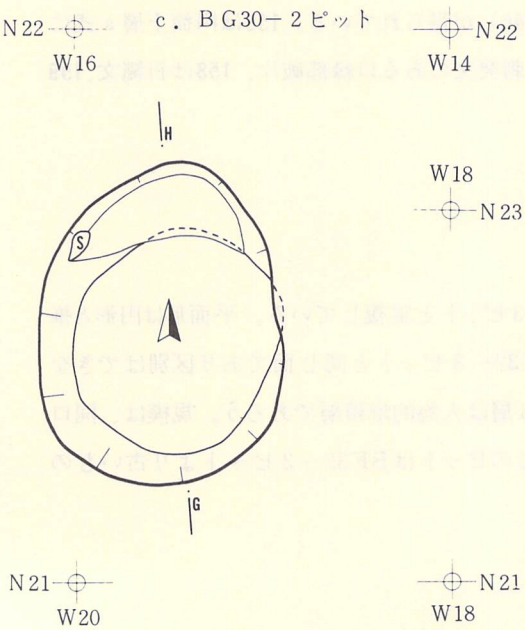
b．ＢＧ30－１ピット

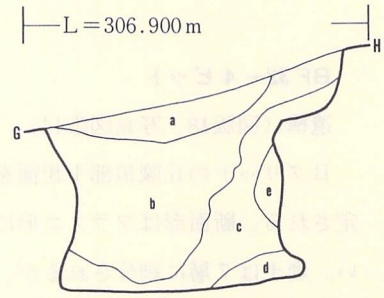




a：10ＹＲ3/2　黒褐色　炭化物・焼土が少量混入する。ややしまり・ねばりなし。
b：10ＹＲ3/3　暗褐色　炭化物まばらに混入する。しまっている。粘性有。
c：10ＹＲ3/4　褐　色　暗褐色土が混入する。ややしまっている。粘性弱。

c．ＢＧ30－２ピット





a：10ＹＲ3/3　明　褐　色　橙色パミス・焼土・炭化物がまばらに混入する。しまり・粘性なし。
b：10ＹＲ3/4　暗　褐　色　炭化物・褐色土ブロックが混入する。しまり・粘性なし。
c：10ＹＲ3/4　褐　色　暗褐色土が混入する。しまり・粘性なし。
d：10ＹＲ5/4　にぶい黄褐色　暗褐色土が混入する。しまり・粘性なし。
e：10ＹＲ5/4　黄　褐　色　地山III層に類似する。

（Ｓ＝$\frac{1}{40}$）

BF32－5ピット

遺構（図版19、写真図版15・16）

Ｂグリッドの丘陵頂部付近を占地し、ＢＦ32－２ピットの南東側に位置する。平面形は楕円形である。断面形はビーカー形に近いが、西壁はかなり外傾した立ち上がりを示している。床面には僅に凹凸がある。埋土は３層に細分され、上位から褐色、黄褐色、にぶい黄褐色の土層で構成される。規模は、開口部径150×130cm・底部径126×86cm・深さ36～48cmである。

遺物（図版30、写真図版25）

埋土下位から台付浅鉢（26）が得られている。口縁部を欠損しているが、口縁部と胴部は浅い沈線と磨消帯で区画される。胴部の地文は斜縄文である。時期は縄文時代後期であろう。

BF33－1・33－2ピット

遺構（図版19、写真図版15）

Ｂグリッドの丘陵頂部の平坦面を占地している。基本土層Ⅱ層の下位に土器片を含む土層(a)があり、住居址の存在（ａ・ｂ・ｊ・ｈ層）を想定して精査したが、床面が検出されなかった。さらに掘り下げたところ２基のピットが検出された。平面形は円形基調であり、断面形はビーカー形であったと推定される。底面は平坦で、堅くしまっている。

埋土は２基とも中央ほど落ち込むように堆積している。33－２ピットの下位は実測せずに掘り上げている。２基とも、にぶい黄橙色土の混入する褐色～暗褐色の土層で構成されている。33－１の規模は、開口部径160×(120)cm・底部径124×(112)cm・深さ88cm（表土から 120cm）である。33－２の規模は、開口部径140×(130)cm・底部径114×108cm・深さ132cm（表土から、170cm）である。重複関係は、残存部では認められない。

遺物（図版30・37、写真図版25・29）

埋土上位（ａ層）から大型深鉢（27）、縄文土器片（160～162）が得られている。**27**は底部を欠損しているが、胴部下半は外反し、胴部上半から口縁部は内彎ぎみに立ち上がっている。口縁部は磨消帯となり、胴部上位には、左右に折り返すように区画された平行沈線による文様区画帯がある。時期は縄文後期前葉である。**160・161**は口縁部破片、**162**は胴部破片である。**160**は平縁で隆帯上に原体圧痕文が伴う。**161**は平縁、地文は複節斜縄文である。

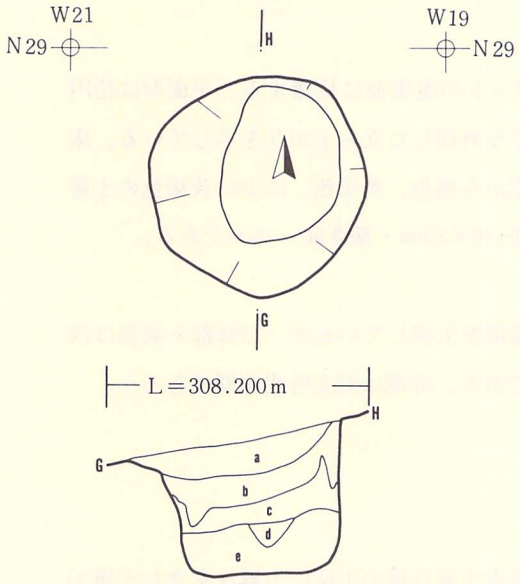
BF33－3ピット

遺構（図版20、写真図版16）

Ｂグリッドの丘陵頂部平坦面を占地し、遺構の北西側２分の１位は調査範囲外にある。平面形は、開口部は楕円形、底部は円形に近い。断面形はフラスコ形である。底面は中央ほど緩く

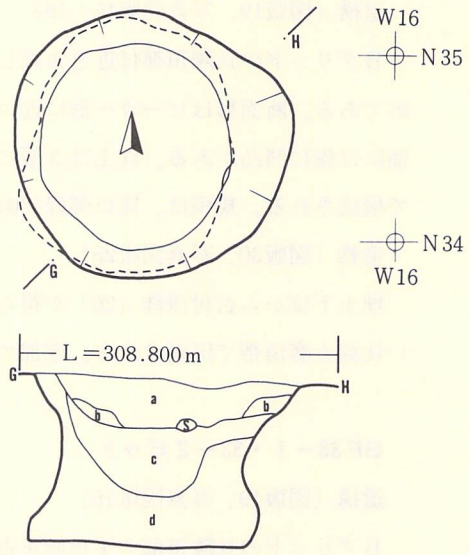
図版21　ピット（5）

a．ＢＧ31ピット



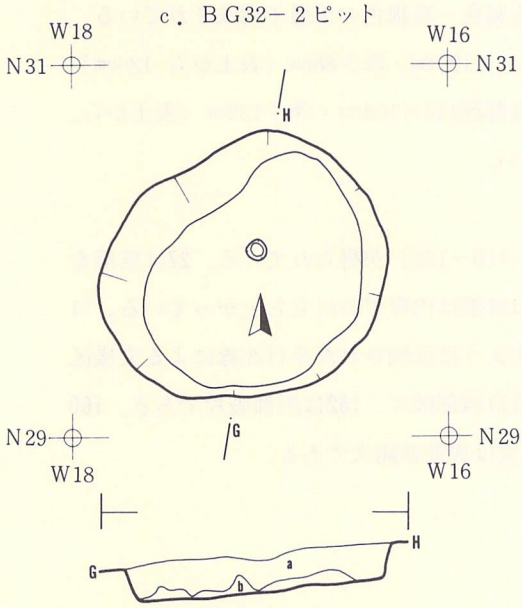
a：10ＹＲ3/4　暗　褐　色　炭化物・褐色土がまばらに混入する。ややしまる。粘性なし。
b：10ＹＲ4/4　褐　　色　あらい黄褐色土が混入する。しまり・粘性なし。
c：10ＹＲ5/4　にぶい黄褐色　黄橙色土が混入する。しまりなし。粘性弱。
d：10ＹＲ6/4　にぶい黄橙色　暗褐色土が混入する。しまり・粘性なし。
e：10ＹＲ6/4　にぶい黄橙色　しまり・粘性なし。地山Ⅳ層に類似する。

b．ＢＧ32－１ピット



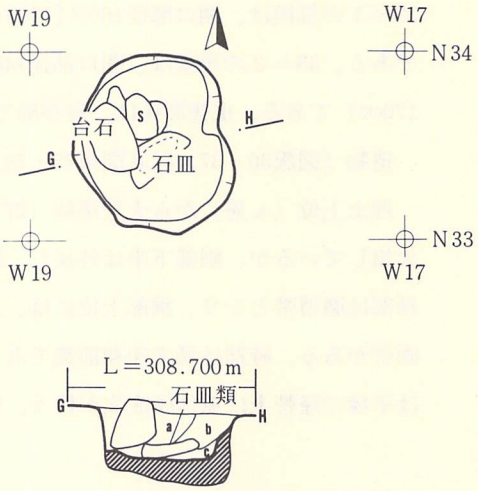
a：10ＹＲ5/4　褐　　色　灰黄色火山灰や炭化物が混入する。ややしまっている。粘性なし。
b：10ＹＲ5/3　黄　褐　色　灰黄色火山灰の小ブロック・浮石が混入する。ややしまっている。粘性なし。
c：10ＹＲ3/4　暗　褐　色　灰黄色火山灰・褐色土の粗粒が混入する。しまり・粘性なし。
d：10ＹＲ5/3　にぶい黄褐色　灰黄色火山灰が全体に多量に混入する。しまり・粘性なし。

c．ＢＧ32－２ピット



a：10ＹＲ3/3　暗　褐　色　褐色土が少量混入する。しまり・粘性なし。
b：10ＹＲ5/4　褐　　色　しまり・粘性なし。

d．ＢＧ32－３ピット



a：10ＹＲ5/4　褐　　色　黒褐色土が混入する。しまり・粘性なし。
b：10ＹＲ5/6　黄　褐　色　暗褐色土が混入する。しまりなし。粘性弱。
c：10ＹＲ5/8　黄　褐　色　しまりなし。粘性弱。

（Ｓ＝$\frac{1}{40}$）

凹み、調査範囲外にかけて副穴がある。副穴は楕円形と推定される。深さは16cmである。

埋土は７層に細分され、上位で落ち込むように、下位では西壁から北壁に低く傾斜して堆積している。規模は、開口部径170×（140）cm・底部径164cm・深さ124cmである。

遺物（図版31・37・42・45、写真図版25・26・29・32・34）

埋土上位から深鉢胴部破片(28)、大型深鉢(29)、縄文土器片(163～169)、複刃の削掻器(411)剥片（447・448）が得られている。**28**は円筒上層ｃ式に分類されるもので長方形の刺突が連続し、隆帯上に原体圧痕文を伴う。**29**は口縁部の大部分を欠損しているが、波状口縁、折り返し口縁である。胴部上半は隆帯で区画され、その中に楕円形の隆帯を起点に10本の隆帯が放射状に貼付され、さらに鍵状の短い隆帯が１本付されている。各隆帯は上下両側から押圧され稜のある隆起線となっている。円筒上層ｄ式に分類される。**163・164・169**は口縁部破片、**155～168**は胴部破片である。**163**は突起部に２個のボタン状貼付文があり、刺突文と原体圧痕文のある隆帯が貼付される。円筒上層ｃ式に分類される。**169**は円形竹管文が付され、大木10式に分類される。

BG30－１ピット

遺構（図版20、写真図版16）

Ｂグリッドの丘陵南斜面中位を占地し、３棟の住居址の間に位置する。平面形は不整な楕円形である。断面形をみると、壁は外傾して立ち上がる。壁面や底面は木根によって大きく攪乱され凹凸がある。埋土は３層に細分され、上位から黒褐色、暗褐色、褐色の土層で構成される。上位ほど炭化物が混入している。規模は、開口部径124×110cm・底部径98×64cm・深さ20～44cmである。出土遺物はない。

BG30－２ピット

遺構（図版20、写真図版16）

Ｂグリッドの丘陵南斜面中位を占地し、ＢＦ30住居址の南側に位置する。平面形は、開口部は北側を掘り過ぎたため楕円形、底部は円形である。断面形はビーカー形に近い。底面は比較的平坦である。埋土は５層に細分され、斜面上位から下位に落ち込むように堆積している。全体に暗褐色土が支配的であり、上位では炭化物が混入している。規模は、開口部径174×130cm・底部径120×110cm・深さ86～114cmである。出土遺物はない。

BG31ピット

遺構（図版21、写真図版17）

Ｂグリッドの丘陵南斜面上位を占地し、ＢＦ30住居址の北側に位置する。平面形は、開口部は不整な円形、底部は不整な楕円形である。断面形はビーカー形に近い。底面には僅かに凹凸がある。埋土は５層に細分され、斜面上位から下位に緩く傾斜して堆積している。規模は、開口部径116cm・底部径83×63cm・深さ60～76cmである。出土遺物はない。

BG32－１ピット

遺構（図版21、写真図版17）

Ｂグリッドの丘陵頂部平坦面を占地している。第一次精査では、埋土ｃ層までの比較的浅いピットと考えていたが、底面が軟質であるため再度精査した。平面形は、開口部は円形、底部は不整な楕円形である。断面形はフラスコ形である。壁面は軟質で検出しにくかった。底面は堅く、比較的平坦である。

埋土は３層に大別され、上位から褐色、暗褐色、にぶい黄褐色の土層で構成される。全体に灰黄色火山灰が混入している。また埋土ａ層下位には、炭化物が多く混入しており、礫や土器片も含まれている。規模は、開口部径149×143cm・頸部径110×100cm・底部径136×103cm・深さ86～89cmである。

遺物（図版37・54、写真図版29・39）

埋土上位から縄文土器片（170～173）、角柱状原石（524）が得られている。**170～173**は胴部破片である。**170～172**には隆帯が貼付され、刺突文もみられる。円筒上層ｃ式に分類される。**524**は断面形が五角形の角閃石英安山岩である。加工されていないが石棒の類であろう。ＢＦ30住居址、ＢＨ29住居址でも同じものが出土している。

BG32－２ピット

遺構（図版21、写真図版18）

Ｂグリッドの丘陵頂部平坦面南縁を占地している。平面形は不整な楕円形である。断面形は皿形である。底面は北から南に低く傾き、中央北寄りに、径10cm・深さ25cmの副穴がある。埋土は暗褐色と褐色の２層に細分される。規模は、開口部径156×130cm・底部径126×96cm・深さ18～20cmである。

遺物（図版37・45・54、写真図版29・34・39）

埋土から縄文土器片（167）、剥片（449）、角柱状原石（525）が得られている。**167**は胴部破片で円筒上層ｃ式に分類される。**525**は断面形が五角形の斜長石流紋岩である。

BG32－3ピット

遺構（図版21、写真図版18）

Ｂグリッドの丘陵頂部平坦面を占地し、BG32－1ピットに隣接している。平面形は不整な楕円形である。壁は全体的に直立ぎみに立ち上がる。底面の状態は掘り過ぎたため、不明である。このピットには石皿や台石が埋められており、埋土は人為的堆積層で3層に細分される。規模は、開口部径96×78cm・底部径85×70cm・深さ22～24cmである。

遺物（図版52・53、写真図版37・38）

石皿（509）や台石（513～515）が得られている。**512**は両面使用の石皿である。**515**は台石としたが、両面に平坦な磨面が形成されており石皿として利用されたことも考えられる。

BH30ピット

遺構（図版22、写真図版18）

Ｂグリッドの丘陵南斜面中位を占地し、BH29住居址床面精査中に北壁直下付近で検出された。遺構上半部を欠くが、平面形は開口部は円形と推定される。底部は不整な円形である。断面形は残存部からフラスコ形に近いものと推定される。底面には緩い凹凸があり、中央付近に径28×21cm・深さ6cmの副穴がある。副穴付近には板状の炭化材がある。C－14の年代測定値は、4150±120ｙＢ.Ｐ.（1950年よりの年数）である。

埋土下位は黒褐色の単層であり、住居址埋土とは不連続である。従って、このピットは住居址構築以前のものである。規模は、底部径126×124cm・北壁付近の深さ108cmである。出土遺物はない。

BH32ピット

遺構（図版22、写真図版19）

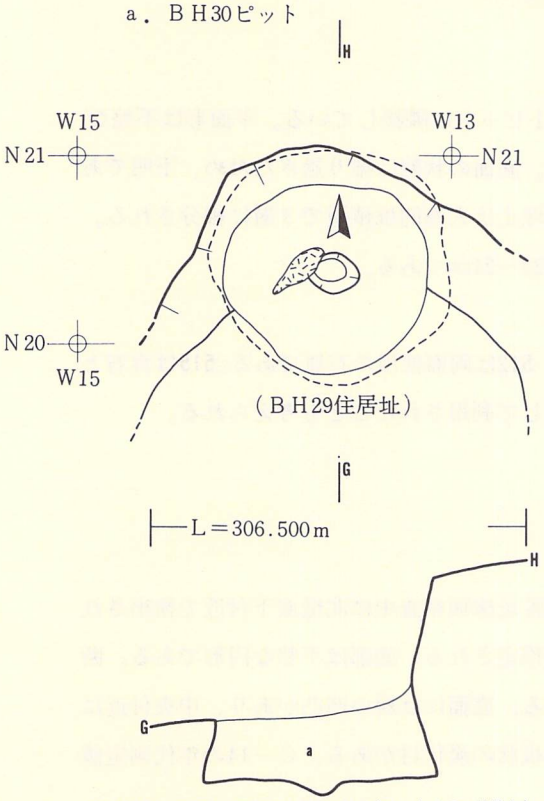
Ｂグリッドの丘陵頂部付近を占地し、BH31住居址の北側に位置する。平面形は円形、断面形は皿形である。底面は西から東に低くなる。埋土は炭化物を含む暗褐色の単層である。規模は、開口部径118×107cm・底部径90×87cm・深さ10～14cmである。

遺物（図版38、写真図版29）

埋土から縄文土器片（175～178）が得られている。**175～177**は口縁部破片、**178**は胴部破片である。**175**は口縁部や口唇部に原体圧痕文が施文されている。**176～178**は、大木10式に分類される同一個体の破片と思われる。波状突起頂点を起点に口縁部を区画する隆帯がある。口縁部は無文帯で、隆帯との境に竹管文を伴う。地文は斜縄文で沈線を伴う。

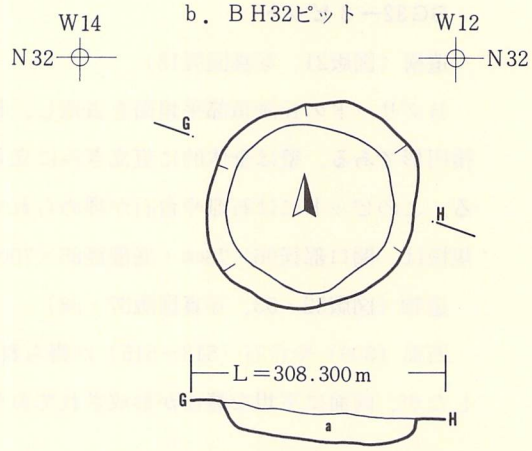
図版22　ピット（6）

a．ＢＨ30ピット



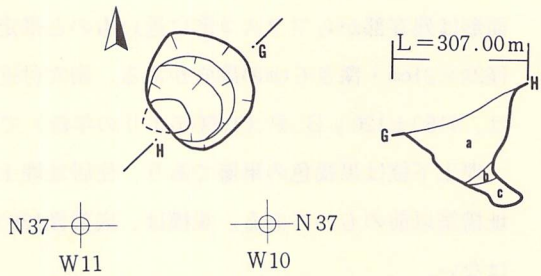
a：10ＹＲ3/2　黒褐色　褐色土の粗粒が混入する。しまり・粘性なし。

b．ＢＨ32ピット



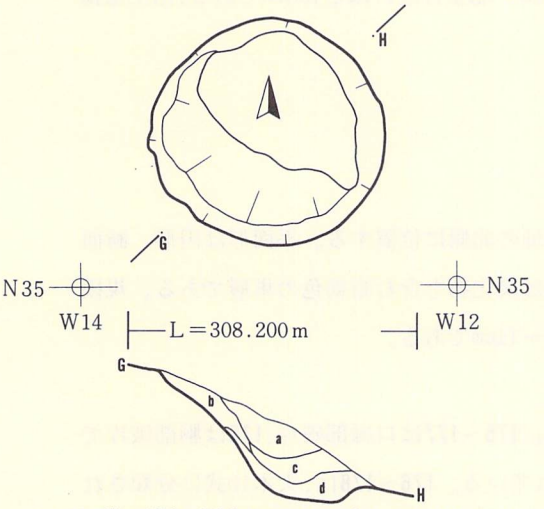
a：10ＹＲ3/3　暗褐色　炭化物・橙色土の粗粒が少量混入する。しまりなし。粘性なし。

c．ＢＨ33－１ピット



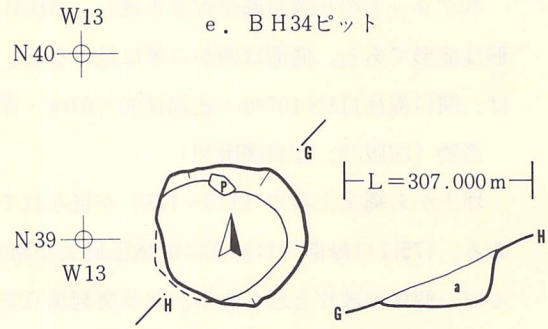
a：10ＹＲ3/3　暗褐色　褐色土ブロックが少量混入する。しまり・粘性なし。
b：10ＹＲ3/6　褐　色　しまり・粘性なし。
c：10ＹＲ3/2　黒褐色　しまり・粘性なし。

d．ＢＨ33－２ピット



a：10ＹＲ3/3　暗褐色　炭化物がまばらに混入する。ややしまる。粘性なし。
b：10ＹＲ3/4　暗褐色　灰黄色土が混入する。しまりなし。粘性なし。
c：10ＹＲ3/2　黒褐色　灰黄色土がまばらに混入する。しまっている。粘性なし。
d：10ＹＲ3/4　褐　色　灰黄色土が多く混入する。しまりなし。粘性弱。

e．ＢＨ34ピット



a：10ＹＲ3/2　黒褐色　褐色土の小ブロックと粗粒が少量、炭化物がまばらに混入する。しまり・粘
粘性なし。

（Ｓ＝$\frac{1}{40}$）

BH33－1ピット

遺構（図版22、写真図版19）

Ｂグリッドの丘陵北斜面に位置する。平面形は円形に近い。断面形をみると、北東壁は緩く外傾ぎみに立ち上がり、南西壁は下位で内彎し中位から上位は外傾ぎみに立ち上がる。壁面には凹凸があり、下位ほど堅くしまっている。埋土は３層に細分される。規模は、開口部径63×54cm・西壁付近の深さ60cmである。出土遺物はない。

BH33－2ピット

遺構（図版22、写真図版19）

Ｂグリッドの丘陵北斜面に位置し、北東壁を欠く状態で検出されている。平面形は、開口部は円形、底部は不整な卵形である。断面形をみると、南西側の壁は大きく外傾する立ち上がりを示している。底面は丸底であり、壁面や底面には凹凸がある。埋土は４層に細分され、中央に緩く落ち込むように堆積している。規模は、開口部径120cm・底部径98×60cm・中心部の深さ38cmである。出土遺物はない。

BH34ピット

遺構（図版22、写真図版20）

Ｂグリッドの丘陵北斜面に位置する。平面形は不整ながら円形に近い。断面形をみると、南西壁は直立ぎみに立ち上がっている。底面には凹凸がある。埋土は黒褐色の単層である。規模は、開口部径76×74cm・底部径69×58cm・南西壁付近の深さ26cmである。

遺物（図版38、写真図版29）

埋土から縄文土器片（179）が得られている。**179**は深鉢の胴部破片である。胴部上半に貼付された隆帯に刻みが入っている。円筒上層ｃ～ｄ式に分類される。

BI 29ピット

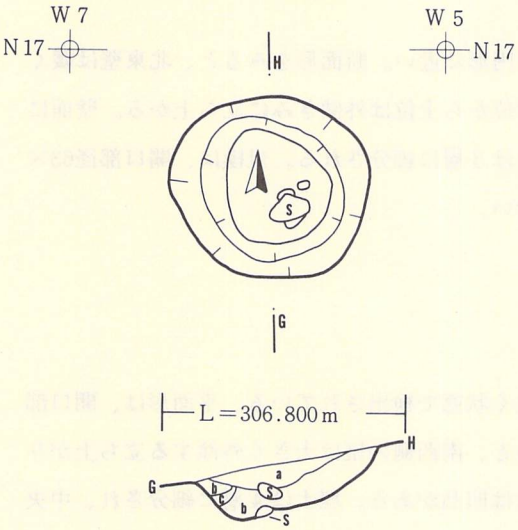
遺構（図版23、写真図版20）

Ｂグリッドの丘陵南斜面中位に位置する。平面形は円形に近い。断面形をみると、開口部が広く丸底で皿形に近い。底面は北から南に低く傾く。埋土は２層に大別され、上位から黒褐色、暗褐色の土層で構成され、中位に礫が入っている。規模は、開口部径105×98cm・底部径64×56cm・中心部の深さ24cmである。出土遺物はない。

□　　□

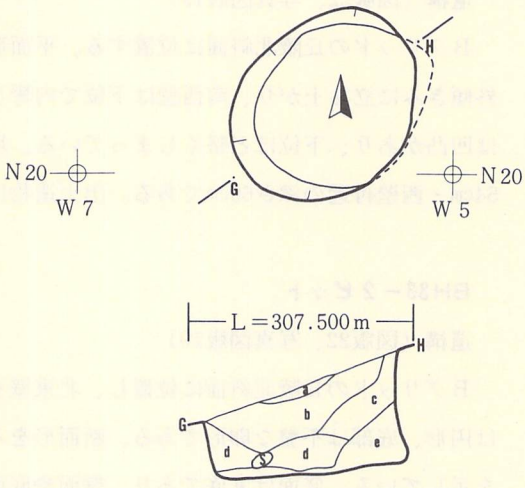
図版23　ピット（7）

a．ＢＩ29ピット



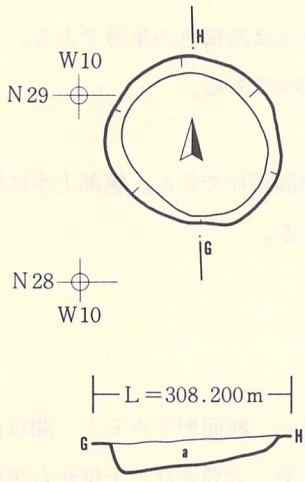
a：10ＹＲ2/2　黒褐色　暗褐色のブロックが混入する。しまり・粘性なし。
b：10ＹＲ3/4　暗褐色　褐色土ブロックが混入する。ややしまる。粘性なし。
c：10ＹＲ5/8　黄褐色　しまり・粘性なし。

b．ＢＩ30ピット



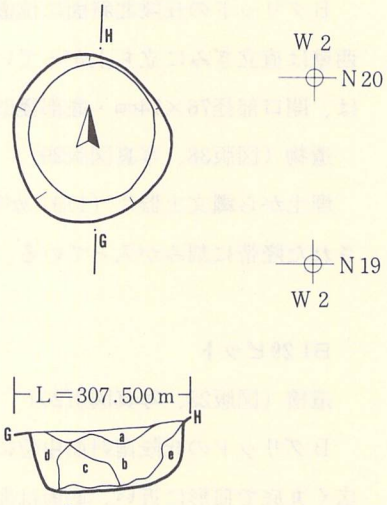
a：10ＹＲ3/3　暗　褐　色　しまり・粘性なし。
b：10ＹＲ2/3　黒　褐　色　にぶい灰黄色土や褐色土のブロックが混入する。ややしまりあり。粘性なし。
c：10ＹＲ4/4　褐　　色　灰黄色土が混入する。しまりなし。粘性なし。
d：10ＹＲ3/3　暗　褐　色　灰黄色土・焼土ブロックが混入する。ややしまりあり。粘性なし。
e：10ＹＲ6/4　にぶい黄褐色　黒褐色土が少量混入する。しまりなし。粘性なし。

c．ＢＩ31ピット



a：10ＹＲ3/4　暗　褐　色　褐色土の小ブロックが混入する。ややしまっている。粘性なし。

d．ＢＪ30ピット



a：10ＹＲ3/3　暗　褐　色　褐色土が混入する。しまりなし。粘性なし。
b：10ＹＲ4/4　にぶい黄褐色　黄褐色・灰黄色土が混入する。ややしまる。粘性なし。
c：10ＹＲ3/3　暗　褐　色　灰黄色土のブロックが混入する。ややしまる。粘性なし。
d：10ＹＲ4/6　褐　　色　暗褐色土が混入する。ややしまる。粘性なし。
e：10ＹＲ5/4　にぶい黄褐色　灰黄色土が多く混入する。しまり・粘性なし。

（Ｓ＝$\frac{1}{40}$）

BI 30ピット

遺構（図版23、写真図版20）

Ｂグリッドの丘陵南斜面中位を占地し、BI29ピットの北に位置する。平面形は楕円形である。断面形は、北東壁が内彎しているが、ビーカー形に近い。底面は比較的平坦である。埋土は５層に細分され、下位３層は指交状に堆積している。規模は、開口部径110×88cm・底部径100×78cm・深さ30～60cmである。出土遺物はない。

BI 31ピット

遺構（図版23、写真図版21）

Ｂグリッドの丘陵頂部付近を占地し、BH31住居址の北東側に隣接している。平面形は、開口部は円形に近く、底部は楕円形である。断面形は皿形である。底面は北から南に低く傾く。埋土は暗褐色の単層である。規模は、開口部径94×88cm・底部径80×68cm・深さ９～15cmである。

遺物（図版38・42・44・50、写真図版29・32・33・36）

埋土から縄文土器片（180～185）、削掻器（414）、箆状石器（425）、石刀（506）、冠状石器(507)が得られている。

180～185は胴部破片である。**180**は大木９～10式、**182**は円筒上層ｃ式に分類される。**181**は厚手の土器片である。**183～185**は隆帯上に原体圧痕文を伴う土器片である。**506・507**は石製品としては不完全なものである。

BJ 30ピット

遺構（図版23、写真図版21）

Ｂグリッドの丘陵南斜面上位を占地し、BI 30ピットの東に位置する。平面形は円形、断面形はビーカー形に近い。底面は壁際で内彎ぎみに緩く立ち上がり壁に移行する。埋土は５層に細分され、北半はにぶい黄褐色、南半は褐色～暗褐色の土層で構成される。規模は、開口部径90×84cm・底部径75×67cm・深さ28～32cmである。出土遺物はない。

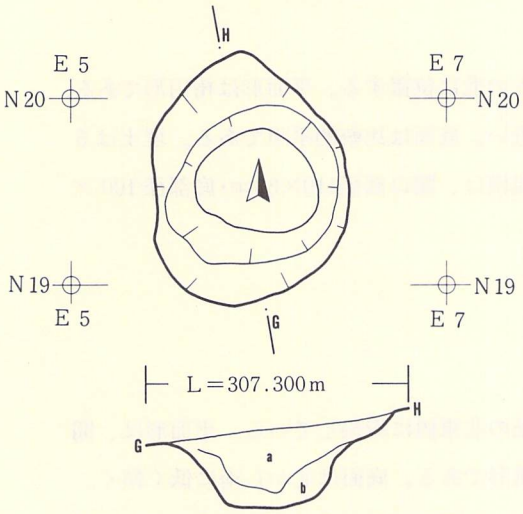
CB 29ピット

遺構（図版24、写真図版21）

Ｃグリッドの丘陵南斜面上位に位置する。平面形は、開口部は南北に長軸をもつ楕円形、底部は東西に長軸をもつ楕円形である。断面形をみると壁は外反して立ち上がっている。底面は丸底ぎみで凹凸がある。埋土は黒色土と暗褐色土の２層からなる。規模は、開口部径132×102

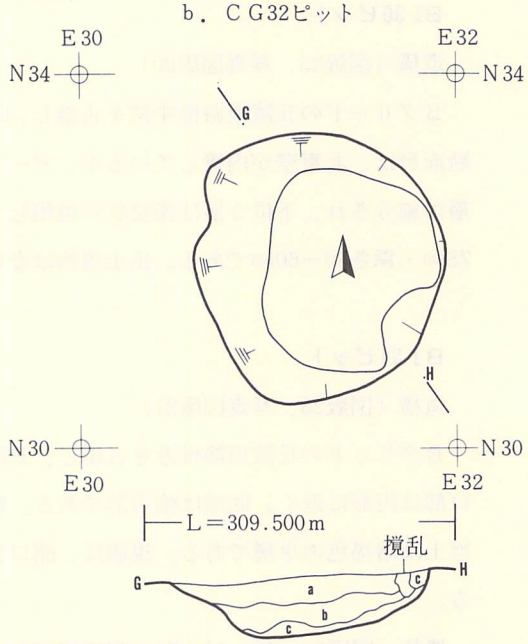
図版24　ピット（8）

a．ＣＢ29ピット



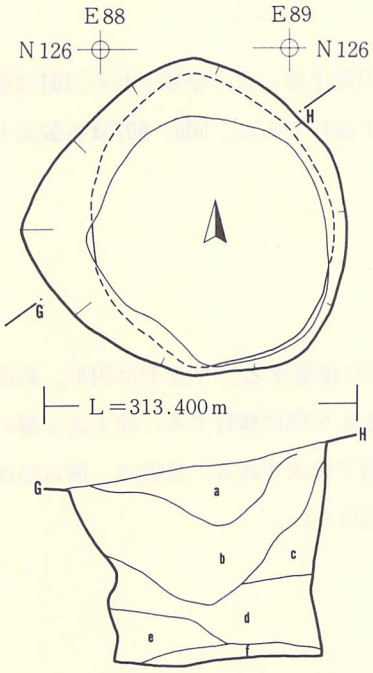
a：10ＹＲ2/1　黒　色　暗褐色のブロックが混入する。しまり・粘性なし。
b：10ＹＲ3/3　暗褐色　褐色土のブロックが混入する。ａよりややしまる。粘性なし。

b．ＣＧ32ピット



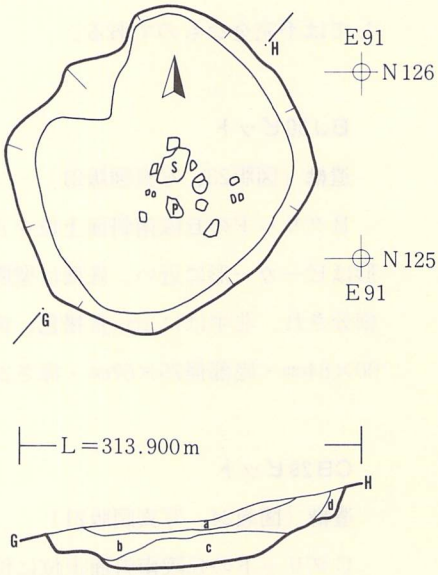
a：10ＹＲ3/2　黒褐色　炭化物・焼土がごくまばらに混入する。ややしまる。粘性なし。
b：10ＹＲ2/2　黒褐色　炭化物・焼土がごくまばらに混入する。しまりなし。粘性なし。
c：10ＹＲ5/6　褐　色　黒褐色土が混入する。しまっている。粘性弱。

c．ＤＨ51ピット



a：10ＹＲ2/2　黒褐色　炭化物・橙色パミスがまばらに混入する。しまっている。粘性なし。
b：10ＹＲ3/2　黒褐色　橙色土・褐色土のブロックが多量に混入する。ややしまっている。粘性なし。
c：10ＹＲ3/4　褐　色　黄褐色土のブロックが混入する。しまりなし。粘性弱。
d：10ＹＲ3/4　暗褐色　壁際に褐色土が混入する。ややしまっている。粘性弱。
e：10ＹＲ5/6　にぶい黄橙色土が混入する。しまりなし。粘性弱。
f：10ＹＲ3/3　黒褐色土が混入する。しまりなし。粘性弱。

d．ＤＩ51ピット



a：10ＹＲ3/2　黒褐色　炭化物・焼土がまばらに混入する。しまり・粘性なし。
b：10ＹＲ3/2　黒褐色　縄文土器片が混入する。ややしまる。粘性なし。
c：1ＹＲ3/4　暗褐色　褐色土が混入する。ややしまる。粘性なし。
d：10ＹＲ3/3　暗褐色　褐色土が混入する。ややしまる。粘性なし。

（Ｓ＝1/40）

cm・底部径66×55cm・中心部の深さ42cmである。出土遺物はない。

CG32ピット

遺構（図版24、写真図版22）

Cグリッドの丘陵頂部平坦面を占地している。平面形は不整ながら円形に近く、底部は隅丸方形基調で南東隅が歪である。断面形は皿形に近い。底面には凹凸がある。埋土は3層のほぼ水平な堆積層からなり、炭化物や焼土を含む黒褐色土が主体である。規模は開口部径146×130cm・底部径107×90cm・深さ15～30cmである。出土遺物はない。

DH51ピット

遺構（図版24、写真図版22）

Dグリッド北端の南西斜面を占地し、DI51ピットの西に位置する。平面形は、開口部は不整な円形、底部は楕円形である。断面形はビーカー形に近く、中位から開口部にかけ壁は外傾した立ち上がりを示している。底面は東から西に僅に低くなる。埋土は6層に細分され、上位2層は黒褐色、下位4層は褐色～暗褐色の土層で構成されている。規模は、開口部径172×169cm・底部径154×127cm・深さ93～115cmである。出土遺物はない。

DI51ピット

遺構（図版24、写真図版22）

Dグリッド北端の南西斜面を占地し、DH51ピットの東に位置する。平面形は不整ながら隅丸方形ぎみである。断面形は皿形に近い。底面には凹凸があり、緩い丸底である。埋土は3層に大別される。b層には縄文土器片が混入している。規模は、開口部径154×147cm・底部径140×120cm・深さ25cmである。

遺物（図版31・38、写真図版26・29）

埋土から残存部約3分の1位の深鉢片(30) 縄文土器片(186～190) が得られている。**30**はキャリパー状の器形を呈し、口縁部は沈線に縁どられた隆起線によって波状に区画され、さらに曲線的な区画を伴う。口縁端には横位に張り出す小突起がある。大木8a式に分類される。**186～189**は口縁部破片ある。いずれも粘土紐が貼付されており、円筒上層d式に分類される。**186**は折り返し口縁部に粘土紐が貼付されている。**187・188**は同一個体の破片である。山形突起頂点は楕円形の面をなし刺突文を伴う。突起部上位には2本の粘土紐が巡ぐり、口唇部には刻みが入っている。**189**は突起部付近の破片である。突起部頂点直下に横位に張り出す瘤状小突起があり、口唇部には刻みが入っている。**190**は胴部破片である。

5．遺構外の出土土器

当遺跡から検出された遺構は調査地の南西に張り出す尾根の端部付近に集中しており、遺物も同様に尾根の端部付近の頂部から南斜面下位にかけての範囲から多く出土している。遺物中の土器類は、ほとんどが縄文土器で、ごく僅かに土師器が含まれている。縄文土器の時期も前期から後期まであり、中には接合復元できたものもあるが、大半は破片のままである。これらの土器類を製作技法や文様施文の違い等で以下の７群に大別した。Ⅰ群は縄文時代前期末から中期初頭にかけて、Ⅱ群は中期前葉、Ⅲ・Ⅳ群は中期中葉、Ⅴ群は中期末葉、Ⅵ群は後期に属し、Ⅶ群は時期不明の粗製土器や土製品を一括している。

なお図示した土器および土器片は、出土遺物の総量ではなく、各群の代表的なものである。また、遺物の番号は31～56が実測図の番号101～293は拓本の番号である。

Ⅰ群

円筒土器系土器群と大木系土器群があり、円筒系土器群はⅠa・Ⅰb・Ⅰcの３群に、大木系土器群はⅠd群とした。円筒系土器群は文様帯は口縁部付近にあり、幅５cm位である。また文様帯には縄文の地文はない。

Ⅰa群（図版32－31、図版38－191～207、写真図版26・29）

縄文原体の圧痕により文様構成がなされている土器群である。縄文原体は太目で、１本ずつ押しつけて施文している。小さな粘土の貼付のある土器もある。器形は深鉢で平縁のものが多い。胎土に繊維はほとんど含まれない。

31は大型深鉢の口縁部破片である。平縁で、文様帯の下端に小さな粘土の貼付がある。縄文原体を口唇部から、縦・横交互に押しつけて施文している。

202・203は胴部の破片で、木目状撚糸文が施文されている。**204～207**はコイル状の縄文原体が施文されている。

Ⅰb群（図版32－32・33、図版39－208～216、写真図版26・30）

文様帯に粘土紐を貼り付け、縄文原体を１本ずつ押圧して文様を構成している土器群である。折り返し口縁で、縄文原体を押圧したものもこの土器群に含めた。口縁部は平縁のものよりも波状のものが多い。粘土紐は文様帯の下端には必ず巡り、口縁部にも平行して貼付するものがある。波状口縁のものは波状突起の部分から１本あるいは複数の粘土紐を懸垂させて貼付している。口縁部突起の形状も、先が二つに分かれたり、肥厚したり種々ある。また、ほとんどの土器の口縁部や粘土紐上には縄文原体が押圧されている。

32は深鉢で、四つの突起を持つ波状口縁である。波状突起から左に弧を描くように垂下する粘土紐が貼り付けてある。

33も深鉢で、波状突起部に粘土紐が「８」字状に貼り付けてある。

Ｉｃ群（図版39－217～224、写真図版30）

Ｉｂ群と同様な器形、施文方法を示すが、文様帯の内部を細い複数の原体を押圧して縁取りするような文様帯を構成している土器群である。この土器群は遺構内から出土したものを含めても、遺跡全体から出土した土器の中ではかなり少ない。

Ｉｄ群（図版32－34～36、図版39－225・226、写真図版26・30）

大木系と思われる土器群である。

34は浅鉢で底部は欠損している。胴部は張り、頸部で僅かにくびれて、口縁部は外傾した後内彎ぎみに立ち上がる。竹管を押し引きした沈線と刺突による文様が施文されている。文様施文の範囲は胴部下位付近にまで及ぶ。

35は粗製深鉢で、底部は欠損している。やや胴が張る円筒形を呈し、折り返し口縁である。縦位の綾繰り文が施文され、口縁部直下には「∩」状の粘土紐が四つ貼り付けてある。

36は深鉢で底部が欠損している。胴部中位が角ばって張り、口縁部は内彎ぎみに外傾して立ち上がる。竹管の截断面を押し引きした沈線と刺突による文様が施文されている。文様施文の範囲は口縁部から底部付近まで及んでいる。

225・226は同一個体と思われる口縁部の破片である。横位に平行する沈線と竹管によるコンパス文が施文されている。

Ⅱ群

円筒系土器群と大木系土器群があり、円筒系土器群をⅡａ群、大木系土器群をⅡｂ群とした。

Ⅱａ群（図版39－227～238、写真図版30）

Ｉ群の円筒土器系のものに較べて、粘土紐の貼り付け方がやや複雑で、縄文原体を折り曲げて刺突したＣ字状の文様が施文される土器群である。波状口縁と平縁のものがあり、波状口縁の方が多い。粘土紐には縄文原体による圧痕が施文されている。

228はコイル状の原体圧痕による文様が構成されている。**231**は口縁部に粘土紐が波状に貼り付けてある。**237・238**は文様帯の内部が細い２本の縄文原体による縁取りがなされている。

Ⅱｂ群（図版33－37・38、図版40－239～242、写真図版26・30）

大木系と思われる土器群である。

37は大型深鉢の口縁部破片である。器形はキャリパー形を呈すると思われる。縄文原体の押圧による文様が施文されている。

239～242は半截竹管による刺突文が施文されている。**241**には粘土紐の貼り付けがなされている。

Ⅲ群

円筒系土器群と大木系土器群があり、円筒系土器群をⅢa群、大木系土器群をⅢb群とした。

Ⅲa群（図版33・34－42～45、図版40－243～252、写真図版27・30）

粘土紐の貼り付けと箆状工具による刺突で文様帯が構成される土器群である。器形は深鉢形が多く、文様帯の幅が広く、粘土紐の貼り付けも多彩になる。文様帯の幅は10cm以上となり、胴部中位付近まで広がるものもある。平縁と口縁部突起を持つものがあり、口縁部突起の形状も多様である。粘土紐で区画した中を箆状工具で連続刺突しており、粘土紐上も箆状工具で刻み目を施したものもある。文様帯には縄文の地文はない。当遺跡出土の土器の中ではこの土器群がもっとも多い。

42は波状口縁を持つ深鉢である。口縁部には粘土紐が波状に貼り付けてあり、縄文原体の押圧が行なわれている。

43は平縁の深鉢で、口縁部から横に突きでるような棒状の粘土の貼り付けが四つある。口縁部には粘土紐が波状に貼り付けてある。文様帯は胴部中位付近まで達するようである。

45は弁状突起を四つ持つ深鉢で、文様帯の幅も12cm位ある。

246・250は粘土紐に箆状工具による刻み目が施されている。

Ⅲｂ群（図版33－39～41、図版40－253～261、写真図版26・27・31）

大木系と思われる土器群である。器形はキャリパー形を呈する深鉢が多く、沈線や粘土紐の貼り付けによる文様帯が口縁部付近にあるものが多い。口縁部は平縁だけのようである。当遺跡出土の大木系土器群の中では最っとも多い土器群である。

40は小型深鉢で、底部は欠損している。胴部は外反ぎみで、口縁部は外反した後、直立ぎみに立ち上がる。口縁部には粘土紐が波状に貼り付けられ、口縁部下位にも小さな粘土紐が貼り付けてある。補修孔もある。

41も小型深鉢で、胴部がやや張り、口縁部は外反する。口縁部には粘土紐が波状に貼り付けられ、縄文原体による押圧がある。粘土紐の下位から胴部中位付近にかけて沈線による文様が施文されている。

253～256は沈線による施文、**257～261**は粘土紐の貼り付けによる施文がなされている。

Ⅳ群（図版34－47、図版40・41－262～271、写真図版27・31）

円筒系の土器で、文様帯に地文が残る土器群である。粘土紐の貼り付けはⅢa群同様に、多採であるが、文様帯の幅はやや狭くなる。粘土紐は幅広で薄いものと、細く厚いものがある。粘土紐の上に縄文原体の圧痕のあるものとないものがある。出土点数は少ないが、波状口縁や突起を持つ器形が大半のようである。

47は波状口縁を呈する深鉢で、口縁部の４分の１位の破片である。口唇部に箆状工具による刻み目がある。粘土紐の両側は箆状工具でなでられ沈線状になっている。粘土紐上にも縄文が施文されている。

267は粘土紐の両側が撫でつけられている。また口縁部突起の裏側にも粘土紐の貼り付けが行なわれている。**270**は幅広の粘土紐と幅の狭い粘土紐の組み合わせによる施文で、幅広の粘土紐には指頭による押圧が行なわれている。

Ⅴ群

大木系の土器で、中期後葉から末葉にかけての土器群である。Ⅴa、Ⅴbの二群に分けた。

Ⅴa群（図版41－272～275、写真図版31）

幅広の隆帯と沈線による文様施文を持つ土器群である。個体数は少なく、同一個体の破片が多いようである。

272は口縁部の破片で隆帯による渦巻文が施文されている。

Ⅴb群（図版34－46、図版41－276、写真図版27・31）

細い沈線と磨り消し手法による文様を施文している土器群である。この土器群も出土点数は極めて少ない。

46は小型深鉢で、口縁部は波状を呈する。沈線と磨り消しによる「Ｊ」字状の文様を連続して施文している。器厚は３～５㎜と薄い。

276は胴部の破片で、沈線と磨り消しによる「Ｊ」字状の文様が施文されている。

Ⅳ群（図版34－48～50、図版41－277～282、写真図版27・31）

縄文時代後期に属すると思われる土器群である。後期の前葉と後葉に大別されるが、ここでは一括して扱った。

48は大型深鉢の破片である。口縁部はほぼ平縁で、箆で左右に粘土を寄せ、連続した貼り瘤状にしてある。器面は無文である。

49は大型深鉢の波状口縁の破片と思われる。折り返し口縁で、突起から垂下する隆帯が貼り付けられている。隆帯は両側を棒状工具により連続して押圧されている。

50は壺形を呈するような小型土器の破片である。注口が着くかどうかは不明である。頸部から上は沈線による連弧文と刺突により文様帯が形成されている。

278は口縁部突起から垂下する隆起帯の両側に棒状工具による刺突がなされている。**275・280**は平行沈線による文様施文がある。**281・282**は同一個体の破片と思われる。口縁部に肥厚する突起があり、刻み目と沈線によって区画した後に、瘤状の粘土塊を貼りつけた文様が施文され

ている。

Ⅶ群（図版35－51～58、図版41－283～293、写真図版27・31）

Ⅰ～Ⅵ群以外の土器群を一括して扱った。その大半が粗製土器で、時期の明確でないものが多い。

51は大型深鉢の破片である。地文は横位の羽状縄文である。

52・53は小型深鉢で、単節斜縄文の地文のみである。

56は土師器の坏形または盌形土器である。ロクロは使用しておらず、輪積の跡が残る。外面はナデ、内面はナデのち一部ミガキの調整が施されている。

57は土器片を利用した円盤状土製品である。中央に径6㎜の孔が開けられている。

58は平面が三角形状、立面が長楕円形状、側面が逆台形状を呈する土器で、口縁部の一端が欠損している。片口状のものが着いていた可能性もある。器面には縄文原体の圧痕による文様が施文されている。

6．石器および石製品

本遺跡出土の石器および石製品は95点である。その内訳は、石鏃5点、石槍2点、石錐1点、石匙2点、削掻器10点、石箆および箆状石器7点、その他の剥片石器2点、使用痕のある剥片11点、打製石斧1点、磨製石斧3点、凹石・磨石・敲石類20点、石皿・台石類12点、半円状扁平打製石器1点、石刀1点、冠状石器1点、角柱状原石16点である。

出土状況をみると、約7割は遺構の集中する遺跡西端Bグリッドからの出土である。遺構内から出土した剥片石器は11点、礫石器は18点である。

(1) 石鏃

遺物番号401～405（図版42、写真図版32）

石鏃は、細かな素材剥片を利用し、両面細部調整によって鋭利な先端部を作りだした小型の剥片石器である。5点出土している。

a　平基無茎鏃である。2点出土している。**401**は木葉形、**402**は三角形であり、2点とも扁平で両面から調整されている。

b　有茎鏃である。3点出土している。3点とも基部は平基に近く、赤堀栄三の分類A_2~A_3型に該当する。**403**は短身で、茎部は逆三角形で片面が凸面である。**404**はやや長身で両面から調整されている。茎部は欠損している。**405**は長身で両面から粗い調整がなされている。茎部は抉入状に剥離されてできている。

(2) 石槍

遺物番号406・407（図版42、写真図版32）

石鏃より厚く、重量が5ｇ以上の木葉形の剥片石器を石槍とした。２点とも粗い両面調整で基部は凸基である。

(3) 石錐

遺物番号408（図版42、写真図版32）

石製の錐である。出土した１点は、不定形な剥片の一端に錐部を作りだしたもので、錐部は非常に短い。

(4) 石匙

遺物番号409・410（図版42、写真図版32）

石匙は、一般につまみ状の小突起をもち、片面からの加撃・押圧による刃部加工がなされた打製石器である。石匙の形態は縦型・横型などに分類される。

409は縦型石匙である。扁平な剥片を利用し、両側縁からノッチ状に加工し半円形のつまみを作りだしている。左側縁は直刃、右側縁は弧刃であり一部欠損している。第一次剥離面が多く、調整は刃部やツマミ付近に集中している。**410**は横型石匙である。粗い打撃によってつまみを作りだしている。自然面と第一次剥離面の交叉する弧状の側縁に使用痕がある。刃部加工は施されていない。

(5) 削掻器

遺物番号411～420（図版42・43、写真図版32）

不定形剥片の側縁に連続的な調整によって刃部を作りだしている石器である。

411・**412**は両側縁に刃部加工を施した複刃削器である。**411**は直刃、**412**は弧刃である。

413は側縁と先端に刃部加工を施したものであり、先端部は太い錐部としての機能を持っており石錐として分類することもできる。

414は半円状の剥片の側縁に片面から細部調整が施されており円形掻器に近い。

415・**416**は直刃削器である。**417**～**419**は凸刃削器である。**420**の刃部は短いが削器に分類した。刃部調整はすべて片面から施されており、**415**・**417**以外の刃部調整は粗い。

(6) 石箆・箆状石器

遺物番号421～427（図版43、写真図版33）

石箆は、両面又は片面から加撃調整し、楕円形や撥形に作りだされた石器である。

421は、縦長の台形状剥片を利用し、基部や側縁を主として片面から調整して作られている。

422～**427**は、粗い加撃調整によって木葉形状に作られている。側縁は交互剥離によって鋸歯状をなしている。箆状石器としたが形態的まとまりに欠ける。

(7) その他の剥片石器

遺物番号428・429（図版44、写真図版33）

特定の器種に分類できない剥片石器である。**428**は弧状の側縁に使用痕があり、両端に加撃調整が加えられている。**429**は長側縁に両面から調整が加えられており、楔的使用も考えられる石器である。

(8) 使用痕のある剥片

遺物番号430～441（図版44、写真図版33）

使用痕のある剥片や部分的に刃部状調整のある剥片を一括した。

430は打面付近に使用痕や調整痕のある剥片。**431**は第一次剥離面の交叉する直線状の側縁に使用痕のある剥片。**432**は弧状の側縁に使用痕のある剥片。**433**は第一次剥離面の交叉する一側縁に使用痕のある剥片。**434**は自然面と第一次剥離面の交叉する凹状の側縁や下縁に使用痕のある剥片。**435**は自然面と第一次剥離面の交叉する下縁に使用痕のある剥片。**436**は切出形の先端付近に使用痕のある剥片。**431**は薄い側縁に片面からの刃部状調整がある五角形の剥片。**438**は片面が自然面で弧状の側縁に使用痕のある剥片。**439**は自然面と第一次剥離面の交叉する薄い縁辺に使用痕のある剥片。**440**は打面付近の厚い部分に加撃調整と使用痕のある剥片。**441**は自然面を残し、側縁にノッチ的調整と使用痕のある剥片である。

(9) 打製石斧

遺物番号482（図版46、写真図版34）

出土したのは１点だけである。長さ8.7cm、幅3.0cmの長方形をしており、両面から粗く加工されており断面は凸レンズ状である。基端近くが最も厚く第一次剥離面のままである。刃部は薄く両平刃、直刃ぎみである。石質は凝灰質硬質泥岩である。

(10) 磨製石斧

遺物番号483～485（図版47、写真図版34）

全面的に研磨された石斧である。３点出土している。

483は頸部付近を欠損しているが定角式磨製石斧であろう。両側縁は研磨され石斧主面との間に稜がある。断面形は隅丸長方形である。刃部は弱凸強凸片刃で、直刃ぎみである。長さは、11.8cmである。石質は緑色細角礫質凝灰岩である。

484は刃部付近を欠損しているが乳棒状磨製石斧である。部分的に第一次加工面(打製面)が残っている。欠損部を両面から加撃調整し再利用している。長さは13.2cmである。石質は粘板岩ホルンフェルスである。

485は断面が隅丸三角形に近い磨製石斧である。基部下位を欠損しており、刃部形態は不明である。石質は両輝石安山岩である。

(11) 凹石・磨石・敲石

遺物番号486～504（図版47～50、写真図版35・36）

凹みのある凹石、磨面のある磨石、敲打痕のある敲石は、複数の利用がなされている場合が多いので、まとめて記述する。

486～488は主として凹石として利用されたものである。**486**は扁平な礫の両面に各１個の凹みを有する。**487**は礫の全面に10個余の凹みを有する。凹み部分は大きく、良く利用されている。**488**は礫の両面に弱い複数の凹みを有する。

489～491は複数の機能面が観察されるものである。**489・490**はやや扁平な礫で磨面や凹み部分を有し、さらに側面には敲打痕がある。**491**は凹石のほかに磨石としても利用されている。

492～503は主として磨石として利用されたものである。弱い凹み部分が観察されるものもある。なお**501～503**は非常に扁平な礫である。

504は断面形が三角形の柱状の礫で、先端部が敲石として利用されたものである。

(12) 半円状扁平打製石器

遺物番号505（図版50、写真図版37）

半円状扁平打製石器は、鈴木孝志氏（1958）によって命名された石器である。出土したのは１点だけである。硬砂岩の礫を利用しており、長側縁には磨擦痕を有し、両端は片刃と両刃状に打ち欠かれている。村越潔氏の形態分類ではＡ２型に近い。長さ14.1cm、幅5.9cm、厚さ2.5cmである。この石器は円筒土器文化に伴なう特殊な石器とされており、機能的には石鋸的機能や打製石斧的機能などが考えられている。

(13) 石皿

遺物番号508～512（図版50～52、写真図版37）

中央を凹めた皿形の石器である。磨石と組み合わせて製粉器などに利用されたものと考えられる。5点出土している。このうち**508**は片面だけに皿面がある。**509**～**512**は両面に皿面がある。皿面は円形～楕円形に凹んでいるが、縁や脚などの加工はみられない。石質は、**509**は細砂質凝灰岩、それ以外は両輝石安山岩である。

⑭　台石

遺物番号513～519（図版52・53、写真図版38）

台石としたのは7点である。このうち**515**と**519**は平坦な磨面形成が認められることから、石皿として利用されたことも考えられる。石質は**514**は細砂質凝灰岩、それ以外は両輝石安山岩である。

⑮　石刀

遺物番号506（図版50、写真図版36）

出土した1点は、石刀状の粘板岩を利用し、刃部と背部に加工の痕跡が認められるものである。加工程度から石製品として認定するには問題があろうが、冠状石器とともにBI－31ピットから出土しているため石製品として認定した。

⑯　冠状石器

遺物番号507（図版50、写真図版36）

出土した1点は、基底面を除き良く研磨されている。頭部と基底部は連続し、断面形は三角形に近い。石質は両輝石安山岩である。

⑰　角柱状原石

遺物番号520～535（図版54、写真図版39）

断面形が五角形の柱状節理の原石である。住居址やピットから出土したものを含めて16点である。石質は角閃石英安山岩14点、斜長石流紋岩2点である。長さの最大は50.5cmであり、接合できたものは40cm前後になる。石棒の類であろう。雫石町塩ヶ森遺跡では大木7～8の時期に多く出土している。

石器集計表 (1)

遺物番号	図版番号	写真番号	器種	出土遺構名 グリッド名	法量 (cm・g) 長さ	幅	厚さ	重量	石質	産地・生成年代
401	42	32	石鏃	BH29住居址	2.9	1.5	0.3	1.3	硬質泥岩	雫石西部新第三系中新統
402	〃	〃	〃	BF31II層	3.4	1.9	0.4	1.3	白色珪質細粒凝灰岩	雫石西南部新第三系中新統
403	〃	〃	〃	不明	2.9	1.3	0.4	1.2	チャート質粘板岩	北上山地又は田山古生界
404	〃	〃	〃	BF30II層	3.1	1.2	0.4	1.9	粘板岩	〃
405	〃	〃	〃	BH29住居址	4.8	2.1	0.7	3.9	白色珪質細粒凝灰岩	雫石西南部新第三系中新統
406	〃	〃	石槍	WP2－I層	4.5	1.9	0.9	7.4	玻璃質流紋岩	雫石盆地西南域新第三系中新統
407	〃	〃	〃	BF31II層	3.7	1.9	0.9	7.1	凝灰質硬質泥岩	雫石西部新第三系中新統
408	〃	〃	石錐	CA29II層	3.0	1.4	0.5	2.1	〃	〃
409	〃	〃	石匙	BG28焼土付近	7.3	3.1	0.5	13.0	凝灰質珪質泥岩	〃
410	〃	〃	〃	BH31焼土付近	4.7	5.7	1.4	25.0	〃	〃
411	〃	〃	削掻器	BF33-3ピット	3.2	2.3	0.9	6.9	白色珪質細粒凝灰岩	雫石西南部新第三系中新統
412	〃	〃	〃	不明	6.1	3.6	1.0	22.4	凝灰質硬質泥岩	雫石西部新第三系中新統
413	〃	〃	〃	WP2－I層	6.7	2.0	1.3	22.1	凝灰質珪質泥岩	〃
414	〃	〃	〃	BI31ピット	2.1	1.8	1.1	4.0	チャート	北上山地古生界
415	〃	〃	〃	WP1－I層	3.5	6.8	1.5	30.9	凝灰質硬質泥岩	雫石西部新第三系中新統
416	〃	〃	〃	C～D	2.9	5.5	0.9	22.0	凝灰質珪質泥岩	〃
417	43	〃	〃	BG28焼土付近	3.2	6.8	1.3	28.2	珪質泥岩	〃
418	〃	〃	〃	WP2－I層	7.3	3.9	1.4	39.8	凝灰質珪質泥岩	〃
419	〃	〃	〃	WP1－I層	3.3	4.4	1.1	15.7	硬質泥岩	〃
420	〃	〃	〃	WP1－I層	3.7	5.0	0.7	12.2	凝灰質珪質泥岩	〃
421	〃	33	石箆	BG28II層	5.7	3.6	1.4	32.9	凝灰質硬質泥岩	〃
422	〃	〃	箆状石器	WP1－I層	5.9	3.2	1.8	27.0	〃	〃
423	〃	〃	〃	不明	6.8	4.7	1.4	42.0	〃	〃
424	〃	〃	〃	BF30ピット	6.7	4.1	1.9	66.0	珪質泥岩	〃
425	〃	〃	〃	BI31ピット	5.3	3.6	2.1	41.5	粘板岩	北上山地又は田山古生界
426	〃	〃	〃	BF31 I層	5.2	2.9	1.3	20.3	硬質泥岩	雫石西部新第三系中新統
427	〃	〃	〃	BG33II層	5.7	4.7	1.9	52.5	玻璃質流紋岩	雫石盆地西南域新第三系中新統
428	44	〃	その他の剥片石器	BG30II層	3.1	2.9	1.1	9.3	凝灰質珪質泥岩	雫石西部新第三系中新統
429	〃	〃	〃	BG28II層	4.8	2.9	1.3	18.9	玻璃質流紋岩	雫石盆地西南域新第三系中新統
430	〃	〃	使用痕のある剥片	BF30II層	2.3	1.6	0.2	1.0	凝灰質珪質泥岩	雫石西部新第三系中新統
431	〃	〃	〃	BF28焼土付近	2.4	2.4	1.1	7.9	珪質泥岩	〃
432	〃	〃	〃	WP1－II層	1.9	2.3	0.8	4.1	〃	〃
433	〃	〃	〃	BG29II層	2.4	1.5	0.9	2.9	チャート質粘板岩	北上山地又は田山古生界
434	〃	〃	〃	WP2－I層	3.6	2.7	0.6	8.3	凝灰質珪質泥岩	雫石西部新第三系中新統
435	〃	〃	〃	BG32II層	3.0	2.7	0.7	5.2	玻璃質流紋岩	雫石盆地西南域新第三系中新統
436	〃	〃	〃	WP1－I層	5.0	3.0	1.3	19.6	硬質泥岩	雫石西部新第三系中新統
337	〃	〃	〃	WP2－I層	4.0	3.8	0.5	13.7	凝灰質珪質泥岩	〃
438	〃	〃	〃	WP1－II層	3.3	5.1	0.8	14.2	〃	〃
439	〃	〃	〃	BG28焼土付近	3.6	3.8	0.7	9.0	チャート質粘板岩	北上山地又は田山古生界
440	〃	〃	〃	BG32II層	3.3	4.7	0.7	13.0	凝灰質珪質泥岩	雫石西部新第三系中新統
441	〃	〃	〃	WP1－I層	3.6	2.8	0.8	7.3	玻璃質流紋岩	雫石盆地西南域新第三系中新統
442	〃	34	剥片	BH27陥し穴状遺構	8.6	5.1	1.7	67.0	〃	〃
443	〃	〃	〃	BF29ピット	3.0	2.7	0.8	7.4	細砂質凝灰岩	奥羽山地新第三系中新統
444	〃	〃	〃	BF30ピット	2.8	3.4	0.6	6.2	チャート	北上山地又は田山古生界
445	〃	〃	〃	〃	3.5	1.4	0.4	2.0	珪質泥岩	雫石西部新第三系中新統

石器集計表 (2)

遺物番号	図版番号	写真番号	器種	出土遺構名 グリッド名	法量 (cm・g) 長さ	幅	厚さ	重量	石質	産地・生成年代
446	45	34	剝片	BF32-3ピット	3.8	2.4	0.8	5.6	硬質泥岩	雫石西部新第三系中新統
447	〃	〃	〃	BF33-3ピット	4.1	2.2	0.7	6.3	チャート	北上山地古生界
448	〃	〃	〃	〃	4.7	2.0	1.1	7.2	珪質泥岩	雫石西部新第三系中新統
449	〃	〃	〃	BG32-2ピット	2.5	2.4	1.0	7.2	チャート質粘板岩	北上山地又は田山古生界
450	〃	〃	〃	BF29II層	2.1	4.0	0.9	10.8	凝灰質珪質泥岩	雫石西部新第三系中新統
451	〃	〃	〃	〃	3.8	2.2	0.5	3.5	玻璃質流紋岩	雫石盆地西南域新第三系中新統
452	〃	〃	〃	BF31 II層	4.8	2.2	0.8	7.6	〃	〃
453	〃	〃	〃	〃	2.4	4.4	0.9	7.1	凝灰質硬質泥岩	雫石西部新第三系中新統
454	〃	〃	〃	BF32 II層	3.0	1.7	1.4	4.6	珪質泥岩	〃
455	〃	〃	〃	BG28 II層	2.6	5.0	0.8	12.0	凝灰質珪質泥岩	〃
456	〃	〃	〃	〃	3.5	3.1	0.8	9.2	〃	〃
457	〃	〃	〃	〃	4.5	4.0	1.2	16.4	〃	〃
458	〃	〃	〃	〃	3.1	5.7	1.0	18.7	〃	〃
459	〃	〃	〃	〃	4.0	5.5	0.8	18.3	〃	〃
460	〃	〃	〃	〃	4.1	5.6	0.9	16.6	〃	〃
461	〃	〃	〃	〃	2.2	4.0	0.5	8,0	〃	〃
462	〃	〃	〃	〃	5.6	4.8	1.4	25.3	〃	〃
463	46	〃	〃	〃	2.3	2.3	0.8	2.6	凝灰質硬質泥岩	〃
464	〃	〃	〃	BG29 II層	2.0	3.8	0.7	7.5	玻璃質流紋岩	雫石盆地西南域新第三系中新統
465	〃	〃	〃	BG31 II層	2.7	2.9	0.9	5.5	珪質泥岩	雫石西部新第三系中新統
466	〃	〃	〃	BG33 II層	2.8	2.5	1.0	6.8	チャート質粘板岩	北上山地又は田山古生界
467	〃	〃	〃	BG33 III層	3.2	1.2	0.7	2.5	玻璃質流紋岩	雫石盆地西南域新第三系中新統
468	〃	〃	〃	〃	3.6	5.2	0.6	11.7	〃	〃
469	〃	〃	〃	WP1－I層	4.2	2.2	2.1	17.7	〃	〃
470	〃	〃	〃	〃	2.9	3.2	0.4	4.2	凝灰質硬質泥岩	〃
471	〃	〃	〃	〃	2.3	2.5	0.6	3.7	凝灰質珪質泥岩	〃
472	〃	〃	〃	〃	2.8	2.3	0.3	1.9	〃	〃
473	〃	〃	〃	WP1－II層	2.0	2.5	0.3	1.9	〃	〃
474	〃	〃	〃	〃	3.9	2.4	0.6	3.0	〃	〃
475	〃	〃	〃	WP2－I層	3.4	4.8	0.7	14.3	〃	〃
476	〃	〃	〃	〃	3.3	2.1	0.9	7.9	珪質泥岩	〃
477	〃	〃	〃	〃	3.0	3.0	0.7	5.8	凝灰質硬質泥岩	〃
478	〃	〃	〃	〃	2.3	2.6	0.7	3.0	凝灰質珪質泥岩	〃
479	〃	〃	〃	C25～30	3.7	1.8	1.0	7.8	〃	〃
480	〃	〃	〃	不明	2.5	3.0	0.9	8.5	玻璃質流紋岩	雫石盆地西南域新第三系中新統
481	〃	〃	打製石斧	BG32 II層	8.7	3.0	1.8	68.0	凝灰質硬質泥岩	雫石西部新第三系中新統
482	47	〃	磨製石斧	北側山地	12.0	5.4	2.2	300	緑色細角礫質凝灰岩	奥羽山地新第三系中新統
483	〃	〃	〃	BF28	13.4	5.3	3.1	350	粘板岩ホルンフェルス	北上山地古生界
484	〃	〃	〃	BF30 II層	8.1	4.7	2.2	155	両輝石安山岩	八幡平周辺第四系
485	〃	35	凹石・磨石・敲石	BF30ピット	9.3	6.0	3.5	280	〃	〃
486	〃	〃	〃	BF28 II層	8.2	8.0	6.1	380	〃	〃
487	〃	〃	〃	BF29ピット	13.0	10.8	5.6	1240	〃	〃
488	47	〃	〃	BG32 II層	11.2	8.5	5.6	740	〃	〃
489	48	〃	〃	BF33 II層	9.9	6.8	4.6	450	〃	〃
490	〃	〃	〃	BG32	15.6	10.8	8.6	1740	〃	〃

石器集計表 (3)

遺物番号	図版番号	写真番号	器種	出土遺構名グリッド名	法量 (cm・g) 長さ	幅	厚さ	重量	石質	産地・生成年代
491	48	35	凹石・磨石・敲石	WP2－Ⅰ層	10.3	8.6	7.3	930	両輝石安山岩	八幡平周辺第四系
492	〃	〃	〃	WP2－Ⅰ層	3.7	3.8	3.3	58	粘板岩	北上山地又は田山古生界
493	〃	〃	〃		8.4	7.4	6.9	550	両輝石安山岩	八幡平周辺第四系
494	〃	〃	〃	BF33 Ⅱ層	6.7	6.4	5.9	230	〃	〃
495	〃	〃	〃	BH31 住居址	10.5	10.0	5.7	810	〃	〃
496	〃	〃	〃	BJ31 Ⅱ層	8.3	6.9	6.3	500	〃	〃
497	49	〃	〃		9.8	7.8	5.9	700	〃	〃
498	〃	36	〃	BH31 住居址	9.7	6.4	4.9	380	角閃黒雲母花崗岩	北上山地中生界
499	〃	〃	〃	WP1－Ⅱ層	15.6	7.5	2.8	600	両輝石安山岩	八幡平周辺第四系
500	〃	〃	〃	BF28 Ⅱ層	12.3	8.3	2.6	390	〃	〃
501	〃	〃	〃	BF28	12.8	9.3	4.0	760	〃	〃
502	〃	〃	〃	BF29 ピット	22.1	12.3	5.0	1800	〃	〃
503	50	〃	〃		14.5	6.6	6.1	880	〃	〃
504	〃	〃	半円状扁平打製石器	BF30 ピット	14.1	5.9	2.5	320	硬砂岩	北上山地古生界
505	〃	〃	石刀	BI31 ピット	23.0	5.2	2.2	260	粘板岩	北上山地又は田山古生界
506	〃	〃	冠状石器	BI31 ピット	7.4	10.3	4.8	300	両輝石安山岩	八幡平周辺第四系
507	〃	37	石皿	BG29 Ⅱ層	38.2	17.2	9.2	8500	〃	〃
508	51	〃	〃	BG32-3 ピット	34.8	29.3	13.8	18600	細砂質凝灰岩	奥羽山地新第三系中新統
509	〃	〃	〃	BG29 Ⅱ層	33.4	29.4	10.7	18000	両輝石安山岩	八幡平周辺第四系
510	〃	〃	〃	BH28 Ⅱ層	29.0	26.6	11.0	14900	〃	〃
511	52	〃	〃	BH33 Ⅱ層	47.1	35.0	12.1	31100	〃	〃
512	〃	〃	台石	BG32-3 ピット	35.3	35.5	16.8	32700	〃	八幡平周辺第四系
513	53	38	〃	〃	22.6	18.6	7.6	5200	細砂質凝灰岩	奥羽山地新第三系中新統
514	〃	〃	〃	〃	29.2	22.5	10.1	11000	両輝石安山岩	八幡平周辺第四系
515	〃	〃	〃	BG32 Ⅱ層	22.3	25.1	9.7	8100	〃	〃
516	〃	〃	〃	BF28 Ⅱ層	21.0	20.0	5.7	3560	〃	〃
517	〃	〃	〃	BH33 Ⅱ層	22.3	15.9	7.4	4500	〃	〃
518	〃	〃	〃	BG27 Ⅱ層	49.1	33.8	10.5	30400	〃	〃
519	54	39	角柱状原石	BF30 住居址	50.5	5.8	5.6	2400	角閃石英安山岩	安比川流域新第三系中新統
520	〃	〃	〃	〃	44.6	4.8	4.3	1020	〃	〃
521	〃	〃	〃	〃	29.7	4.4	3.7	730	〃	〃
522	〃	〃	〃	BH29 住居址	19.0	6.0	3.1	750	〃	〃
523	〃	〃	〃	BG32-1 ピット	26.7	4.6	4.9	730	〃	〃
524	〃	〃	〃	BG32-2 ピット	13.0	6.4	3.1	650	斜長石流紋岩	七時火山基底新第三系中新統
525	〃	〃	〃	BF30 Ⅱ層	13.0	7.0	6.1	520	〃	〃
526	〃	〃	〃	BG33 Ⅱ層	14.5	6.8	5.4	950	角閃石石英安山岩	安比川流域新第三系中新統
527	〃	〃	〃	不明	21.1	3.9	3.1	430	〃	〃
528	〃	〃	〃	不明	21.0	4.4	3.3	450	〃	〃
529	〃	〃	〃	BF31 Ⅰ層	26.0	4.3	4.0	410	〃	〃
530	〃	〃	〃	WP2－Ⅰ層	20.0	4.2	3.3	420	〃	〃
531	〃	〃	〃	WP2－Ⅰ層	20.5	4.4	3.6	540	〃	〃
532	〃	〃	〃	WP1－Ⅰ層	41.0	5.3	3.6	1050	〃	〃
533	〃	〃	〃	BF28 Ⅱ層	38.9	3.9	3.9	860	〃	〃
534	〃	〃	〃	BF32 Ⅱ層	38.1	4.3	4.1	920	〃	〃

V まとめ

1．住居址について

当遺跡からは４棟の住居址が検出されており、３棟はその形態や規模が類似しているが、他の１棟は炉もなく、出土遺物もなく性格が異なる。ここでは前者の３棟と安代町内で検出された縄文時代中期の住居址について比較、検討してみる。

安代町内の遺跡で発掘調査された遺跡は、ここ数年の東北縦貫自動車道関連の発掘調査で急増している。調査された遺跡の中で、報告書が刊行された遺跡の縄文時代に属する住居址は、当遺跡の住居址も含めて152棟ある。その中で中期に属する住居址は表のように39棟である。なお、この表には当遺跡で検出されたような性格が不明な遺構は含めていない。また報告書に記載されている住居址の規模や形状は、表作成に際して多少の変更を加えたものもある。重複した住居址については、時期的に近接しているようであり、同一住居の建て変えのようにも思われるので、まとめて１棟として数えた。

表に示されるように中期の住居址は前葉２棟（5.13％）、中葉５棟（12.82％）、後半３棟（7.69％）、末葉29棟（74.36％）である。これらの住居址のうち、ある程度規模の予測できるものは前葉２棟、中葉５棟、末葉18棟である。前葉の２棟は、形状が楕円形で、規模は3.1×2.7ｍと、6.9ｍ×4.0ｍである。中葉の住居址は、形状が隅丸方形と円形・楕円形があり、規模は長軸が３ｍ前後のものと6.5ｍのものがある。末葉の住居址は、形状が隅丸方形と円形、楕円形があり規模は長軸3.5ｍ前後のものが多く、3.3ｍ×3.2ｍの住居址が５棟ある。これらの住居址の中で楕円形としたものは、その長軸と短軸の長さの差が少ないものが多い。

各時期の資料数にバラツキが多いが、概要として前葉・中葉・末葉とも住居址の規模・形状が、長軸３～3.5ｍの楕円形となり、変化が少ないようである。炉の形態も末葉に複式炉が出現する以外は土器埋設炉や石囲炉・地床炉とその形状や規模に時期的な変化は少ない。住居址の規模が小さいせいか、柱穴が検出される例も少ない。

また長軸の長さが６ｍ以上と比較的大型の住居址も各時期に１棟以上はあり、それが小さい住居址とセットとなって集落を構成したり、あるいは特別な役割を果す建物の可能性もある。

このように湯の沢Ⅲ遺跡で検出された住居址は、他の一部の遺跡で検出されているようなやや大型の住居址を伴わないが、その規模や形態は他の遺跡から検出された前葉や末葉の住居址と較べて特異なものではない。また中期中葉の住居址は安代町内では検出例が少なく、そういう意味では当遺跡の住居址は貴重なものである。

安代町縄文中期住居址一覧表

縄文住居址 152　　中期39(26%)、　後期40(26%)、　晩期44(29%)、　不明29(19%)

No.	遺跡	住居址	平面形	規模	重複	炉	時期　出土土器　他
1	荒屋 I	DII－1	隅丸方形	3.1×3.0	—	土器埋設炉(北寄り)	中期中葉　上層C
2	荒屋 II	DII－1	楕円形	3.1×2.7	2棟からなる	〃〃（中央）	中期前葉
3	〃	FI－1	〃	(69×40)	5棟からなる	〃（中央） 土器埋設石囲炉	〃
4	〃	EII－2	〃	4.7×4.1	2棟からなる	複式炉(南西寄り)	中期末葉
5	越戸 II	DIII－1	〃	3.5×2.9	—	〃（西に寄る）	〃
6	〃	DIII－2	円形	3.9×3.8	2棟からなる	石囲炉(長方形)、地床炉	〃
7	〃	DIII－3	—	—	—	石囲炉(コの字)、地床炉	〃
8	〃	DIV－1	円形	3.3×3.2	—	石囲炉(円形？)	〃
9	〃	DIV－3	隅丸方形	3.6×3.5	3棟からなる	複式炉＋地床炉	〃
10	〃	EVI－1	楕円形	3.6×3.2	—	石囲炉(コの字)＋地床炉	〃
11	〃	EIV－2	〃	3.6×3.2	—	複式炉	〃
12	有矢野	BII－2	円形	2.7×2.6	—	地床炉	〃
13	〃	BII－3	〃	3.3×3.2	—	複式炉	〃
14	〃	BII－5	—	(36×32)	—	石囲炉(長方形)＋地床炉	〃
15	〃	CII－2	楕円形	4.5×4.0	—	石囲炉(円形)	〃
16	〃	DIV－1	〃	4.2×4.0	4棟からなる	石囲炉(五角形)	〃
17	〃	EIV－1	—	—	2棟からなる	地床炉(掘り込む)	〃
18	〃	EIV－2	—	—	3棟からなる	〃（〃）	〃
19	上の山X	BI－1				地床炉	〃
20	〃	BI－2		(90×　)		〃（2基）	〃（大型住居？）
21	〃	BII－1				石囲炉	〃
22	上の山館	CId8	円形	3.2×3.4		複式炉	〃
23	〃	CIId0				〃	〃
24	〃	CIIc9				〃	〃
25	赤坂田	IIIIg2				地床炉3基	〃
26	〃	JIIId3				地床炉2基	〃
27	上の山VII	HIII－3	隅丸方形	6.5×		石囲炉	中期中葉　大木8a
28	〃	OVI－2	楕円形	3.1×2.7		複式炉	中期末葉　大木10？
29	〃	II－1	〃	4.2×		石囲炉	〃　〃
30	〃	SIII－1					〃　大木10　隅丸長方形？
31	〃	SIV－1	隅丸長方形			地床炉2基	中期後半
32	〃	TI－1	隅丸方形？			複式炉？	〃
33	〃	TIII－1				複式炉	〃
34	〃	TIII－2	円形	3.0×2.9		土器埋設石囲炉	中期末葉　大木10
35	〃	TIII－2	〃	3.1×		地床炉	〃　〃
36	湯の沢III	BF30	楕円形	2.7×2.2		土器埋設炉	中期中葉
37	〃	BH29	〃	2.6×2.2		〃	〃
38	〃	BH31	〃	2.7×2.5		〃	〃　埋設土器
39	曲田 I	GIV-016	〃	2.6×2.3		石囲炉	中期末葉

2．陥し穴状遺構について

安代町では、荒屋Ⅱ遺跡の33基をはじめ、９遺跡で合計57基の陥し穴状遺構が検出されている。形態的特徴や遺跡間における差異などを考えるため分類を試みた。分類にあたり、陥し穴状遺構としての形態的まとまりに欠ける３基を除外している。

〔**分類基準**〕分類基準は、検出面や底部の規模、底部の副穴（柱穴状ピット）の有無、埋土中の十和田ａ降下火山灰層の有無など３項目である。

Ａ型…長軸に対して短軸の比が小さく、「溝状」となるもの。底部の短軸径が20cm以下を基準に分類した。Ａ型は遺跡間で差異があることから、さらに３分類した。

１型…検出面における長軸径が３ｍ以上で、短軸径が小さいもの　(50cm前後)。

２型…検出面における長軸径が３ｍ未満で、短軸径が小さいもの　(50cm前後)。

３型…検出面における長軸径が３ｍ以上で、短軸径が大きいもの　(80cm以上)。

Ｂ型・Ｃ型…底部の短軸径がＡ型より大きいもの。底部長軸径が２ｍ以上のものをＢ型、２ｍ未満のものをＣ型とした。Ｂ型・Ｃ型をさらに３分類した。

１型…底部に副穴（柱穴状ピット）があるもの。

２型…副穴がないもので、埋土中に十和田ａ降下火山灰層があるもの。

３型…副穴がないもので、埋土中に十和田ａ降下火山灰層がないもの。

〔**分類結果**〕以上の組みあわせによってできる９つのタイプについてのべてみる。

Ａ型…A1型６基、A2型２基、A3型５基、計13基検出されている。

A1型は扇畑Ⅰ・Ⅱ遺跡に代表される。扇畑Ⅰでは長軸径が大きい。短軸断面は幅の狭いＶ字状である。扇状地の扇央部を占地し、等高線に直交するように構築されている。

A2型は上の山館の２基である。A1型より小型である。

A3型は上の山Ｘ・有矢野遺跡に代表される。底部はA1型に近いが開口部が広く、断面形はＹ字状である。Ａ型では最も深い。上の山Ｘ遺跡では、段丘の縁辺部を占地し、等高線と平行するように構築されている。有矢野遺跡では段丘縁辺部と山麓地緩斜面を結ぶように分布している。

Ｂ型…B1型12基、B2型５基、B3型１基、計18基検出されている。

B1型は荒屋Ⅱ遺跡に代表される。底部には平均6個の副穴がある。断面形はＵ字状に近く、開口部で広がる。荒屋Ⅱ遺跡では、残丘状の段丘縁辺部を占地し、等高線と７基は直交するように４基は平行するように構築されている。いずれも２ｍ前後の間隔で、集中して分布している。

B2型は湯の沢Ⅲ遺跡に代表される。平面形は楕円形に近く、埋土には弓状に落ち込む十和田ａ降下火山灰層がある。湯の沢Ⅲ遺跡では、鋸歯状に発達する丘陵末端付近を占地し、谷頭と

尾根を交互に結ぶように分布している。

B3型は荒屋II遺跡の1基だけである。遺構上位面を大部掘っており形状は不十分である。一見単独に分布しているように思われるが、B1型の間に位置し、B1型を補完するものとして構築されたものと思う。

C型…C1型7基、C2型9基、C3型が6基、計22基検出されている。

C1型は荒屋II遺跡の6基に代表される。平面形は楕円形で、底部に平均3個の副穴をもち、埋土に十和田a降下火山灰を含むもの（C1a型）と含まないもの（C1b型）とに細分される。残丘状の段丘縁辺部に構築されており、C1a型の2基はC2型に連続するように分布し、C1b型はC3型近くに分布する。上の山VII遺跡のKII－101は陥し穴としては浅い。

C2型は荒屋II遺跡の8基に代表される。平面形は楕円形で、B2型より短軸径が大きく、底部長軸径は小さい。9タイプの中で最も深く（平均148cm)、十和田a降下火山灰層はB2型より落ち込んでいるものが多い。残丘状の緩やかな尾根筋を占地し、DIII－101から二列に分かれるように分布している。

C3型は荒屋II遺跡の6基である。平面形は楕円形でC1型に近く、深さは最も浅い（平均86cm)。

〔**まとめ**〕

A型は遺跡間で差異がみられる。扇畑I・II遺跡ではA1型、上の山X・有矢野遺跡ではA3型が多い。出土遺物がなく時期の比較はできないが、扇畑II遺跡のHIIj6は縄文時代後期前葉と思われる住居址下位から検出されていることから、A1型はそれ以前のものと推定している。

B1型は荒屋IIの代表的な陥し穴である。EII－108は縄文時代中期前葉の住居址を切って構築されていることから、B1型はそれ以降のものと推定している。下限は明示されていない。

B2型とC2型は、埋土・形状・配置など類似点が多く、同時期のものであろう。規模の若干の差は湯の沢IIIと荒屋II遺跡間の相違と考えられる。埋土から縄文時代中期の土器片が出土していることから、後期以降～十和田a火山灰降下（915年AD）以前であろう。

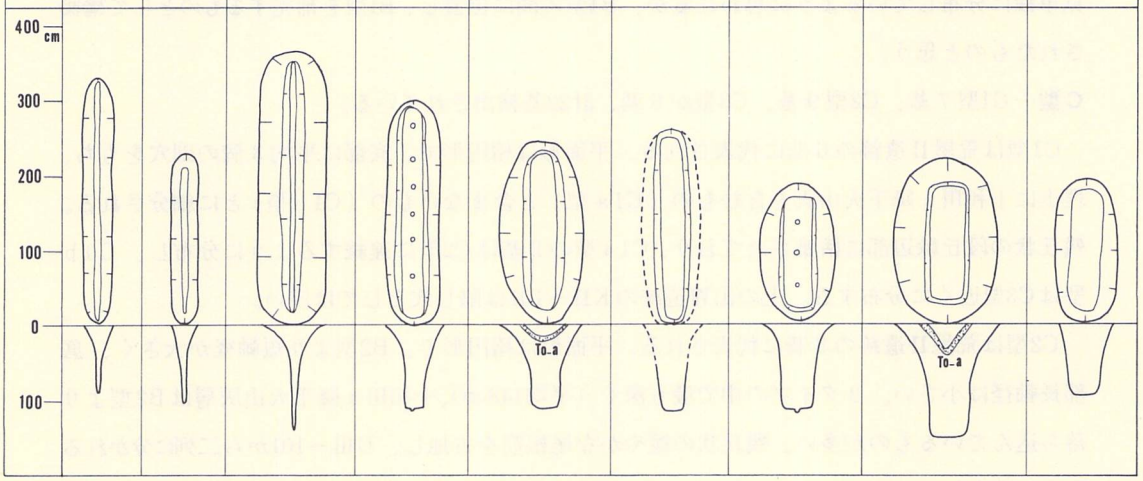
C1a型は埋土に十和田a降下火山灰層があることから、時期的にはB2型やC2型に近いものと思われる。C1b型とC3型は近接して分布しているが、時期は不明である。以上述べたように、安代町における陥し穴状遺構の分類型と構築年代の関係を論ずるには資料が不足している。

一方遺構分布についてみると、荒屋II遺跡のB1型やC3型は集中して分布し、湯の沢III遺跡のB2型と荒屋II遺跡のC2型は一直線上に点在している。これに対しA型は、単独又は2基1対で点在している。地形的にはいずれも段丘や丘陵の縁辺部に多い。

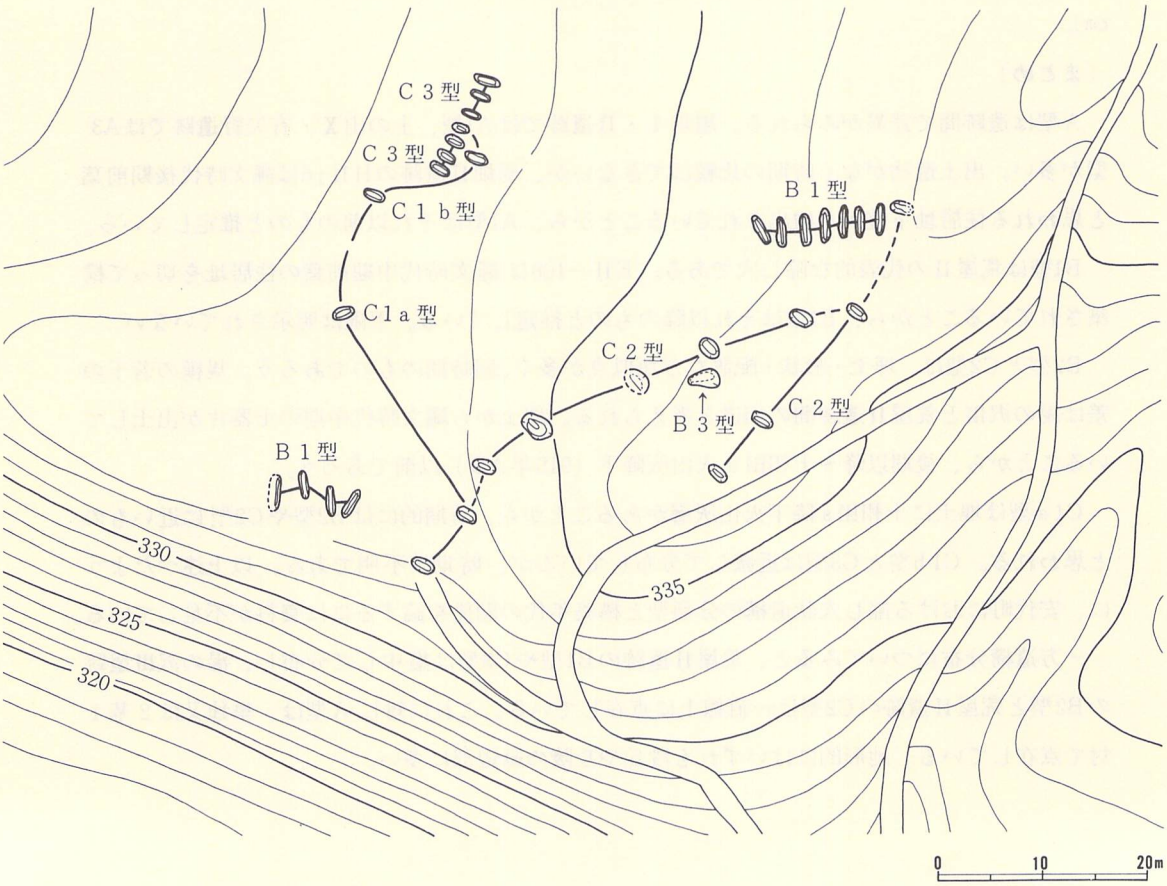
図版25　陥し穴状遺構の形態と分布

a．陥し穴状遺構分類型とモデル

型	A 1 型	A 2 型	A 3 型	B 1 型	B 2 型	B 3 型	C 1 型	C 2 型	C 3 型
数	6	2	5	12	5	1	7	9	6



b．荒屋II遺跡陥し穴状遺構配置図



安代町の陥し穴状遺構分類表

分類型	遺跡名	遺構名	検出面径	底部径	深さ	※	埋土遺物	距離・間隔
A 1	扇　畑　I	C II－151	360×55cm	345×14cm	95cm		な　し	
〃	〃	C D－151	400×50	355×13	105		な　し	
〃	扇　畑　II	H II j 6	300×35	290×20	80		な　し	
〃	〃	I II a 6	300×30	310×20	65＋		な　し	
〃	〃	I II d 1	(310×50)	(320)×20	125		な　し	
〃	上の山 VII	O III－101	300×25	300×15	75		な　し	
A 2	上の山館	C II d 6	240×40	220×15	118		時期不明	
〃	〃	C II d 9	220×35	170×20	90		な　し	
A 3	上の山 X	A II－101	(400×80)	(340)×10	120		な　し	
〃	〃	B I－101	(340×100)	324×13	172		な　し	
〃	〃	B I－102	(380×110)	328×11	184		な　し	
〃	有　矢　野	D III－101	(370×80)	(335)×18	114		な　し	
〃	〃	E IV－101	340×(90)	341×11	114		な　し	
B 1	荒　屋　II	E I－102	326×(100)	300×(40)	109	4	中期前葉	↑
〃	〃	E I－103	270×60	295×37	104	2	な　し	7.5m
〃	〃	E I－104	295×70	326×33	112	7	中期前葉	(2.1m)
〃	〃	E I－105	280×67	254×21	125	5	な　し	↓
〃	〃	E II－17	287×64	275×30	103	6	な　し	↑
〃	〃	E II－108	(300)×60	260×25	110	5	な　し	
〃	〃	E II－109	310×85	260×36	105	14	な　し	11.1m
〃	〃	E II－110	304×73	267×32	110	6	な　し	(1.85m)
〃	〃	E II－111	305×75	292×25	100	13	な　し	
〃	〃	E III－101	283×68	260×32	105	9	な　し	
〃	〃	E III－102	303×74	280×35	104	7	な　し	↓
〃	有　矢　野	D II－101	(320×80)	330×36	100	6	な　し	
B 2	湯の沢 III	B H－27	240×120	200×40	95	c	中期前～中葉	↑
〃	〃	B J－30	2250×130	200×35	105	b～c	中期前葉	50m
〃	〃	C A－31	220×140	205×40	135	c	な　し	(16.7m)
〃	〃	C C－34	230×100	200×40	100	c	な　し	↓
〃	越　戸　II	E IV－101	(280×60)	228×26	125	a	な　し	

分類型	遺跡名	遺構名	検出面径	底部径	深さ	※	埋土遺物	距離・間隔
B 3	荒　屋　II	E II－103	258×50cm	237×30cm	115cm		中期後半	
C 1	荒　屋　II	D I－101	184×75	170×50	109	3（c）	な　し	
〃	〃	D I－105	168×78	102×30	97	3	な　し	
〃	〃	D I－109	197×97	176×58	108	3	な　し	
〃	〃	E I－101	200×115	160×45	130	3（b～c）	中期前葉	
〃	〃	E I－106	194×124	156×35	142	2 b	な　し	
〃	〃	F I－101	207×123	150×38	180	2 d	中期前葉	
〃	上の山 VII	K II－101	180×70	130×40	35	5	な　し	
C 2	荒　屋　II	E I－107	224×122	123×32	149	d	な　し	↑
〃	〃	E I－108	(240)×160	150×42	158	c	な　し	33.2m
〃	〃	E II－101	(260×200)	166×(80)	185	b	な　し	(8.3m)
〃	〃	E II－102	223×155	138×40	163	c	な　し	
〃	〃	E II－104	218×155	190×70	168	e	中期後半	↓
〃	〃	E II－105	224×113	170×35	170	c	な　し	↑ D III-101含む
〃	〃	E II－106	196×105	134×30	132	b	な　し	30.7m
〃	〃	E III－103	210×128	140×43	150	b	な　し	↓ (10.2m)
〃	越　戸　II	E III－101	211×100	150×50	57	b	な　し	
C 3	荒　屋　II	D I－102	200×94	155×40	95		な　し	↑
〃	〃	D I－103	176×82	140×37	70		時期不明	10m
〃	〃	D I－104	188×(100)	147×35	97		な　し	(2 m)
〃	〃	D I－106	175×65	155×45	92		時期不明	
〃	〃	D I－107	190×67	190×50	75		な　し	
〃	〃	D I－108	240×90	172×43	88	(a～c)	な　し	↓
B2～C2？	〃	D III－101	—	—	—	b	な　し	

註１　規模の（　）は、図面を検討し修正した値、又は復元推定値である。

註２　※欄の数字は底部の副穴（柱穴状ピット）の数、アルファベットは十和田ａ降下火山灰層の位置である。

註３　距離・間隔は、陥し穴が直線的に並列している場合、両端の距離と平均間隔である。

3．出土遺物について

湯の沢Ⅲ遺跡から出土した遺物の総量は、土器及土器片が約2,500点、石器及剥片が約200点である。遺構に伴わないものが多い。しかし少量ずつではあるが住居址以外でもピットや陥し穴から伴出している。

出土遺物の中で時期決定の目安となる土器は、縄文時代前期末葉から後期末葉のものまである。前期と中期の土器では東北地方北部から北海道南西部に分布する円筒系土器群と宮城県を中心に分布する大木系土器群が共伴している。これらの土器群と遺構との関係は次のようになる。

Ⅰ群とした土器群は縄文時代前期末から中期初頭にかけての土器群である。Ⅰa群・Ⅰb群は円筒下層d_2式から上層ａ式に相当し、Ⅰc群は円筒上層a式に相当する。Ⅰd群は大木６式に相当すると思われる。36のように特異な器形のものもあり、竹管文が多用されている。このId群とⅠa・Ⅰb群の前後関係は同一遺構に共伴しないことから不明である。Ⅰa・Ⅰb群は焼土遺構の周囲やピット・陥し穴の埋土に共伴して出土している。

中期の土器群はⅠ群に含まれる初頭のものからⅤ群に含まれる末葉のものまである。Ⅱ群は円筒上層ｂ式、Ⅲa群は円筒上層ｃ式、Ⅲb群は大木7ｂ式、Ⅳａ群は円筒上層d式、Ⅳb群は大木8ａ式、Ⅴa群は大木９式、Ⅴb群は大木10式に相当する。この中でⅢa群・Ⅲb群の土器が遺構の内外から最も多く出土している。特にⅢa群の円筒上層ｃ式土器は住居址の埋土下位や焼土遺構の周囲・ピットの埋土から多く出土している。Ⅲb群の大木8ａ式土器は住居址の床面直上から出土している。埋設炉等に使用されていた土器も粗成や破損品であるが、キャリパー形の器形を呈するようで、Ⅲb群と同時期と考えたい。

円筒系土器群と大木系土器群を較べると、胎土は類似しているが焼成が違って感じられる。円筒系土器は全体的に焼きが悪く、脆弱であるのに対し、大木系土器は焼きが良く堅くしまっている。

また当遺跡出土の円筒系土器群を津軽地方出土の同時代の土器群と比較してみると、当遺跡出土の土器群は胴部が脹らむようである。器種は深鉢が大半で、浅鉢や台付のものは見られない。突起や粘土紐の貼り付け等の加飾技法は大差ないようである。

後期の土器群はⅥ群として一括したが、後期前葉の十腰内Ⅱ式に相当する土器（27）や後葉の十腰内Ⅴ式に相当する土器（231～233）等がある。遺構から出土したものは２点あり、ピットの埋土から得られている（26・27）。26は台付浅鉢で、口縁部文様帯が欠損している。遺構外出土の48は玉抱連弧文に近い文様施文を持ち、後期の末葉に相当すると思われる。

石器も土器と同じ様に調査地南西端の尾根頂部から南斜面下位にかかる範囲から多く出土している。遺構に伴う石器は少なく、石鏃2点、石匙２点、箆状石器２点、削掻器３点、凹石・

磨石・敲石５点、石皿・台石４点などである。

遺構外の出土品も含めて出土点数の多い石器は、石皿・台石類と凹石・磨石・敲石の類であり、尾根頂部のピットの中から石皿・台石がまとまって出土した例もある。

また、遺構からもまとまって出土しているが、安山岩類・流紋岩類の角柱状原石が多く得られている。この角柱状原石は破損しているものも多いが、接合すると50㎝前後の長さになる。重量にはバラツキがあり、角に丸味をつけるような加工品は検出されていないが、縄文時代人が意識的に選択して運び込んだものと思われる。雫石町塩ヶ森遺跡や松尾村長者屋敷遺跡等の縄文時代中期の遺跡からも多くの未加工の角柱状原石が検出されており、ある程度限られた時期、地域で何らかの使用がなされたことが予想される。

これらのことから当遺跡の出土遺物は、住居が営まれたと思われる大木8ａ式期･円筒上層ｃ式期の土器類が主体を占め、石器は石皿・磨石類と未加工の角柱状原石が多いことが特徴である。

４．さいごに

湯の沢Ⅲ遺跡は、縄文時代中期の集落跡である。削平、盛土された地形面のため検出遺構は少なかったが、中期の円筒土器と大木系土器が出土している。円筒系は上層ａ式・ｃ式に相当するものが多く、大木系では8ａ式が中心である。近くの湯の沢Ⅰ遺跡付近で表採された円筒下層ｂ式に相当する深鉢の破片などを参考にすれば、湯の沢地区では前期から栄えてきた円筒土器文化が、前期末ごろから大木系土器文化の影響を受けはじめ、中期中葉の円筒上層ｃ式期の繁栄を最後に大木系土器文化圏の支配下に入ったものと思われる。

安代町の南に隣接する松尾村長者屋敷遺跡の場合、前期の140棟余の住居址は円筒下層ｂ式～ｄ式期が中心であり、中期は大木系の住居址である。中期の円筒土器は上層ａ式～ｃ式の空白期間の後、上層ｄ式・ｅ式が若干出土し、大木系土器は8ａ式から急増している。一方安比川が馬渕川と合流する付近にある二戸市上里遺跡では、円筒上層ａ式を中心に下層ｄ式～上層ｃ式までの土器が多く出土しており、上層ｄ式・ｅ式は少ない。大木系土器は７式～10式まで少量出土しているが、遺跡内での円筒土器文化から大木系土器文化への明確な交代期はみられない。折爪岳東山麓の九戸村田代遺跡では、中期の住居址が17棟検出されている。内訳は、上層ｅ式期７棟、大木8ｂ式期８棟、９式期２棟である。円筒土器は上層ｅ式・ｄ式が、大木系土器は8ｂ式、９式が多く、縄文中期8ｂ式のころに円筒系から大木系土器文化に交替している。今後、安比川下流域での調査例の増加に伴い、岩手県北部における二つの文化圏の接触と変化の過程が解明されるものと思う。

参考・引用文献

小笠原好彦　1968　東北地方南部における前期末から中期初頭の縄文式土器（仙台湾周辺の考古学的研究）　宝文堂

江坂輝彌　1970　石神遺跡　ニュー・サイエンス社

村越　潔　1976　円筒土器文化　雄山閣出版株式会社

村越　潔　1976　円筒土器文化に伴う特殊な石器（東北考古学の諸問題）　東北考古学会

三宅徹也　1977　円筒土器の概念とその崩壊（青森県立郷土館調査研究年報№3）　青森県立郷土館

永峯光一　1981　縄文土器大成２－中期　講談社

鈴木道之助　1981　図録石器の基礎知識Ⅲ　柏書房

鈴木　徹　1983　上北町古屋敷貝塚Ⅰ－遺物編－（上北町文化財調査報告書第１集）　上北町教育委員会

稲野裕介　1983　滝の沢遺跡（北上市文化財調査報告第33集）　北上市教育委員会

西川博孝　1983　竹管文（縄文文化の研究第５巻縄文土器Ⅲ）　雄山閣出版株式会社

青森県教育委員会　1976　青森県埋蔵文化財調査報告書第７集（泉山遺跡）

岩手県埋文センター文化財調査報告書第17集（扇畑Ⅰ遺跡）　1981

〃　21集（荒屋Ⅰ・荒屋Ⅱ・越戸Ⅱ遺跡）　1981

〃　38集（有矢野・上の山Ⅹ遺跡）　1982

〃　39集（扇畑Ⅱ遺跡）　1982

〃　40集（上の山館遺跡）　1982

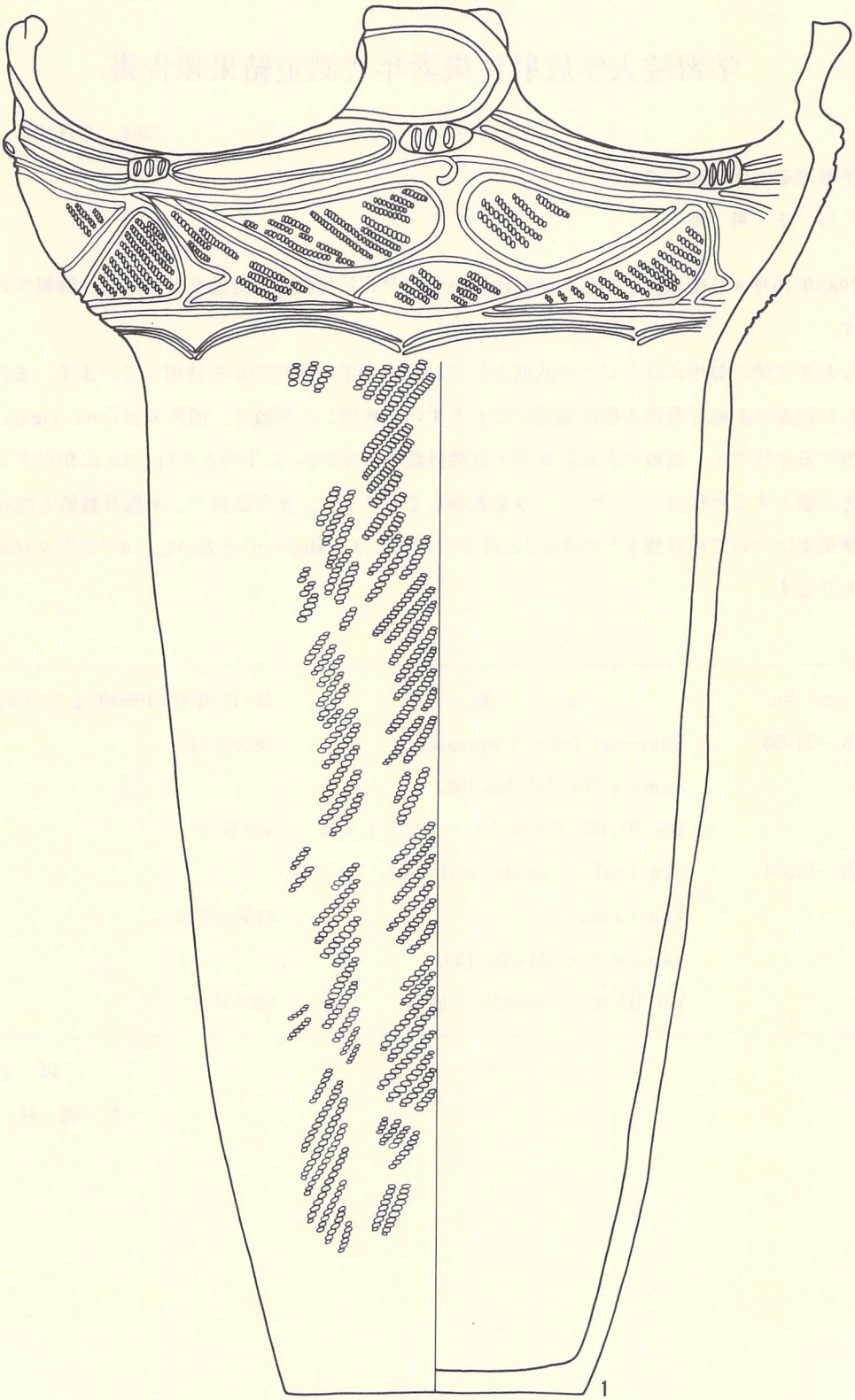
〃　41集（田代遺跡）　1982

〃　55集（上里遺跡）　1983

〃　58集（赤坂田Ⅰ・Ⅱ遺跡）　1983

〃　60集（上の山Ⅶ遺跡）　1983

図版26　土器実測図（１）

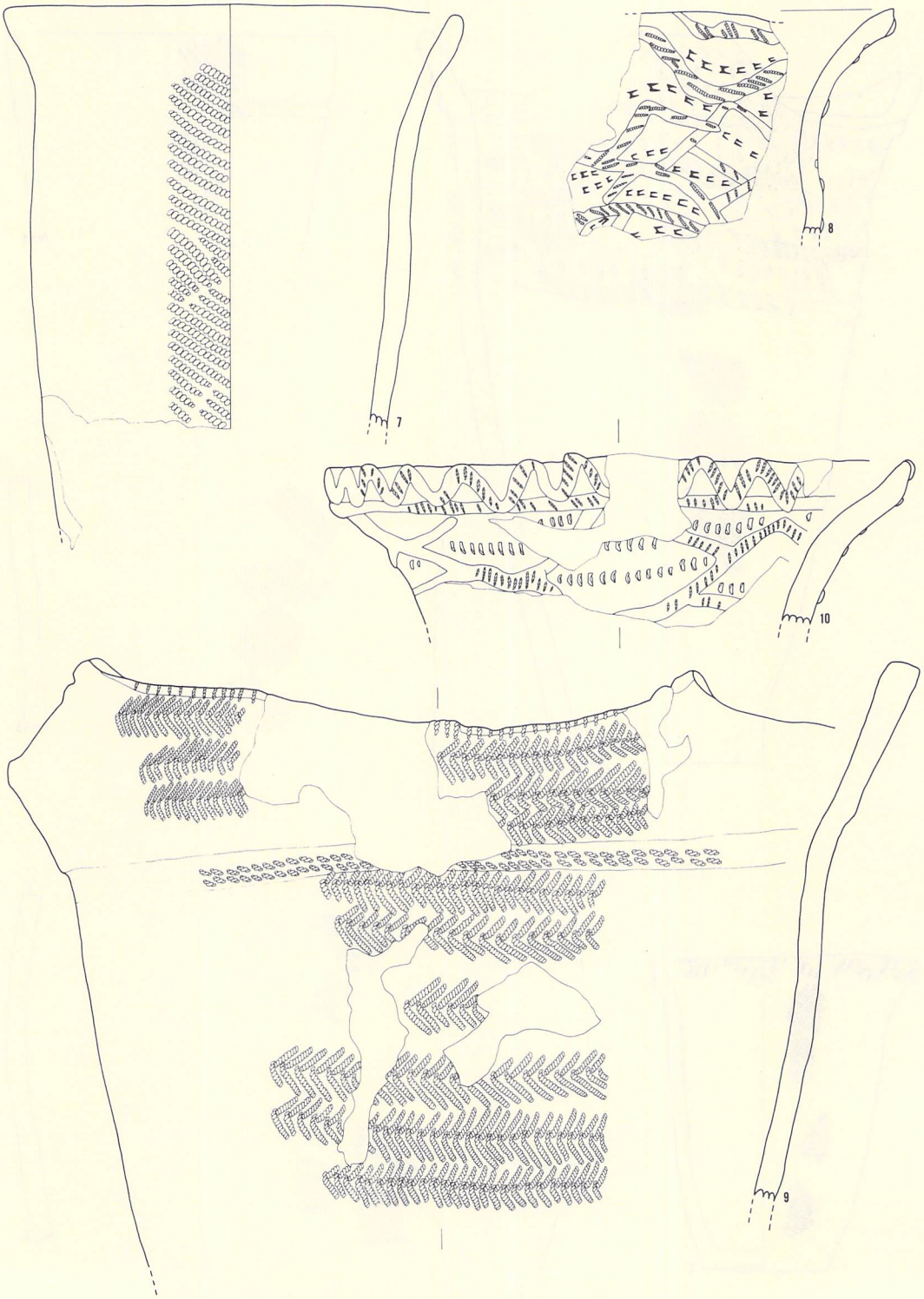


ＢＦ30住居址

図版27　土器実測図（2）

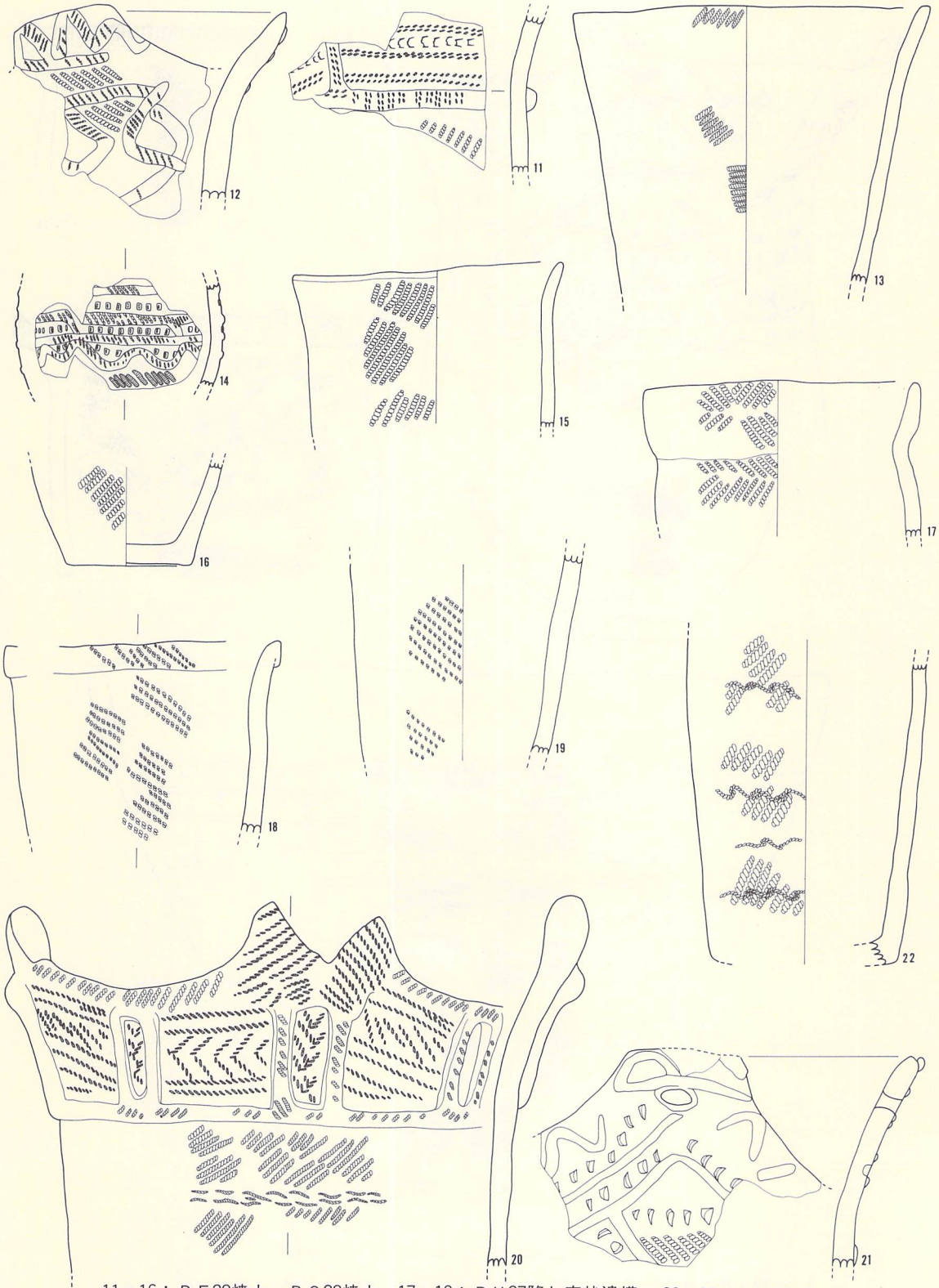
2～5：ＢＦ30住居址、6：ＢＦ29住居址

図版28　土器実測図（3）



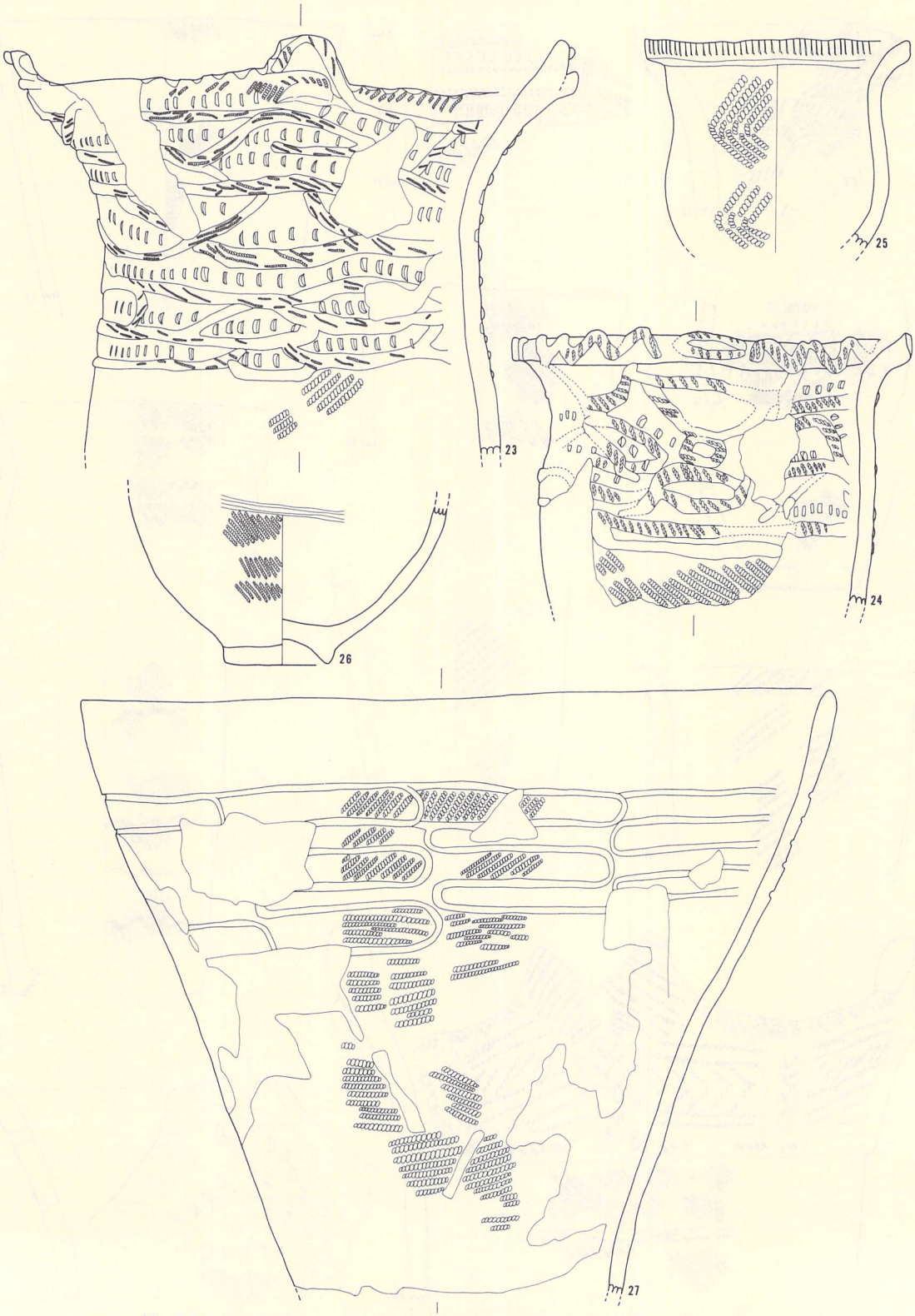
7･8：ＢＨ31住居址、9･10：ＢＦ28焼土・ＢＧ28焼土

図版29　土器実測図（4）



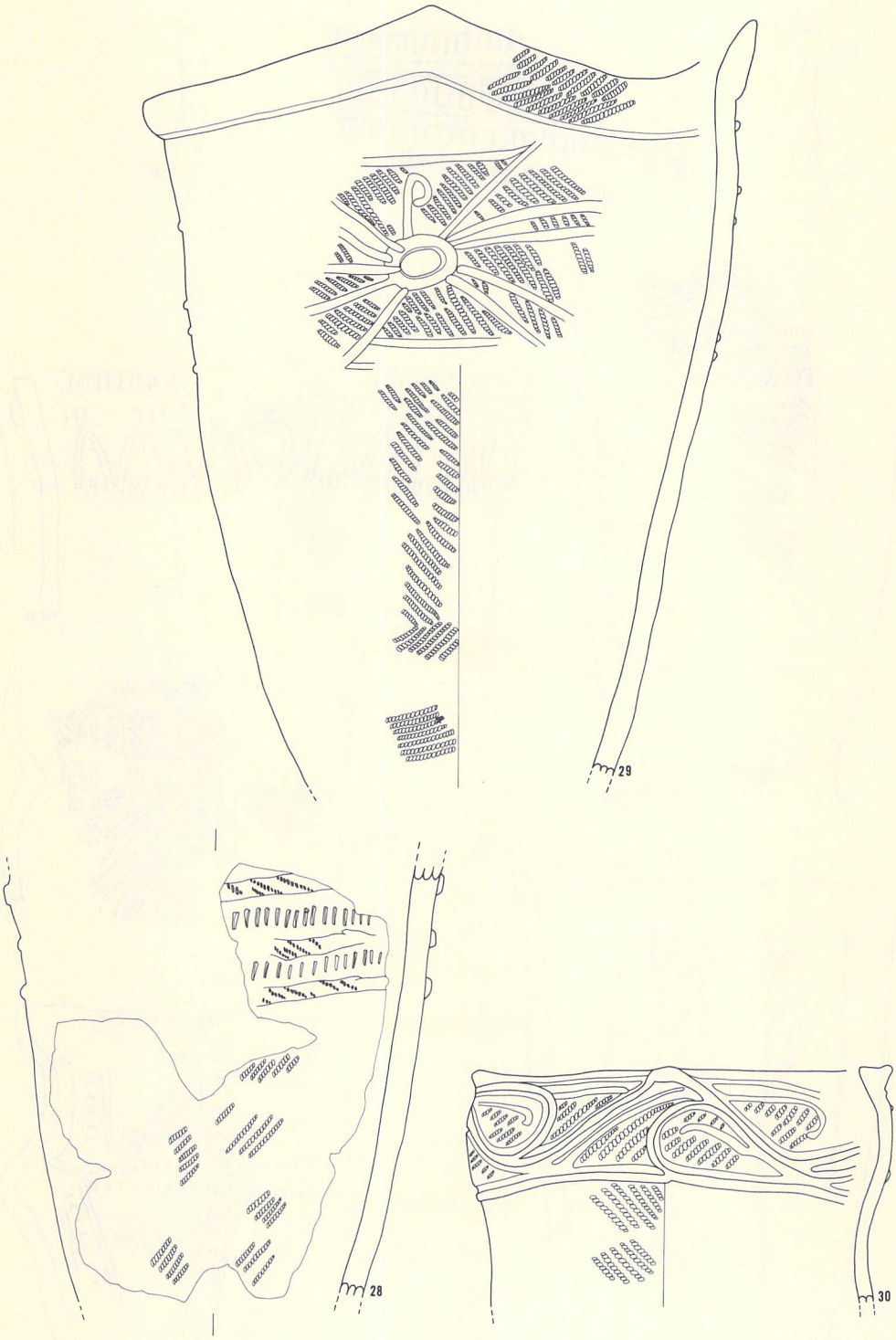
11～16：ＢＦ28焼土・ＢＧ28焼土、17～19：ＢＨ27陥し穴状遺構　20～22：ＢＦ29ピット

図版30　土器実測図（5）



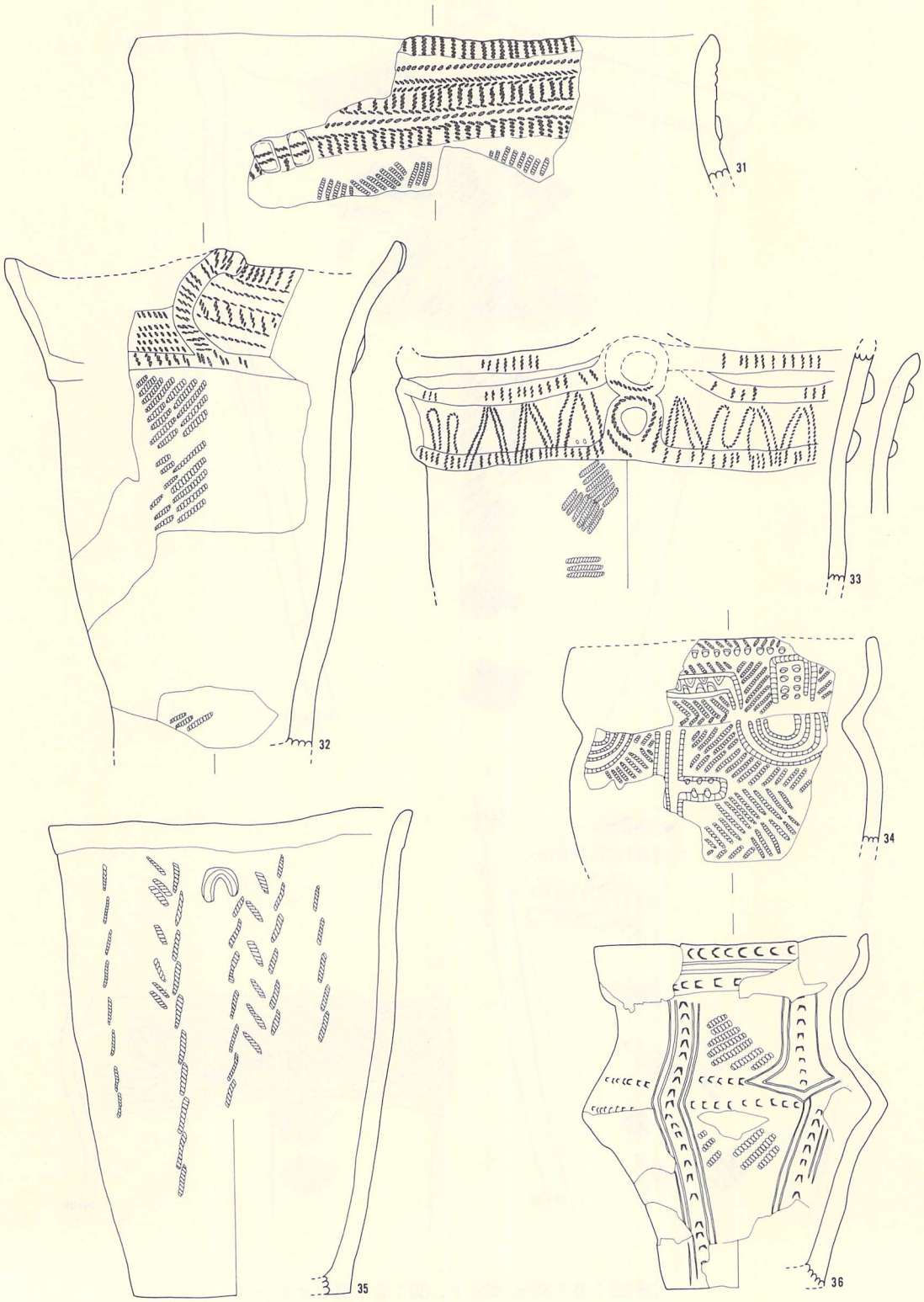
23～25：ＢＦ30ピット、26：ＢＦ32－5ピット、27：ＢＦ33－1･2ピット

図版31　土器実測図（6）



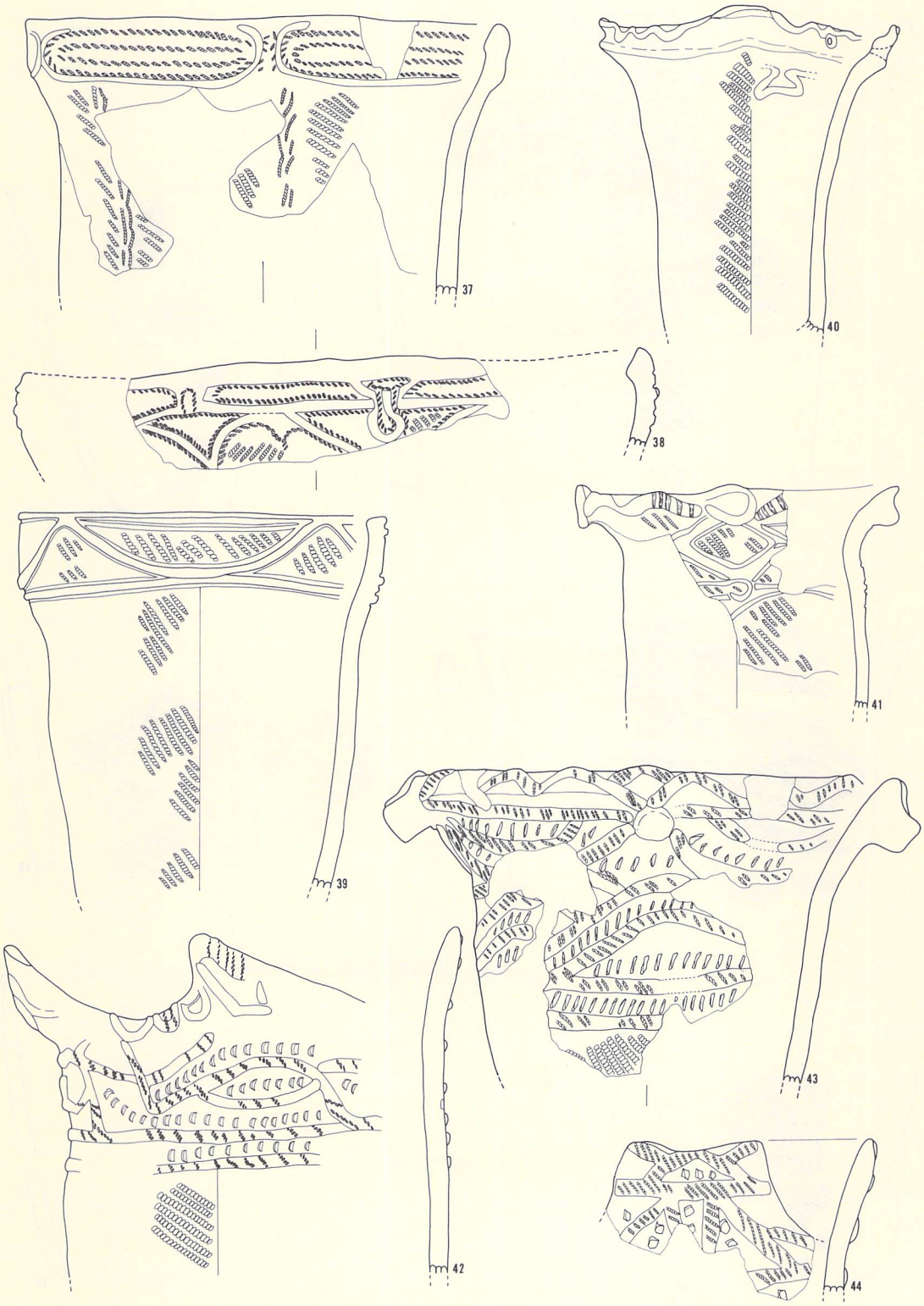
28･29：ＢＦ33－3ピット、30：ＤＩ51ピット

図版32　土器実測図（7）



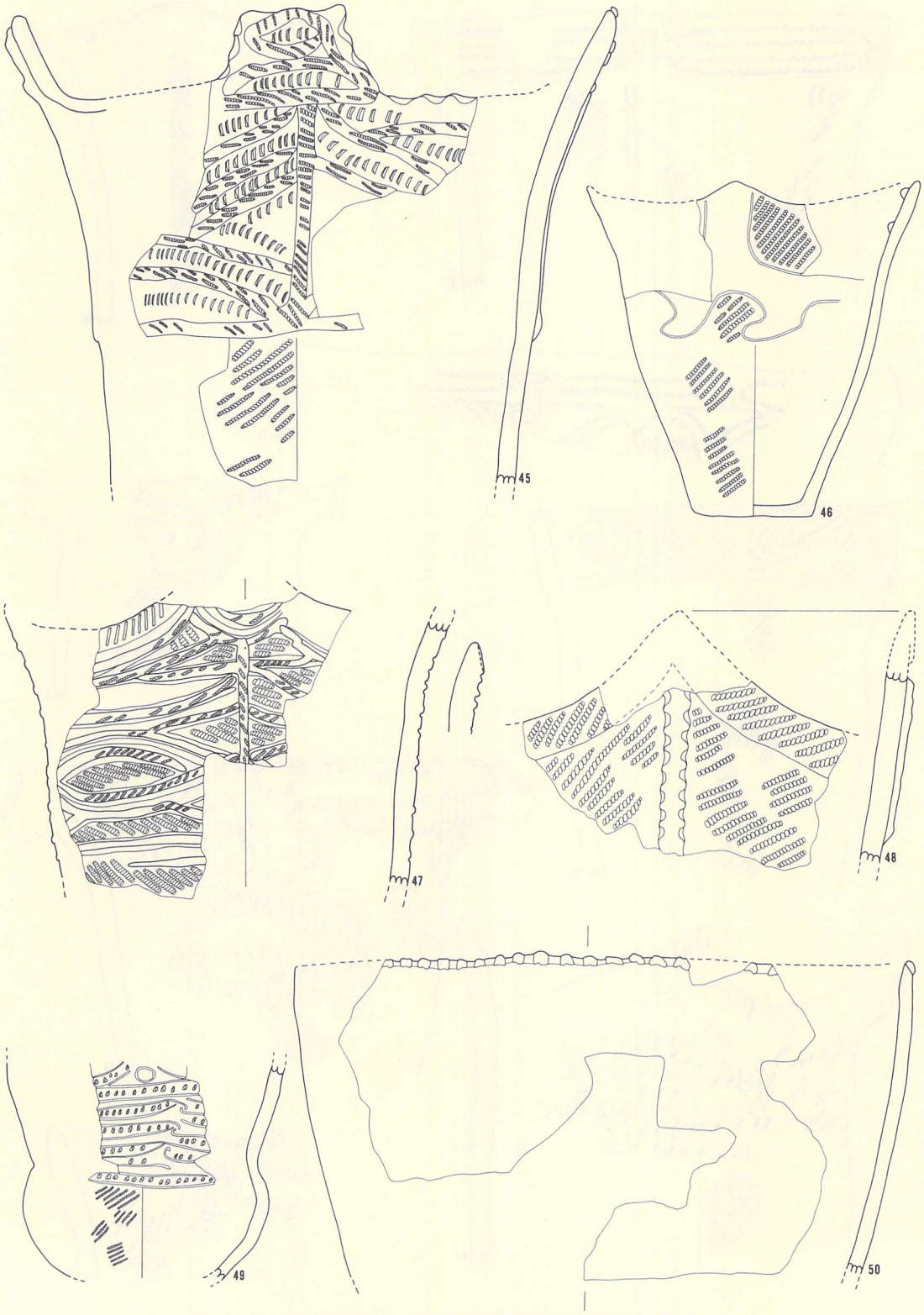
Ⅰ群土器

図版33　土器実測図（8）



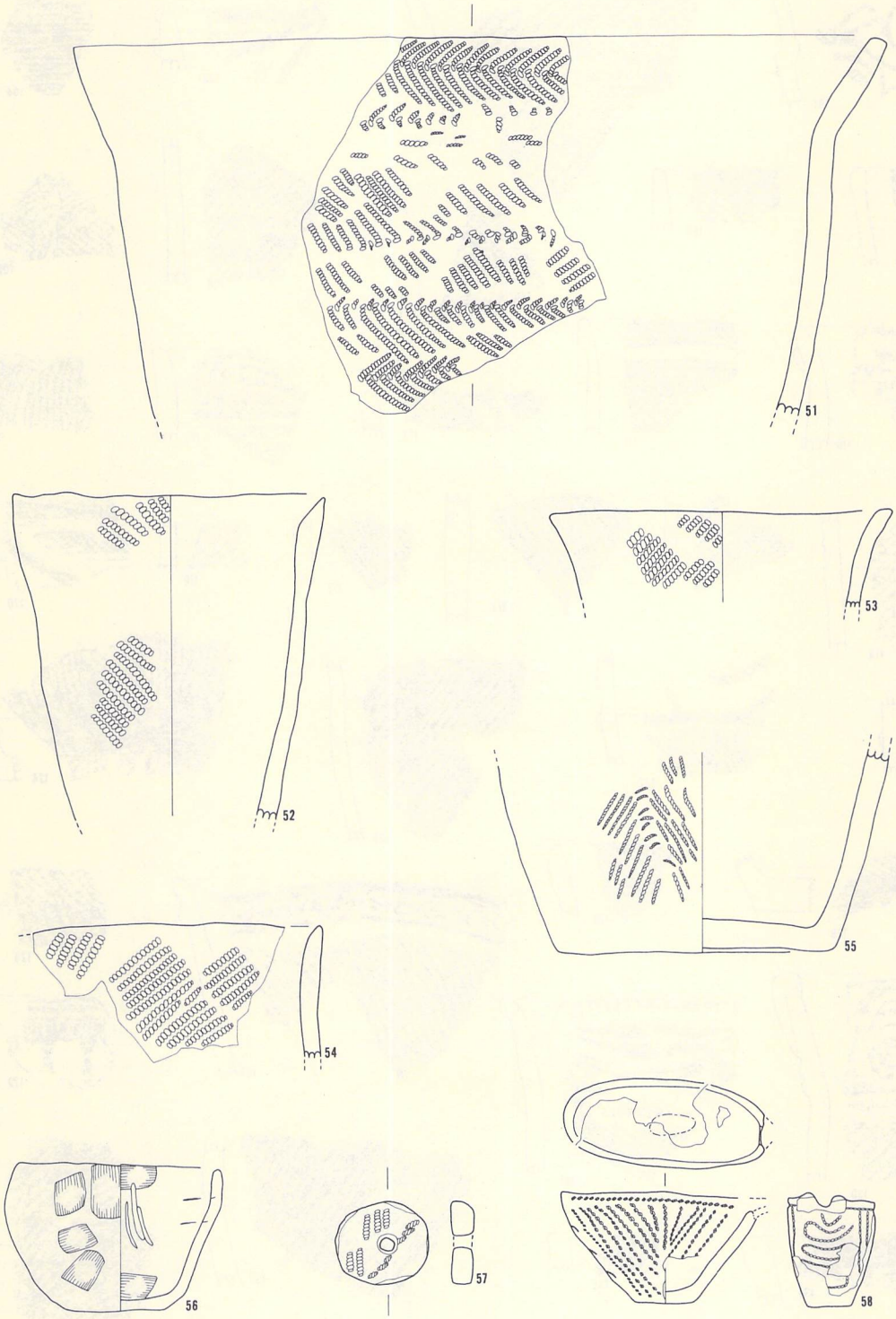
37･38：II群土器、39～44：III群土器

図版34　土器実測図（9）



45：Ⅲ群土器、46：Ⅴ群土器、47：Ⅳ群土器、48～50：Ⅵ群土器

図版35　土器実測図（10）



Ⅶ群土器・土 製 品

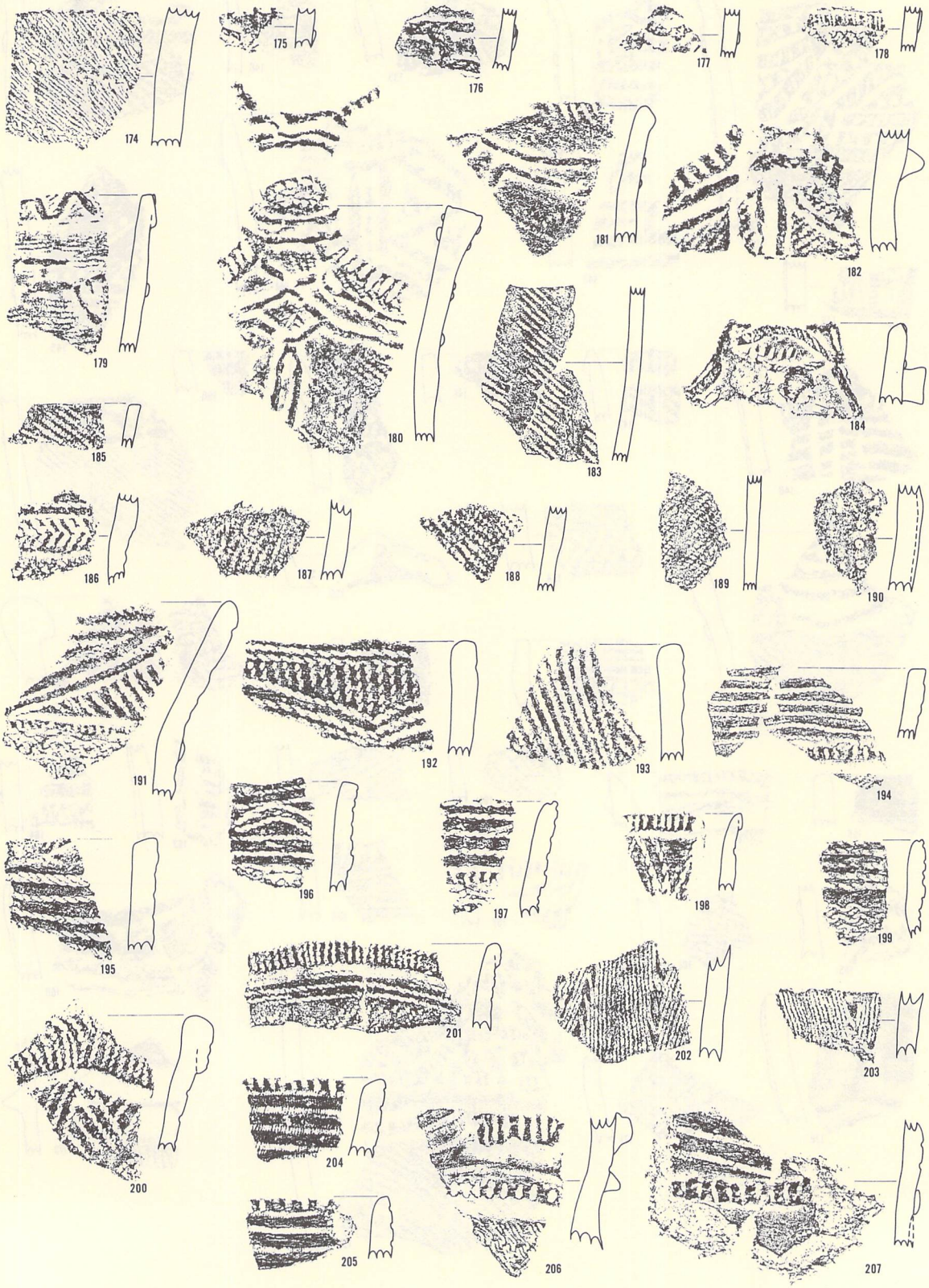
図版36　土器片拓影（1）

101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135

図版37　土器片拓影（2）

136
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173

図版38　土器片拓影（3）


174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207

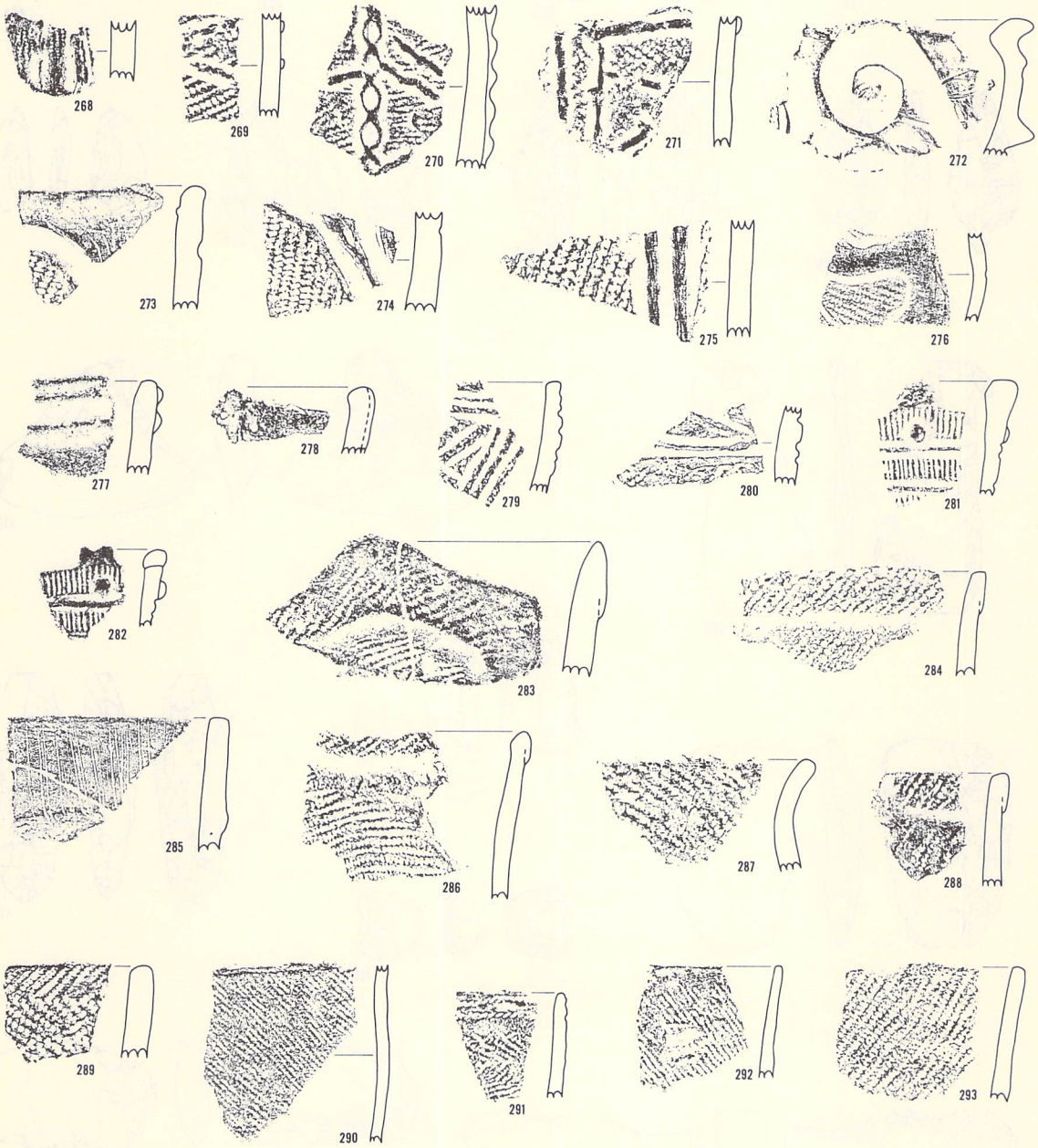
図版39　土器片拓影（4）

208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238

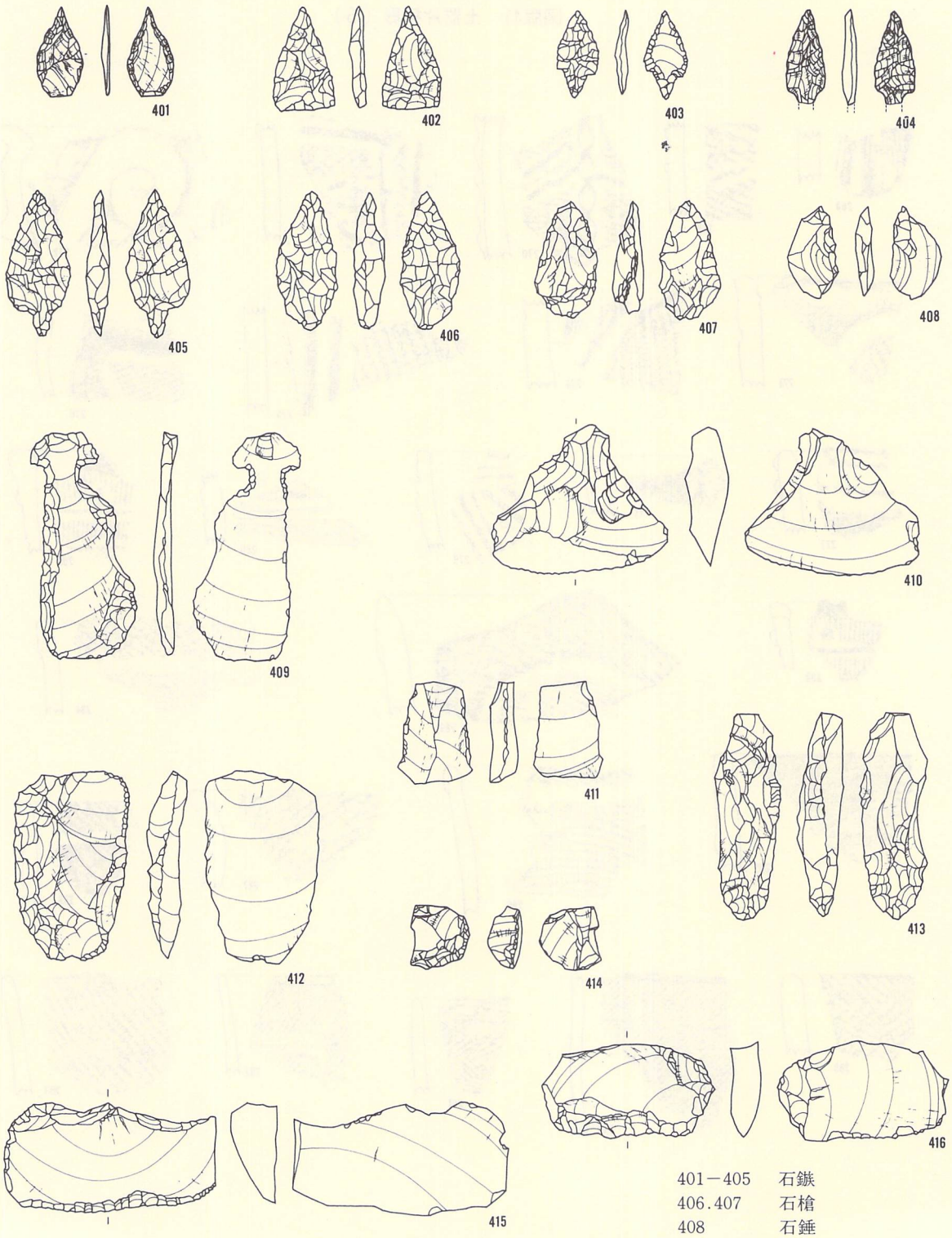
図版40　土器片拓影（5）

239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267

図版41　土器片拓影（6）


268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293

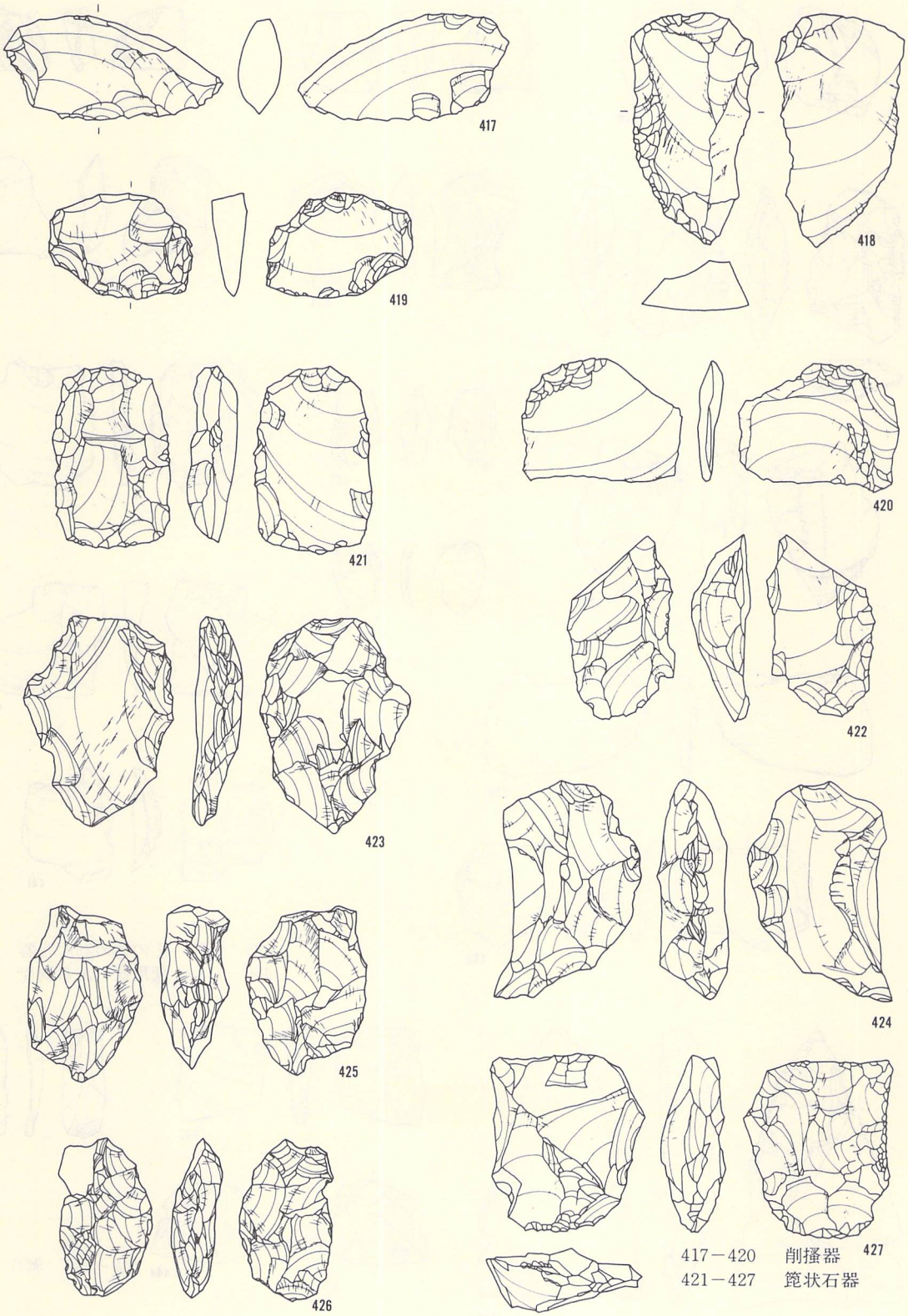
図版42　石　器（1）



401－405　石鏃
406.407　石槍
408　石錘
409・410　石匙
411－416　削掻器

縮尺$\frac{1}{2}$

図版43　石　器（2）



417－420　削掻器
421－427　篦状石器

縮尺 $\frac{1}{2}$

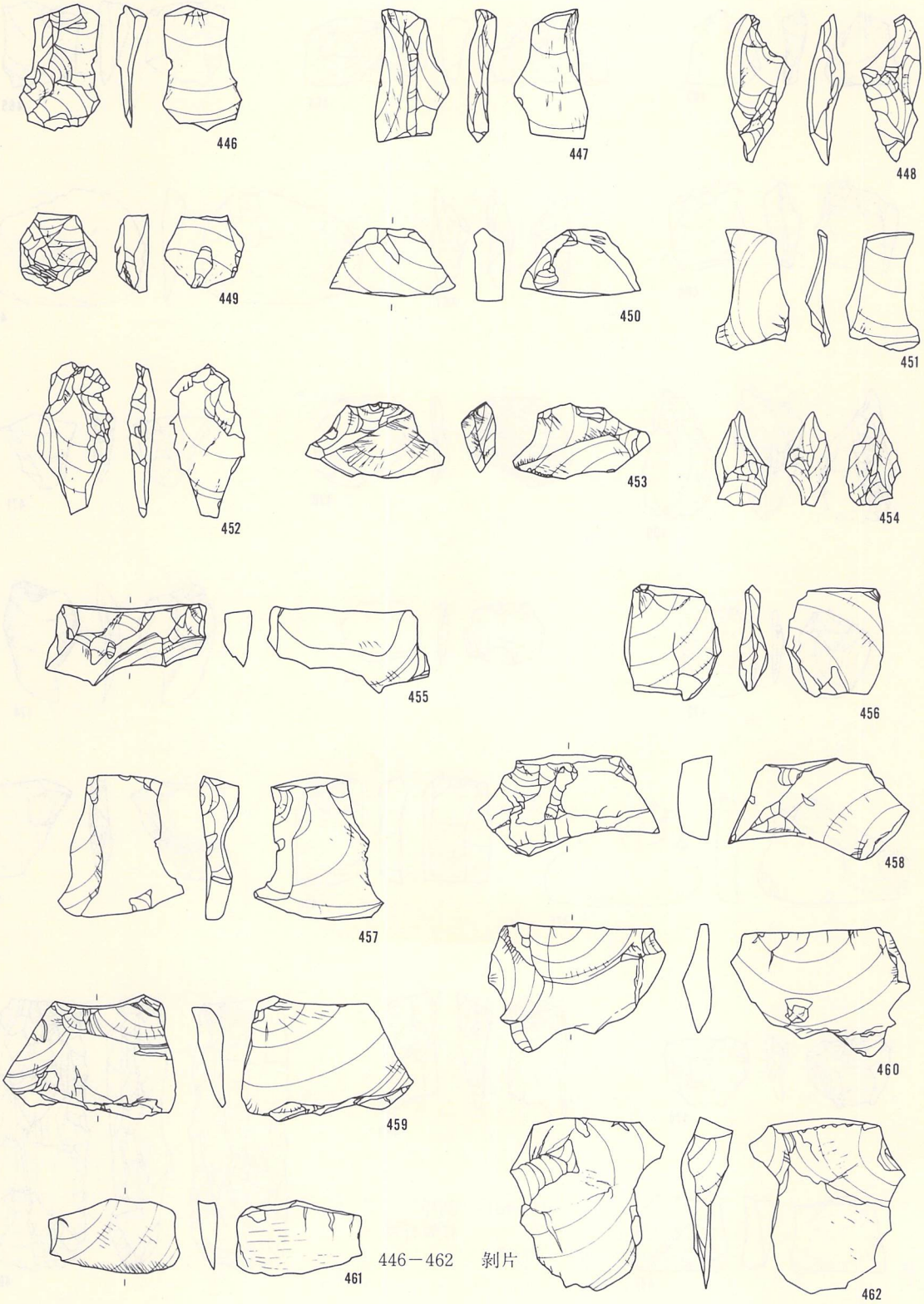
図版44　石　器（3）

428　429　その他の剥片石器
430－441　使用痕のある剥片

442－445　剥片

縮尺$\frac{1}{2}$

図版45　石　器（4）



446－462　剥片

縮尺 $\frac{1}{2}$

図版46　石　器（5）

463－481　剥片
482　打製石斧

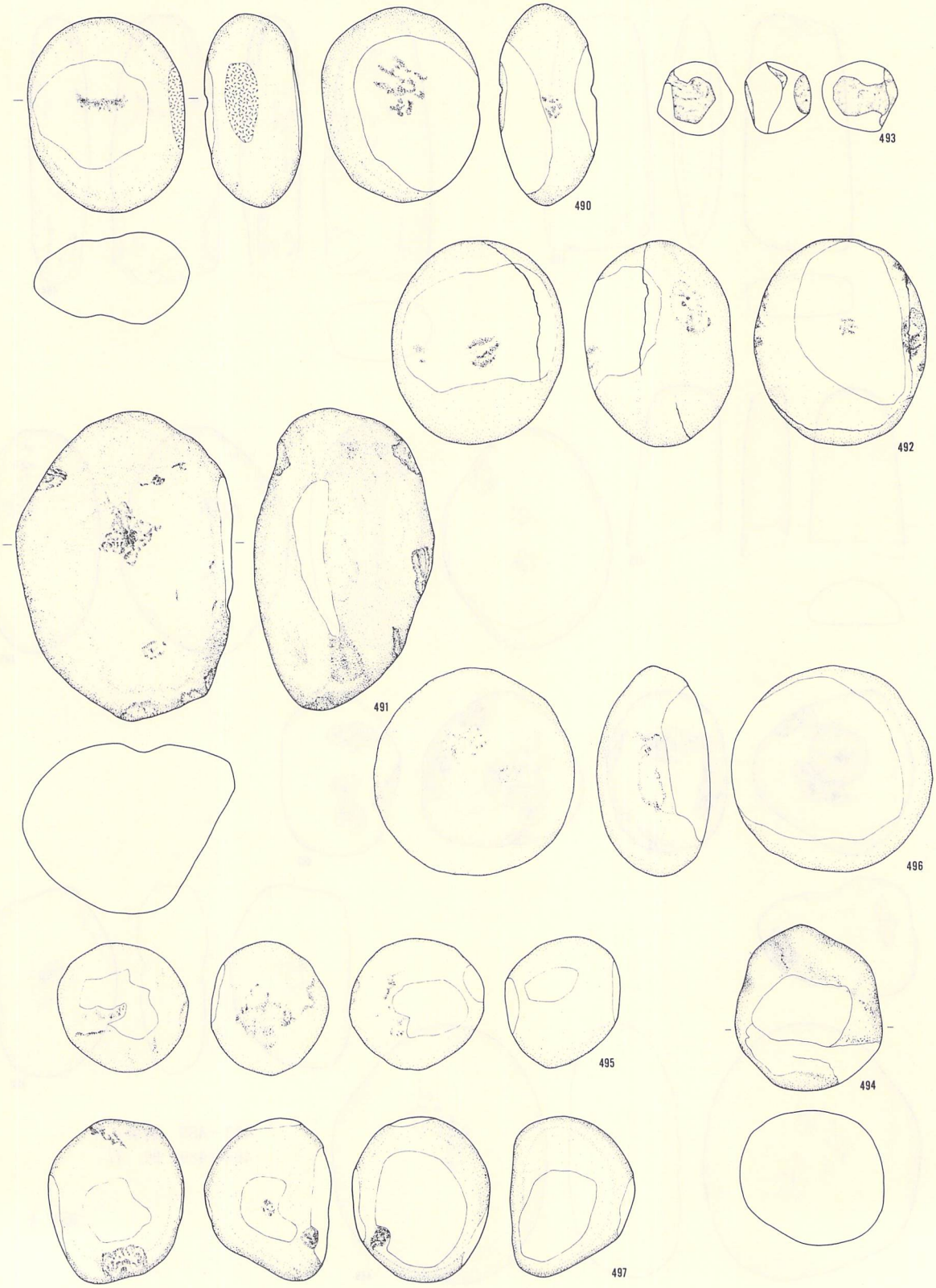
縮尺$\frac{1}{2}$

図版47　石　器（6）

483－485　磨製石斧
486－489　凹　石

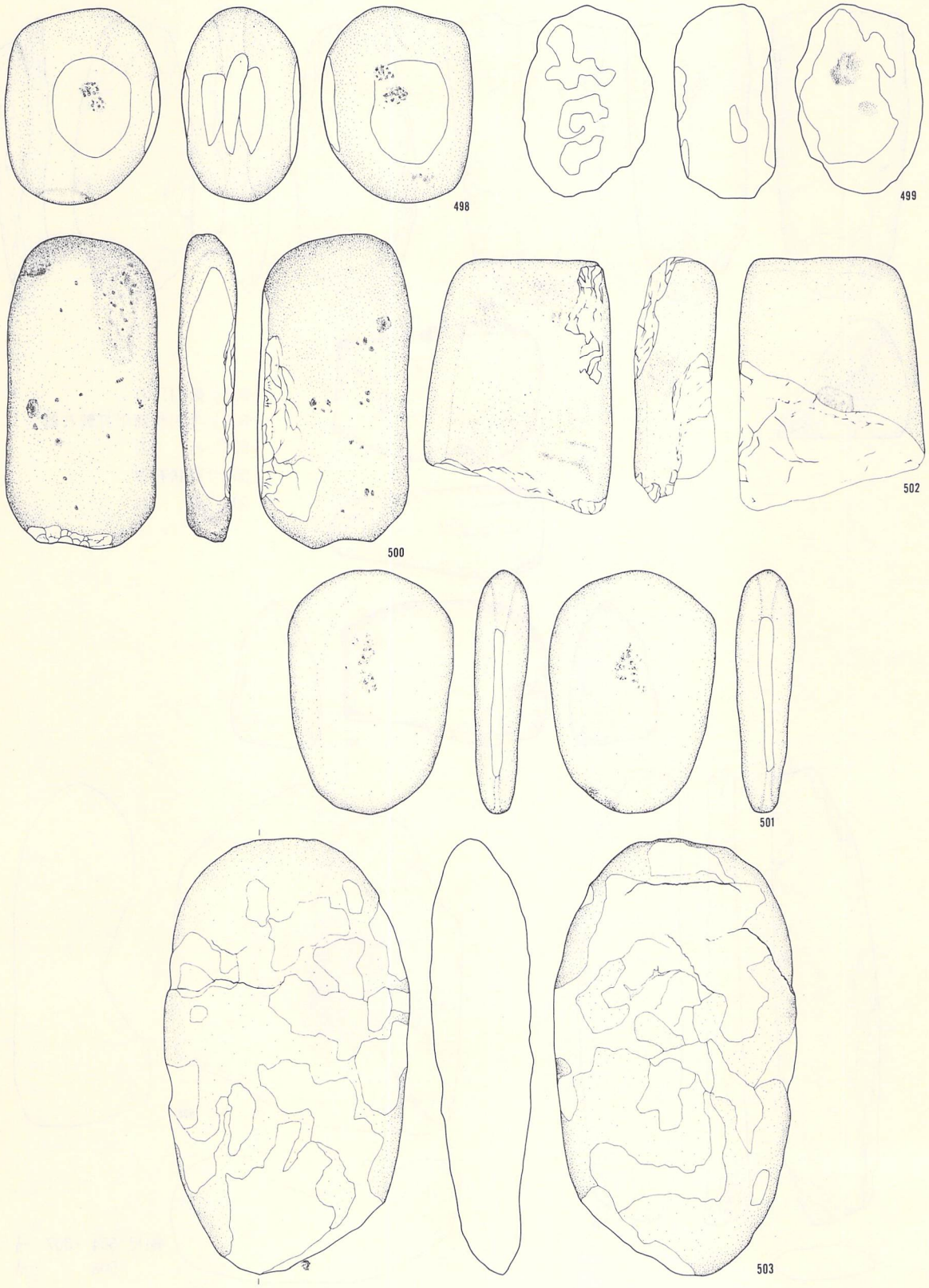
縮尺 $\frac{1}{3}$

図版48　石　器（7）



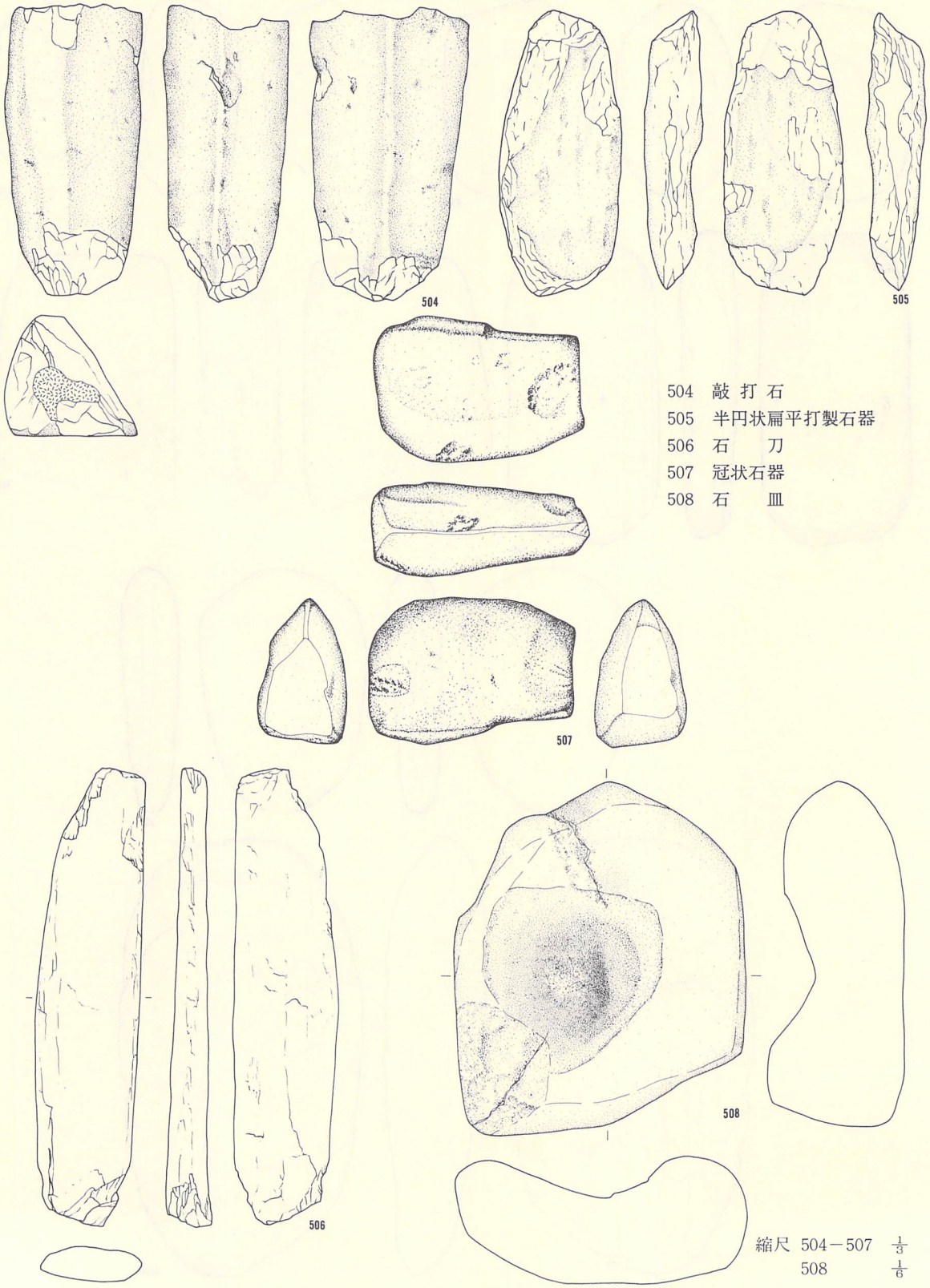
縮尺 $\frac{1}{3}$

図版49　石　器（8）



縮尺 $\frac{1}{3}$

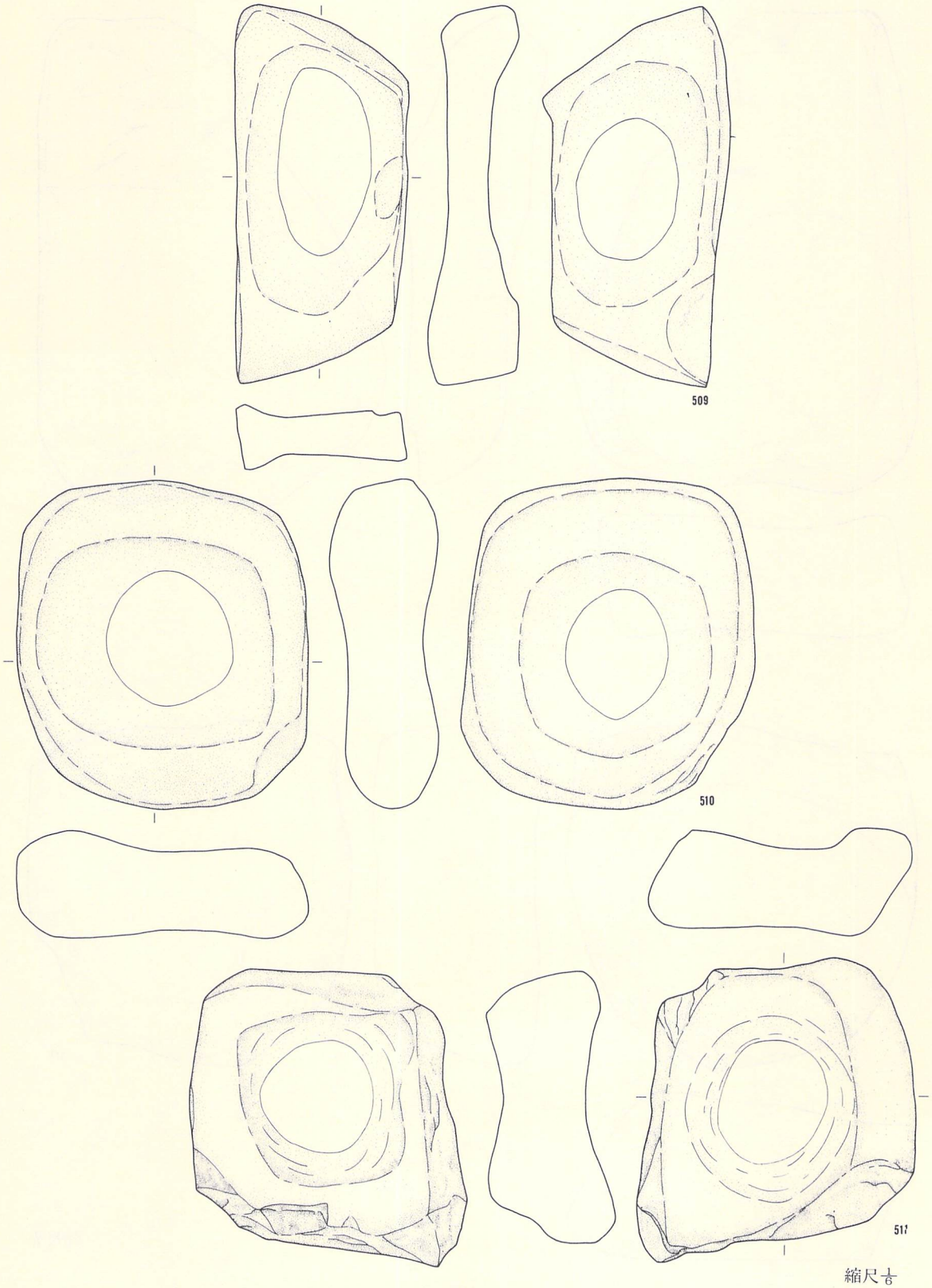
図版50　石　器（9）



504　敲 打 石
505　半円状扁平打製石器
506　石　　刀
507　冠状石器
508　石　　皿

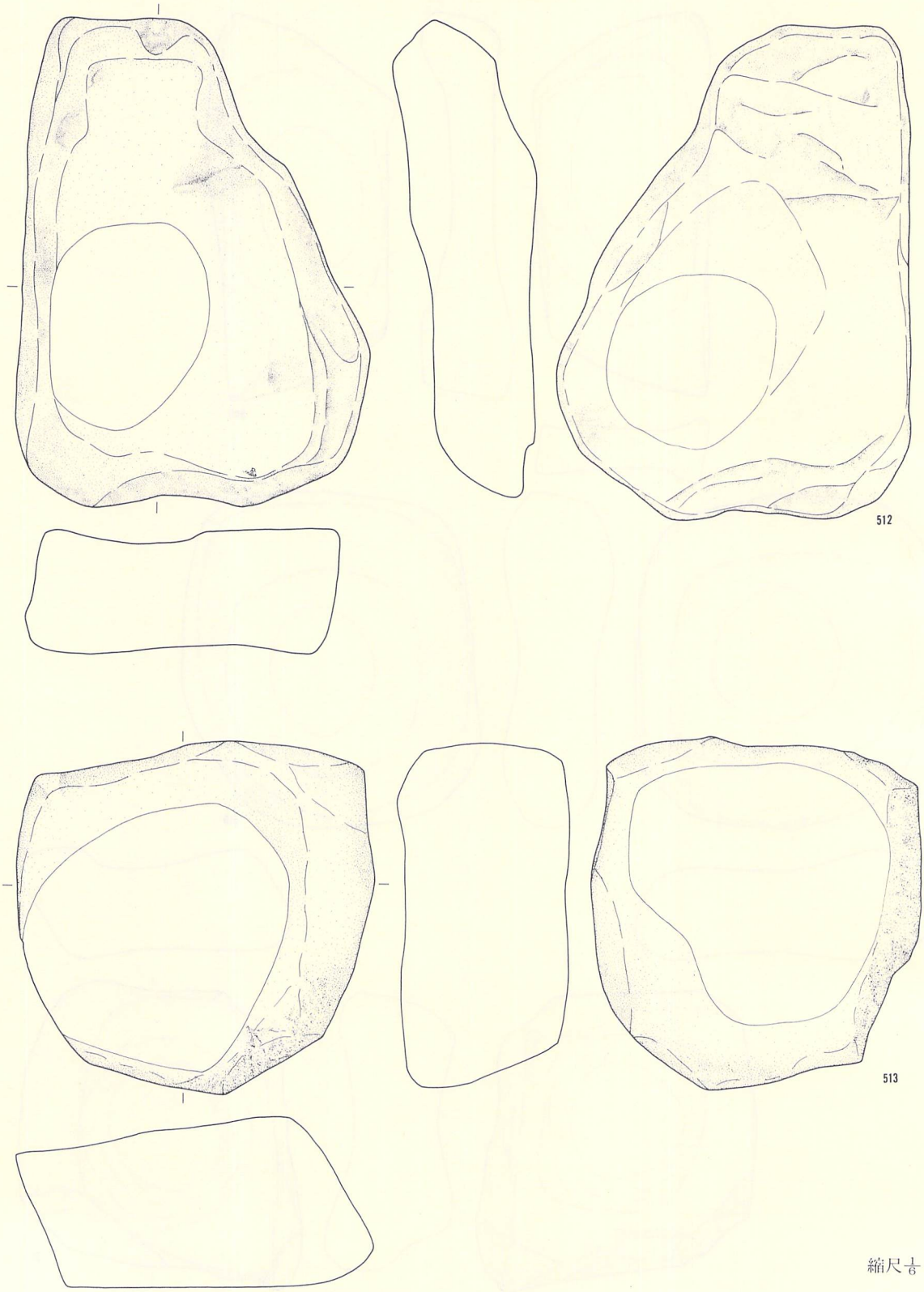
縮尺　504－507　$\frac{1}{3}$
508　$\frac{1}{6}$

図版51　石　器（10）



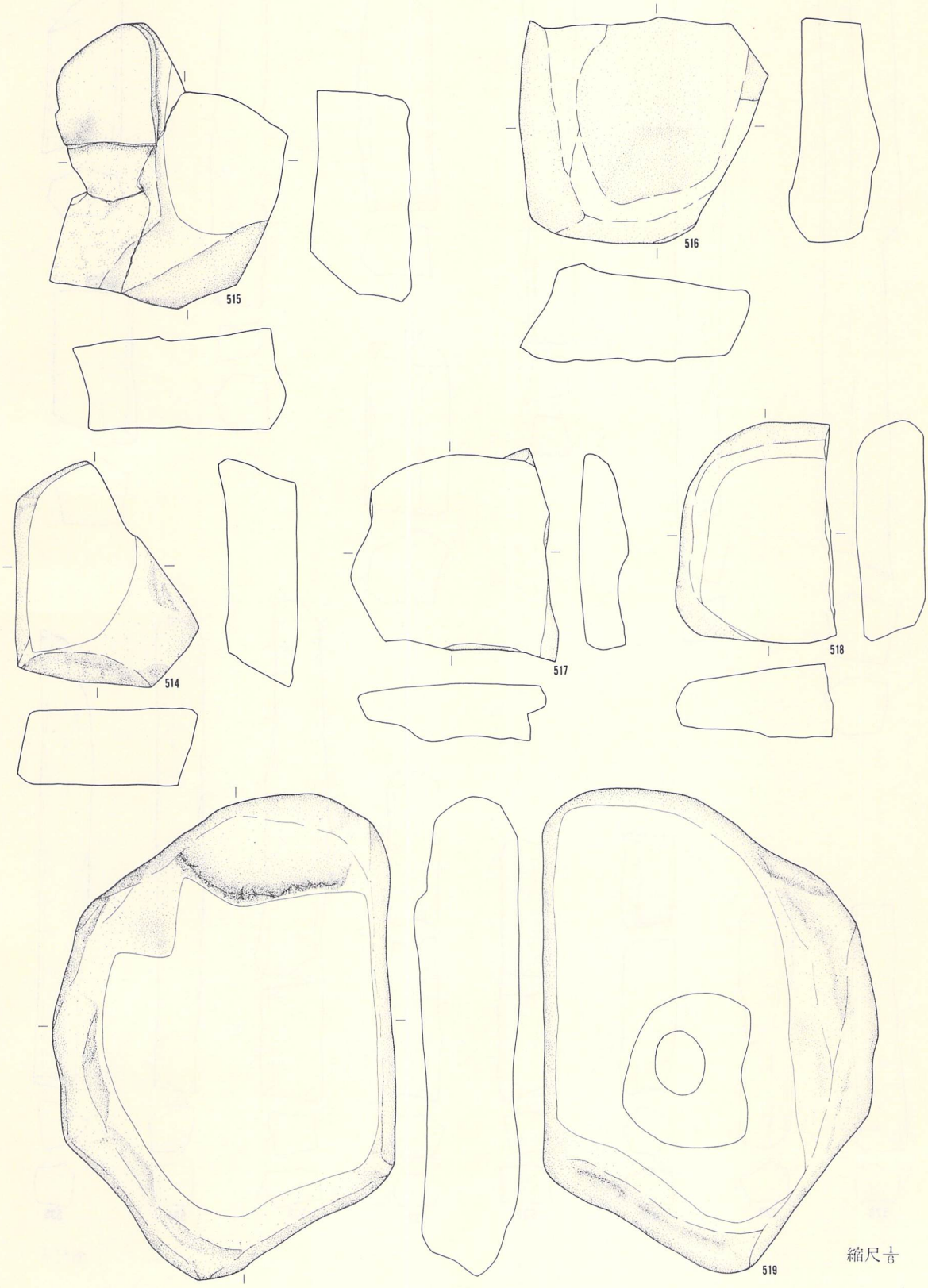
縮尺$\frac{1}{6}$

図版52　石　器（11）

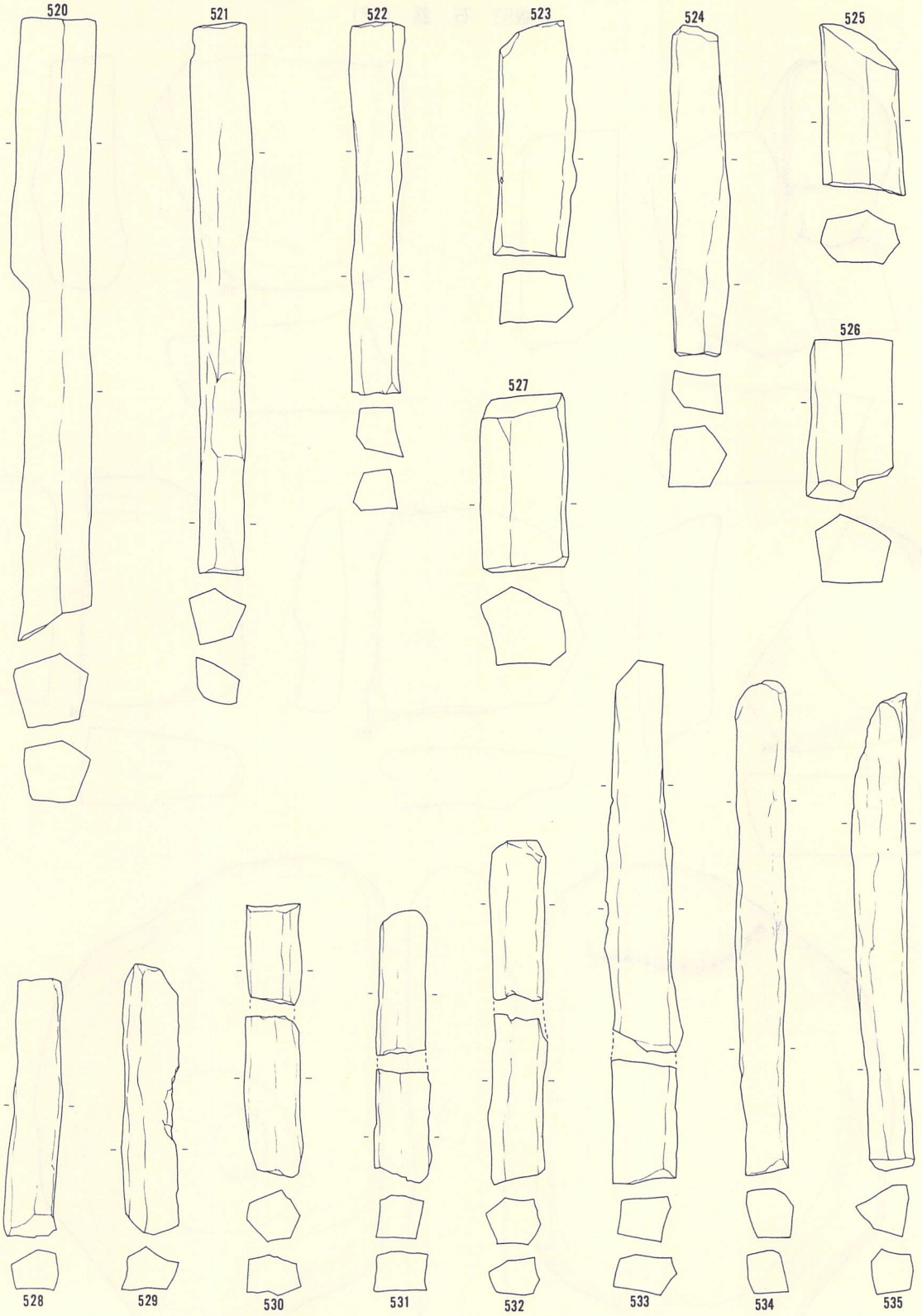


縮尺 $\frac{1}{6}$

図版53　石　器（12）



図版54　石　器（13）



縮尺 1/6

写　真　図　版

写真図版１　遺跡遠景

写真図版２　遺跡近景

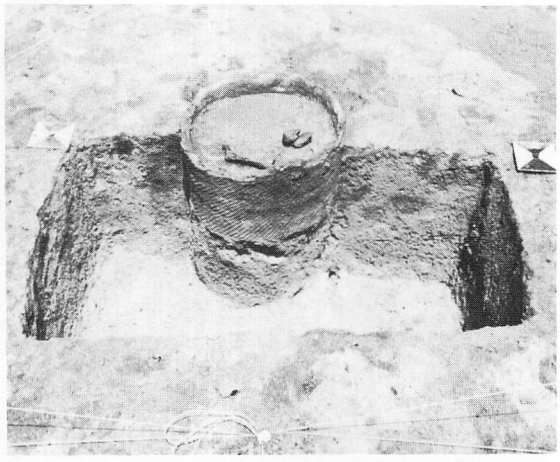
写真図版３　ＢＦ30住居址

a：ＢＦ30住居址（全景）

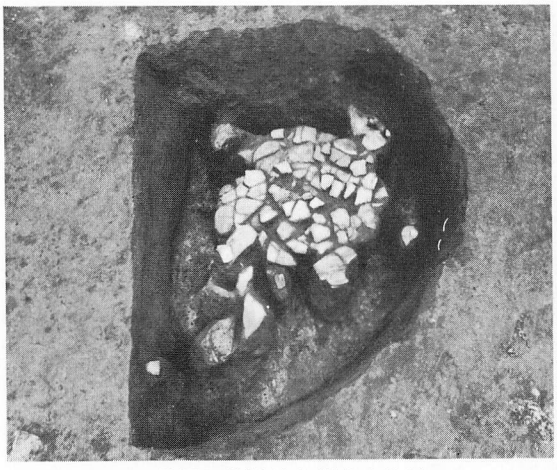
b：ＢＦ30住居址（埋土断面）

写真図版４　ＢＦ30・ＢＨ29住居址

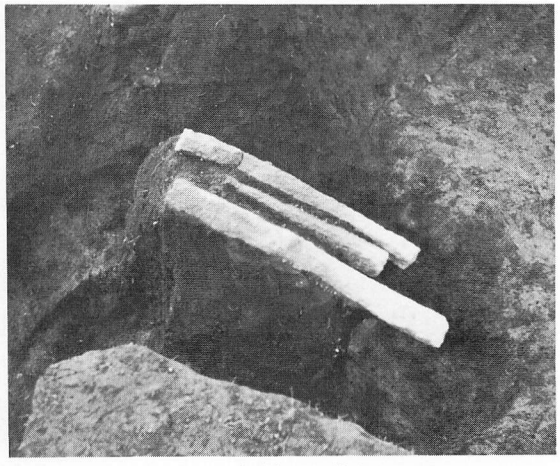
ａ：ＢＦ30住居址土器埋設炉（平面）



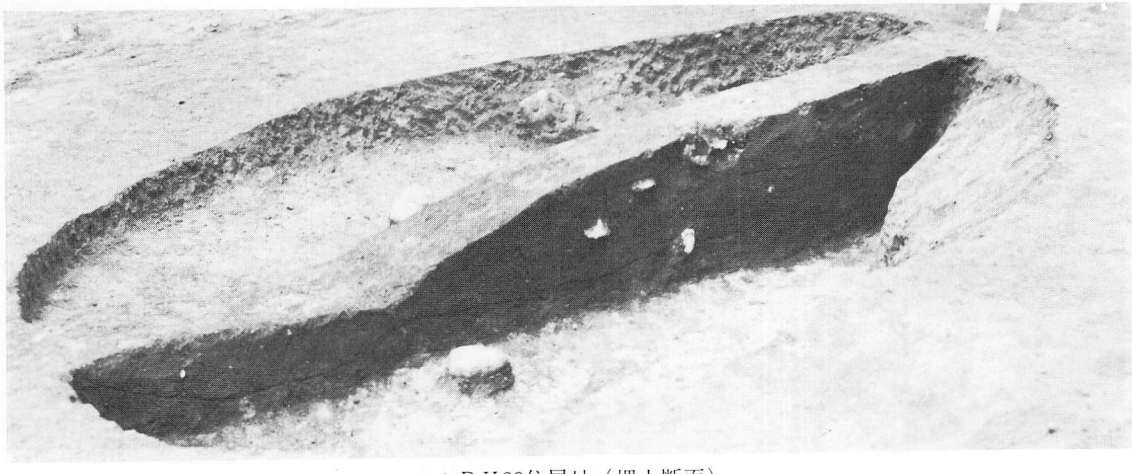
ｂ：ＢＦ30住居址土器埋設炉（断面）



ｃ：ＢＦ30住居址土器出土状況



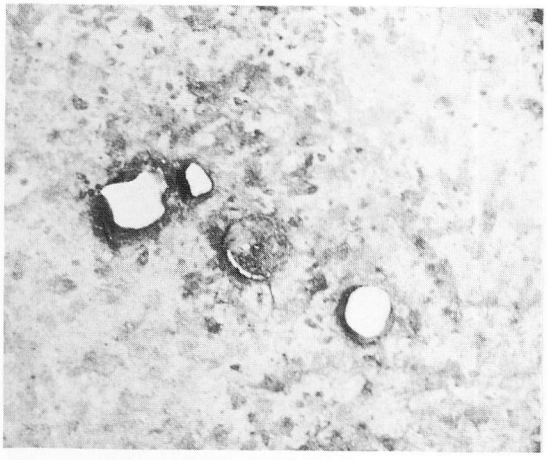
ｄ：ＢＦ30住居址石棒出土状況



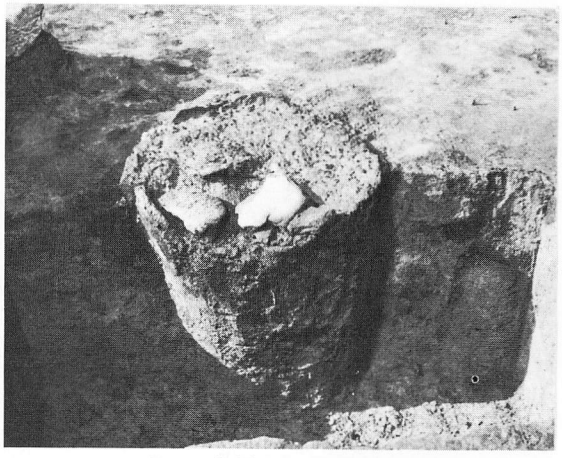
ｅ：ＢＨ29住居址（埋土断面）

写真図版５　ＢＨ29住居址

a ：ＢＨ29住居址（全景）



b ：ＢＨ29住居址炉付近



c ：ＢＨ29住居址土器埋設炉（断面）

写真図版６　ＢＨ31住居址

a ：ＢＨ31住居址遺物出土状況

b ：ＢＨ31住居址（埋土断面）

写真図版７　ＢＨ31住居址

a ：ＢＨ31住居址（全景）

b ：ＢＨ31住居址埋設土器（平面）

c ：ＢＨ31住居址埋設土器（断面）

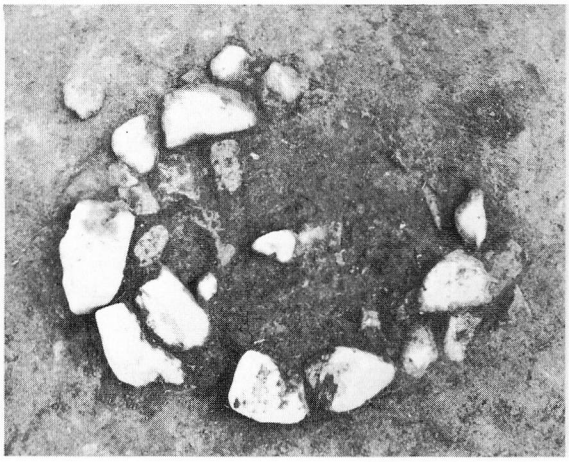
写真図版８　ＣＤ31住居址

a ：ＣＤ31住居址（全景）

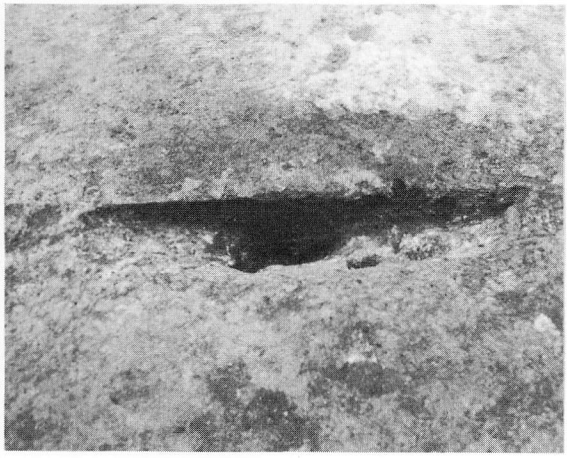
b ：ＣＤ31住居址（埋土断面）

写真図版９　焼土遺構（１）

ａ：ＢＧ30石囲炉（断面）

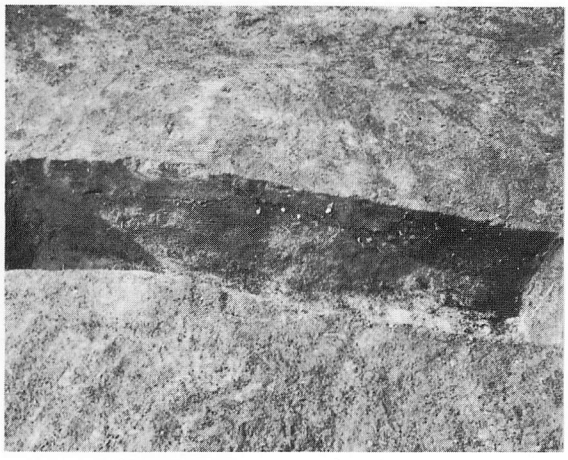


ｂ：ＢＧ30石囲炉（平面）

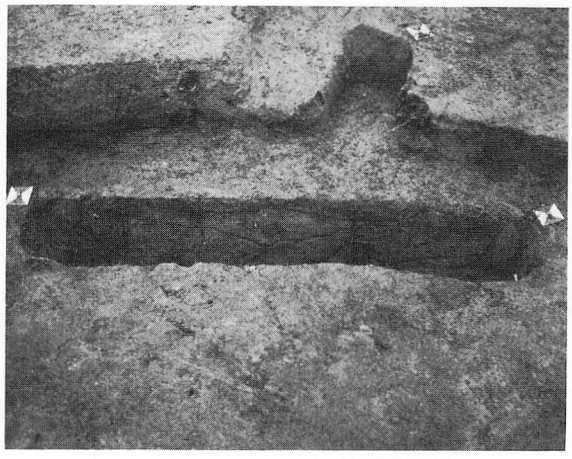


ｃ：ＤＦ37焼土ピット（断面）

ｄ：ＤＦ焼土ピット（全景）

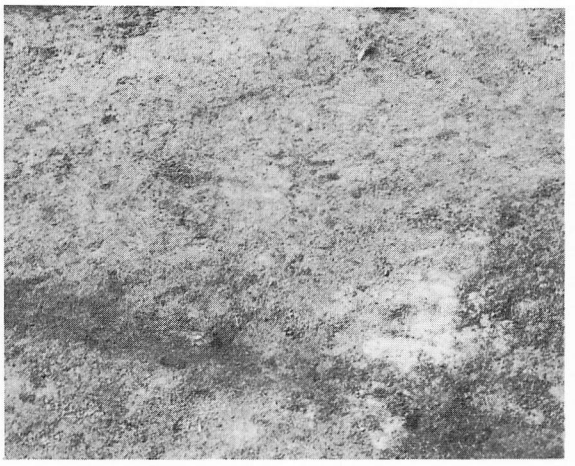


ｅ：ＢＦ28－１焼土遺構（断面）

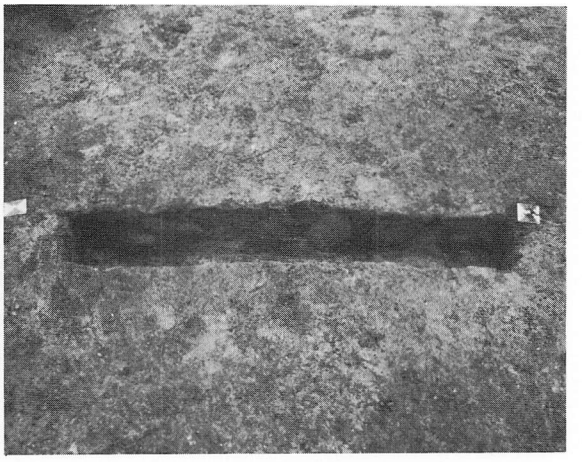


ｆ：ＢＦ28－２焼土遺構（断面）

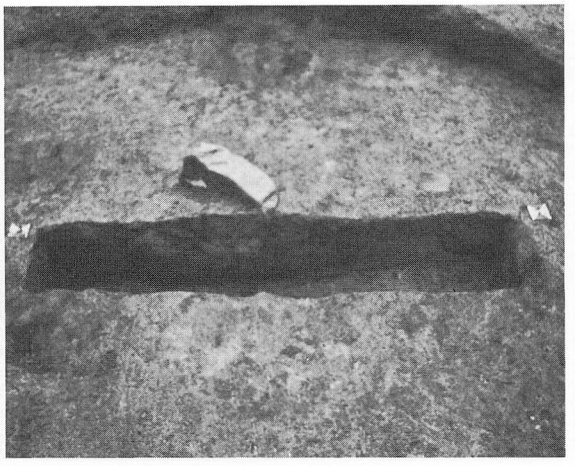
写真図版10　焼土遺構（2）



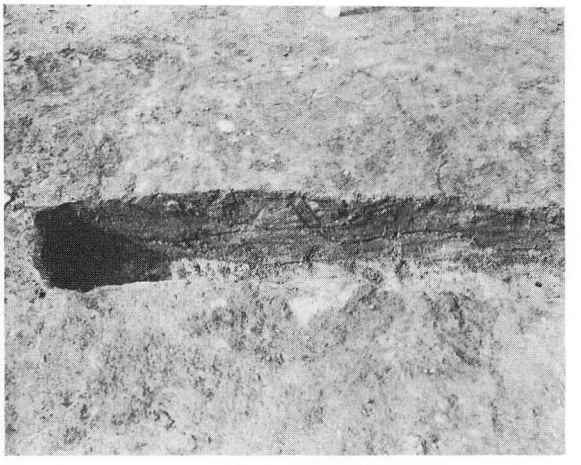
a：ＢＦ32焼土遺構（平面）



b：ＢＧ28－１焼土遺構（断面）

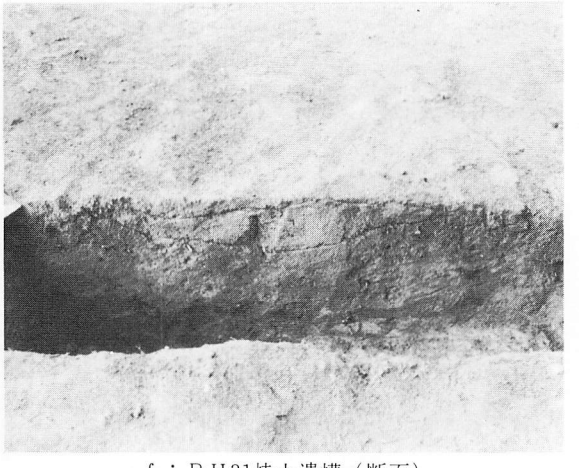


c：ＢＧ28－２焼土遺構（断面）



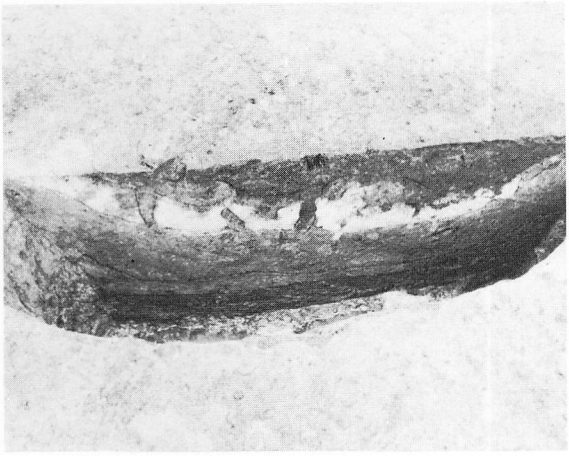
d：ＢＧ30焼土遺構（断面）

e：ＢＨ30焼土遺構（断面）



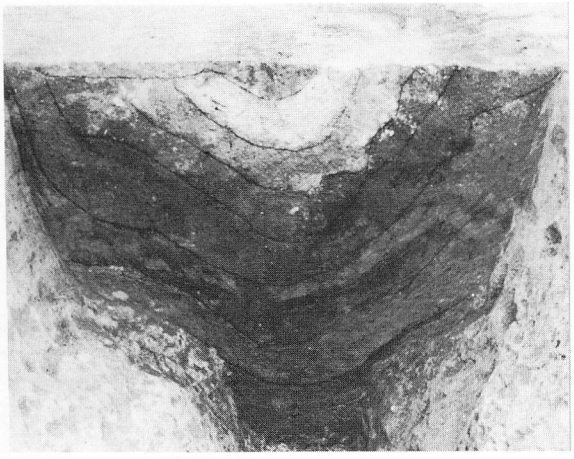
f：ＢＨ31焼土遺構（断面）

写真図版11　陥し穴状遺構（１）

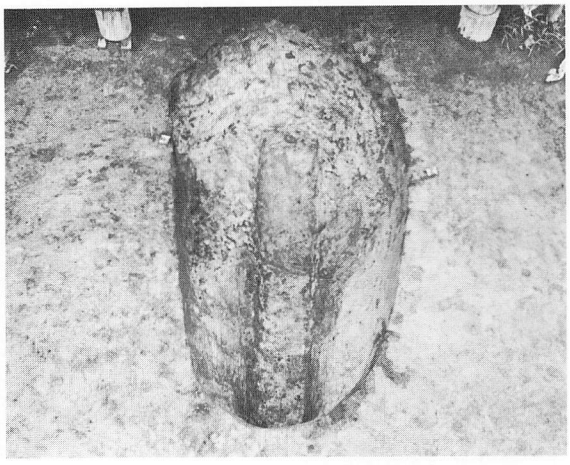


ａ：ＢＨ27陥し穴状遺構（断面）

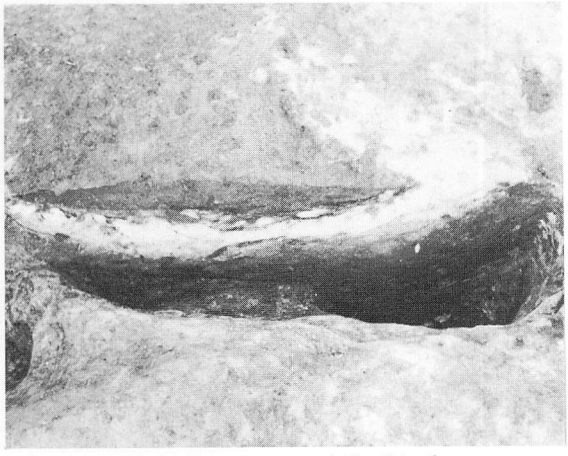
ｂ：ＢＨ27陥し穴状遺構（全景）



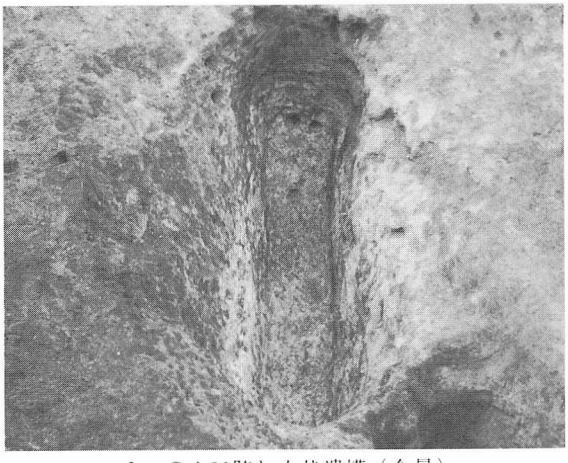
ｃ：ＢＪ30陥し穴状遺構（断面）



ｄ：ＢＪ30陥し穴状遺構（全景）

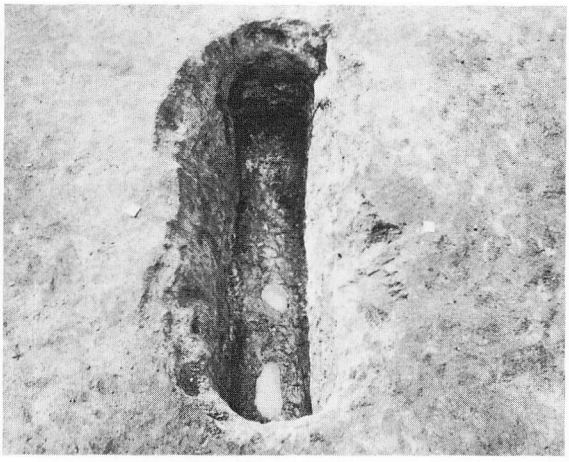


ｅ：ＣＡ31陥し穴状遺構（断面）

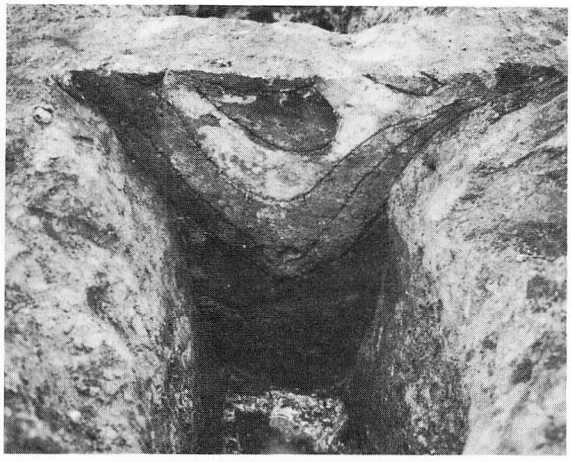


ｆ：ＣＡ31陥し穴状遺構（全景）

写真図版12　陥し穴状遺構（２）

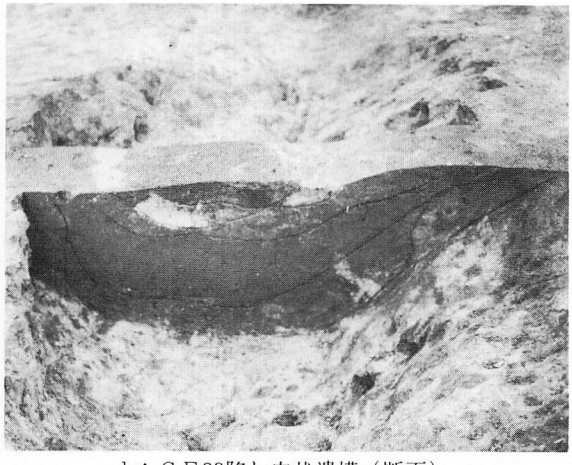


ａ：ＣＣ34陥し穴状遺構（全景）

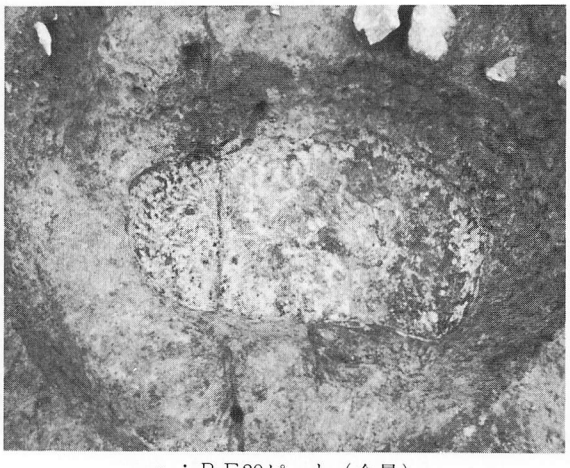


ｂ：ＣＣ34陥し穴状遺構（断面）

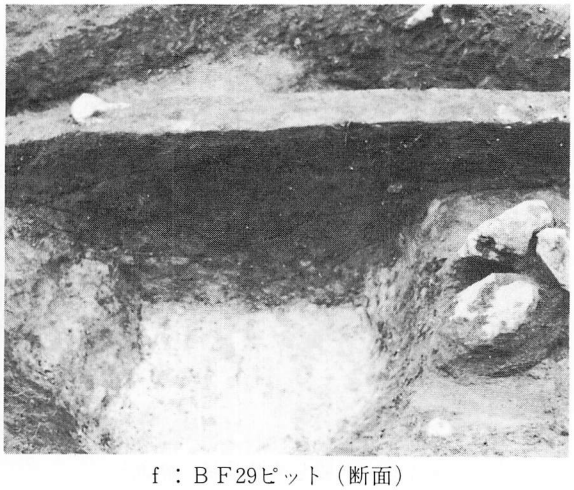
ｃ：ＣＥ33陥し穴状遺構（全景）



ｄ：ＣＥ33陥し穴状遺構（断面）

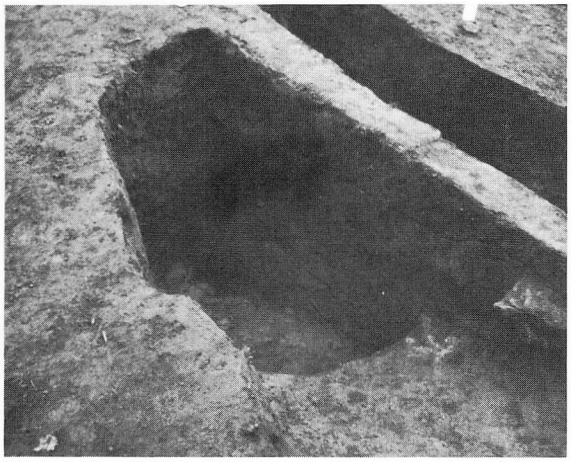


ｅ：ＢＦ29ピット（全景）

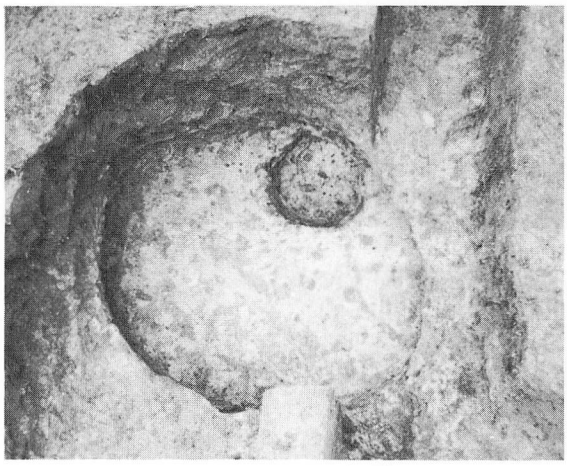


ｆ：ＢＦ29ピット（断面）

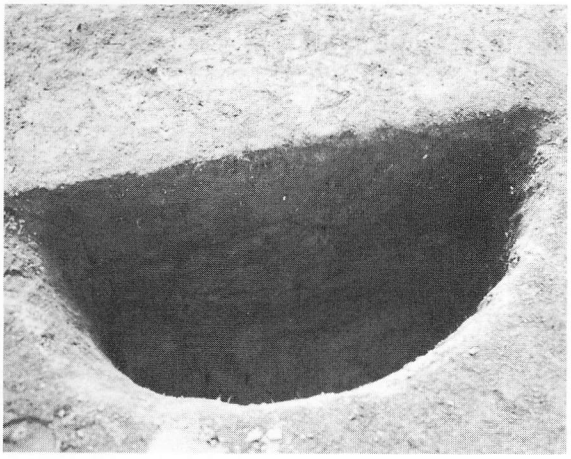
写真図版13　ピット（1）



a：ＢＦ30ピット（断面）

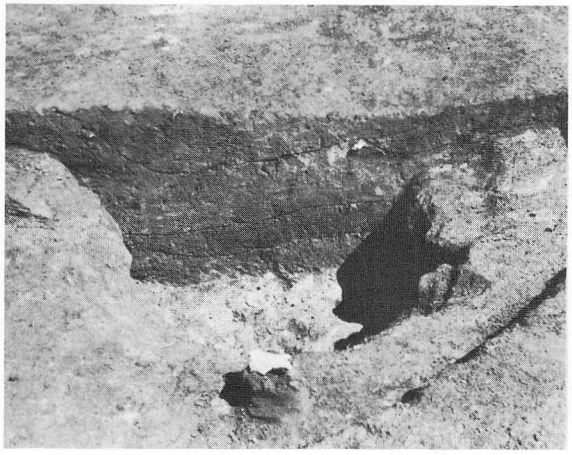


b：ＢＦ30ピット（全景）



c：ＢＦ31ピット（断面）

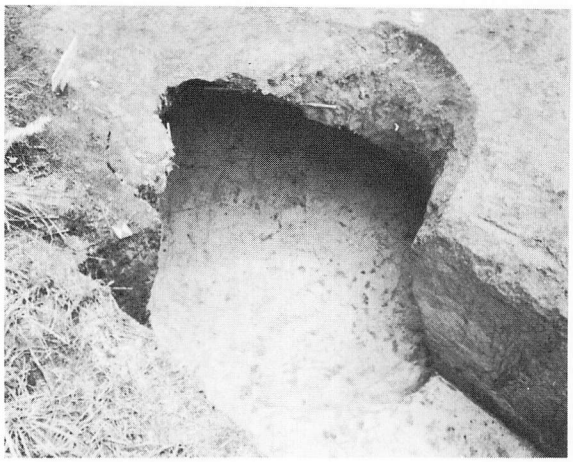
d：ＢＦ31ピット（全景）



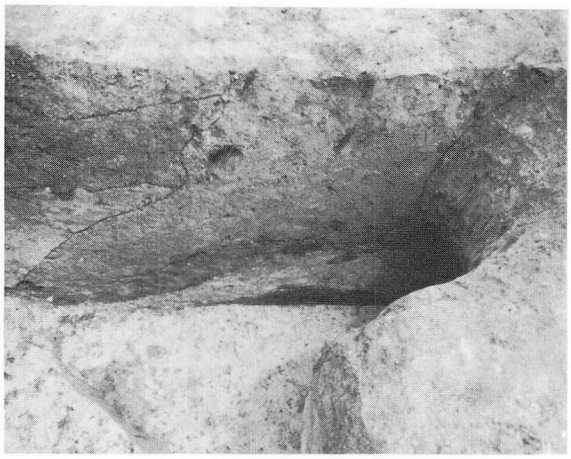
e：ＢＦ32－１ピット（断面）

f：ＢＦ32－１ピット（全景）

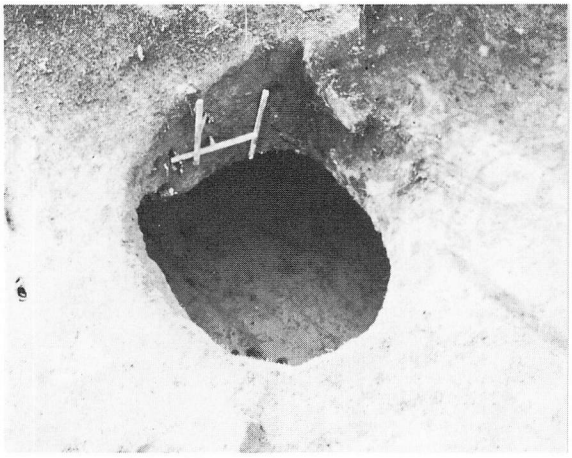
写真図版14　ピット（2）



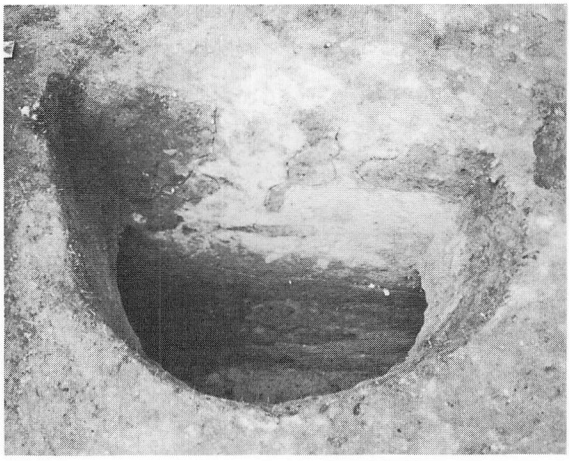
a：ＢＦ32－２ピット（全景）



b：ＢＦ32－２ピット（断面）

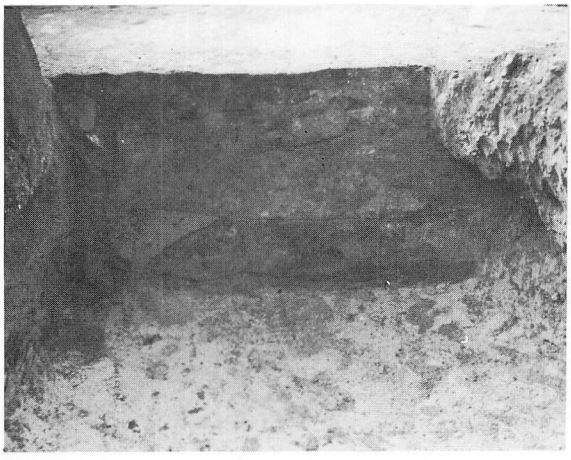


c：ＢＦ32－３ピット（全景）



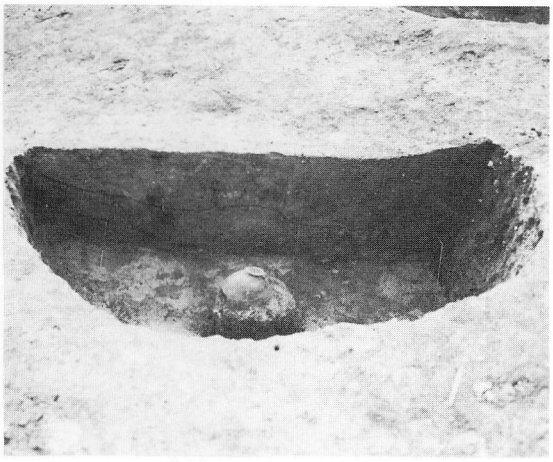
d：ＢＦ32－３ピット（断面）

e：ＢＦ32－４ピット（全景）



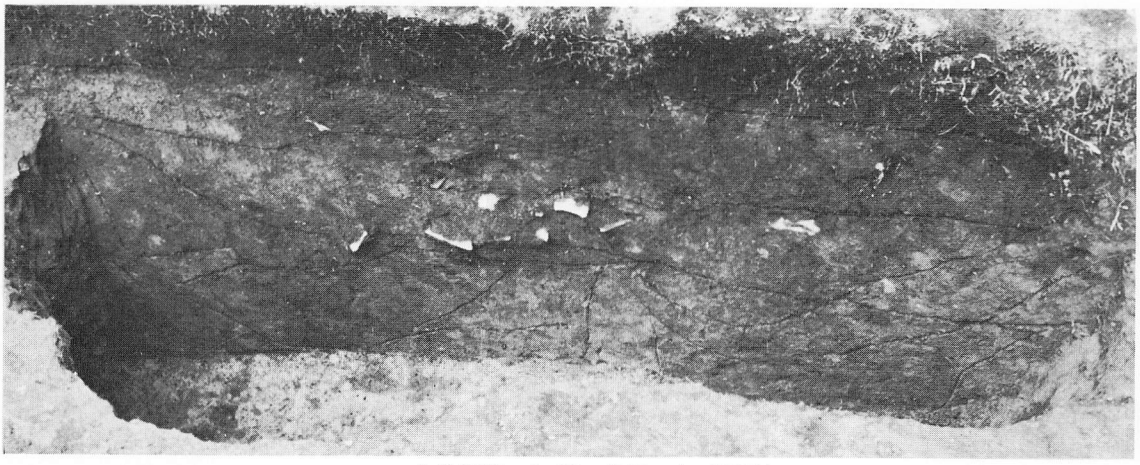
f：ＢＦ32－４ピット（断面）

写真図版15　ピット（３）

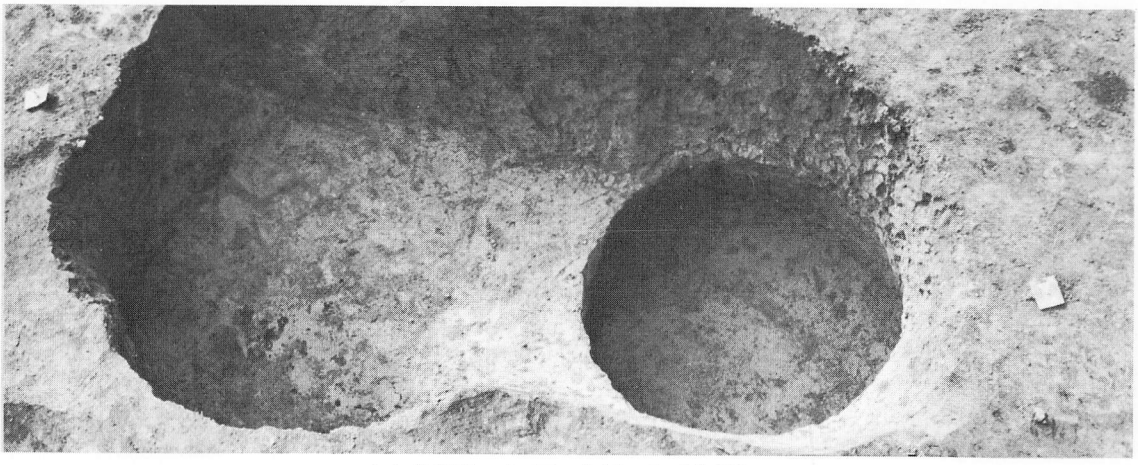


a：ＢＦ32－５ピット（断面）

b：ＢＦ32－５ピット（全景）



c：ＢＦ33－１･33－２ピット（断面）



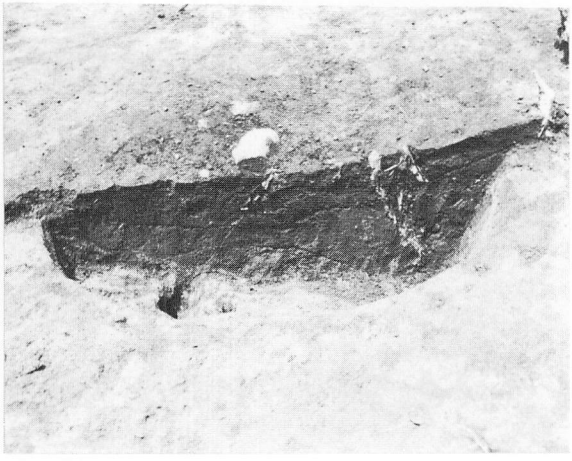
d：ＢＦ33－１･33－２ピット（全景）

写真図版16　ピット（4）

a：ＢＦ32－５ピット土器出土状況

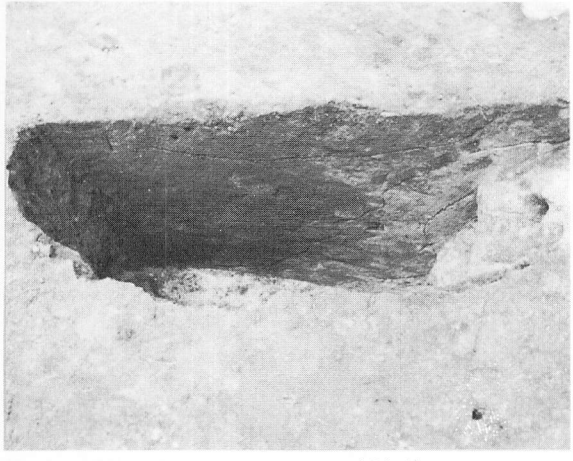
b：ＢＦ33－３ピット（断面）

c：ＢＧ30－１ピット（全景）



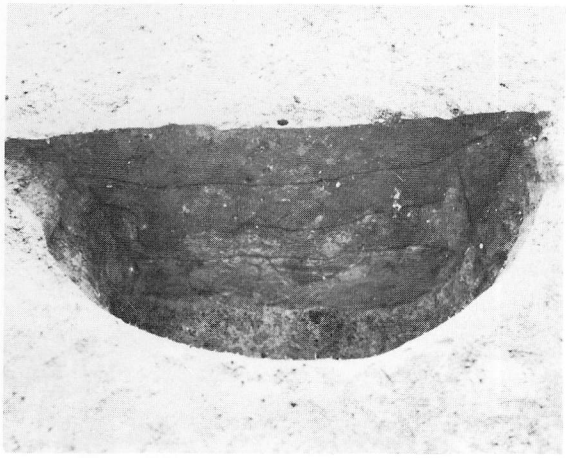
d：ＢＧ30－１ピット（断面）

e：ＢＧ30－２ピット（全景）

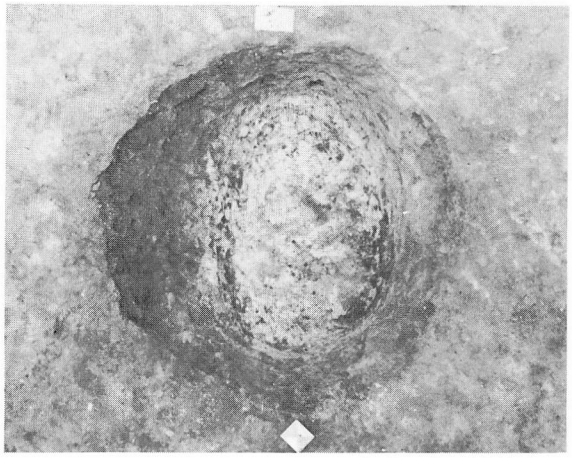


f：ＢＧ30－２ピット（断面）

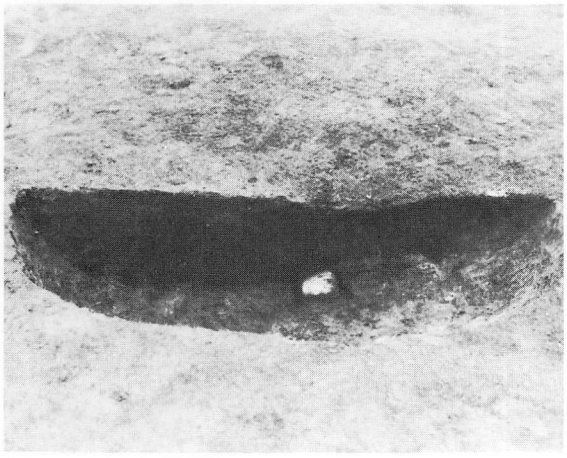
写真図版17　ピット（5）



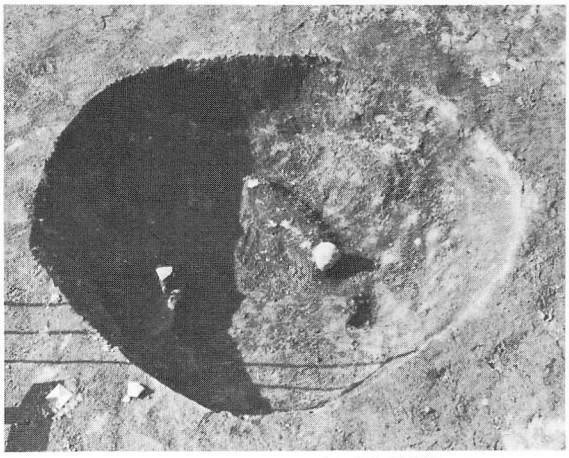
a：ＢＧ31ピット（断面）



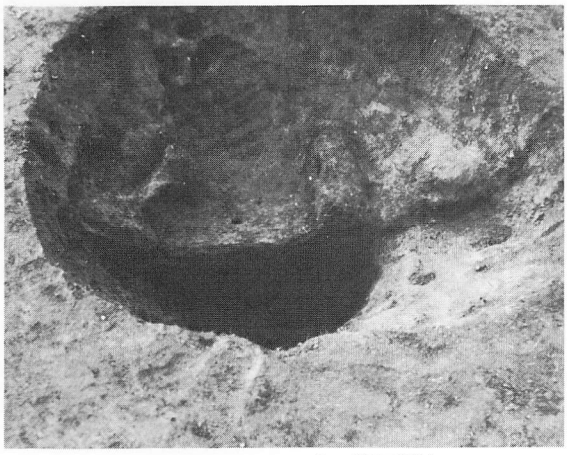
b：ＢＧ31ピット（全景）



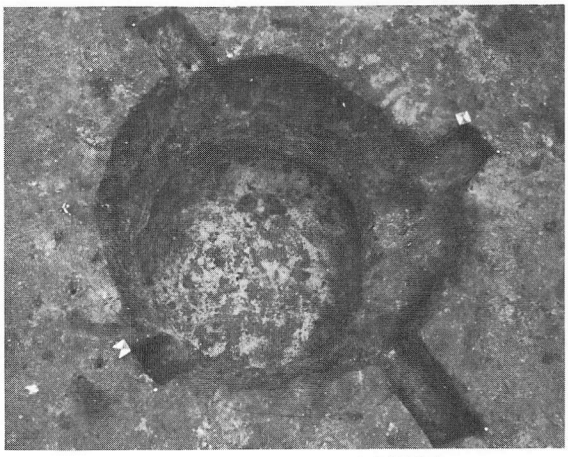
c：ＢＧ32－１ピット（断面①）



d：ＢＧ32－１ピット（全景①）

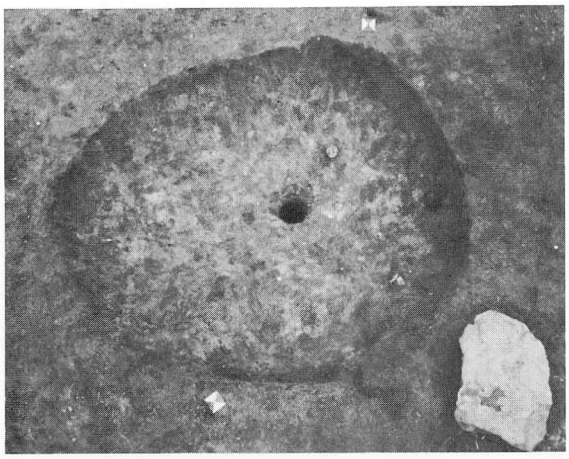


e：ＢＧ32－１ピット（断面②）

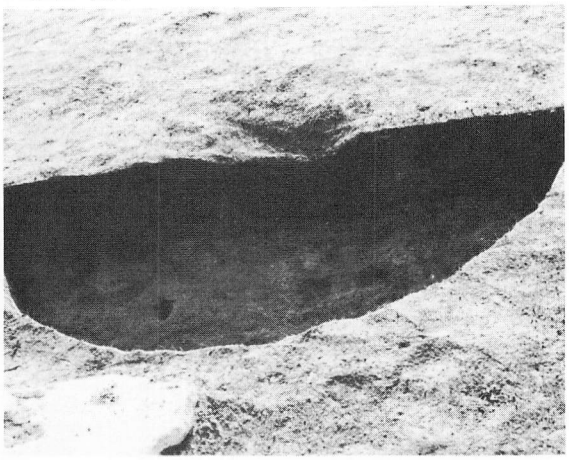


f：ＢＧ32－１ピット（全景②）

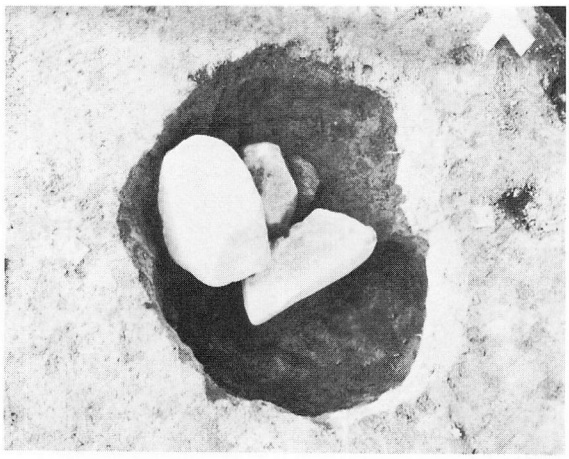
写真図版18　ピット（6）



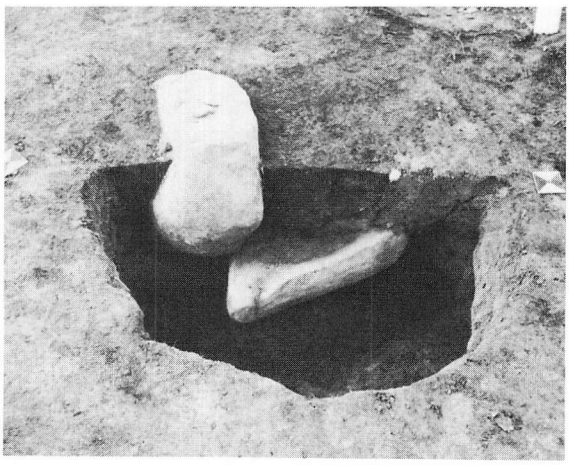
a：ＢＧ32－２ピット（全景）



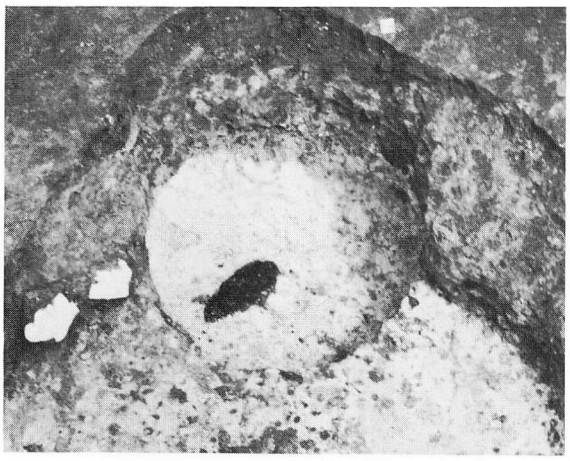
b：ＢＧ32－２ピット（断面）



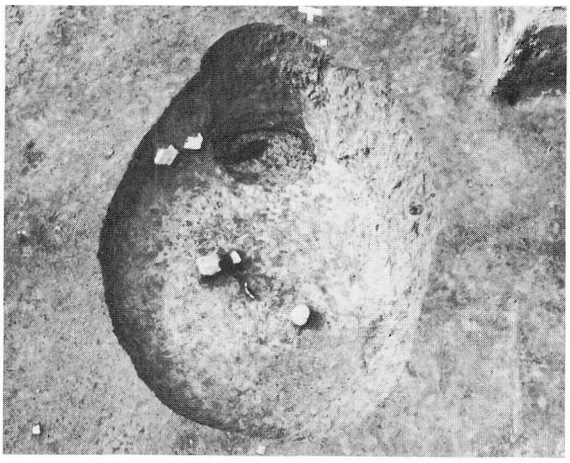
c：ＢＧ32－３ピット（全景）



d：ＢＧ32－３ピット（断面）

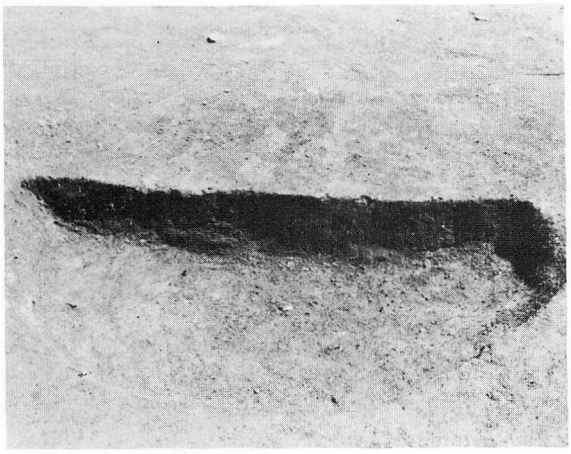


e：ＢＨ30ピット（全景）

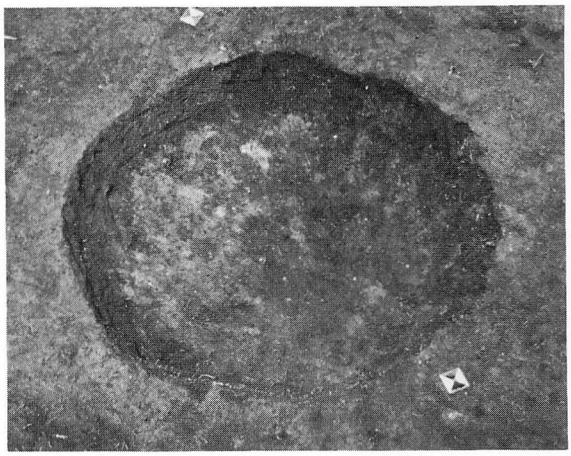


f：ＢＨ30ピット・ＢＨ29住居址

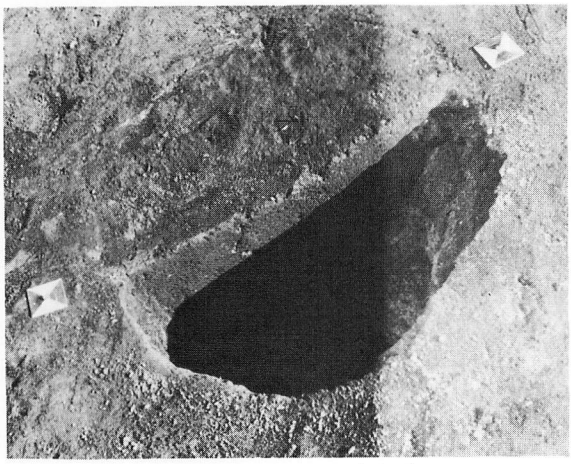
写真図版19　ピット（7）



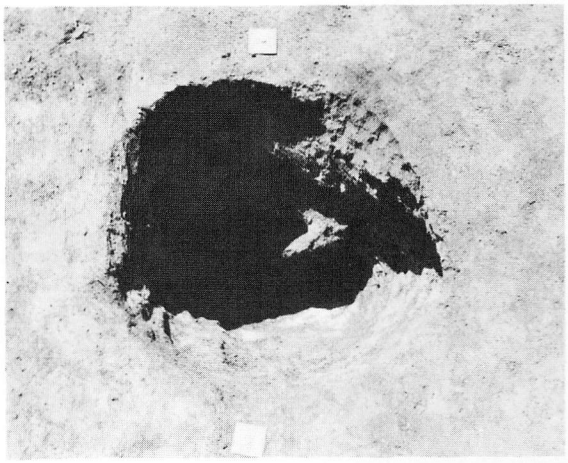
a：ＢＨ32ピット（断面）



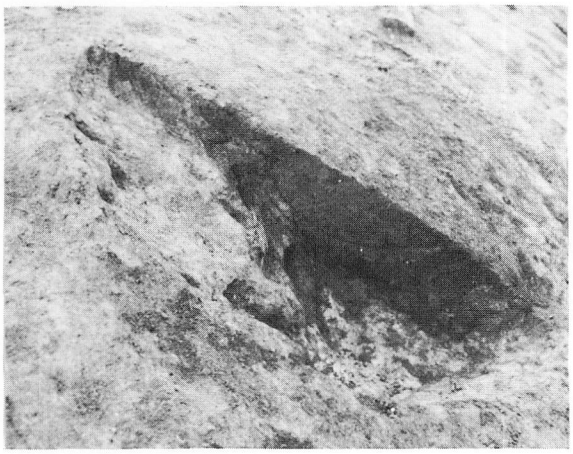
b：ＢＨ32ピット（全景）



c：ＢＨ33－１ピット（断面）



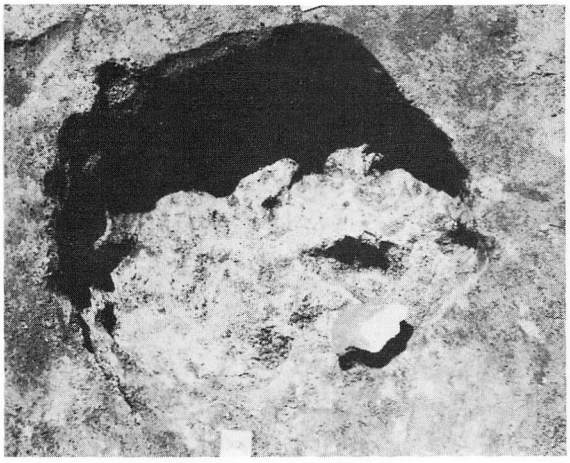
d：ＢＨ33－１ピット（全景）



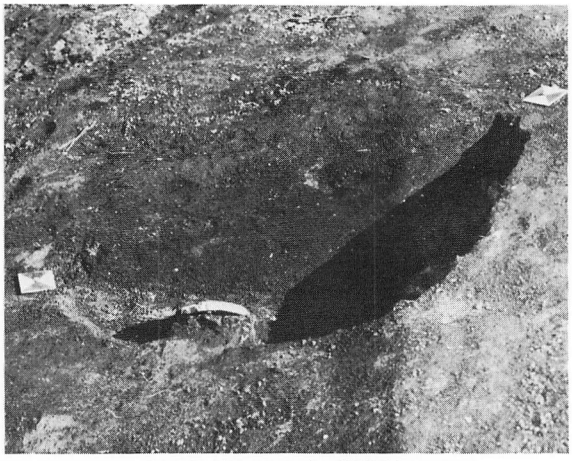
e：ＢＨ33－２ピット（断面）

f：ＢＨ33－２ピット（全景）

写真図版20　ピット（8）

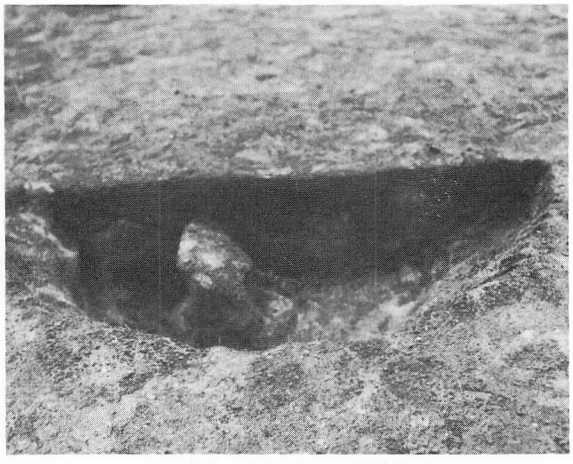


a：ＢＨ34ピット（全景）

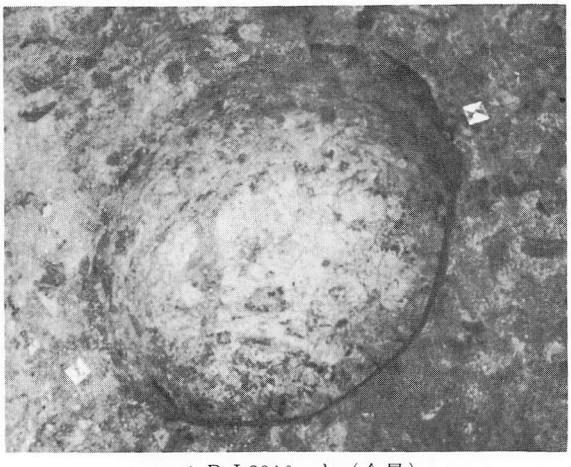


b：ＢＨ34ピット（断面）

c：ＢＩ29ピット（全景）



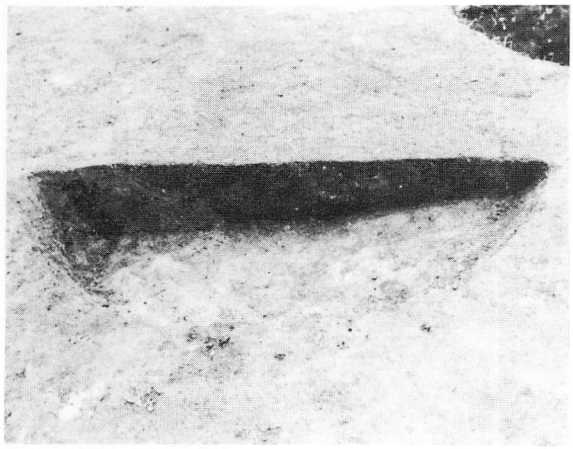
d：ＢＩ29ピット（断面）



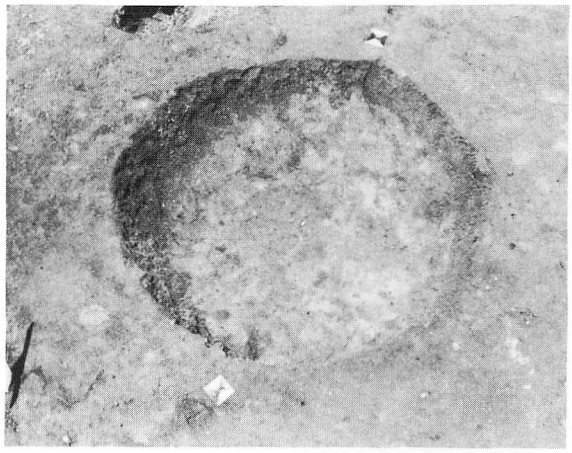
e：ＢＩ30ピット（全景）

f：ＢＩ30ピット（断面）

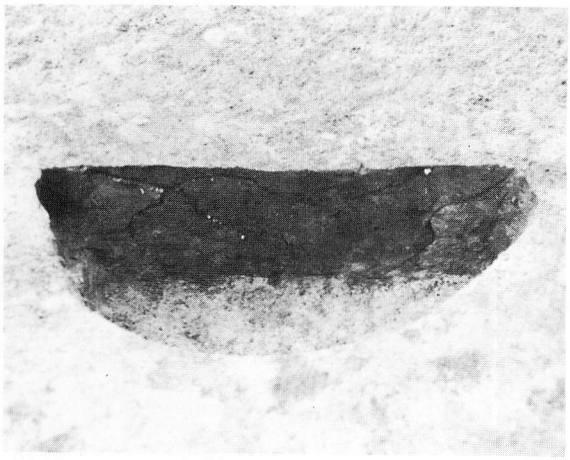
写真図版21　ピット（9）



a：ＢＩ31ピット（断面）

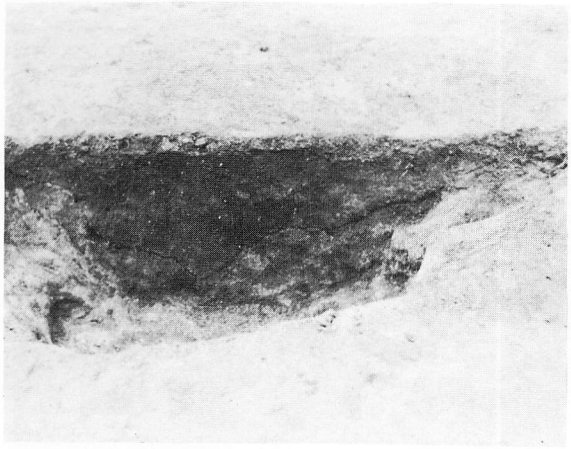


b：ＢＩ31ピット（全景）

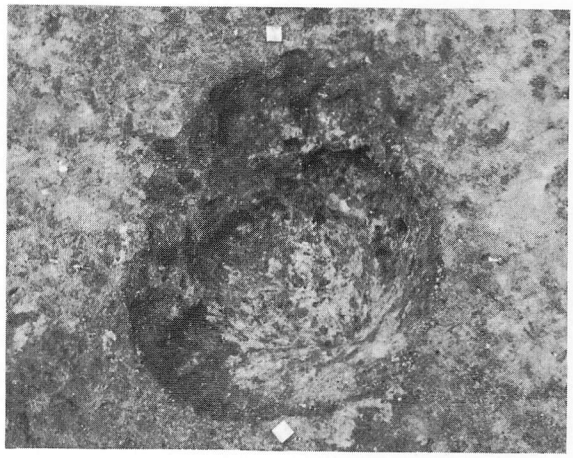


c：ＢＪ30ピット（断面）

d：ＢＪ30ピット（全景）



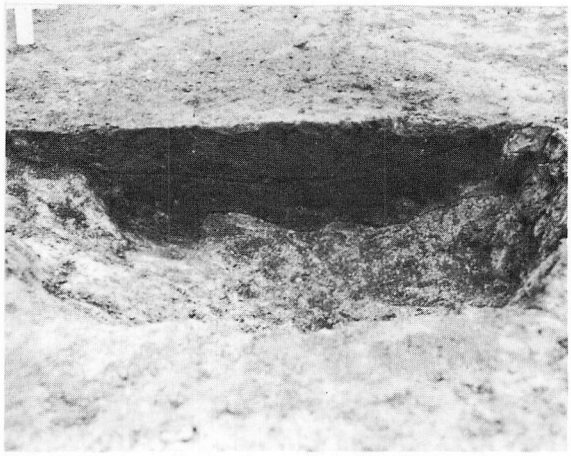
e：ＣＢ29ピット（断面）



f：ＣＢ29ピット（全景）

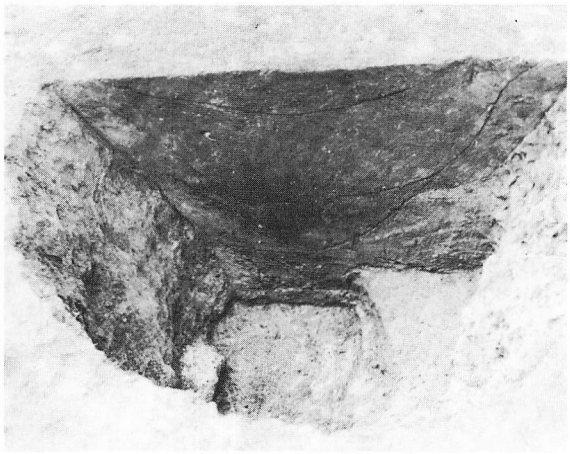
写真図版22　ピット（10）

a：ＣＧ32ピット（全景）

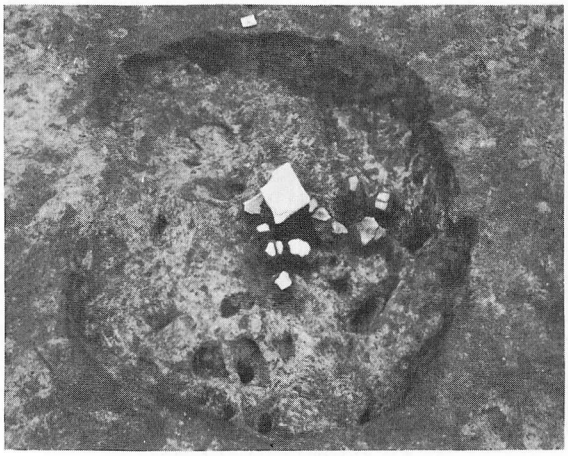


b：ＣＧ32ピット（断面）

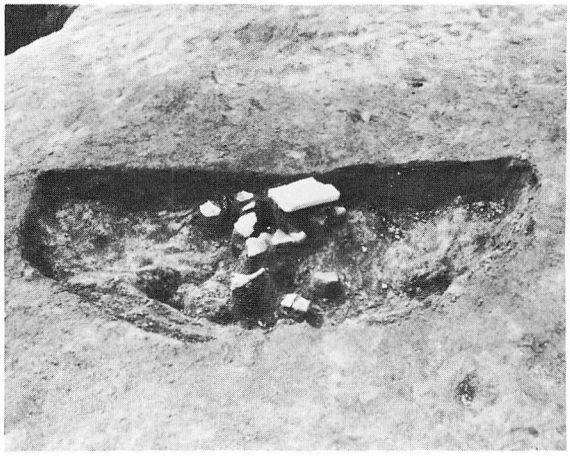
c：ＤＨ51ピット（全景）



d：ＤＨ51ピット（断面）



e：ＤＩ51ピット（全景）



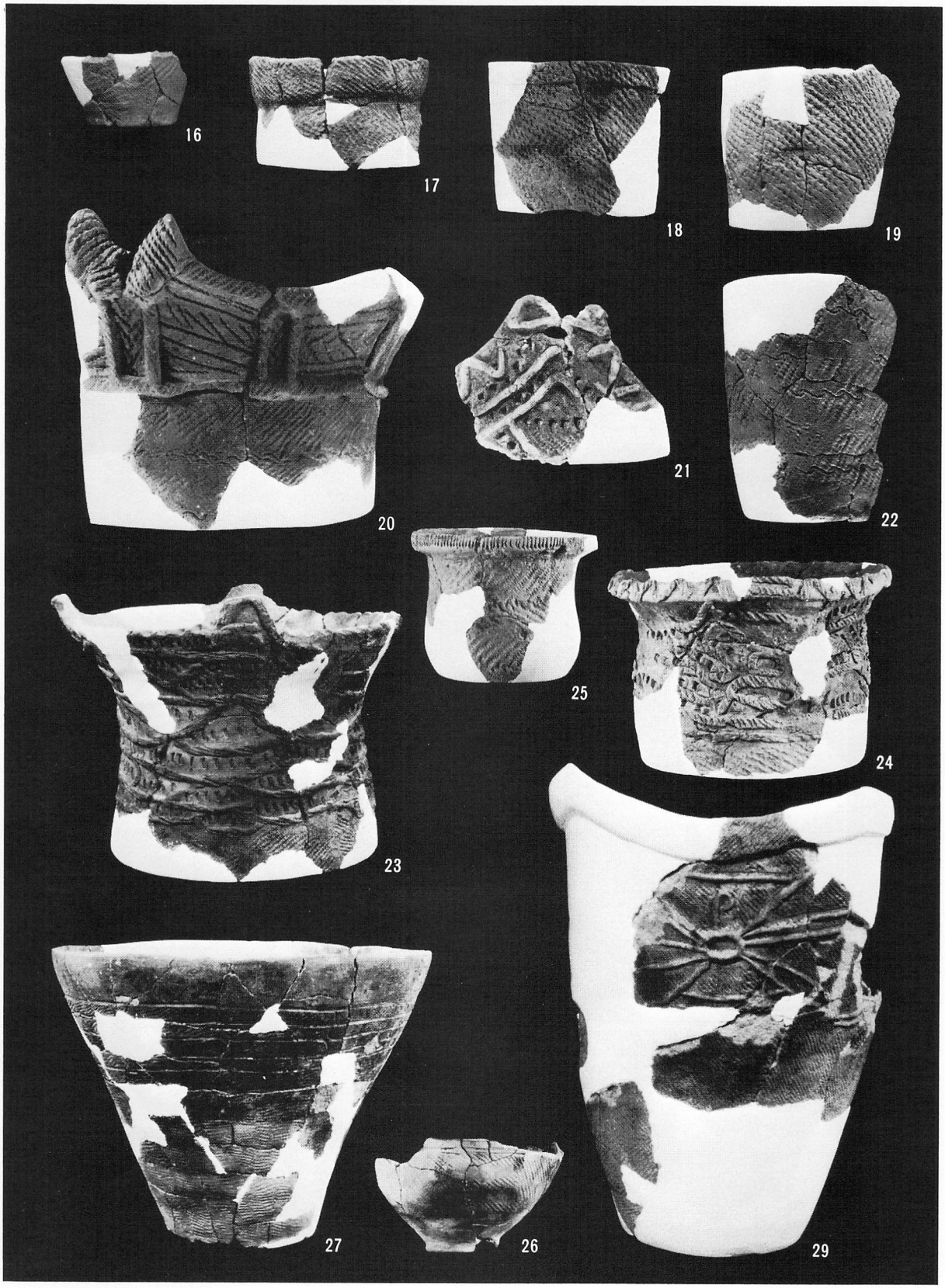
f：ＤＩ51ピット（断面）

写真図版23　土　器（1）

ＢＦ30住居址　　縮尺1/3

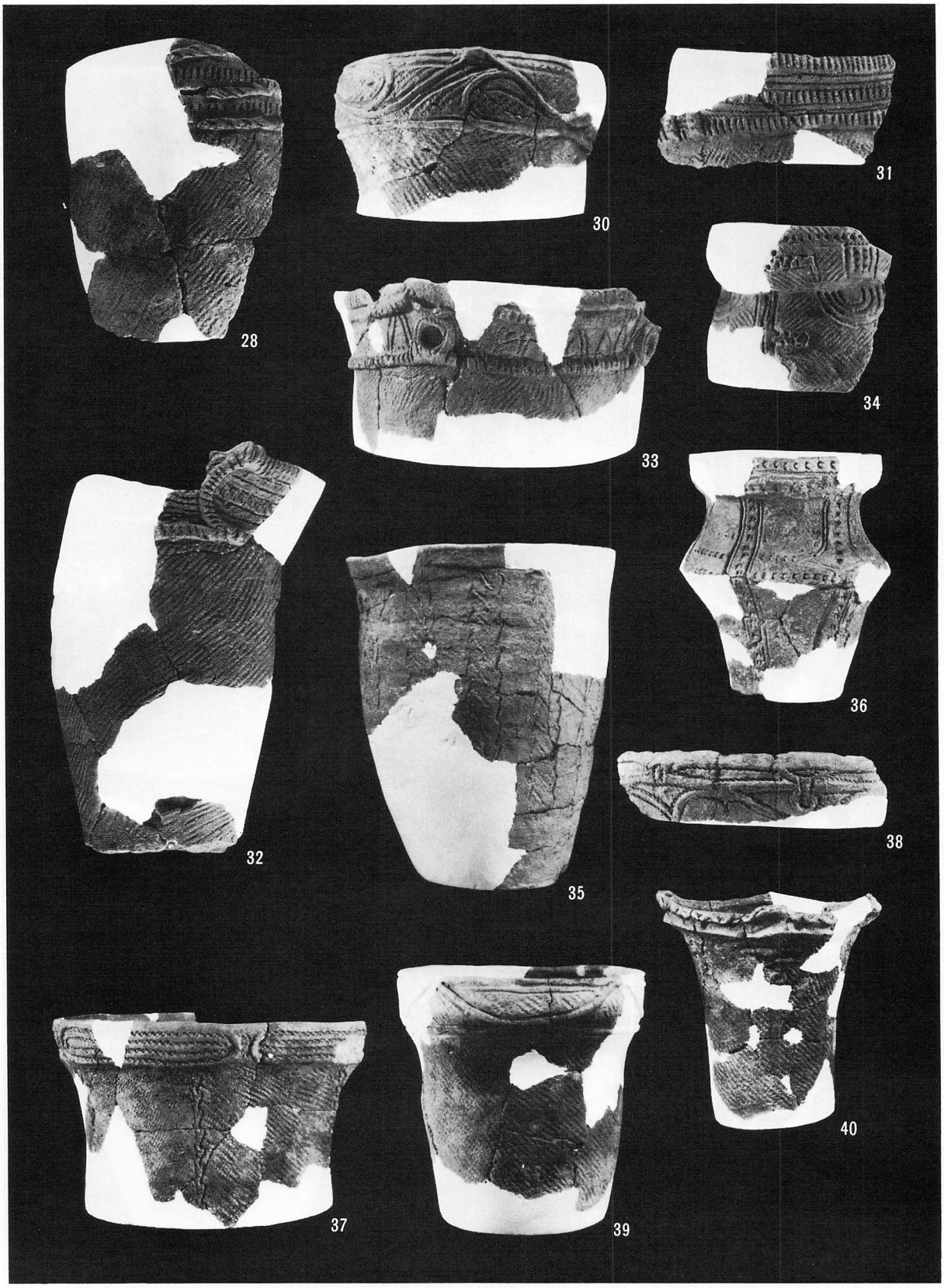
写真図版24　土　器（2）

2～5：ＢＦ30住居址、6：ＢＦ29住居址、7･8：ＢＨ31住居址　9～15：ＢＦ28焼土・ＢＧ28焼土　縮尺$\frac{1}{4}$（9は$\frac{1}{6}$）

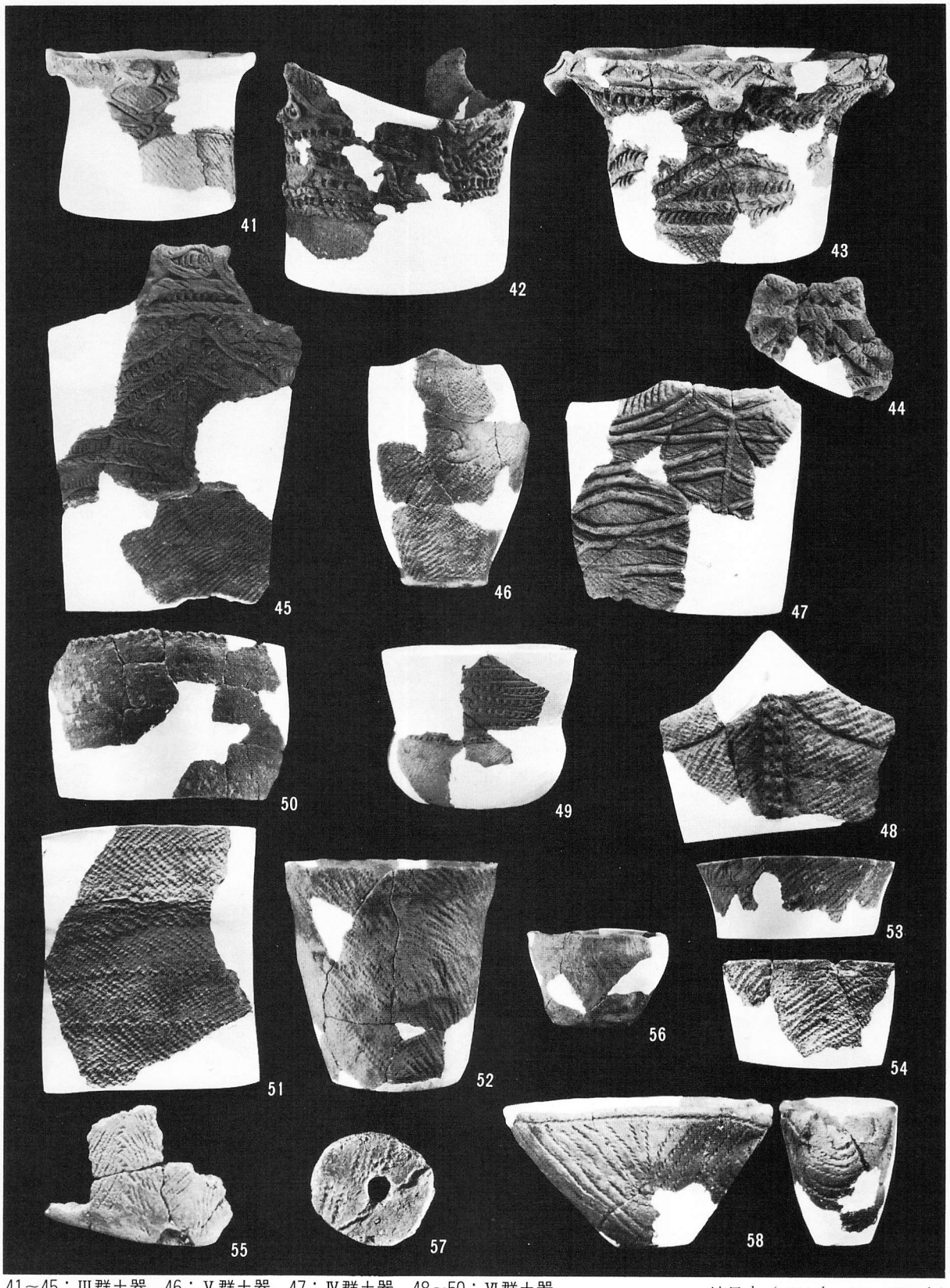


16：ＢＦ28焼土・ＢＧ 8焼土、17～19：ＢＨ27陥し穴状遺構　20～22：ＢＦ29ピット、
23～25：ＢＦ30ピット、26：ＢＦ32－5ピット、27：ＢＦ－33－1･2ピット、29：ＢＦ33－3ピット

縮尺$\frac{1}{4}$（27は$\frac{1}{6}$）



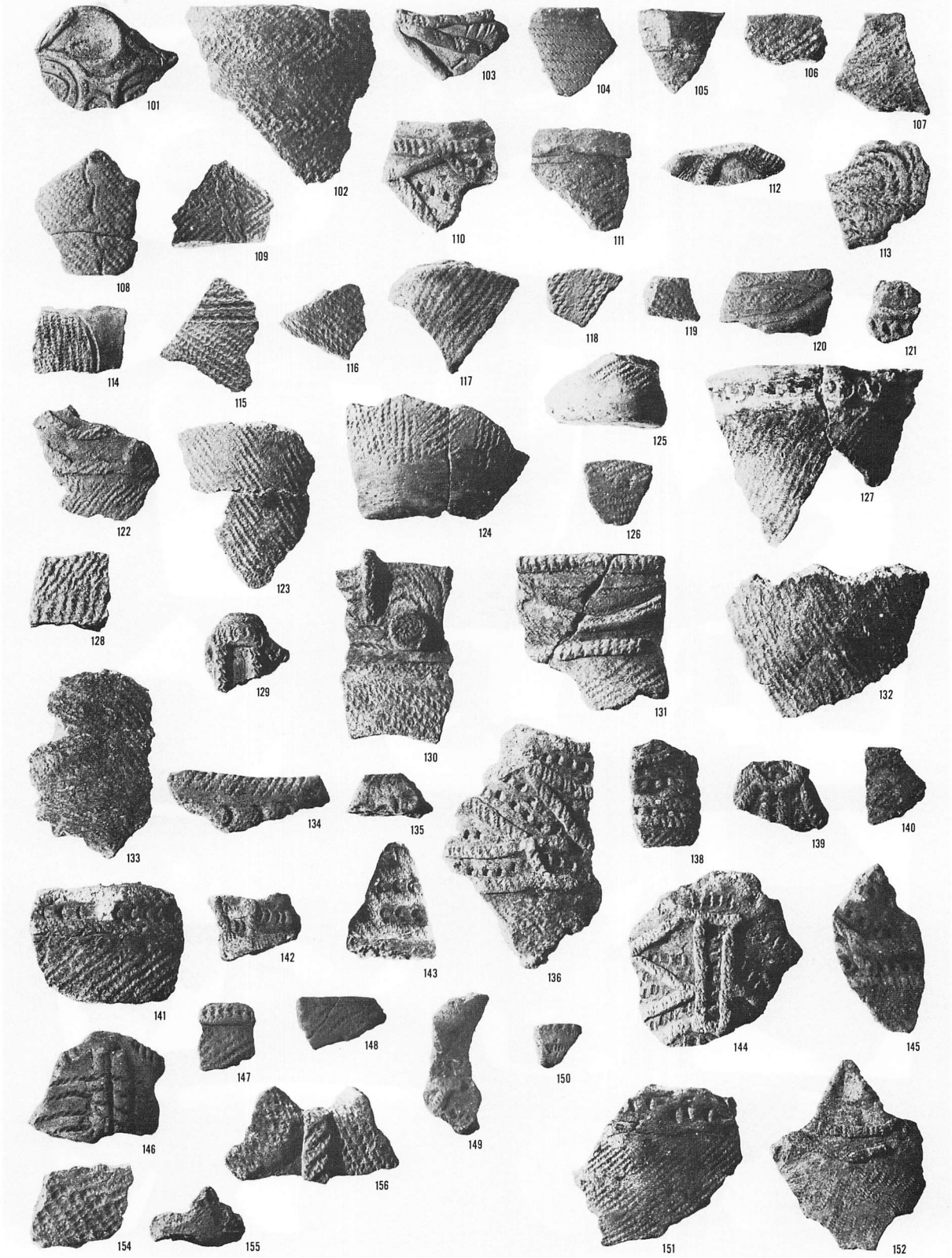
28：ＢＦ33－3ピット、30：ＤＩ51ピット、31～36：Ⅰ群土器、37･38：Ⅱ群土器、39･40：Ⅲ群土器　　縮尺$\frac{1}{4}$



41～45：Ⅲ群土器、46：Ⅴ群土器、47：Ⅳ群土器、48～50：Ⅵ群土器、
51～58：Ⅶ群土器・土製品

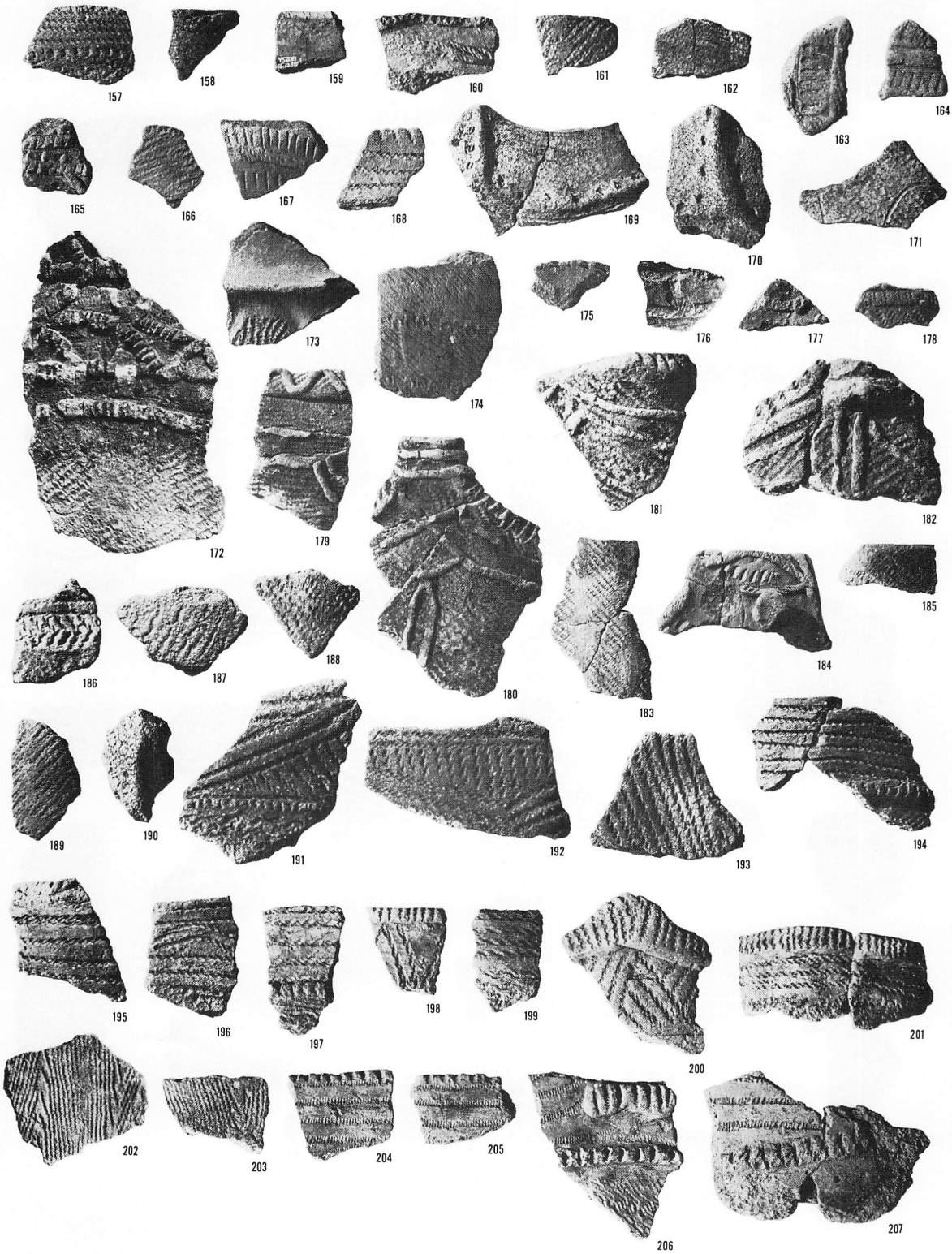
縮尺$\frac{1}{4}$（50は$\frac{1}{6}$、57・58は$\frac{1}{2}$）

写真図版28　土　器（6）



縮尺$\frac{1}{3}$

写真図版29　土　器　（7）

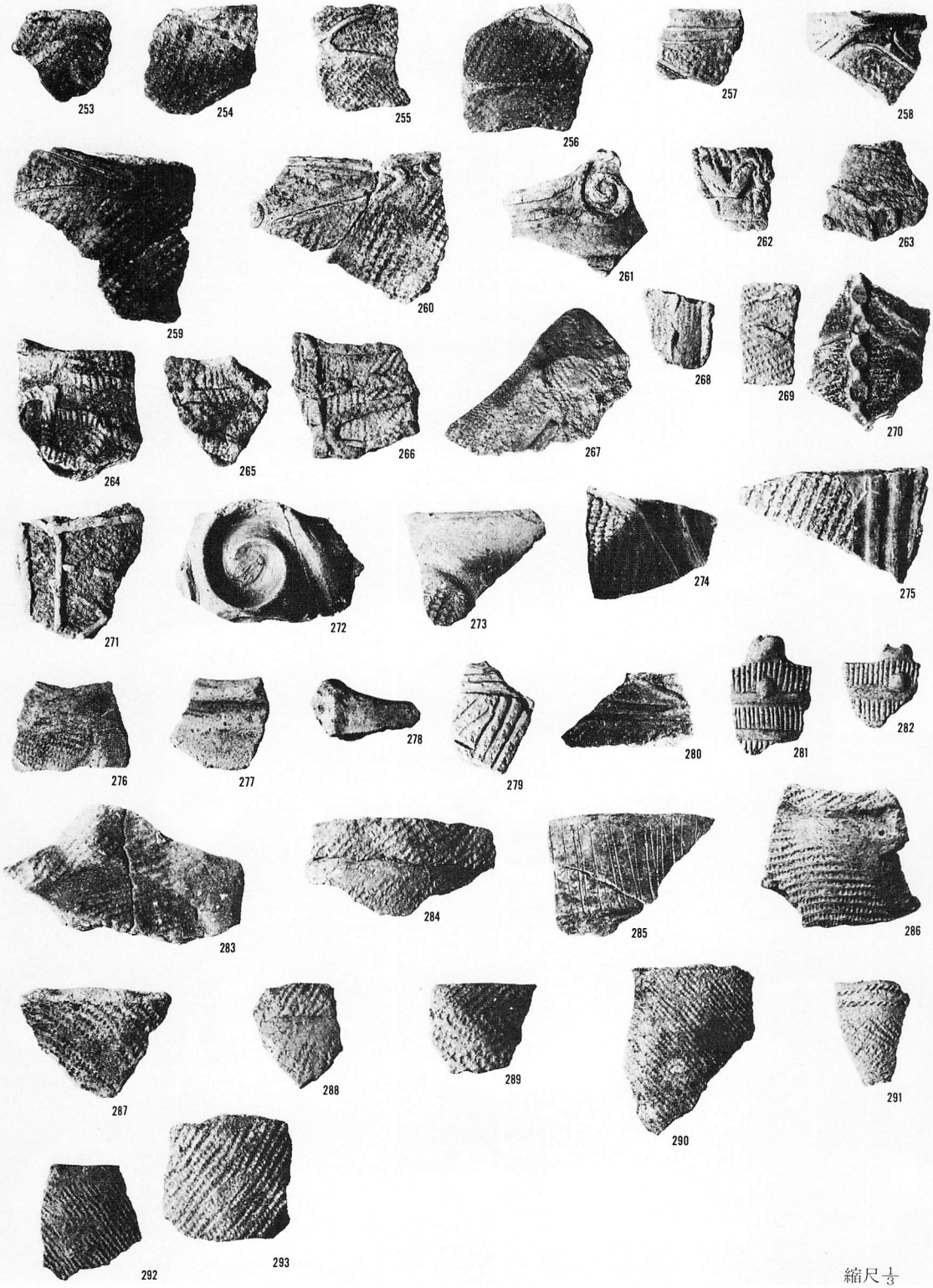


縮尺$\frac{1}{3}$

写真図版30　土　器（8）

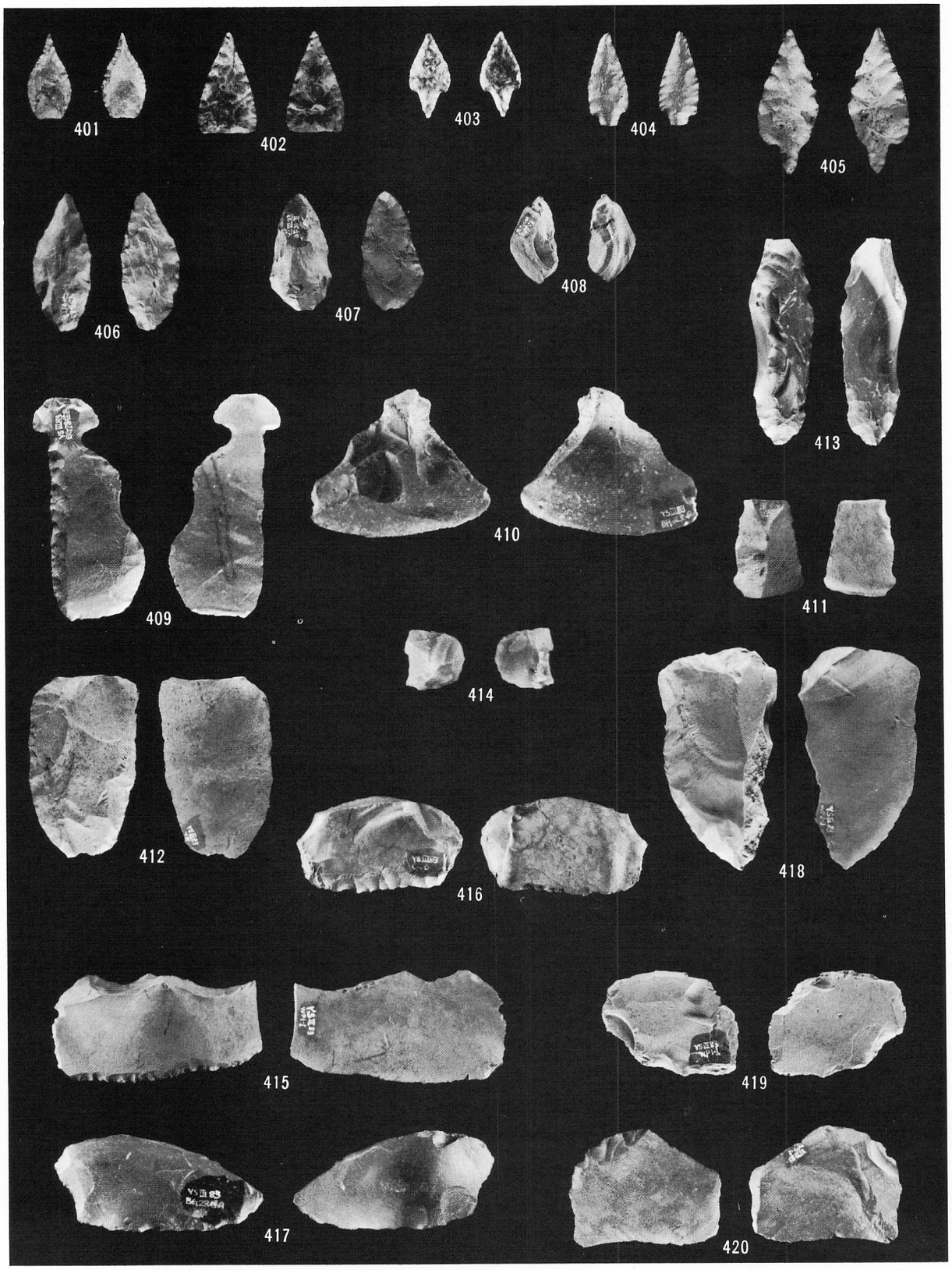
縮尺$\frac{1}{3}$

写真図版31　土　器（9）

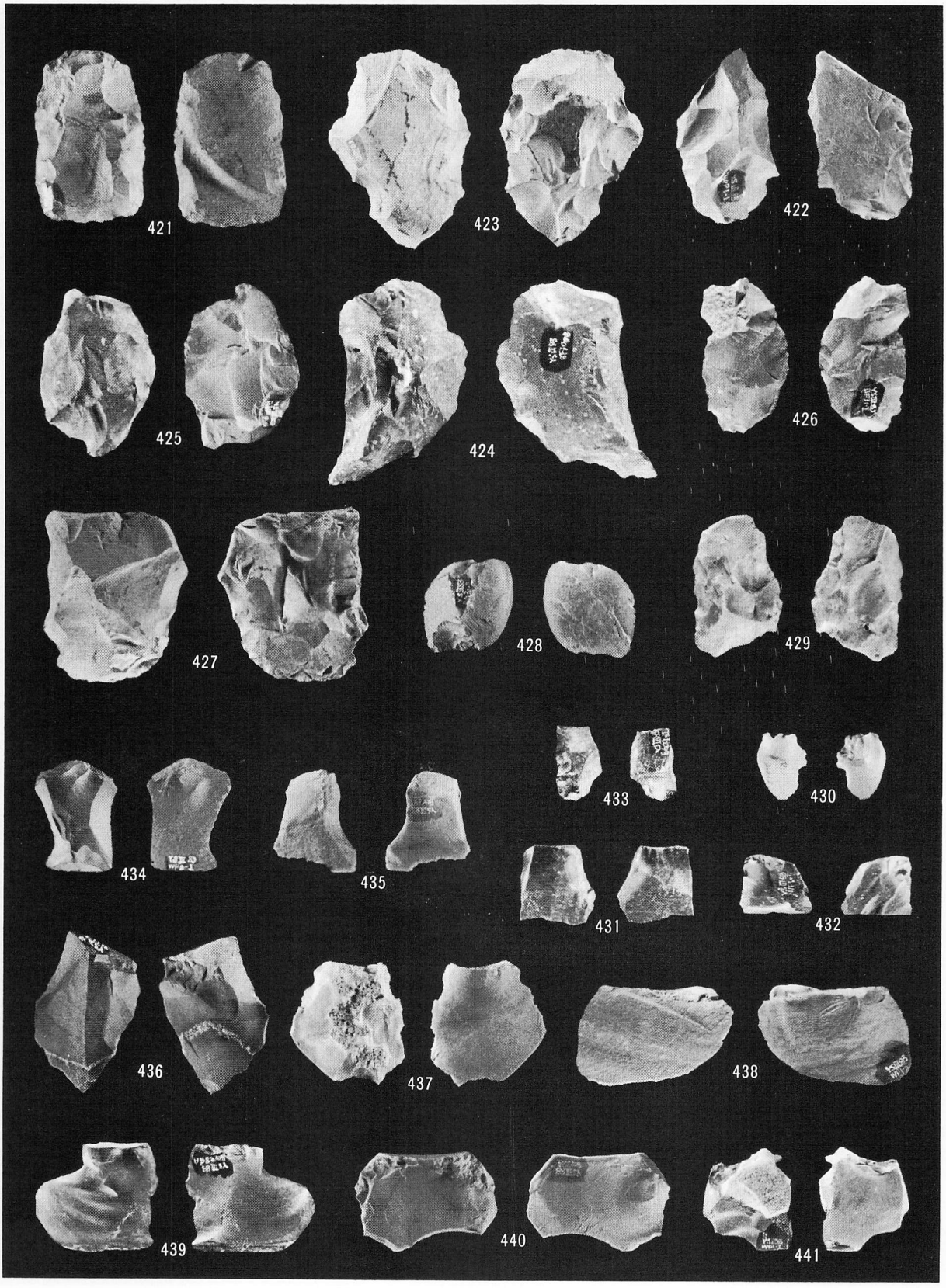


縮尺$\frac{1}{3}$

写真図版32　石　器（1）

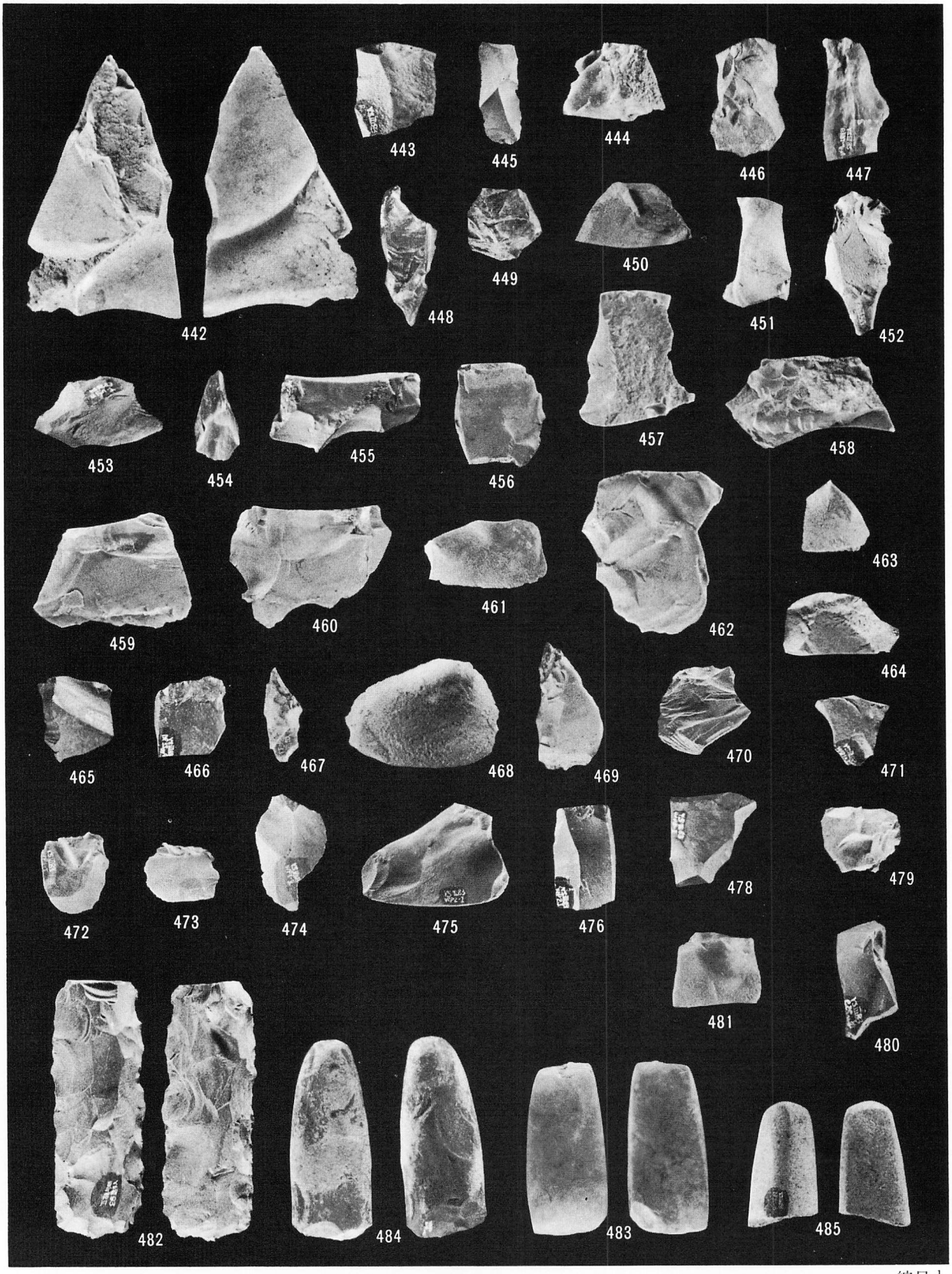


縮尺$\frac{1}{2}$


421
423
422
425
424
426
427
428
429
433
430
434
435
431
432
436
437
438
439
440
441

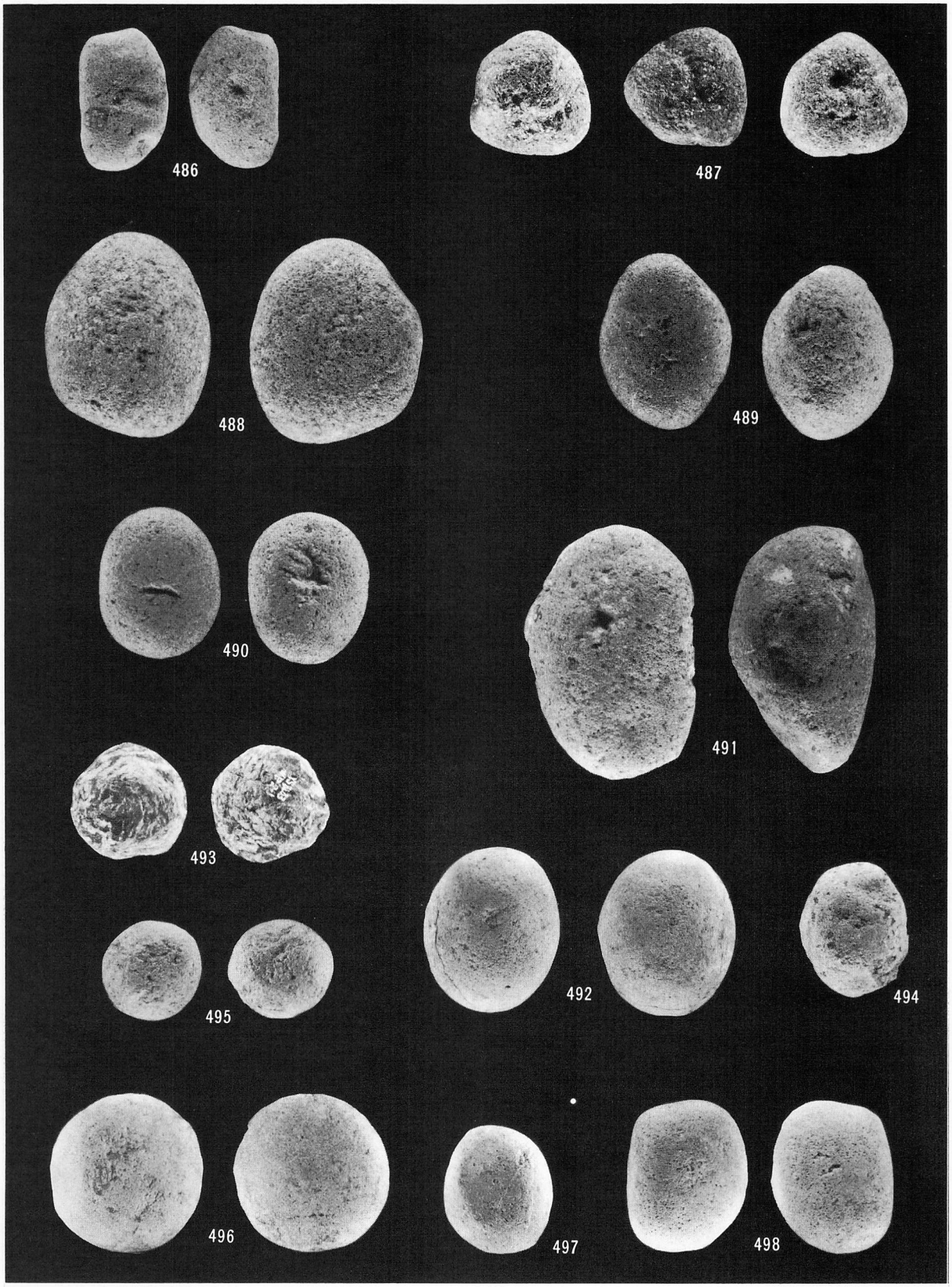
縮尺$\frac{1}{2}$

写真図版34　石　器（3）

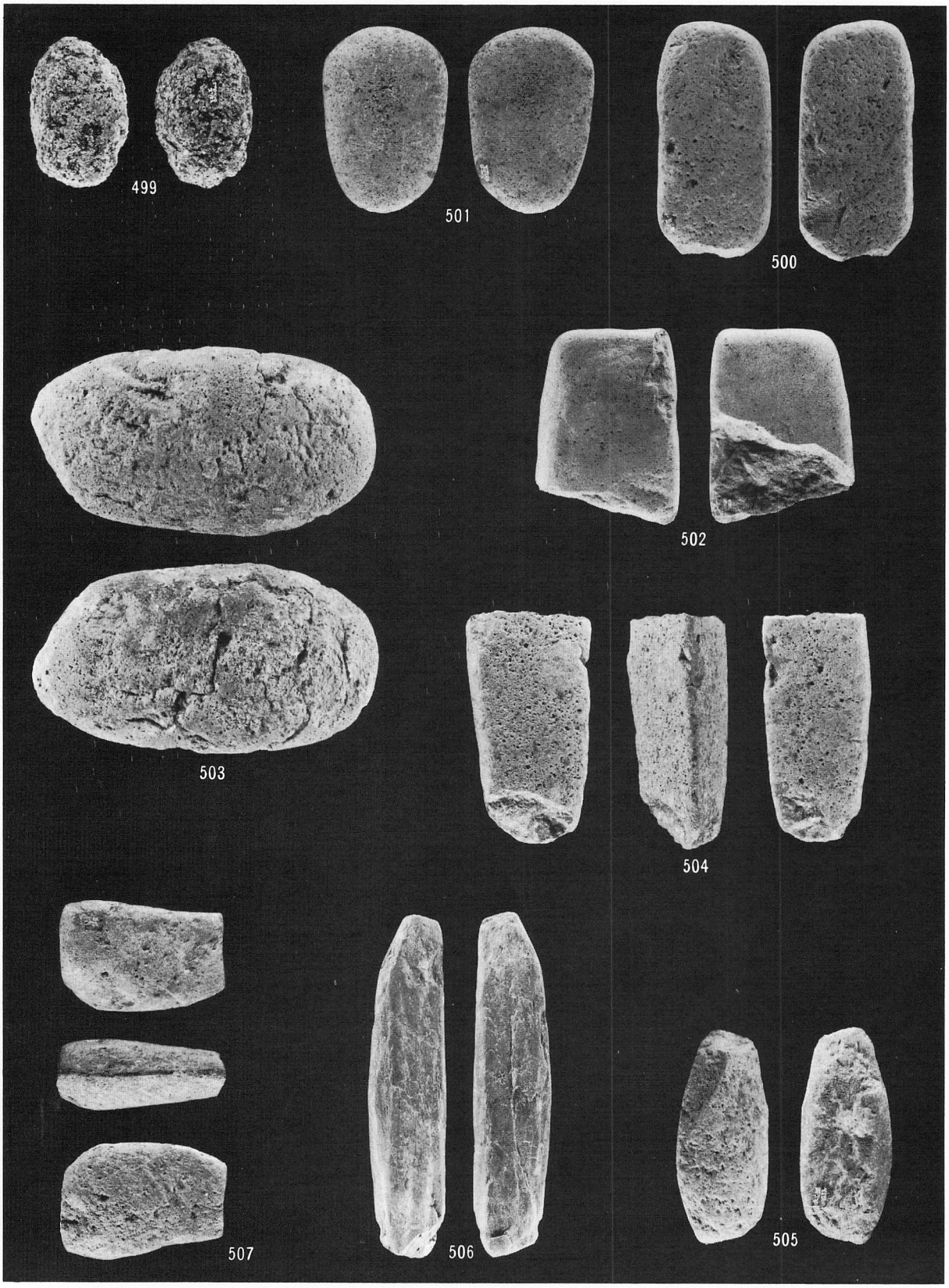


縮尺$\frac{1}{2}$

写真図版35　石　器（4）

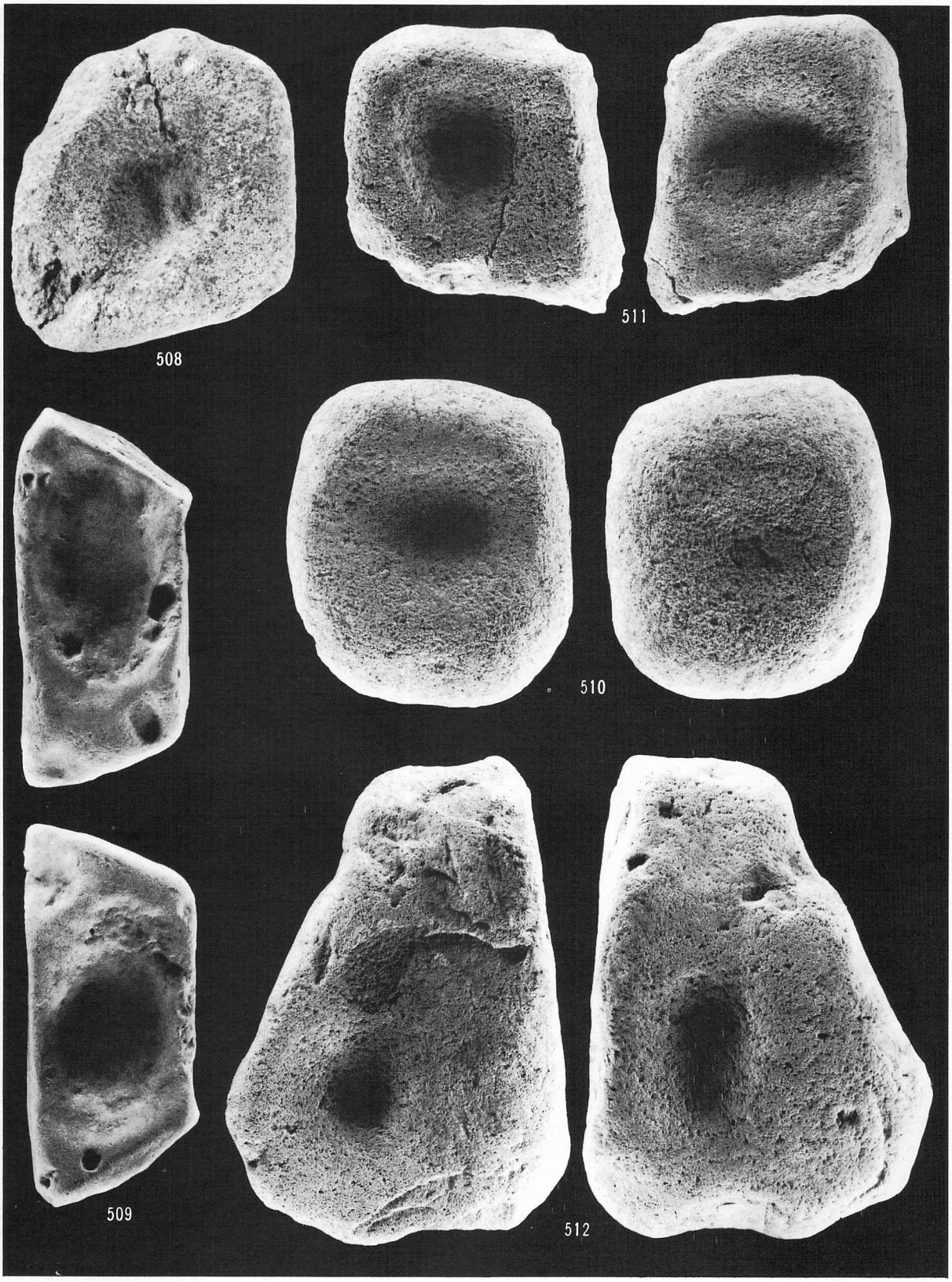


縮尺$\frac{1}{4}$（493は$\frac{1}{2}$）



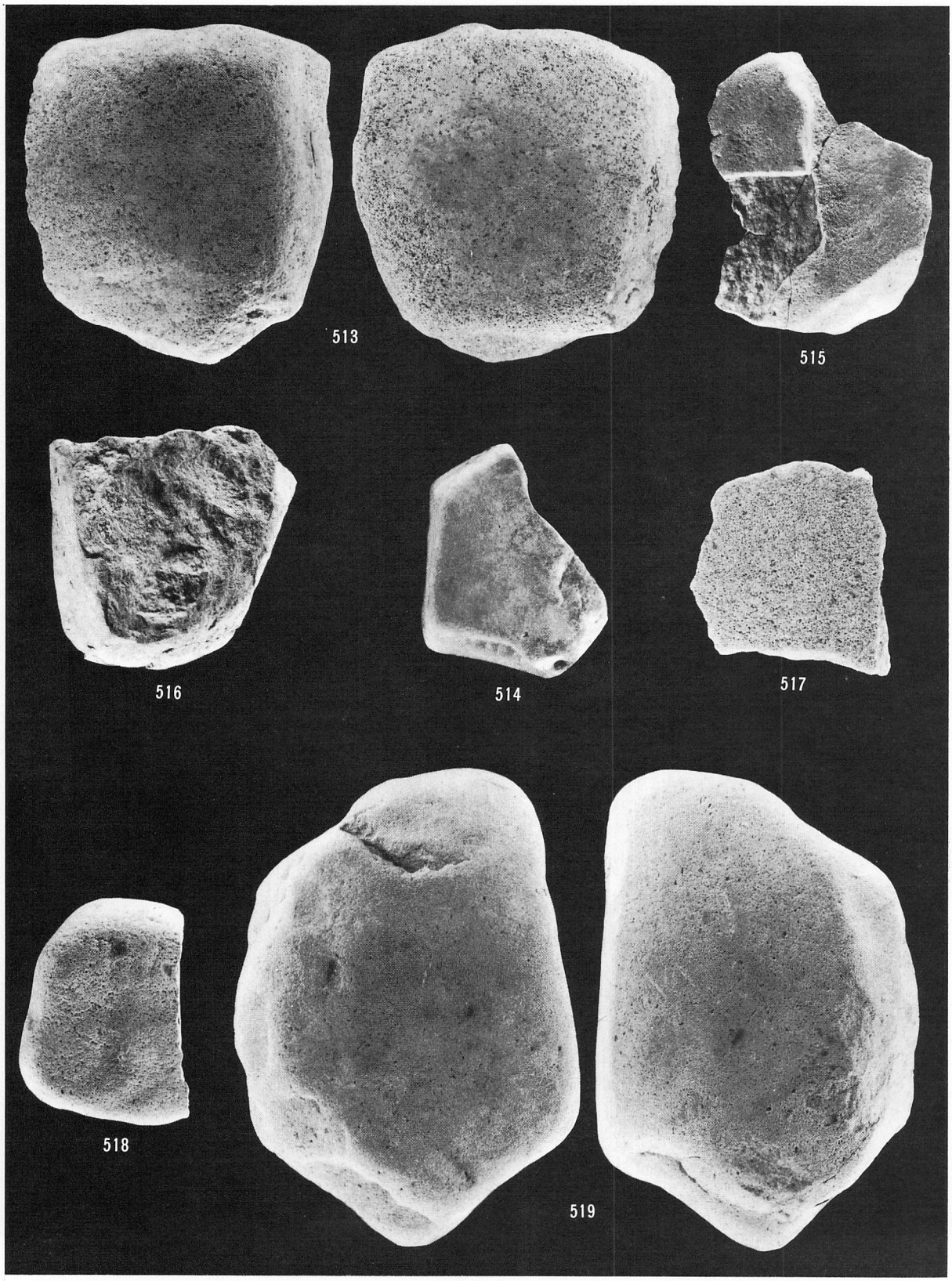
縮尺$\frac{1}{4}$

写真図版37　石　器（6）



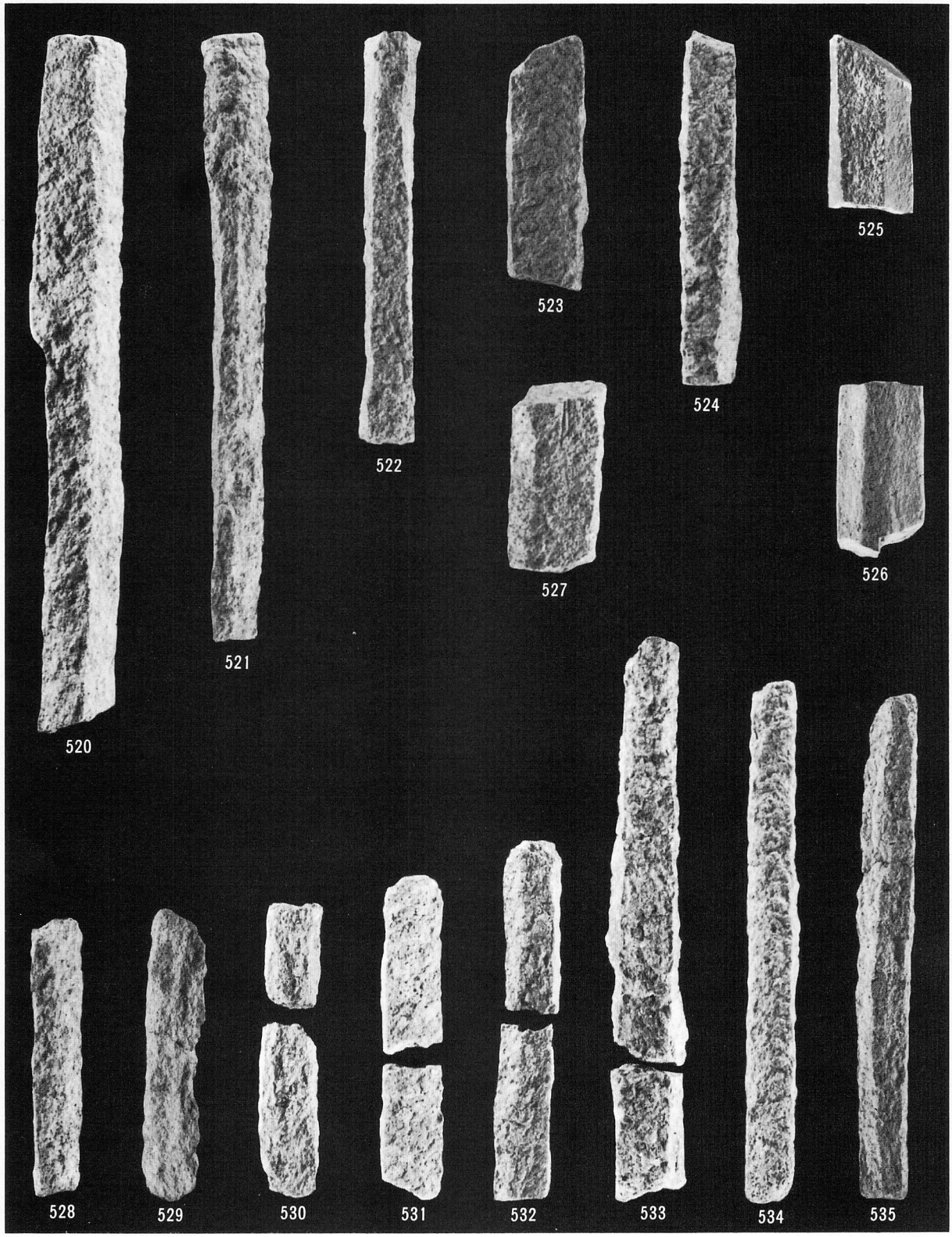
縮尺$\frac{1}{6}$

写真図版38　石　器（7）



縮尺$\frac{1}{6}$

写真図版39　石　器（8）



縮尺$\frac{1}{4}$

繋沢（つなぎさわ）II 遺跡

遺跡所在地	二戸郡安代町字繋沢58－35
委託者	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和58年4月19日～5月31日
調査対象面積	7,940㎡
発掘面積	5,000㎡
遺跡記号	ＴＳII83
調査担当者	専門調査員　佐々木嘉直・佐々木清文
協力機関	安代町教育委員会

1．遺跡の立地

本遺跡は安代町役場の北東約2.8㎞に位置し、北側を安比川が北東に流れ県道二戸・安代線が通る。遺跡は七時雨山地の北西山麓にあたる丘陵地末端付近の緩斜面に載る。この緩斜面は繋沢川と安比川の合流点から南へ300ｍ位入った北西向きの斜面で、調査範囲の標高は305ｍ~315ｍである。安比川との比高は30ｍ以上である。調査範囲は中央付近を流れる小沢によって２分され、北半分は牧草地、南半分は畑地として利用されていた。

斜面下位には日影Ⅱ遺跡、南側の反対斜面には湯の沢Ⅲ遺跡がある。

2．調査の概要

調査は、調査範囲の北端からはじめ、順次南に進めた。その際、斜面下位は全面検出したが湿地や湧水の多い斜面上位は、幅１ｍ又は２ｍのトレンチで検出した。南半分の牧草地は、人為的に削平して造成されており表土は10㎝位であった。北半分の畑地は沢を埋めて造成されていた。遺構は全く検出されなかったが、縄文時代の土器片や石器が少量出土している。前期の土器片は、中央部付近の畑地から出土したものであり、口縁部と体部の境界に隆帯を有するものである。中期の土器片は、南半分の牧草地から出土したものであり、太い沈線や磨消し帯を特徴とするものである。石器は表採したものである。

3．まとめ

本遺跡は人為的攪乱を大きく受けた地形面であり、遺構は検出されなかったが、地表水や湧水などの流れを考えると遺構は存在しなかった可能性が強い。従って調査地は遺物散布地ということになろう。

石神（いしがみ）II 遺跡

遺跡所在地	二戸郡安代町字石神９－２
委託者	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和58年８月19～９月17日
調査対象面積	2,450m²
発掘面積	2,450m²
遺跡記号	ＩＧII83
調査担当者	専門調査員　佐々木嘉直・佐々木清文
協力機関	安代町教育委員会

1．遺跡の立地

本遺跡は、安代町役場の北東4㎞程の地点に位置し、安比川右岸に形成された段丘上に立地している。この段丘は南側で山麓の緩斜面に接し、緩斜面に沿うように旧県道が通り、集落が形成されている。また、北側の段丘崖の下には県道二戸・安代線が通っている。

調査地は段丘上に立地する遺跡のなかでも山裾に近い部分で、南側には山裾に沿って流れる用水路があり、東側の沢からの水と合流して北に流れる。西側には湧水があり、現在は簡易水道源として利用されている。

旧県道の北側には中世城館址である石神館跡があり、旧県道との間には空堀がある。

2．調査の概要

調査区域は調査前までリンゴの栽培が行われていた。表土は10㎝～30㎝の厚さで、表土直下の褐色土上面が遺構検出面となった。しかし調査区域内から遺構は検出されなかった。旧地主によれば、旧県道に近い方の現在のリンゴ園内で、リンゴの植樹をする時に土器や焼土が出たとのことで、遺跡の主体は調査地の北側のリンゴ園中と思われる。

出土遺物としては、縄文式土器片・陶器片・鉄製品・古銭が各々少量ずつ得られている。縄文式土器片は縄文時代中期～晩期のものである。陶器類は甕や擂鉢の破片が多い。古銭は新寛永通寳銅一文銭と鉄一文銭である。

3．まとめ

遺物は縄文式土器片から近世の陶器片まで出土しているが、遺構は検出されていない。遺跡の主体は上述のように調査地北側のリンゴ園中と思われ、その時期も旧県道を挟んだ北側の中世城館址である石神館跡との関係から、縄文時代から中世ごろまでの遺構が存在すると考えられる。

岩手県埋文センター文化財調査報告書第79集
安代町湯の沢Ⅲ・繋沢Ⅱ・石神Ⅱ遺跡発掘調査報告書
東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

印刷　昭和59年9月25日
発行　昭和59年9月29日

発行所…財団法人岩手県埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡
第11地割字高屋敷185
TEL　(0196) 38－9001・9002

印刷所…川　嶋　印　刷　株　式　会　社
〒021 一関市上大槻街4－7
© 岩手県埋文センター　1984